リーマンクエスト

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リーマンクエスト

【Ｎコード】
Ｎ８３３０Ｑ

【作者名】
Ｓｅａｂｏｌｔ

【あらすじ】
「ミナム」という呼び声で目を覚ました山本美男（よしお）
さっきまで、会社にいたはず・・・まったく訳がわからない
うちに、カーネルという女と契りを結んだことになった。
さらにもう一人、ミヌという女性が新たに契りを結びに現れる。

グレースと呼ばれる地で、彼らに待ち受けるものとは、一体・・・

リーマンの終わりは突然に（前書き）

グレース・・・

この地は、千年の都、京を中心に栄えてきた。

千年の都も治めていたミカドも代が嵩むにつれ、その霊力も衰え

その平安も影を落とし、百鬼が跋扈する事態となっていた。

ミカドもこの窮地にこれまでとは違い黒騎士団と呼ばれる、魔導士の力と

騎士の力を兼ね備えた軍団で取締りを行っていた。

そして、平和なグレースをある闇の力が支配しようといていた。

サラリーマンだったミナム、彼は、気がついたらこの地にきていた。

この地でミナムを待ち受けるものとは・・・・

リーマンの終わりは突然に

ここは・・・そして、一体何が？そう考えると、全く意味がわからない。

彼の名は、山本美男（やまもと よしお）、とりあえず、現状を把握するのことに、そうさっきまで、一介のサラリーマンをやっていた。目の前には、同僚の山崎、その横に、事務の西村さん、そして、上司がいたはずだが・・・

目を覚ますと腰に剣をさし、鎧らしきものを着て横たわっていた。

「ミナム」

何か声がする

「ミナムってば！！」

女性の声だ。振り向くとそこには、金髪のかわいい女性が立っていた。

俺の好みだ・・・そう彼は思った。

「ミナム・・どうしたの？」

そう言って、この女性は彼の肩をゆすった。

「ミナムってだれた？」

「あなたのことよ。」

俺はミナムというのか？訳がわからない彼

「本当に俺のことか？」

「そうよ。本当にどうしたの？」

俺が一番知りたい・・・そう悩むミナム

「ところで、君は？」

「何言ってるのよ」

不思議そうに語りかけるその女性に対し、ミナムは首をかしげた。

「どうしたの？」

その女性が再び声をかける。

「だから君は？」

「判らないの？」

そう言って、ミナムの方をまじまじと見る女性、一体どうしたのというような顔をして、

「本当にわからないの？」

ミナムは素直にうなずいた。

「あなたの相方のカーネルよ」

「カーネル？」

その言葉にミナムは、あのカーネル○ンダー○を思う浮かべた。

「あの○ライド○キンの？」

「は～？ミナム、一体何を言ってるの？」

カーネルはあきれた顔をした。そして、カーネルの両肩に手を置き、

「本当に？」

うなずくしかないミナム

「本当なの？」

ただうなずくミナム

「じゃぁ・・・あの時の思い出も？」

あの時って何だ？ミナムは、首をかしげた。

「じゃぁ・・あの熱い夜の想い出も？」

そう言って肩を落とすカーネル

「俺とお前は一体どういう関係なんだ？」

その言葉がカーネルのハートを串刺しにした。そして、カーネルはワーッと泣き出した。

「そんなの～ないわよ！！！。契りを結んだばかりなのに～！！！」

契りって？ひょっとして、俺、彼女と寝たのか？そう驚くミナムがそこにいた。

「忘れるなんて！！！。ひどい！！！」

そう叫んで泣き続けるカーネル。そういわれても俺には何のことだかまったくわからない。一体、どうしろいうのか？まず夢かどうか、ミナムは自分の顔をつねった。

かなり痛い。

ってことは、

・・・・・

・・・・・

残念・・・

夢ではないようだ

現実に目を戻すと、やはり、床に顔を伏せて、泣いているカーネルがそこにいた。とりあえず、記憶をたどることにした。そういえば、あいつ・・・杉山のやつがへんなものを持ってきて、それをＵＳＢ

にさしてからだ。あの時に、そういえば、変な光が・・・

そうだ・・・

じゃぁ・・・

おれは、死んだのか？

しかし、さっきつねった時、痛かったし、

ミナムがふと辺りを見回すと建物の近くに小川があった。

そこへ行きの自分の顔を見た。

すると、ミナムの顔がそこにあった。

これは・・・どういう意味だ？

途方にくれるミナムだった。

カーネルの思い

さかのぼること、数日前、カーネルは、あることに悩んでいた。

そう、ある男との縁談だった。

魔導士試験に合格した彼女は、単に普通の縁談ではなく戦士との縁談が進められていた。

相手は、街の名士の息子、普通なら喜ぶところだが、

その男ときたら、単に名士の息子ということだけで、たいした能力もなく、

太っていてというより単なるデブで頭は悪く、単に力があるだけのたいした事のない人物だった。

はっきり言って、カーネルの好みではなかった。

カーネルは、いやだとかなり断ったが、とうとう両親に押し切られ、結婚することになった。

まだ、恋もしたことないのに、こんな男と・・・いやだ

そう思っても勝手に進む縁談、そして、街のしきたりで禊の儀式をすることになった。

禊とは、この街では縁談がまとまると、女性は、一時、俗世を離れるべく

斎宮と呼ばれる地に行き、結婚するまでの間、そこで暮らし、心身を清める儀式のことだった。

斎宮の近くまで来たカーネル、思わずため息が出た。

これで、私の人生も決まりか・・・・そうなんとなく、やりきれない気持ちでいっぱいだった。

普通の女性だったら十分な相手だし、両親も大賛成だった。

しかし、彼女は何故か納得がいかなかった、

そんな時だった。

斎宮に向かい歩いていると、彼女の前に突如としてまばゆいばかりの光があふれた

「まぶしい！！」としばらく目をつぶると

やがてその光は消え、一人の男がうつむきぎみで横たわっていた。

その男の姿は、今まで見たことのない姿をしていた。

紺色の上下に、下は見たこともない黒の皮靴、上着の下には白いパリッとしたシャツ

何か、リボンのようなものを首からぶら下げている。

その横には、見たことのない鞄と四角い箱のようなものもあった。

「大丈夫ですか？」

カーネルが声をかけるが反応がない。

死んでるのかなと、近づくと息をしている。

「大丈夫ですか」と再び声をかけ、体を揺らすとばだんと

仰向けになり、顔が見えた。

カーネルは、その顔立ちを見た時、ドキっとした。

しばらく、その顔を見続けるカーネル・・・

どのくらいたったのだろう、そのくらい時間の流れが遅く感じた、

ふとわれに返ったカーネル。

どうしよう・・この人・・・斎宮には連れて行けないし。

ここにおいていくわけにいかないし、

とりあえず彼女は、この横たわっている男を近く建物に連れて行った。

そこは、斎宮の近くの武器庫だった。

その男を、運んでいる最中に、カーネルは、ある予言を思い出した。

闇の中から生まれし、ミザキ・・・

グレースを闇に導く・・・

光の中から生まれし、ミナム・・・

グレースを光に導く・・・

ということは、ひょっとして、この人は、ミナム？そう思うと、

あることを思いついた。

そう彼と契りを結んだことにするんだと。

「ちょうどいいわ。ここなら・・・」と適当に服を選んだ。

さて、この服は・・・と、彼女はその男の服を着替えさせてた。

そして、ミナムが目を覚ますのを待った。

あとは、彼女の賭けだった。

ミナムとカーネル

わけのわからない状態が続くミナム、どうしたらいいだろう。

そう思いつつ、元の場所に戻ると、そこには、カーネルが待っていた。

ただじっと涙目でミナムを見つめるカーネル、ミナムも言葉なく立ち尽くした。

これだけ見つめるってことは、本当に彼女と寝たのか？と自分を信じることが

できないミナム、もし、そうだとすると・・・どうなる？

とりあえず、今続いている無言の状態を何とかせねば。

そう考えたミナム

「あの～。」

そう声をかけるが、ただじっとミナムを見つめるカーネル・・・

彼女の姿を見てミナムは、意を決して本当のことを言った。

「本当に、記憶がないんだ、申し訳ない。ところで、俺たち、昔からつきあってたの？」

その言葉に対し、カーネルは、少しむっとした表情で

「ほ！？　本当に？　忘れてしまったの？」
「すまない・・・まったく記憶がない。」
ミナムは丁重に頭を下げた。
「ったく・・」とため息をついたカーネル
そして、
「婚約者がいたのに」とつぶやいた。
その言葉にミナムは驚いた、
「どういう意味？ひょっとして、俺が強姦したのか？」
カーネルは、首を横に振ってそして、
「違うわよ。お互い納得してだけど・・・」
「じゃぁ、どういうことだ。」
「あの時、あなたが私の前に現れたからよ。」
「だから、どういう意味だ。」
「あなたが光の中から現れたの。」
「光の中から？」

ますますわけがわからないミナム。

「あなたは、予言通りに救世主として現れたの」

「予言？　救世主？」

「そう予言よ。あなたが現われたからわたしは、婚約者がいるのに救世主であるあなたと契りを結んだの。」

「だからって・・・」

「あなたが決めたことなのよ。」

「だからって、婚約者のある女性といきなり・・・大体、君は何者なんだ」

「わたしは、カーネル、魔導士よ。」

「まどうし？って？」

「だから・・こうやって、魔法を使って、戦士を助けるのが私の役目なの。」

そう言って、魔法で目の前に火をおこすカーネル

「わっ！！あちち！！」驚くミナムに

「ミナムわかった。」

はっきり言ってミナムには、まったく納得がいかなかったが、

「わかった。何で俺がミナムなんだ。」

「それは、予言の名前で」

「俺は、ビナンと書いてよしおって言うんだ。」

「やっぱりミナムじゃない・・」

「だからよしおだ。」

「いいじゃない。ミナムってば・・・」

ミナムは、ふとあることを思い出した。

ところで、ここはどこだ?

「カーネル・・・」

「何?」

「ところで・・ここはどこだ?」

その言葉にあきれるカーネル

「あ・・」

「だから、ここは一体どこなんだ?」

そう二人が話しているとき、後ろから

「見ぃ～つけた。！！！」という女性の声がした。

第2の女・・・

二人が振り返るとそこには、活発な感じの女性が立っていた。

「あなたは、誰？」

不思議そうに見つめる二人

その女性は、いきなりミナムに抱きついた。

「会いたかった！！！」

それを見て驚くカーネル

「ちょっと！！！」と二人の間に入った。

そして、ミナムの耳を引っ張って

「ミナム。来なさい！！」

「イテテ！！！」

少しはなれたところにミナムは連れて行かれた。

「どういうこと？」

「俺が知りたい」

ムッと怒ったカーネルはミナムのほほをつねり

「誰？どういうこと？」

「だから、俺も知らない。」

「本当に？」

「本当だ。」

きょとんとするカーネルに、両手で自分の頬を「イテテ・・」とさするミナム

「ミナム・・・じゃぁ・・」

「ったく・・大体、お前に会うのも初めてだぞ。」

そこへ

「あの～・・・よろしいでしょうか」

二人の後ろからその女性が声をかける。その声にびくっとなる二人、その女性は、にこやかに二人に話し始めた。

「わたし、ミヌと言います。あるお告げで、ここに降り立った人と契りを結びに来ました。」

目が点になる二人・・・二人は顔を見合わせた。そして、カーネルはミナムの顔を指差した。

「ひょっとして、この人のこと？」

ミヌは、顔を赤くし、「はい・・」とつぶやいた。

ミナムは、もう一度、カーネルの顔を見て、あることをつぶやいた。

「でも・・おれ、こいつと契りを結んだばかりだし。」

えっ・・・と驚くミヌ、やがて肩を落とし、ガクッとうなだれた。

しかし、次の瞬間、ガバっと顔を上げ

「でも・・いいんです。お供します。」

「だったら・・こいつの許可を受けて。」とミナムが言うと

「そうよ！！」と歩調を和すカーネル

「はい！！」と言って今度は、ミヌはカーネルの手を引っ張って外へ出て行った。

「あっ・・・おれは・・」とただ一人残されるミナムだった。

仮契約

カーネルとミヌ二人は、ミナムと離れたところで話をしていた。

「あなたの名前は？」そう聞き始めたのはミヌのほうだった。

「カーネル、ミナムと契りを交わした仲よ。」

「冗談でしょ。」ミヌは、カーネルの言葉を一蹴した。

「いいえ。したわよ」

「うそおっしゃい。何なら、いま調べましょうか。」そういってミヌは

カーネルに近づき、股間に手を入れようとした。

「何すんのよ！！」

「調べるんですよ。契りを結んだかどうか」

「結構よ。」

「本当のこと言いなさいよ。」

そう言うとミヌの左手が青白く光り、ボール上のものができ、やがて、ボールの上を小さくバチバチと電撃が走っていた。

そのミヌの迫力に押され、

「わかった、わかったから」

「じゃあ話すのね。」

ミヌはそのボールを持ったまま言うと

「まだよ。・・・」とカーネルは、真実を言った。

そして、婚約者の話も・・・

「そう・・・じゃぁ・・私とあなたはライバルね・・・」

その言葉に、カーネルは、戸惑った。

「どういう意味？」

「だって、お互いが信頼しないと契りを結んでも意味がないでしょ？」

「そうだけど」

「そしたら、とりあえず、仮の契りだけでもしておかないと」

「仮の契りって？」

「カーネルさんは、左手に契りの契約をサインするの。そして、私は右手に・・・」

「どういう意味？」

「仮の契りの効力は半分しかないの、これから恋のライバルになるあなたを認めるから。」

「何で私が左手なの？」

「心臓に近いから・・・それに、あなた、ミナムさんをあなたの婚約者と決闘をしなければならないのよ。それにあなたは、ミナムに魔法で応援できないわよ」

「あ・・・」

「ミナムは、まだ、未熟だから。私が、影で彼を守るわ。だから・・・」

「ところで、何故、ミヌは、ミナムのことをそこまで・・・」

「私は、ある定めを受けたの、ミナムを守るという・・もうすぐ、斎宮のヤマト姫が来ます。それまでに」

そう言って二人は、ミナムのもとに戻った。

そして、一人待つミナムに

「両手を出して。」カーネルがそう言うと

わけもわからず、両手を差し出すミナム

二人は、すかさず、契約の呪文を唱え、ミナムの両手は青白く光出し

ただ、「わっ！！わっ！！」驚くミナムを尻目に
カーネルは、左手に、ミヌは、右手にそれぞれ仮の契りのサインをした。
しばらくすると、青白い光は消えた。
ただ、呆然としているミナム、ふと、われに返って。
「今何した？」
カーネルとミヌは、にこやかに笑って、
「私たちとミナムの契約の魔法をしたの。」
「契約って？」
不思議そうに聞きなおすミナム。それに対し、カーネルが
「わたしとミヌの二人があなたの魔導士としての契約よ」
まったく意味のわからないミナム
「そう・・か？」
ただ、そう言うしかなかった。どういう意味だ？
本当に一体どうなってるんだ？と悩むミナム
たまりかねてミヌが

「ミナムさん。そんなに悩まないで。」

「そんなものか？」

ミナムの質問にミヌは

「そんなものですよ。」

「そうなんか・・」

「それともうすぐ斎宮様が来られますから。」

また、わからないことを・・・そう思うミナム

「さい・・ぐさまって？」

斎宮様

「斎宮様よ、ここ、斎宮で一番偉い人で、名前をヤマト姫というんですが。皆は、斎宮様と呼んでいます。」

しばらくして、ヤマト姫が現れた。そして、ミナムを見て、

「お前がミナムか」

「たぶん・・・」

ただ、開き直って答えるしかないミナム

心の中では、もうやけくそだ!!と叫んでいた。

「たぶんとは何じゃ・・・たぶんとは・・」

「いや・・・」

ただ薄ら笑いをするミナム。そのだらしない笑いを見てヤマト姫はミナムの耳を持った。

「イテテ!!」

「ちょっと来い。」

ヤマト姫は、そのまま、ミナムを引きずって連れて行こうとした。

「わ～」急に、引きずられパニックになるミナム、ただ叫ぶのがやっとだった。

「斎宮様！！」とカーネルとミヌが着いて行こうとしたら。

「来るな！！おぬしら！！」と二人は、追い返されてしまった。

そのまま、ずるずるとミナムは、引きずられて行った。

ある場所につれてこられたミナムに

「シャキッとせんかい！！！」と活を入れるヤマト姫

「はい！！」と正座をするミナム

「お前にはいくつかの試練がある。」

「試練？」

「そうだ、まず、カーネルの親に了解を得ることだ。」

ヤマト姫の言葉を聞いて、目が点になるミナム

「えっ・・と・・それって・・挨拶に行くことですか。」

「そうじゃ、そこには多くの試練が待っておる。」

それは、両親への挨拶っていつの世も試練だよ・・・普通は、そうミナムが心で思っていると

「何か言ったか？」

「あっ・・いえ・・なにも・・」

「そうか？」

「はい・・」

「それと・・・」

「それと？」

不思議そうに聞くミナムに対して、ヤマト姫は指を指した。

指を指され、たじろぐミナムに

「決闘をせねば」

「ははは・・・決闘ね・・・」

しばらく、考えるミナム、ひょっとして、俺が戦わないといけないのか？

そう考えると、しばらく固まってしまった。

「・・・・・・・」

「おい？」と声をかけるヤマト姫・・・ミナムに反応がない

「・・・・・・・」

「どうしたんじゃ？」

「・・・・・・・」

その間、約3分・・・・

「ええ～！？！！」大声を上げて驚く

その驚きを見て、逆にびくっとなるヤマト姫、そして、

「反応が遅い！！！」と叫び、

パカーンとミナムの頭をたたいた。

「イテテ・・・」頭を抑えるミナム

「それで？決闘って？」

「この村の掟で、婚約者を奪った者は、婚約者と戦い勝ち、正式な夫として、認められねばならん。」

「このまま逃げるのは？」

「ならん。」

「なぜ？」

「カーネルの両親が村に不義の娘を持ったとして、この村におれなくなる。」

「もし、俺が負ければ？」

「カーネルも処刑される。不義の罪として。」

言葉が出ないミナム、その様子を見てヤマト姫は、

「わかったな。ミナム」

そう言い残して、ミナムの前を去った。

しばらく、考えるミナム・・・記憶がないのが恨めしい・・・

しかし、カーネルは、命がけで俺と契りを交わしたんだ。

男として、戦わねば・・・けど、さっきまでサラリーマンだった

おれが戦えるのだろうか？ただ、ミナムの頭には不安しかなかった。

決闘って？

二人の元に戻ったミナム・・

「どうだった？」それがカーネルの一言目だった。

カーネルをチラッと見て、ふと”カーネルも処刑される。不義の罪として。”というヤマト姫の言葉を思い出し

「カーネル・・・ごめん」

ミナムはつぶやいてしまった。

「なに謝ってるのよ。ところで、斎宮様は、何を話されたの？」

「お前の両親への挨拶と元婚約者との決闘・・・・」

「やはり・・決闘か・・・・」

「カーネル知っていたのか？」

「ええ・・まぁ・・村の掟ですもの。」

その言葉を聞いたミナムは、そこまで俺を・・・

そして、

「すまん・・・・」

と再び謝った。

「だから・・・」

「ところで、決闘の時は、カーネルも一緒に戦うのか？　魔法か何かで？」

そのミナムの言葉にカーネルは、逆にうつむいた。

「無理なのよ」

「なぜ？」

「私は、ある結界の中にいるから。」

「結界って？」

ミナムの頭には、霊能者が、悪霊から防御するのに結界をはることぐらいしか

思いつかなかった。

「結界の中だと、魔法が使えないの。」

「なぜ？カーネルが結界の中に？」

「決闘は、正々堂々としなければ、いけないの。私は加勢できないの。」

その言葉を聞いて、不安が的中したミナム、どうしようこのままだ

と殺されると思っていると

「だから、私が守るから・・・」

そう横からミヌが言い出した。ミヌの言葉が理解できないミナム

「？」

「さっき、カーネルさんと一緒に契約したでしょう。私の魔法であなたを守るから・・・」

「ミヌも・・・魔法が使えるのか？」

「もちろんよ。私も、魔導士試験合格してるの、しかも、カーネルさんと同じ、第一種」

その言葉に驚くカーネル、一方、何を言っているかわからないミナム

「ミヌって、今年の首席？」

カーネルがたずねると、ミヌがカーネルのほうを見て」

「そうよ、昨年首席のカーネルさん」

二人とも一体何を言ってるんだ？とりあえずわけのわからないミナム

「それで一体何がどうなるんだ？」

「だから、私があなたを影から守るから、信じて」

その言葉に、ぐっと来たミナム・・・
ただ・・うつむいて
「ありがとう・・」という言葉しかでなかった。
しばらくして、カーネルとミヌが
「それより、ミナムの能力が見たいわ・・・」
守ってもらえるのだから大丈夫と思ったミナムは
「しかし、俺・・・剣道少しかじったくらいしかできないぞ。」
そういうと、逆にカーネルとミヌが不思議そうな顔をした、
「ケンドーって？何？」
「だから、剣をもってこうやる・・」
「ああ・・剣術ね・・」
ここではそういうのか・・・そう思うミナムは
「ところで、俺の相手ってどんなやつ？」
と思わず相手の事を聞いた。
「身長でミナムの約1．5倍くらいかな？　大体ミナム自体背が低いわよ。」

「ごめんね・・小さくて・・・」

そういいつつミナムは、聞くのではなかったと後悔した。

「ミナム行くわよ。」

カーネルの声に

「どこへ？」

ミナムの声は無視され、そのまま二人に連れられたあるところへ行った。

不動の剣

3人が行ったのは、不動の剣が置いてある広場だった。

不動の剣。それは、ここ斎宮の御神体である　”アメノムラクモノ剣”通称”えくすかりばー”

を模した刀が置いてある広場だ。模した刀と入っても実際よりかなり大きなものでどちらか言えばモニュメントに近かった。

そこに着いた3人・・・

ミナムの開口一番は

「ここは？」

だった。その言葉に、ミヌが振り返り

「不動の剣の広場。」

「不動の剣って？」

「”えくすかりばー”のモニュメントがあるところよ。」

「エクスカリバーって？聖剣で有名な？」

「あら、よく知っているわね。」

「そりゃ～あれだろう、石に刺さっていて、真の王様しか抜けない

剣の事だろう。」

ミナムの言葉を聞いて、あきれるカーネルとミヌ

「えくすかりばーの正式名称は、アメノムラクモノ剣って言って、ここ斎宮の御神体なの。」

その言葉を聞いて頭を抱えるミナム、アメノムラクモノ剣って、草薙の剣だろう？

一体どうなってんだ？と悩んでいると、

「何悩んでいるのよ」とカーネルが声をかける、その言葉にミナムは、そうだ、

ここは、別の世界だからこんなことがおきるんだ、と思っていると目の前で

ミヌがうろうろしてるのに気づいた。

「ミヌどうしたんだ？」

「ここに斎宮様が剣を置いていったはず何だけと。どこかな？」

ミヌがあたりを探すがなかなか見当たらない。

「おかしいな？」と探しているミヌ、そして、不動の剣の横にある小さい剣を見つけて、

「ミナム、この剣を取るのよ」

それを見てミナムは、こんなに大きい刀は無理だろうと思った。
その刀は、長さが美男の身長とほぼ同じで、形は青龍刀のように分厚く見るからに重そうだった。
それもそのはず、ミナムからは、不動の剣しか見えていなかったのだ。、
ミヌに聞きなおすミナム
「これを。おれで？」
てっきり、自分が指した剣だと思い込み返事をするミヌ
「そうよ。」
不動の剣を見てミナムは、
「無理だろう・・」
とつぶやいた。その言葉にあきれたミヌ、
「そんなこと、言わずに、とりあえずやって・・」
「はいはい・・・・」
「ミナムがんばって」そう励ますしかないカーネル
ミナムは仕方なくその剣を手にして、両端を踏ん張り、引き上げよ

うとした。

「ミナムちょっと・・それは、・・・」とミヌが言おうとした時だった。

バキッと言う音とともにその刀はふわっと浮きあがった。

「うああ!!!!」と驚きの声を上げ、思いっきり持ち上げた反動で、ひっくり返るミナム

その光景を見て驚く二人。

そして、ミナムが軽々と不動の剣を持っている様子を見たカーネルが

「ミヌ!!あなた何かした?」

「わたしじゃない・・・」と否定をするミヌ

「じゃぁ・・どういうこと?」

「あ・・驚いた・・へぇ〜こんなに軽いんだ・・」とその剣を片手で持ち上げるミナム

「あの剣って・・・結構重いわよね・・・」とミヌに話かけるカーネル

「だってあれって、不動の剣でしょ?斎宮の」

「ってことは?」

「あれって・・・確か固定してあったはずよ。」

「それって・・」

「そう・・絶対に持ち上がらないの・・」

と二人は顔を見合わせた

「「ええ～！！！！」」

二人が、ミナムを見るとその刀を片手で軽々と振り回す姿がそして、

「ミヌ・・・これがお前の魔法か・・・」と言いつつ不動の剣を軽々と振り回すミナム

「どういうこと？」

「さあ？」

本当に不思議そうにミナムを見る二人・・・

どうなっているの？

顔を見合す、カーネルとミヌ・・・

二人は思い出したかのように走っていって

「ミナム・・・ちょっと待った。」

そう言って、二人は、剣が置いてあった場所を見て、どうしよう・・・

「どうしたの二人・・・」

気楽に話しかけるミナム

「ミナム・・これ・・・」と二人が指差すと

「ん？」

ミナムは驚いた。

「これって・・・置物？」

コクリとうなずく二人・・・

元の場所にそっと置くミナム

「これでわからないよな・・」

うなずく二人だったが・・・

ミナムを見た瞬間、後ろのヤマト姫が立っているのを見て逃げていった。

「お～い・・・どうしたんだ。」

あれ・・どうしたんだあいつら・・・俺を置いて、訓練はどうすんだ。

ミナムがそう思っていると、後ろから

「コホン」と咳がした。

もしや・・・と思いミナムが振り返ろうとすると。

パカンと棒のようなもので頭をたたかれた。

「イテテ！！」

ミナムが振り返るとそこには、ヤマト姫が怖い顔して立っていた。

「おぬし不動の剣に何をした！！！」

「あ・・いや・・・」

口がどもるミナム・・・その様子を見て、不動の剣を見たヤマト姫が、

「貴様これをどうやって！！持ち上げた！！」

「ミヌの魔法で・・・」

「ミヌのやつ・・・」

と言ってヤマト姫はその場を去ろうとしたが、

「お前の剣はこれだ。」と一つ目のロバが引いてきた台車に乗せてある剣を指差した。

「ありがとう。」とミナムはその剣を取り、軽々と振り回し、

「この剣竹刀みたいだな。これで戦えばいいのか？」

ヤマト姫の返事はなかった。というより、その光景を見て、驚いていた。

「貴様、その剣も軽々と使えるのか？」

「ああ・・本当に軽いな・・・魔法ってすごいな。」

そう関心しているミナム。

これは、よほどじゃ・・・と驚くヤマト姫・・そして、ミヌを追いかけた。

「斎宮様、ごめんなさい・」と平謝りするミヌ

「ミヌよ・・お前、いくら魔法で応援しろといったが、あれはやりすぎだろう。」

ヤマト姫が土下座をしているミヌの頭を棒でつつくと

「斎宮様、誤解です。私、まだ何も魔法をかけていません。」

「何を言う！！！普通の力で不動の剣が持ち上がるものか。」

「ですから・・・私、本当に魔法をかけていないんです。」

「本当か？」

「はい。なんでしたら、私とカーネルを結界に入れていただければわかります。」

「まことか・・」

「はい。」

「どういうことだ。」

「たぶんかなりの怪力だと。」

「ということは、力をセーブする魔法をかけねば、相手が即死の可能性もというより会場で多くの死者が出るかも・・・」

「ミヌよ当日は、頼むぞ。」

「はい・・斎宮様」

挨拶

この日、ミナムは、カーネルの両親へ娘をもらう挨拶に行くことになった。

「ミナム・・・大丈夫？」

ミナムの緊張する姿を見たカーネルが心配そうに声をかけた。

「だいじょう・・ぶ」

「なに緊張しているのよ。」

緊張するわい・・・いつの世でも、両親に娘をくださいと言うんだから

しかも、婚約者がいる女をくださいだもんな・・・

そうミナムが思っていると。

「そろそろ時間よ・・・」

「ああ・・」

立ち上がるミナム・・・

その姿を見たカーネルは、そっと、ミナムの服を直した。

「がんばってね！！」

「ああ・・」

二人は、両親のいる家にむかうべく、斎宮を出た。

やがて、二人は、カーネルのいた村に着いた。

彼らを見た村人は、すぐに集まり、二人を囲み罵声を浴びせた。

「貴様！！どうやって、たぶらかした！！」

「どんな、魔法を使った！！」

その様子を見て驚くミナム、動きようがない、どうしたらいいんだ。

そう迷っていると。

「やめてよ！！この人には、罪はないわ！！」

そう言って、ミナムの前に両手を上げ立ちはだかると今度は、村人の矛先は

カーネルに向けられた。

「この淫乱娘が！！！」

そして、村人はついに二人に対して石や物を投げつけてきた。

それにあたり、「いた！！」と頭を抑えるカーネル

その時だった。

がばっと、カーネルをかばい抱きしめるミナム

ドキッと鼓動があがるカーネル

そして、数々飛んでくる物のたてになるミナム・・・

その影で、ミナムに抱きしめられ

カーネルは、ドキドキしていた。

村人からの投げつけられる暴言や物があたるのをただじっと我慢し、

カーネルをかばうミナム、その時だった。

「村人よ・・・やめるのじゃ！！！」

その声に振り返る村人たち、そこにはヤマト姫が立っていた。

「斎宮様・・・何故？」

「不義ですぞ！！」

「まだ、正式に不義と決まったわけじゃあるまい・・・」

そうさらっと、答えるヤマト姫・・・

その言葉に驚く村人たち、

「不義でしょう？　婚約者がいるのに・・・斎宮様・・・」

「まだ、婚約しかしていないんだろ。」

またさらっと答えるヤマト姫・・・

「斎宮様・・・」と返答に困る村人たち

「とりあえず、お前ら、両親へ挨拶に行くのじゃ。」

そう言って二人をカーネルの親元へ向かわせた。

「斎宮様？どうして？」

「今回は、わしの領域で起こった事態じゃ。少しはもわしにも責任があるのじゃ」

ヤマト姫は、村人を諭した。

「斎宮様？斎宮様がそこまでしなくても」

村人は不思議がった。

カーネルの家に着いた二人。

「ここか？」

「うん。ミナム大丈夫？」

「ああ・・」

ミナムの緊張は次第に高くなっていった。

玄関を叩き、

「はい。」という女性の声と共に、ガチャとドアが開いた瞬間だった。

開いたドアの向こうには、腕を組んで睨むつけるカーネルの父親がいた。

「失礼します。」と言い直立不動で立ち頭を下げ、玄関に入る許可を待っているミナム

「まぁ・・・入りなさい。」

とカーネルの父の言葉は、意外と優しかった。

「ありがとうございます。」

そう言って、二人は家の中に入った。

二人は、ある部屋に通された。そして、カーネルの父が

「まぁ・・・座りなさい。」とミナムに言うと

「ありがとうございます」とミナムは一礼をして、その場に座った。

「今日は何のようだ。」

「正式に挨拶に来ました。」

「ほう・・・正式にとは」いぶかしげな顔をするカーネルの父

「順番が逆になって、まことに申し訳ございません。しかし、お嬢さまとの仲をお許しください。」

そう言って、ミナムは、座っていた椅子から地面におり、土下座をした。

その光景を見たカーネルの父は戸惑った。彼は一体何者なんだ？

カーネルの父は、ミナムはもっといい加減なやつだと思っていたからだった。

一方、横にいたカーネルは、ミナムの様子を見て、胸が熱くなるというか苦しくなるというか

嬉しいというか、えも言えぬ感覚に襲われていた。そして、さっき自分をかばってくれたことを思い出し・・・

胸の鼓動が高くなるのを感じて、口を押さえ、ほろりと涙を流した。

カーネルの様子を見ていた父は、しばらく考え、ミナムに声をかけた。

「まぁ・・・顔をあげなさい。」

素直に顔をあげるミナム、しかし、緊張のボールテージは、最高潮を迎えていた。

耳にまで聞こえる鼓動、異様な口の渇きと口内に広がる変な味・・・

「は・・い。」

「ミナム君・・・ひとつ聞いていいか。」

「はい。」

「娘をどう思っている。」

しばらく、沈黙が続いた。

カーネルの家族が固唾を呑んで待っているとやがて、ミナムの口から

「かけがえのない人です。」

そうこぼれてきた。

その言葉に、カーネルは感動した。

「そうか・・わかった」とカーネルの父は言い、振り返り

「母さん、酒を用意しろ」そういうと、ミナムの肩をたたき

「娘をたのんだぞ。」

「ありがとうございます。」

そう言って、再び頭を下げるミナム、カーネルは、ミナムに寄り添っていった。

やがて、話は、決闘の話になった。

「明日、相手方へ婚約破棄の話をしにいくが、たぶん、決闘になるだろう。そのときは、頼むぞミナム君」

「はい。」

「それと、君は一体どこから来たんだね？」とカーネルの父が尋ねると

「それが・・・」

とミナムははっきりと答えれなかった。第一、全然別の世界のサラリーマンっていっても誰もわからないぞ。

そう悩んでいると、カーネルが「お父さん・・・ちょっと」と父親に耳打ちした。

「えっ？」と驚く父親、

「そうか・・それで斎宮様がいらしたのか」

「だから、ミナムって名前も言わないで・・・」

「わかった。なお更だな、」

そして、ささやかな宴が行われた。こうして、ミナムの緊張の一日が終わった。

決闘

斎宮のヤマト姫の仲裁もあり、決闘は7日後に決まった。

しばらく、ミナムは、カーネルとミヌそして、ヤマト姫が協力し

多少の武術訓練を受けた。

そして、一週間が過ぎ、決闘の日がやってきた。

決闘の入り口には、カーネルの婚約者だったゴリアテをいた。

そして、「お前がミナムか」とにらみを利かすゴリアテ

彼こそ、カーネルの婚約者だった。

身長で言うと、ミナムの約1，5倍

ミナムが現在の約１７０ｃｍとすると２６０ｃｍくらいあった。

ゴリアテを見たミナムは、

「あれと戦うのか？」とカーネルに聞いた。

「勝たないとあなたは、死ぬのよ、私と一緒に・・・」

「大丈夫ですよ・・・私がいるから・・」と横で声をかけるミヌ・・

・

「わたし、信じてるから・・・」そう言って、ミナムの両手を握るカーネル

「ああ・・」

「がんばって！！！」と励ますミヌ

「ああ・・」

「そろそろ時間じゃ・」

「私は、結界の中に行くから・・」

そういって、カーネルは、ヤマト姫に連れられて行った。

決闘場に向かうミナム、本当に俺は大丈夫なのだろうか？

決闘場に入ったミナム、、目の前に立つゴリアテ・・・・

間近で見てミナムは、でかい・・こんなやつに勝てるのか？

そう思いながら、剣を構えた。

「こんなチビと戦うのか」

それがゴリアテの一言目だった。そして、ギャラリーのほうを振り

返り、
人差し指を天にむけ
「一分だ。」
おおっとどよめくギャラリー
「一分で充分だ。」
一分持つのか俺と逆に心配になるミナム・・・
やがて、ドン、ドンと始まりの合図の太鼓がなった。
にやりと不適な笑みを浮かべるゴリアテ、大きく振りかぶって
「覚悟!!!」
と剣を振り下ろした。
キーン!!!という高音が決闘上に響き渡った。
「ミナム!!」そう叫ぶカーネル
ミナムは、ゴリアテの攻撃を剣で受け止めていた。そして
あれ?と不思議な感覚がミナムを襲った。
こいつ、思ったほど力がないぞ。・・・そう思ったミナムは、

必死になって押さえつけるゴリアテの剣をえいと押し返した。

すると、ゴリアテの剣は跳ね返され2、3歩後ろに交代するゴリアテ、

すげ～これがミヌの魔法の力かとミナムが感心していると

「貴様！！！！」とゴリアテは本気で怒り出し、何回も刀を振り下ろしてきた。

キ～ン！！　キーン！！と会場に響く金属音・・・・

そして、再び剣をあわせ、力比べとなった。

「今度は、さっきのように行かないぞ！！！」と力むゴリアテ、

さっきとは違うようだと思ったミナム・・・そして、力を入れて

ギン！！！と

その剣を跳ね返すと、後ろによろめくゴリアテ・・・

会場はその光景に驚愕した・・・

「あのチビ、やるな！！」

「勝負は互角か！！」

と会場がどよめき始めた。

そんな時だった。

「待て！！！」と会場の外で声がした。

その声の主は、ゴリアテの兄、ガリデアスだった。

「兄じゃ。」

「貴様！！！、卑怯なやつだな。」

不思議そうにガリデアスを見るミナムとカーネル

ガリデアスの横には、ミヌがいた。

「この魔導士は、誰だ。」

「えっ？」

「カーネル以外にこんな魔導士とも契りを交わしていたとは、卑怯なやつ！！！！」

会場は、ミナムに向かってブーイングの嵐だった。

ガリデアスは、まず、ミヌを結界の中に連れて行った。

そして、「この決闘は仕切りなおしだ。」と叫び

「俺の選んだ剣で再開する。」

と言って、二人に同じ剣を渡した。

その剣は、ミナムが持っている剣よりはるかに大きくなっていた。

しかし、ゴリアテにとっては、自分が持っていた剣と同じ重さだった。

仕方なく、その剣を手にするミナム、ふと、さっきより軽くなったなぁ、そう思った。

その光景を見て、頭を抱えるヤマト姫、

ミヌのバカ・・・失敗しおって・・・そう思い、ミナムに念を送った。

「ミナムよ・・・・とにかく、力を抑えるんだ・・・いいな」

えっ!!えっ!!!何の今の・・・ただ驚くミナムに

「はじめ・・・」と再び決闘再開の太鼓が鳴り響く

誰しもがミナムが一撃でやられると思っていた。

「貴様!!!覚悟!!!」そいって、ゴリアテは、ミナムに切りかかってきた

そして、大上段から思いっきり刀を振りかざした。

さっきと同じように受けるミナム

キーーーーン！！！！という金属音が会場になり響き

つばぜり合いをする二人、

ミナムが力を要れさっきと同じように跳ね返した時だった。

その光景に会場の誰しもが我が目を疑った。

ギンという音と共にゴリアテの剣は跳ね返され、その勢いで、後ろ吹き飛ぶゴリアテ、

「うあああぁぁぁ！！」という叫び声と飛んでいくゴリアテ、

どすーんと会場の壁に叩きつけられた。

そして、ゴリアテは、その場で意識を失った。

静まり返る会場・・・

「えっ・・・」と声も出ないガリデアス

それより驚いたのは、ミナム

一体何が起こったんだ・・・

「あ～あ・・・やっちゃった。」とミヌが言うとその横にいたカーネルが

「一体どういうこと？何の魔法をかけていたの？」

ミヌのほうを見て聞くと

「ミナムさんの力を抑える魔法・・・」

「えっ？」

「この間、不動の剣を持ち上げたでしょう」

「ええ」

「あの時、まったく魔法をかけてなかったの」

「あれって？ミヌがとぼけてたわけじゃなかったの？」

「そうよ。だからこんなことが起きたの。」

「あの体つきで？」

「そうじゃ・・」と後ろからヤマト姫がやってきて。

結界に一本線を追加し、結果の中に入ってきた。

「あやつの力は、尋常じゃない・・・わしにも測りしれん・・・」

「どういうことですか？」

「たぶん、今、最初と同じくらいの力で跳ね返そうとしただけだろうが、

それで、あのゴリアテの巨体があそこまで飛ぶぐらいの力じゃ・・・

」

そう言って、カーネルの肩をぽんとたたきヤマト姫は耳元でつぶやいた。

「カーネルよ。本当に、契りをしていたら、お前は天国にいってるぞ。」

その言葉に耳まで真っ赤になるカーネル・・・

「そんな・・」

「こら・・・変な想像をするな・・・」

「えっ？そんなこと・・・」

「天国と言っても、本当の天国だが・・・」

「えっ？」

「そらそうじゃろう、あの力で抱かれたらひとたまりもあるまい。」

その言葉を想像して、ぞっとしたカーネル。ちょっと待って・・

斎宮様、本当のこと知っているの？どうしよう？と戸惑っていると

「どうしたんじゃ・・・」

「斎宮様・・・ごめんなさい・・」

「何のことじゃ？」

「わたし・・」とカーネルが言おうとするとカーネルを指差し、言葉をさえぎった。

「わしは知らんぞ何も・・」

「ありがとうございます。」

「それより、禊をせねば・・・カーネルとミヌもな」

「ミヌも？」

「カーネルさんの後は、私ですから・・・」そううれしそうに言うミヌ

「さあ・・勝者を祝福しておいで。」

ヤマト姫の言葉に

「えっ・・」

「お前の契りの相手だぞ、せめて抱きしめてやれ・・・」

「えっ・・でも・・・」

真っ赤な顔がなおらないカーネルに

「じゃぁ・・私が行きますよ。」

ミヌがカーネルをけしかける。

「待って。行くわ」

そういって、ミナムに向かって歩くカーネル

近づくカーネルを見つめるミナム

「ミナム・・・」そういってミナムを抱きしめるカーネル

そして

「ありがとう・・・」耳元でささやいた。

大混乱！！

決闘場では、ミナムに抱きつくカーネルの姿があった。

一方、ゴリアテは、気絶したままだった。

会場には、なんとも言えぬ空気が流れていた、そう、

村人たちは、名士の息子が完全に負けたことに動揺していたのだった。

そして、ヤマト姫が今回の決闘が終ったことを告げようとした時だった。

「意義あり！！」そう叫んだのは、ゴリアテの兄、ガリデアスだった。

「この決闘は、無効だ！！」

その声に、ヤマト姫が

「わしの判断に間違いがあるというのか？」

「そうではありません。途中まで、別の魔導士を使っている時点で信じがたい。」

「そこまで疑うのか？」

ヤマト姫の一言に

「その通りです。私も信用できません」

そう言って、村の衛兵隊長もでてきた。

そして、ミナム・カーネルそして、ミヌを衛兵隊が取り囲んだ。

どうする？とあせるミナム、とりあえず、何とかしないと。

その時だった。

「いでよ、結界！！！」そう衛兵隊長が叫んだ。

3人を囲むように結界が出来上がった。

魔法が使えなくなって、動揺するカーネルとミヌ

そこへ、ガリデアスの魔導士が攻撃をしてきた。

火炎の周りをバチバチとうなりをあげる電撃が走る球状のものがミナムたちを襲った。

ミナムは思わずカーネルとミヌを抱きかかえ、その攻撃を背中で受けた。

バチという大きな落ち共にミナムの背中でその火炎ははじけた。

3人は、その直撃で死を覚悟した。

ミナムの影で、目をつぶっていたカーネルとミヌ・・・

あれ・・？とふとミナムを見るとミナムは目を瞑ってぐっと絶えていた。

その姿を見て、カーネルは

「ミナム大丈夫？」

と声をかけると、ミナムは目を開け・・・

あれ？

「どうしたの？」

あんまり痛くない・・・・とだんだん背中が熱くなってきた。

顔がだんだん赤くなるミナム

「どうしたの？」、

思わずミナムは、二人を抱きかかえ、

「アツー！！！」と叫び飛び上がった。

二人もあわててミナムの首に抱きついた。

次の瞬間、３人だけでなく、そこにいた全員が目を疑った。

３人は、気づいたら雲の上まで飛んでいた。

「なんという、スピード！！」

「あんな、スピードははじめて見た。」

「ミナムというやつは、魔法も使えるのか、しかも・・結界が利かないぞ。」

衛兵隊の魔導士たちは、驚愕した。そして、はっと気づき、

「追いかけろ！！！」

と魔導士たちは、ミナムたちを追いかけた。

「ここは？」と驚くミナム

「さぁ？」とわけのわからない二人。

「どう見ても、雲の上だな？」

「ミナムどうやってきたの？」とミヌが聞くと

「ミヌの魔法か？」

「私じゃないわよ。」と二人がカーネルを見ると

「私も違うわよ。」

「じゃぁ・・・どうやって？」

不思議そうに考える3人、やがて、上昇が止まった。」

「ひょっとして・・・？」

3人はいやな予感がした。

徐々に落ち始めたのだ。

「あ～落ちる～！！」

衛兵隊の魔導士たちが、躍起になって、追いかけて飛んでくる間、

ミナムたちは、徐々に下降していった。

「ねぇ～私達どうなるの？」

ミヌが聞くと、

「たぶん・・・元の位置におちるわよ。」

とカーネルが言うと、

「魔法で何とかならないのか？」と聞くミナムに

「無理よ結界が！！」とすでにその落ちる勢いにパニックに近いカーネルとミヌ

「だいたいこんなに高いところまで飛んだことないし。」

だんだん重力加速がついていった。

「あ～落ちる！！！」そう叫んでも3人は落ちていく。

「きゃー！！！！！」

「どこまで、いったんだ？あいつら」と3人を追いかけていた衛兵隊の魔導士が

上を見ると黒い点がものすごい速度で近づいてきた。

その落ちてもののを見た魔同士達

「なにか！！来るぞ～よけろ！！」とおあわてでよけた。

「きゃー！！！！」という叫び声と共に3人が落ちていった。

「あぶない・・・」と顔を見合わせた魔導士達だったが、

「あっ！！」とまた3人を追いかけた。

一方、ヤマト姫は「もうわしゃ知らん」と決闘場から出ていた。

その時だった。

どす～ん

決闘場のほうから大きな地鳴りがし、地震がしばらく起こった。

それに驚いたヤマト姫は、会場の方へ引き返した。

ヤマト姫が目にしたもの・・・それは、

ミナムを中心に大きなくぼみができ、決闘場は壊滅的打撃を受けていた。

「なんじゃ・・・これは・・・」

そして、中心には、カーネルとミヌをそれぞれを両手で抱え呆然と立っているミナムの姿があった。

それは、少し前のことだった。上空から落ちてきたミナムは、カーネルとミヌを抱えたまま、会場に着地をした。

「ついたぞ・・」

と一息するまもなく、地面はべコとへこみ、次の瞬間、地鳴りとともに衝撃波があたりを襲った。

「うわ～！！！」

「なんだ！！」

衝撃波に飛ばされる衛兵達、そして、衝撃波で混乱するギャラリー

ただ真ん中で、衛兵達が飛ばされていくのを見て自体がわからない

ミナムたち3人・・・

衝撃波も収まり、辺りを見たミナムたち、自分を中心に半径５ｍほどの深さ２ｍほどの穴ができていた。

そして、ミナムは二人を地面に降ろし、

「一体、何が起きたんだ？」

「勝手に飛んで行ったみたいだけど・・」

3人は不思議そうに辺りを見て、顔を見合わせた。

「どうなってるの？」

「さぁ？」

そこには、崩壊した決闘場、その中にるいるいとと横たわる気絶した衛兵隊、ガリデアス、そして、ギャラリー達・・・

上空から戻ってきた魔導士達が、その光景を見て戸惑った。

「早く助けなければ」という魔導士がいる一方「何をした！！」と怒る魔導士がいた。

そんな中の一人が、「貴様！！何をした」と再び魔法で、ミナムを攻撃してきた。

とっさにミナムはその攻撃を、剣で跳ね除けた。

「えっ？」

その光景に驚く、カーネルとミヌ

「あの剣って、魔法を跳ね返すの？」

「そんな剣って・・・まさか？」

ミナムは、魔導士に向いて、剣をかまえた。そして、その魔導士に近づいて行った。

焦った魔導士は、

「わわ・・・！！！」

無差別に魔法で攻撃をしてきた。

それを、剣で跳ね除けるミナム、

やがて、ミナムは魔導士の間近に立ち

「もう・・いいでしょう」と魔導士に声をかけた。

魔導士もその恐怖に「は・・い・・」といって、その場から逃げた。

混乱する決闘場、その状態を見たヤマト姫・・・

このままでは、いかん！！と決闘場の祭壇に立ち、

「皆のもの！！」と叫んだ。

それを見たギャラリーは、

「斎宮様！！！」

「あれは、悪魔ですか？」

そう叫んだ。

「皆、静まれ！！」

「斎宮様～！！」

「あやつが、ミナムじゃ！！！」

そう言って、ヤマト姫はミナムを指差した。

皆がミナムのほうを驚愕の表情で見る、そして、口々に

「あの・・・」

「本当ですか？」

ヤマト姫は、コクリとうなずき、

「伝承の通り現れ、そして、魔導士と契約した。」
「何故、もっと早くわれわれに・・・」
一同が、救世主が現れたと喜びそうになった時、
「しかし、皆のもの、このことは、口外するな！！」
その言葉に驚く、一同・・・
「何故！！」
「この村の伝承であっても、京では、反逆になる・・・」
「では、どうしろと・・」
「あれは、ミナムではない。」
「じゃぁ、この現象は？」
「竜巻だ！！　衛兵隊長大丈夫か？」
そういってヤマト姫は、衛兵隊長を見た。
彼は何とか起き上がり
「はい・・何とか」
「決闘の最中に竜巻が起きたそう報告しろ、さもないとお前らも反

逆扱いにされるぞ。」

「はっ・・・でも・・ミナムの件は・・・京でも・・」

まじめそうに答える衛兵隊長・・・

「何を言っておる。単なる伝承ではないか。」

「は？」

「あやつは、ミナムではない。」

「えっ？」

驚いて隊長は聞き返した。

「では、何故あのようなことを。」

「あの混乱を治めるためじゃ・・わかったな」

「はい。」

混乱する決闘場・・・その真ん中に立っていた3人・・・

決闘場に来ていた人々は、ミナムのところへ謝りにきた。

「ミナム殿・・申し訳ない・・・」

「いいよ・・俺は、それより、カーネルに謝ってよ」

ミナムは、そういって、カーネルの方を指差した。

「ミナムっ・・・いいってば・・」

「よくないよ・・」

そう話をしているとヤマト姫が現れた。

「ミナム。カーネル、ミヌよ、行くぞ。」

3人は、斎宮へ連れて行かれた。

一方、この事件は、京まで届いていた。

黒騎士団詰所、ここは、ミカド直属の近衛師団の配下にあり

征魔将軍となっていた、マヤザキにその一報が入っていた。

「マヤザキ様・・・」

「どうした・・・」

「ミナムが現れたと情報が?」

「ほう・・どこで?」

「斎宮のあるセイの地、カモベ村だそうです。」

「ほう・・そうか。」

「いかがいたしましょう。」

「まぁ・・ほうっておけ・・・また誤報かも、」

「しかし、被害が・・・」

「どんな被害だ。」

「竜巻がおき、衛兵隊を中心に多数の重傷者・・」

「ほう・・」

「決闘場が・・・崩壊したそうです。」

「崩壊・・か・・まあ・・まだ、ほっておけ、下がれ」

「はっ・・」

ミナムか・・・

まぁ・・いい・・・今回は、見張りもつけたし・・・

ミザキはそう思いつつ、詰め所を後にした。

パソコントラベル・・・・

ヤマト姫に連れられてきた3人、ミナムが身を寄せていた武器庫の前まできて

「ミナムはここで待つように」そう言われて、一人残った。

俺はどうしたらいいんだろう？と思いつつ一人残るミナム

ふと今日のことを思い出していた。

そういえば、俺は一体どうしたんだろう？あの力は魔法のおかげ？

ふと自分の力を試してみたくなった。

外に出たミナム、ふと大きな石を持ち上げた。

ふあっと持ち上がる・・・

やはり・・・

今度は、軽く飛んでみた

かるく目線が武器庫の前を超えた。

これは・・・ひょっとして、・・・・重力が小さいのか？

まるで、どっかのアニメみたいな設定だな？

とりあえず、自分の力をセーブしなければ、
そう思うミナムだった。
そうこうしていると、カーネルが戻ってきた。
「ミナム、何してるの。」
「魔法の効力のチェック。」
「えっ？」
「試してみたんだけど・・・」
「ちょっと効きすぎだな。」
「そう・・・」
「そう言えば、カーネルはどこ行ってたんだ。」
「斎宮・・」
「ミヌは？」
「まだ、斎宮様のところ・・」
ミナムがミヌの事を聞いたとたんカーネルは、少しムッとした。
しばらくして、

「カーネル・・」とミナムの声がする

「どうした？」

「あっ・・・いえ・・・」

どうしたんだろう、ミナムがミヌのことを聞くのは、普通なのに

なにイラついてるんだろう？そう焦りつつも話題を変え、

「ところでミナム・・・」

カーネルはミナムを武器庫の奥へ連れて行った。

「これ・・」

そう言ってカーネルがあるものを出してきた。

「これは？」

それを見て、不思議に思うミナム

そこには、ミナムがサラリーマンとしてきていたスーツ一式とノートパソコンがあった。

これらを差し出したカーネルは、

「これ・・・あなたが着ていた服・・とこの箱が一緒にあったの。・・・」

「それって？」

「光の中から現れたあなたは、この服を着て、その横にこの箱があったの・・」

「そうか・・・ありがとう、とっておいてくれて・・・」

そう言って、服とパソコンを見つめるミナム、

「ところで。この服は何？」

「スーツと言って、俺の国では、男はこれを着て、働きに行くんだ。」

その言葉を聞いて不思議そうに見るカーネル

「それって、軍服みたいなもの？」

「まぁ・・そんなものかな？」

「ミナムって軍隊にいたの？」

「軍隊というより、商人がいるだろう。」

「まぁ・・」

「あれを大きくしたようなところで働いているんだ。」

カーネルはいまいちよくわからなかったが、

「そうなんだ・・・ところでこの箱は？」

「これは・・パソコンって言って、仕事の道具だ。」

そう言って、ミナムはパソコンを手にした。

「ところで、どうして今頃？」

「禊の儀式で、会えなくなるのよ。１０日程・・・」

カーネルの言葉に

「そうか・・さびしくなるな・・・」

そういってカーネルを見つめるミナム

その言葉胸がキュンとなるカーネル、少し鼓動があがってきているのに気づいた。

ふとミナムを見るとこっちを向いている。どうしよう・・とどきどきしていると

「ただいま戻りました！！」と元気のいい声と共にミヌが帰って来た。

ドキッとするカーネルをよそ目にミヌはミナムの元に走って行き、

「ミナムさ～ん！！　さびしいです。」とミナムに抱きついた。

それを見たカーネルは、カーッとなって、思わずミヌをミナムから引き離した。

「あ～ん！！」と少し甘えた声を出し。ミヌは

「カーネルさんの意地悪！！」と言って、カーネルの手を払った。

「１０日間も会えないんですよ。カーネルさんこそ・・抱きつきなさいよ・・」

そう言って、カーネルの背中をドンとミナムの方に押した。

「あっ！！」という声とともにミナムに抱きつくカーネル

その時だった。パソコンがパカッと開き、電源が入った。

カーネルはミナムに抱きついたまま、どきどきしていた。

頭に血が上り、動けなかった。

一方、カーネルに抱きつかれたミナムもドキッとしていた。

それを見ていて面白くないミヌがコホンと咳払いをし

「お二人さん・・・そろそろ・・・」と言おうとした瞬間、

パソコンが光だした。

「え！！」と驚く3人・・・

「あ！！まぶしい！！」とミヌが目をつぶった。

やがて、その光が消えた。

ミヌが目をあけると二人の姿がなかった。

「ミナムさん！？・・・カーネルさん！？」

いない・・どうしようとあわてるミヌ・・・

そして、走ってヤマト姫のところへ行った。

「なに！！！、二人が消えたじゃと！！！」

ヤマト姫の前で事情を説明するミヌ

「はい・・斎宮様・・・」

「一体、どういうことじゃ！！！」

「私にも何がなんだか！！！」

目覚めはどっきり！！

ミナムが目を覚ますといつもの天井が見えた・・・

自分の部屋か・・・とさっきまでのことを思い出す。

ふと・・・さっきまでのは？・・・と悩むミナム

そうだ・・・カーネルとミヌとか・・・なんか、生々しい

夢だったな・・・なんだ・・・夢おち・・・か・・・

と安心するミナム・・・・

ふと、あることに気づく・・・おれ・・服着てないし・・・

「ん？」何か横が暖かい・・・と横を見ると、金髪の美少女が

しかも・・・裸で・・・？

カ・・・・カーネルか？

彼女の姿を見て、鼓動が上がるミナム・・・

「う～ん・・・」と声を上げ、目をこするカーネル・・・

カーネルも目を覚まし、自分が裸であることに気づいた

目をこすって、見るとそこには裸のミナムが・・・・

「えっ・・・」しばらく、固まるカーネルとミナム・・・
どうなっているの？ここはどこ！？とカーネルも何がなんだかわからない状態だった。
そして、再度、自分が裸で・・・ミナムも裸？？？
「きゃー！！！！」
思わずカーネルは叫んだ。
「けだもの！！！」
パチーン！！！と部屋に響く平手打ちの音・・・・
「イテテ！！」とひっぱたかれた頬をなでるミナム・・・
カーネルは、枕を取った。
「うああ！！」と驚くミナムに
バン！！バン！！と数発枕で殴り続けた。
「カーネル　落ち着いて！！」
「なによ！！」
「話せばわかる！！」

そういうミナムを無視し、殴り続けるカーネル

「服！！服！！」というミナムの言葉に、ふと自分の姿を思い出し立ち止まるカーネル

「あ・・・」と真っ赤になった瞬間だった。

股間から右足につたって血が流れた・・・

それを見たミナムは、硬直した。

そうとも知らずに

「きゃー！！」と叫んでミナムから布団を引っぺがすカーネル・・・

そそくさと布団を自分に巻き、ミナムを見た瞬間

今度は、カーネルが硬直した、そう・・・ミナムの・・・股間の・・・硬直した・・・を見て・・・

「きゃー！！！」とまた叫び、カーネルはうずくまった。

その叫び声に思わず股間を押さえるミナム・・・

沈黙が二人の間を支配する。

やってしまったのだろうか？本当に・・・・また、記憶ないし・・・

う～ついていない

おれ・・・と疑心難儀になるミナム・・・

本当にHしちゃったの・・・わたしたち・・・記憶・・・な・・・
い・・・どうしよう・
わたし・・・とパニックになるカーネル

しばらくして、
「「あの～」」
という言葉を同時に発した二人・・・ふと見ると、いつの間にか見詰め合っていた。
ドックン・・・ドックン・・・と高鳴る二人の鼓動・・・
お互い真っ赤な顔をして・・・・
「カーネル・・・」
「ミナム・・・」
その時だった。
ピッピッピッ！！！　ピッピッピッ！！！
ピッピッピッ！！！　ピッピッピッ！！！

携帯の着信音がけたたましく鳴り出した。

ドキン！！！とした二人、そっぽうを向いた。

「なんなの！？　この音・・」そういうカーネルに

「携帯の着信音だよ。」

あわてて携帯を探すミナム

「けいたい？」

その言葉の意味すらわからないカーネルをよそにミナムは携帯を見つけ

「もしもし・・・」と話し始めた。

誰と話しているんだろう？と不思議そうにミナムを見つめるカーネル

「すみません・・私、数日・・・」

「さっき、消えたから・・驚いたよ、ところで大丈夫か？」会社の上司からだった。

「えっ？無事かって？・・ええ・・何とか・・」

「そうか・・・よかった」

「数日も休んですみませんでした。」

「何言ってんだよ。3時間ほど前のことだろ？」
その言葉に驚くミナムふと時計を見るとまだ5時だった。
一体どうなってるんだ？そう思いつつも
「あと・・すみません・・・、今週休ましてください。何か調子悪くって」
「わかった。体に気をつけてな」そういい残し上司の携帯は切れた。
「誰と話してたの？どうやって？」と不思議そうに聞くカーネル
「これは、携帯と言って、相手と話ができる機械なんだ。」
「ふ～ん」とまったく意味のわからないカーネルを見ると
布団から血がにじんできた。それを見たミナムが
「カーネル・・血！！」というと
「きゃー」と血を見ているカーネル
「とりあえずトイレへ」とカーネルをつれて、ミナムはトイレへ行った。
扉を開けるとごく普通の洋式トイレがそこにあった。
「ミナム・・・これ・・・で・・どうやって？」

半分怒り気味のカーネルにミナムは、

「こうやって・・」

と座り方を見せ・・紙はここにあるから。それと。流すときはこれを押すんだよ

とボタンを押して見せた。

「わかったわ・・・」

「そうか・・」

便座に座ったカーネルをじっと見つめるミナム、それを見て

「ミナム・・」

「なに？」

「外に出て・・・」

「ごめん・・」とそそくさとミナムはトイレの外に出た。

便座に座って考え込むカーネル・・・

どうしよう・・・Hしたのに・・記憶がない・・・

ん？ということは、ミナムは覚えいたらどうしよう？

とミナムを思い出すと・・・急に・・・あの姿が・・・そう・・

あの・・・股間の・・・・

どきーんとなり再び鼓動が高鳴り、耳まで真っ赤になるカーネル

その間に、ミナムは、汚れたシーツを洗濯機へ掘り込んだ。

そして、新品の男性用パンツとTシャツ、そして、スウェットの上下を用意していた。

そういえば、本当に俺達、Hしたんだろうか?また記憶がない・・・

そう思うミナム、

その頃、少し落ち着いたカーネルはあることに気づいた。ひょっとして、

ミナムは、あのことに気づいたのかしら? 前、Hしていないことに・・

もし、そうだとしたら、どうしよう・・・そう思っていると

コンコンとドアを叩く音がした。やがて

「カーネル大丈夫か?」

「ええ・・」

「でられるか・・」

「まぁ・・・」

そういって、カーネルは、便座からたちあがり、ミナムの言ったボタンを押そうとしたら

「どれ？」と迷った。

そして、「えい」とあるボタンを押した。

そのボタンは・・・・ウォシュレットだった。

あれ？ながれないな？と不思議そうに便座を見ているカーネル

ウィーンと棒が出てきた。

棒がでてきた？けど・・・とその棒を見ていると、

棒の先から勢いよく、水が飛び出した。

「きゃーー！！」

「どうした？」

「ミナム助けて・・・水が・・・」そうパニックなるカーネル

あわててトイレの扉を開けるとそこには、便座の前でカーネルが座り込んでいた。

その様子を見て、慌てて、ウォシュレットのボタンを押し、止める

ミナム

「ミナム・・・」裸のまま抱きつくカーネル・・・

「大丈夫？」

「うん・・・」と素直にうつむくカーネル

すぐさま、カーネルは、自分の姿を思い出し

「きゃっ」と隠そうとするが何もない。

そこにミナムが

「とりあえず、これで体を拭いて・・」とバスタオルを渡した。

「ありがとう・・・」

「あと、お風呂入れたから入って。」

「うん・・」

一方、グレースでは、ミヌとヤマト姫が二人を探していた。

「一体どこ行ったのじゃ？」

「斎宮様どうしましょう。」

パニックはつづく

一人、湯船につかるカーネル・・・

ようやく落ち着きを取り戻していた。

そして、ここはどこ？

一体どうなったの？

そう悩んでいた。

ミナムは、あの血のことが気になった。

ひょっとして・・・おれが・・・傷つけたのか？

そして、浴室の前に立ち

「カーネル・・・」

その声に驚くカーネル

「な・・なに？」

「大丈夫か？」

「ええ・・・大丈夫よ・・・どうしたの？」

「さっき、血が・・・」

「血・・・？」そういえば・・・カーネルが思い出すと

ああ・・・生理・・・・

「ああ・・・あれよ・・・・・」

「あれって？」

「あれよ・・・月一の・・・」

その言葉に驚くミナム・・・ってことは、生理？

「大丈夫？」

「ええ・・？」

「それと服置いとくから。」

「ありがとう」

生理・・・か・・・ちょっと待てよ・・・とミナムは近所のコンビニへ行った。

風呂から上がったカーネル・・・ふとおいてある服を見ると男物

これ・・・着るの？　カーネルも男物の下着には流石に抵抗があった。

とりあえず、バスタオルを巻いて、洗面所をでたカーネル・・・

「ミナム」と呼ぶが反応がない

あれ？どこ？と思い廊下に出ると

部屋の方から”ピンポーン”という音が鳴る

何だろう？と思い部屋に行くと。

何度も”ピンポーン”という音が繰り返しなる

「何なのこの音？」と戸惑うカーネル・・・

外には、早瀬由美がいた。

おかしいな～よっちゃん・・いないのかな？

ふとノブを掴むとカチャっとドアがあいた。

無用心だなと由美が扉を開け・・・

「失礼します・・」と声をかけ中に入る。

ふと見ると奥の部屋に人影が・・・・あっいるじゃない・・・と由美はこっそりと部屋に入っていった。

カーネルはさっきまでの変な音が急にやんで

あれ？・・・とまった・・なんだったんだろう？と不思議そうにしていた。

その時だった。

「よっちゃん！！」と言う声と共に後ろから誰かに胸をつかまれた。

むにゅという感覚が由美の手に伝わった。

「あれ！！」と由美が声を上げた瞬間

「ただいま～！！」ミナムは家に戻ってきた。

その時だった。

「きゃ～！！！！？！○×△！！！！！」

カーネルの叫び声がした。

「どうした！！」と慌てて部屋に入りミナム

そこには、カーネルに抱きついている由美の姿があった。

その頃、あのＵＳＢを渡した杉山は、もとの持ち主のところへ行った。

「山っち、おるか～？」

その部屋のドアは半開きだった・・・

あれ～山っちにしては無用心だな～そう思いながら

「山っち。部屋に入るぞ～」と入っていった。

部屋に入ると山っちは、パソコンデスクにうつ伏せになって座っていた。

なんだ～いるじゃね～か・・・そう思い山っち肩に手を置く杉山・・・

寝てるのか？そう思い、山っちの肩を揺らした時、

ゴロンと力なく頭が動き・・・こめかみから血を流れてるのが見えた

えっ？と驚く杉山・・・

「うぁぁああ！！」と叫び腰を抜かす杉山・・・・

その時だった。

カチっという音と共にこめかみに何か金属の冷たさが伝った。

「静かにしろ・・・！！」

さて・・・

斎宮では、ミヌとヤマト姫が二人を探していた。

「斎宮様・・どこにもいません。」

「一体どこに行ったのじゃ？いなくなった何日たっておる。」

「二日です。」

ヤマト姫は頭を抱え、しばらく考えた。

「ミヌよ。」

「はい・・」

「お前だけ、禊の儀式じゃ・・」

「ええ～！！！」

「いいから行くのじゃ！！」

「いやだ！！」

ミヌは、ヤマト姫に引きづられて行った。

一方、京では・・

「マヤザキ様・・・」

「何だ。」

「ミカド様がお呼びです。」

「なにゆえ？」

「どうやらミナムのうわさを聞いたみたいです。」

「左様か。すぐ参る。」

ミカドの前に呼ばれた、マヤザキ・・・ミカドは

「朕は怖いのじゃ・・朕を脅かすミナムが現れたと言うじゃないか。」

「は・・・陛下・・しかしながら、今回も偽者のようで・・・」

「偽者か・・・本当か？」

「はい・・・陛下」

「それならばよい、もう下がれ。」

「ハッ！！」

また、ミナムのことか？ミナムのこととなるとすぐに怯えるミカドにあきれるマヤザキだった。

そんなこととは、露知らずミナムは、修羅場の中にいた。
二人を前に正座するミナム・・・
「よっちゃん、この人、誰？どういうこと？」
「あ・・・だから・・・由美・・」
その言葉を聞いて、チラッと由美に視線を送り、
「ミナム！！この人は誰？」
「あ・・いや・・・カーネル」
言葉が出ないミナム・・・どうしようか？
「「どうなの！！！」」と二人からと睨まれた。
二人に睨まれ・・・ただ・・・脂汗を流すミナム・・・
そして、ミナムは切れて
「あ～！！！」と叫び
「カーネル・・こいつとはそんな関係じゃないんだ！！」
とカーネルに言うと
「よっちゃん！！この人とどんな関係なの！！」と問い詰める由美

「だから・・」

「ちょっと・・わたし。話し終わってないんだけど・・・」

「待った。」

と由美は手を出しカーネルの言葉を制した。

「わたしは、そんなこと聞いてないの。」

由美の言葉に首をかしげるカーネル・・・

「ちょっと来なさい・・・」と由美は、ミナムを連れて行った

そして、ミナムの襟首をつかんで、

「どういうこと？あの娘と結婚するの？」

ミナムは、一応説明をしたが、由美にはまったく理解ができなかった。

「それで？」

「それで・・・って」

「責任は取るの？」

「ああ・・・」

「まぁ！！あきれた。まぁ・・いいわ・・」

そう言って、適当に納得した由美は、カーネルを見た。

「それと・・由美・・お願いがあるんだけど・・・」

「これ・・・」とナプキンを手渡した・・・

ミナムの手の中にあるナプキンを見て由美は不思議そうに

「どうしたの？これ？」

「彼女、あれらしいんだ。」

「あれって？」

「耳貸して。」

由美は首をかしげながらも、耳を寄せた

「せいり・・・」とミナムが耳元でつぶやくと。

「なんで？わたしが？」

「たぶん、彼女使い方わからないから。」

「まぁ・・いいわ・・・」

そう言って、由美は、カーネルのほうを見た。

カーネルは、まだ、バスタオルを巻いたままだった。

「カーネルさん。ちょっといい？」

由美の言葉に驚くカーネル

「はい・・」

「ちょっときて・・」と二人は洗面所へ行った。

しばらくして、

「じゃじゃ～ん！！」

そこには、現代風の格好をしたカーネルが立っていた。

「えっ？」

その姿に驚くミナム・・・

「あんなスエットじゃかわいそうよ、よっちゃんの服、勝手に使ったから・・」

そういって、ウインクする由美・・・

「急にどうしたんだよ・・・」

「よっちゃんのお嫁さんだから・・・こうしたかったの。」

二人から蚊帳の外に置かれたカーネル・・ミナムに馴れ馴れしい由

美の姿に少し妬けた。

「あの～」

「あっ・・・カーネル・・こいつ・・由美・・」

「だから・・」

「あ・・勘違いしたな・・・こいつ・・もう結婚してるんだ。」

「えっ？結婚って」

うそ？この人もう結婚してるの？ミナムのお嫁さん？そう疑っていると

「こいつこいつって・・・」

そう膨れる由美だったがにこやかに

「実は・・異母姉弟なの・・わたしたち。」

その言葉に驚くカーネル、

「じゃぁ・・・彼女じゃ・・・・」

由美は両手をないないと振って

「絶対ない・・・ありえないって」

その言葉にミナムは続けて話した。

「そうだよ・・・姉弟として暮らしてたんだから・・・ところで今日はなんだ？」

「なんだって、明日、例の件で車出してって」

「あっ・・・忘れていた・・・」

「じゃぁ・・明日ね。」

そう言って由美は帰って行った。

その時、ミナムの携帯が急になった。

近づく・・・

鳴り響く携帯、ミナムは、その携帯を手に取り、

だれだろう・・と液晶画面を見た。

そこには、杉山の文字・・・

何だよ・・・と思いつつ、携帯をとると

「あっ・・・山本？」と杉山の声が入ってきた。

「なんだよ・・・」

「いいか！！？よく聞いてくれ？」

杉山はあせっていた、こめかみに銃口を突きつけられていたからだった。

「なんだよ・・えらいあせってるな」

「あのＵＳＢ持ってるよな？」

「ＵＳＢ？」

「そう・・あのＵＳＢ？」

「あの・・て・・・どの？」

「冗談言ってる暇なんかない。会社で見せたやつ・・」

「ああ・・・ちょっと待てよ」

あたりを見回すミナム・・しかし、USBをさしたパソコンが見当たらない。

あれ～？と探すミナムだったが見つけることができなかった。。

「杉山・・・ごめん・・・ないみたいだ。」

「ないって？・・・俺の命がどうなってもいいのかよ。」

「そう言っても・・・」

「頼むから探してくれ・・・後で電話するから」

そういい残し、携帯は切れた。

命？一体どういうことだ？

「ミナム・・・なに今の？」

「ああ・・」とふと自分の置かれている状況に気づいた。

ちょっと待てよ・・・ということは？俺達帰れないのか？

どうしよう・・・カーネルにいえないし・・・

その時だった。一通のメールが届いた。

だれだろう・・・とメールを見るとそこには、血まみれの杉山の姿があった。

そして、

例のＵＳＢを持って来い・・・さもないとこいつの命はないぞ。

そうメールに書いたあった。

やばいぞ・・・これは・・どうしよう・・

「どうしたのミナム？」とカーネルはミナムの携帯を覗いてきた。

そして、その血まみれの人間がいるのみ驚いた。

「なに？これ！！」

そう言って驚くカーネル・・・

「ミナム・・・友達でしょ？」

「そうだけど・・」

「早く助けないと」

「けど・・・」

「けど？」

「あれがないんだ。」

「あれ・・て？」

「あのパソコン・・・」

「そう・・・」

カーネルがそう聞き流そうとしたとき、あれって、ここへ来た時の？

ん？ひょっとして・・・あれがないと・・・

「えっ～！！！？？」

驚くカーネル・・・

「どうすんのよ！！あれがないと帰れないわよわたしたち。」

「どうするって・・・ないんだよパソコンと一緒に・・」

頭を抱えるカーネル・・・あなたはいいわよこの世界の住人だもの・・・私はどうするの？

そうあせっていると・・・

再びミナムの携帯がなった。

「どうだわかったか」

「ああ・・」

「明日22時に、山泊岸壁に来い。」

「わかった。」

そして、ミナムは「カーネル・・・」と別のUSBを見せた。

「これは？」

「これに魔法をかけて、あれと同じにしてくれ。」

「でも・・記憶ないわよ、そんなものの。」

そういうカーネルの目の前に一枚の絵が出てきた。

正確には写真を印刷したものだが、

「これ・・は」

「これを真似て、それと、向こうの世界に移動できるようにと魔法をかけてみて。」

「えっ？」

「やってみてよ。」

「できるかしら？」

「たぶん」

その言葉にカーネルも

「やってみるわ・・」

ＵＳＢに魔法をかけた。そしてＵＳＢは絵の通りに変化した。

おなかがすいたの～

カーネルの魔法でできた偽ＵＳＢ・・・

あとは、明日、杉山を迎えに山泊岸壁へ行くだけだった。

落ち着いた二人、カーネルのおなかが急になった。

その音を聞いたミナム・・・・ふとカーネルを見ると少し恥ずかしそうにしていた。

「ミナム～」

と甘えた声を出した。

「なんだい・・」

「おなかがすいたの～」

その声を聞いて笑い出すミナム

「笑わないでよ～」

「はいはい・・」

そう言いつつも笑っているミナム

「もうっ・・・落ち着いたら急におなかがすいた・・・」

「はいはい・・」

「まだ・・わらってるし・・・」

「じゃぁ～なにか食べに行こう。」

「外で食べるの？」

「そうだよ・・・」

二人は、近所の定食屋に入った。

「いい・・匂いね・・」

席に着いた二人、ミナムがカーネルに話しかけた。

「カーネル・・・あとで、買い物に付き合ってくれないか？」

「えっ？」

「食事がすんだら、由美と合流するんだけど。」

「また、由美さん？」

「そう・・・カーネルの服を選んでもらうから。」

「えっ？私これでいいわよ・・・」

カーネルがそう答えると、ミナムは手招きをして

「ちょっと・・・耳貸して？」

その言葉に、不思議そうに耳を貸すカーネル

「カーネルの下着も買うから・・」

そうだ・・・・わたし、男物の下着をつけていたんだっけ？そう思うと恥ずかしくなったが、

そこまで気を使ってくれるミナムをじっと見つめた。

「どうしたんだ？」

「ありがとう・・」

そうこうしていると、食事が運ばれてきた。

食事中、ミナムの携帯がなる。

「ああ・・由美か？　今・・・食事中・・・」

「由美さんから？」

「３０分ほどで来るって・・」

「そう・・」

二人は、食事をすませ、由美との集合場所に向かう途中

「ミナム・・・」

「なに？」

「ミナムの世界って・・・すごいわ・・・」

「なにが？」

「夜もこうして明るいし・・・馬もいないのに馬車が動いているし。」

「あれ？あれは、自動車って言うんだ。」

「こんな世界があるなんて？」

「カーネル」

「えっ？」

「着いたぞ・・・」

二人はショッピングセンターに入口についた。

「カーネルさん！！こっち！こっち！」そう呼ぶのは由美だった。

そこには、カーネルにとっては夢のような世界が広がっていた。

「京でも、こんなことないのに、しかも夜に・・・」

由美は、カーネルの買い物がひと段落すると、二人を連れてあるところへ行った。

そこは、ショッピングセンター内の宝石店だった。

「よっちゃん・・・ここで買いなよ・・」

「なにを？」

「婚約指輪といいたいところだけど・・・今は、無理だから。ペアリングを」

「えっ？」そう驚くミナムを尻目に由美はカーネルの手を引っ張った。

「カーネル早く」

そして、二人で楽しそうに、リングを選んだ。

由美は、パエリングを持って、機嫌よさそうにショッピングセンターを後にした。

由美に続いて歩く二人、ふと、彼女が目の前で立ち止まり振り返った。そして、

「これ・・・」

そういって、二人にリングをわたす。それを黙って受け取るふたり。

「あした、これを持ってくるのよ・・」

「えっ？」

「お父さん、お母さんに報告するのよ。わかった。」

「わかったよ・・」

その言葉にカーネルが緊張した。

「ミナムの両親に挨拶・・・はやく会いたいわ・・・」

その言葉に少し暗くなる二人・・・

「明日・・会えるわ・・じゃぁ・・」そういって由美は自宅に帰って行った。

家に向かって歩く二人・・・カーネルはなんだかものすごく疲れているのに気づいた

そして、あまりの疲れに立ち止まった。それに気づいたミナムが

「カーネル・・・どうした？」

「いや・・なんとなく・・しんどくて・・・」

「歩けるか？」

「う～ん・・・痛い！！！」と急にふくらはぎがつった。そして、座り込むカーネル

「大丈夫か？」

「ちょっと、足がつっただけ・・」

その様子を見て、ミナムは

「これじゃ・・歩けないだろう・・・」

とカーネルに背中を見せる。その光景を不思議そうに見るカーネル

「ほら・・・乗れ・・」

「えっ・・」その言葉に嬉しいような恥ずかしいような・・・なんともいえない心地よさを

感じるカーネル・・

「ほら・・はやく」

「ありがとう・・」

カーネルは、そう言って、ミナムの背中に乗った。

「重くない？」

「大丈夫・・・」

そう言ってにこやかに、カーネルをおんぶして、歩くミナム

「どうしたの？そんな笑顔で・・・」

「いや～」

「本当にどうしたの？」

「なんでもない・・・」

「本当に？」

「なんでもないから・・」

「そう？」

しばらくして、カーネルの声がしなくなった。

「カーネル？」とふと後ろを見るとカーネルは寝息を立てていた。

疲れたんだな。きっと、何もかも新しいことばかりだし。

そう思いつつ、ミナムは、家に向かった。

報告

翌朝、カーネルが目を覚ますとミナムの部屋にいた。

どうやって帰ってきたのと昨日のことを思い出す。

ミナムの背中に乗って・・そこから記憶がない・・・ふと服を見ると昨日のままだった。

ひょっとして、ミナムがつれてきたのか？と考えて起きあがろうとすると体中が痛い、

どうしてこんなに痛いのかしらと思いつつカーネルがふと周りを見ると、ミナムがいなかった。

「ミナム～」といいながら痛い体をおしてミナムを探した。

するとキッチンの方から何か物音がした。

そこへ行くと、ミナムがいた。そして、にこやかに

「おはよう」と言ってきた

「おはよう・・何してるの？」

「朝ごはん・・カーネル机のほうへ行って・・」

そう言って、ミナムは机のほうを指差した。

「うん・・」

カーネルは、机のほうへ行くと

そこには、ご飯と目玉焼き、そして、怪しい物体があった。

何この物体は？豆に何か糸が引いている・・・

そうカーネルが思って、においをかぐと少し変な臭いがした。これは、食べ物なの？

少し不安になるカーネル、そこへ、「お待たせ」とミナムが味噌汁を持ってきた。

カーネルは、思い切って変な物体について聞いてみた。

「ミナム・・これ食べれるの？腐っているみたいだし。」

ふと、その言葉にきょとんとするミナム・・・そして、カーネルが言う物体を見て

「これ？これは納豆と言って、体にいいんだよ。」

「でも、なんだか気味悪いんだけど。」

「大丈夫。カーネルの家で、出たネバネバサラダみたいなものだから。」

「そう？」

疑いつつもカーネルは納豆を口にした。

「あっ・・・」とミナムが言ったが遅かった。

カーネルの口の中には、ネバーとしたものが臭いと共に広がり、そして、納豆の苦味が追従してきた。

「まず・・・」

「カーネル・・こうやって食べるんだよ。」

そう言ってミナムは、納豆に卵をかけ、醤油を入れて、ご飯にかけて見せた。

そして、カーネルに同様のものをした。

「もう・・いいわよ。」

そう言って拒もうとしたカーネルだったが、ミナムに

「だまされたと思って。」

と仕方なく口にすると、さっきとは違い、結構いける・・・

その時だった。ミナムがテレビをつけた。

目の前の黒い板が急に光りだしたかと思えは、いきなり人があわられて

話し出した。これには、カーネルもびっくり仰天した。

「ミナム・・これは？・・・」と声が出ないカーネル・・・

「これはテレビと言って、いろんな情報が見れたりするんだ。」

しばしテレビに食い入るカーネル。

「カーネル・・」

「何？」

「ごはん・・・」

「あっ・・」

二人が食事が終る頃に

「よっちゃん！！」と由美がやってきた。

そして「カーネル、おはよう。」

「あっ・・おはようございます。」

カーネルが挨拶していると

「よっちゃん。」小さな女の子がトコトコ歩いてきて、ミナムに抱きついた。

ミナムはよいしょとその女の子を抱き上げ、

「みゆちゃん。おはよう」

「この子は？」

「みゆっていうの。」

「かわいいわね～、みゆちゃん」

カーネルを見たみゆは、驚いて、ミナムのほうへ抱きついた。

そこへ「こんにちは～」と由美のだんなも入ってきた。

「よっちゃん。準備できた。」

「もうちょっと・・・・」

「早く。」

そう言ってみんなは、ミナムの車に乗った

「さぁ・・出発・・」

ミナムの車は軽快に飛ばし、目的地へ向かった。

その時、予想外の事が起こった。それは、カーネルが乗り物酔いをしたのだ。

しばらく休憩をとり、再び、車を走らせ、一行は、目的地のミナムの両親が眠る墓地に着いた。

「これが俺の両親だ・・・」

お墓を指差しミナムが言うと

「ミナムって・・・石から生まれたの？」

そう勘違いをするカーネル

「あっ・・そうじゃなくて、ここはお墓・・・」

「お墓って？ひょっとして・・」

「そうちょうど1年前に、事故で亡くなったんだ。お父さんとお母さん、そして、俺達の妹でみゆのお母さんの真美が眠ってるんだ。」

その言葉に震えるカーネル、どういったらいいの？そう戸惑っていると。

ミナム達は、お花を供え、線香を焚き、お墓に水をかけた。

ミナムは、カーネルに柄杓をわたし、

「同じようにやって見て。」

言うとおりにするカーネル。水を掛け終わると。

一同がお墓の前で手を合わせ、それぞれの思いを告げた。

そして、おもむろにミナムが話し始めた

「とうさん・・かあさん・・真美・・・・俺・・・この人と結婚するんだ。生きているうちにできなくて、ごめん。」

そこへ、由美がペアリングをあけた。そして、ミナムはリングを手に取り、

カーネルの手にはめた。カーネルもミナムにリングをはめた。

「俺達がんばるから、見守っててくれよ。」

ミナムが言う。すると

「みゆが・・よっちゃんのお嫁さんになるの。」

みゆがそう言ってミナムの足につかまった。

それを見て、ミナムは、かがんでみゆの顔を見て

「大きくなったらね。」

そう言ってみゆの頭をなぜた。

「やった・・・・!!」

岸壁での出来事

家に着いたミナムとカーネル・・・

ミナムは、カーネルのほうを見て、

「カーネル・・・今日は疲れたろう・・・ゆっくり休みな。」

そう言って、家を出ようとするミナムに

「どこへ行くの？」

カーネルはミナムの手をつかんだ。

「どこって・・・ちょっと買い物・・」

「うそ！！　行くんでしょ・・」

その言葉にカーネルから目をそらすミナム・・・

「目をそらさないで！！」

「けど・・・カーネルを危険な目に合わすわけには・・・」

その言葉にカーネルは、大声を上げた。

「何言っているの！！ミナムとわたしは、一心同体なの。」

ミナムはカーネルの声に驚いた。

「それに、ここでは、ミナムも普通の人なんでしょ。」

「そうだけど・・・カーネルも・・・・」

「わたし？魔法が使えるわ。」

カーネルは、軽く魔法を使って見せた。

「カーネル・・・わるい・・・・」

「わたしは、あなたの魔導士よ・・・・」

カーネルは、ミナムの肩をぽんと叩いた。

そして、二人は、指定された岸壁に向かった。

山泊岸壁で待つ二人、そこへ黒塗りの車が一台やって来た。

車のドアが開く・・・

黒い背広にを着た2人組みが降りてきた。

そして、二人の真ん中に杉山がいた。

「持ってきたんだろうな。」

「ああ・・」

答えるミナム

「じゃあ・・渡してもらおうか。」

「杉山の解放が先だ。」

「おっと、えらい威勢のいいことを言うねぇ～」

そう言って、一人が拳銃を取り出した。

「どうする。」

「じゃあ・・真ん中に俺が置くから。」

「杉山を帰したら拾ってくれ！！」

ミナムの言葉に、

ダーン！！！

大きな音がなった。そして、ミナムの足元でパシーンと石が跳ねた。

「先に、こっちがもらう。・・・」

黒服の男が話を続けようとしたら、もう一人の男が車から降りてきた。

「本物かどうか・・確認させてもらうよ。」

その男は、手にパソコンを持ち、ほかの二人とは違っていった。

「わかった・・」

そう言うしかないミナム・・・

仕方なく、ミナムは彼らとの中間にＵＳＢをおいた。

ミナムが元の位置に戻ったのを見て、ＵＳＢを拾う黒服の男

そして、パソコンを持っている男に手渡した

「確かに本物っぽいな～」

ＵＳＢを確認したその男は、そのＵＳＢをパソコンに刺した。

その時だった。そのＵＳＢは稲光をあげ輝きだした。

そして・・・・

ボン！！！という音が響き

パソコンが大破した。

その光の中で、彼らの悲鳴が聞こえる。

一体何が起こったんだ？と腕で光をさえぎり、構える二人・・・

「ぐぁぁあ！！！」という叫び声がしたかと思うと

やがて、その光は消えた・・・

しばらくして、二人が彼らのいた場所を見ると、壊れたパソコンと体の一部がなくなった男二人が倒れていた。

「ミナム・・・友達は？」

「さぁ・・というより、カーネル・・・本当に向こうの世界にいける魔法をかけたのか？」

「一応、テレーポートの魔法はかけたけど・・・」

倒れていた二人が「うっ・・」とうめき声を上げていた。

「カーネル・・逃げろ・・」

二人は、その場から逃げ、ミナムの家に向かった。

杉山は、気がつくと野原に倒れていた。

「おれはだれだ？」と起き上がると・・・

「おお！！！」

「きゃぁ～！！」

そういう声がした・・・杉山が声のする方向を見ると・・・

多くの人が杉山を見ていた。何が起きたかわからない杉山・・・

何故こんなに歓声が起きるのだろう？そう思ったとき。

自分が素っ裸だったのに気づき

「うぁあ～！！！」と股間を押さえた。

しばらくして、衛兵が現れた。

なんか・・・やばそう・・・

そう思う杉山は、そのまま。衛兵に連れて行かれた。

もう一人の流浪者

小宮山　真・・・彼の人生は、順風満帆だった。

一流大学を経て、一流企業の研究員・・・・と絵に描いたような人生だった。

そうあるものが彼の前に届くまで・・・・

それは、あるクライアントのからの依頼だった。

彼は、ある研究に対し、ヘッドハンティングされた。

そのクライアントが秘密結社の舎弟企業とは知らずに・・・

それが例のＵＳＢだった。

彼は、これをパソコンにつなぐことで、時空が歪むことに気がついた。

世紀の大発見だった。しかし、そのＵＳＢを山根がくすね、別の秘密結社に売り飛ばそうとした。

身の危険を感じた山根は、ＵＳＢを杉山に渡し、あの事件が起きた。

ふと目を覚ます、小宮山・・・ここは？とわれに返ると・・・・

ここは？とあたりを見回す・・・

目の前には壊れたＰＣとＵＳＢ・・・それをじっと見つめる

ふと、自分のポケットにもうひとつ小型のＰＣがあるのを思い出し

それにＵＳＢをさした。

頼むから行ってくれ・・・そう願う・・・

やがて、ＰＣは光に包まれてた。

小宮山は、その場から消えた。

その頃、秘密結社の舎弟企業では、黒い背広を着た二人が机の前に直立不動で立っていた。

その机には、そこのボスが座っていた。

「小宮山もいなくなったのか。」

「は。」

「それで？例のＵＳＢは？」

「それが・・」

「どうした？」

「小宮山と一緒に消えまして・・・」

「なに？どういうことだ！！」

その男は机を大きく叩き、二人に指を指した。

「どこへ行ったんだ！！やつは・・」

「それが・・・」

「ところで、持っていたやつらは？」

「一人は、杉山ひろし・・・もう一人は、山本美男・・・」

「杉山は？」

「彼は、小宮山と一緒に消えたようです。」

ボスは、振り返り窓のほうを見た。

「いかがします？」

「まず、小宮山を探せ！！」

小宮山が気づくと自分の家の天井が目に入った。

自分の家か？と思いつつ、体を起こす。手元には例のＵＳＢが刺さったＰＣがあった。

当たりの様子を見て、よし！！と心で叫んだが、なにやら、下の階から騒ぎ声がする

何だろうと階段を下りていくと、かつての部下達がいた。

そして、彼らの目の前には、血まみれの父と「殺さないで！」と嘆願する母がいた。

部下達は、「息子はどこだ？」

「息子は！！帰っていません！！」と母親が言った瞬間、

ダーン！！！

彼らの前に崩れ落ちる母親・・・それを見ていた小宮山は

慌てて階段を駆け上がった。

「いたぞ！！」

その音に気づいた黒服の男たちは小宮山に襲い掛かってきた。

小宮山はパソコンを触り再び時空の彼方へ消えた。

次に着いたのは、彼が勤めいた事務所だった。

誰もいないはずが、ボスの部屋の電気がついていた。

小宮山は、拳銃をとってき、そーっとボスの部屋をのぞいた

ボスは。携帯で、部下からの報告を受けていた。

「そうか、小宮山はどうした」

「なに！！・・逃げた？」

話を止めた。そして、ボスが振り返ろうとすると

ダーン！！！

銃声が部屋中に響いた、そして、ボスは小宮山の凶弾に倒れた。

その音を聞いた一人がボスの部屋に入ってきた

ボスが倒れているのを見て驚く部下・・・

「ボス！！」といった瞬間

ダーン！！！

小宮山は再びトリガーを引いた。

しばらく、待ち伏せをする小宮山・・・

さっき両親を殺した二人が戻ってきた。

彼らを確認した小宮山は、銃口を彼らに向け撃った。

ダーン！！！

しかし、もう一人が慌てて、反撃をしてきた

ダーン！！

ダーン！！

廊下に響く銃声・・・

銃弾は小宮山が持っていたパソコンをあたりわき腹にかすめた。

その衝撃にうずくまる小宮山・・・

「くそっ・・・」

その光景を見た黒服の男は立ち上がり、うずくまる小宮山に近づき

銃口を向け

「貴様！！両親の元に行けや！！」

そう叫びこみ山を撃とうとした瞬間だった。

ＵＳＢが再び輝きだした。

その閃光に視界をうばれる黒服の男、

光が消えるにつれ、銃を向けていた右手、両足のすねから下が一瞬で消えた。

そして、消えた後からは激痛と共に大量の血が噴出した。

「ぐわぁぁああ！！」

黒服の男達の叫びが廊下にこだました。

一方、光に包まれた小宮山は再び時空の彼方へ飛ばされた。

その時空の中、薄れ行く意識の中、小宮山の手からＵＳＢが離れ、時空の彼方に消えていった。

気がつくと目の前には見たことがない世界が広がっていた。

「ここは？」

魔法のたまご

斎宮では、厳しい禊に耐えるミヌの姿があった。

なんで・・・わたしだけが？そう思いながらミヌは、禊の１０日間を耐えた。

そして、ミナムたちがいた武器庫に戻った。

もう一度、二人が消えたところを見ると・・・

黒い箱が口を開いた状態であった。

これは？あの時光ったやつ・・・と思い手にとって見た・・・

中にたくさんのボタンがあり、ミヌがそれに触れようとしたとき、

「何をしておる？」

ヤマト姫が入ってきた。

その言葉に驚いたミヌは、ボタンを思わず押してしまった。

スリープモードのパソコンは、再起動し始めた。

ミヌの手の中の箱が、キュイーンカタカタカタという音がしだした。

その音に気づき手の中のパソコンを覗き込むミヌ・・・

「いかん・・・」

ヤマト姫が叫んだが

パソコンが急に光だし・・・ミヌごとその場から消えた。

「なんということじゃ・・・」

一方、何とか逃げて家に戻ったミナムとカーネル・・・

さっきまでの状況で、無事に家に着けたことに安堵した二人・・・

家の前まで来ると、家の中から物音がした。

ドアに耳を当てるミナム・・・

その様子を見て、カーネルが質問した。

「どうしたの？　ミナム・・・」

ミナムは、カーネルの方を振り返り、口に人差し指を立てカーネルの言葉をとめた。

「しっー！！誰かいる。」

「どうするの？」

「とりあえず・・・ドアを開けてみる・・」

「大丈夫？」

二人は打合せ、そーっとドアから離れ、ミナムがドアノブを手を掛けようとした瞬間だった。

バン！！

ドアがミナムの顔面を直撃した。

「遅いわねぇ～よっちゃん・・」

中から由美が出てきた。ドアが重いことに気づいた由美

ふと目の前を見るとカーネルが呆然と立ち尽くしてていた。

「あっ！　カーネルさん。どうしたの？そんなところに突っ立ってて？」

にこやかな顔をして話しかける由美とは対照的に、唖然とした表情がつづくカーネル

「ところでよっちゃんは？一緒のはずでしょ？」

その言葉に何とか反応するカーネルは、ドアの外側を指差した。

「あ・・・え・・・その・・」

「え？なに？」

「そこ・・・」

カーネルの指差したほうを見た由美は、ドアの外に、顔面を押さえ、ヘタリこむミナムの姿を見つけた。

「いてて・・・」

その姿を見た由美は、あきれた顔をした。

「何やってるのよそんなところで。」

ミナムも立ち上がりざまに

「急にドアを開けるなよ！！急に！！」

「どうしたのよ？一体？そんなに怒って・・・」

逆切れする由美・・・

「ところで、なんでお前がいるんだ？」

「なんでって？」

急に笑顔になった由美は、カーネルとミナムの背中を押して、

「まぁ～はいった　はいった♪」

部屋の中に連れて行った。

3人は廊下を抜けリビングに入った瞬間

パーン！！！

パーン！！！

大きな音がミナムの耳を襲った。

そこには、由美のだんなとみゆが二人に向けてクラッカーを鳴らした。

「おめでとう！！」

その光景に驚くミナムとカーネル・・・

「ささやかだけど。お祝いよ。わたしたちからの。」

そして、ささやかな宴会がそこで行われた。

その宴会の中、みゆが再びよっちゃんのお嫁さんになるんだ！！と言い出した。

困り果てた４人、その時、カーネルが

「みゆちゃん・・・よっちゃんと結婚するには、魔法が必要なの！」

「まほう？・・・みゆにはできない・・・」

泣き出したみゆに、４人はどうすることもできなかった。

カーネルが仕方がないと思い

「お姉さんが魔法を教えてあげる。」

その言葉に泣き止む、みゆ・・・

「本当？」

「本当に？」

「うん」

「おい・・そんなこと言ってもいいのか？」

ミナムの言葉にキッと怖い顔をするカーネル

「ミナムは黙って。」

「おっと」

カーネルは、両手を合わせ、呪文を唱えた。

そして、あわせた手の中から、白く光る小さな卵が出てきた。

それを持ち、みゆの額に当てた。

やがてその光る卵は、みゆの額の中に消えていった。

「お姉ちゃん？みゆこれで魔法が使えるの？」

「おおきくなったらね」

「本当？」

「うん。本当よ。」

「よっちゃん！！魔法が使えるって、これでよっちゃんのお嫁さんなれるね。」

はしゃいでミナムに抱きつくみゆ・・・

ミナムもみゆの頭をなでた

「大きくなったらね。」

「やった～♪」

その言葉を聞いたみゆは、しばらくはしゃいでいたが、やがて疲れて寝てしまった。

みゆの寝顔を見ながらミナムはカーネルに聞いた。

「本当に、魔法が使えるのか？」

「えっ？」

「いまのやつ。」

「ああ・・・あれ？　魔法のたまごって言うの」

「魔法のたまご？」

「あれは魔導師の資格を持つとできるようになるの。あの魔法は、その人が本来持っている

魔力の扉を開けるようなもので、あれをしたからっと言って、１００％魔法が使える訳ではないわ。」

「どういうこと？」

「魔導師と本人の魔力がないと無理なの。だからすぐ使える訳でわないの」

「そうなんだ」

二人が話していると由美が近づいてきて

「大体片付けたから・・・わたし、帰るわ・・・」

「そうか・・・」

「じゃぁ・・楽しかったわ。」

「こっちこそありがとう」

玄関まで送る二人・・・

由美が玄関から出ようとすると

「ちょっと」

二人を近づけ耳打ちした。

「じゃぁ・・今晩もがんばってね!!」

その言葉に顔が赤くなる二人・・・

「バイバイ!!!がんばるのよ〜」

由美はガッツポーズをした後、手を振りながらその言葉をのこして、玄関は閉まった。

はて・・・

「ははは・・」

由美たちを見送った二人・・・

ミナムがカーネルを見ると真っ赤な顔をしていた。

「まいったね・・・」

「・・・・・」

なんとなくリビングに戻った二人

思わず目が合ってしまった。

互いに見詰め合う二人・・・

「ちょっと・・・トイレ・・」

ミナムが少し離れようとした瞬間だった。

カーネルは思わず背中の服をつかんでしまった。

「あ・・・・」

立ち止まるミナム・・・

ぱっと手を離すカーネル・・・

黙って振り返るミナム・・・
じっとうつむくカーネル
ミナムはそっとカーネルの肩に手をおいた。
見つめあう二人・・・
やがて、両者の顔が近づき始めた・・・・・・
そして
カーネルも両目をとじ・・・
二人の唇が近づいていった。
その時だった。
ミナムの上からあるものが降ってきた。
「うわ～！！！」
その声とともに、ミナムはカーネルのほうへ倒れこんだ
次の瞬間
「「いった～」」
そう言って顔を起こすカーネル、そして、自分の状態を見るとミナ

ムの顔がカーネルの胸の中にうずくまっていた。

「ちょっと～ミナム～」

それを見たカーネルがミナムに言おうとした時だった。

ふとミナムの上に何か乗っかっているのが目に入った。

そこには・・・・

パソコンを持ったミヌの姿があった。

「ミヌ？」

「元気だった？」

これがミヌの一言目だった。

「ところで？ミナムさんは？」

カーネルに聞くミヌ・・・

カーネルは無言で、ミヌの足元を指差した・・・・

えっ？と驚き足元を見るミヌ

「ひょっとして？」

黙ってうなずくカーネル・・・

「ごめんなさい・・・」

慌ててミナムの上から降りるミヌ

やがておもむろに起き上がるミナム・・・・・

そのミナムを見て

「ミナムさん・・・会いたかった。」

抱きつくミヌ・・・

コホンと横で咳払いをするカーネル・・・

「あっ・・・」

ミナムから離れるミヌ

「ところで、ここはどこです？」

グレースへ

「ここは、ミナムの自宅なの！」

ミナムとカーネルの前に座り、まじまじと周りを見るミヌ・・・

そのしぐさにカーネルは

「どうしたの？」

「何か珍しくて。」

そう言って、ミヌは、目の前のボタンを押した。

黒い板が急に輝きだし、映像が映った。

それは、テレビリモコンのボタンだった。

「えっ？えっ？　絵が動いてる～！！！しかも、しゃべって！！！」

驚くミヌを尻目に、さっと画面を消すミナム

「ミナムさんどんな魔法を使ったんですか？」

「魔法じゃないんだけど・・・」

「それより、ミヌはどうやってきたの？」

カーネルは、ミヌのほうを見て聞いた。

ミヌは、パソコンを指差し、

「あれ」

それを見たミナムとカーネル

「「やった！！」」

そう叫んで喜んだ

「ミヌよくやったぞ！！」

二人でミヌを抱きしめた。

「どうしたんです？二人とも」

その時だった・・・パソコンが光りだした。

そして3人は光に包まれた。

ミヌがいなくなった翌日、ヤマト姫が再び武器庫に行った。

「ミヌのやつ・・・一体どこに行ったんじゃ。・・・」

そうつぶやきながら、武器庫の扉を開けた。

そして、目に飛び込んで来た風景に驚愕した。
室内には服が散乱し、３人は抱き合うように裸で寝ていた。
扉が開いたことで光が３人を照らした・・・
その光で３人は目を覚ました。
「う～ん。」
目をこすった３人、自分達の格好に気づいた。
「「きゃー！！！」」
「わ～！！！」

３人の悲鳴がこだまする。
そこに、コン！コン！コン！と頭を杖で叩くヤマト姫、
その響きに呼応して、３人の「イテ！！」という声が出た。
「おぬしら！！、」
武器庫に響く、ヤマト姫の声・・・
その声に慌てて服を着る３人・・・

「ミナム！！許可が出たとは言え、どういうつもりじゃ！！！」

ヤマト姫の怒りに対し、３人は、慌てて

「違います！！」

そう答えると

「ええい！！聞く耳持たぬ！！カーネル！！ミヌ！！おぬしら来い！！」

そう言って、二人を斎宮へ連れて行った。

そして、延々とヤマト姫の説教が続いた。

「おぬしら！！」

「斎宮様！！ですから・・・戻ってきたら。裸になっていたんです。」

必死に言い訳をすし続けるカーネルとミヌ・・・その姿にあきれる

ヤマト姫

「もう・・よい・・」

ため息をついた、そして、

「カーネルは、今から禊に入る。それと・・・ミヌは、わしと来い。」

「「はい・・」」

ヤマト姫の部屋に巫女がやってきた。

「カーネル様・・・こちらへ。」

そう言って、カーネルを禊を行う場所へ連れて行った。

ミヌ・・・

一人残ったミヌにヤマト姫は近づき

「ところで、ミナムはどうじゃった。気に入ったのか？」

「はい・・」

少しうつむくミヌ・・・

その様子を見たヤマト姫は、

「早いものじゃ～おぬしがここへ来た時を思い出すのぉ～」

そう言って、ミヌの頭をなでた。

「はい・・ありがとうございます。」

「おぬしをミナムに渡すのはおしいのぉ～」

ただ黙って、ヤマト姫の言葉を聞いていたミヌが

「斎宮様・・・」

声を掛けようとしたとき、ヤマト姫がミヌを抱きしめた。

「すまぬのぉ～、お告げさえなければ・・・わしの・・・」

その言葉に

「斎宮様・・・大丈夫です・・・」

「そうか・・」

ヤマト姫は、ミヌが現れた時を思い出していた。

それはある日のことだった。いつものように斎宮内の勤めを終え戻ろうとしたときだった。突如、目の前にまばゆい光が現れた。

その光に視界を奪われたヤマト姫・・・

しばらくして、光が消えた・・・そこには、小さな女の子が裸で立っていた。

「この子は?・・・」

そして、近づき

「おぬし・・名は?」

目の前に立つヤマト姫を見て、泣き出すミヌ・・・

やがて、落ち着きを取り戻したミヌにもう一度名前を聞いた。

「おぬし・・名前は・・・」

「ミヌ・・・ここは?」

光の中からあらわれし者・・・ひょっとして、こやつがミナムか・・・

ヤマト姫は、そう思いミヌを育てることにした。

この出会いから年月は過ぎ、

ミヌが育つにつれて、この子がミナムでないことにヤマト姫は気づいた。

しかし、ミヌの魔力体力を見て、ヤマト姫の弟子としてここまで育てあげた。

わが子のようなミヌを見て、

「いいんだな」

「はい。斎宮様。」

「そうか・・・」

ヤマト姫が言った時だった。

「斎宮様！！」

斎宮殿に巫女が慌てて入ってきた。

「一体なんじゃ！！」

「カモベ村に盗賊が！！！」

両刀使いのミドリ

「それがどうした・・・衛兵がいるじゃろ！！」

その言葉に、巫女はうつむき

「それが・・・」

「どうしたんじゃ・・・」

「カモベ村の衛兵が砦で交戦中、かなり苦戦しております。」

「なに～！！衛兵が苦戦するとは、一体・・・」

驚いたヤマト姫は

「救援は？」

「斎宮からとセイの国府直営隊が現在向かっております。」

「一体・・どんな連中だ」

そこへ別の巫女が入ってきて

「盗賊は、盗賊は・・あの両刀使いのミドリです。」

「なに！！」

その名前にヤマト姫は驚いた。

両刀使いのミドリ・・・・百人の部下を持つ盗賊

その残忍な手口は、グレース中に知れ渡っていた。

なぜ、やつがここへ来れたのじゃ？確かやつは、もっと東の国にいたはず・・

そう思っていると、目の前をミヌが横切った。

ミヌは斎宮殿を出ようとしていたのだ、その様子に声をかけるヤマト姫

「ミヌ！！どこへ行く！！！」

「ミナムのところ！！ミナムと戦うわ！！」

走って斎宮殿を出ようするとミヌに

「両刀使いのミドリじゃぞ！！！」

「わかってるわ！！そのくらい、けど・・ミナムと戦わないとカーネルの両親がいるのよ！！」

そう言って、ミヌは、斎宮を後にした。

その頃、武器庫にいたミナムの元に村人がやってきたいた。

「ミナム様！！！助けてください！！！」

「どうした？」

「村が・・村が・・盗賊に・・・・・」

その話を聞いたミナム、ふとカーネルの両親がいるのを思い出した。

「わかった！！したく出来次第行く！」

「ありがとうございます。」

そういい残し村人は、村のほうへ戻っていった。

ミナムは行かねばと決闘の時に着ていた鎧を見ると背中に大きな穴が開いていた。

これは、使えない・・・どうしようか、迷っているとふといつも着ていたスーツが目に入った。

これでも着るか・・・たぶん、もう着ることないし・・・

ミナムがスーツに着替えていると、ポケットの中から何か出てきた。

それは一箱の爆竹だった。爆竹を見て、金曜の晩に飲みに行った帰り、駄菓子やで思わず買ってしまったの思い出した。

まぁ・・いいか・・・と爆竹を数本取り出して、ポケットに入れた。

ミナムが着替えを終え、剣を手にした時だった。

「ミナム！！」

ミヌが武器庫に入ってきた。

「なに！？　その格好」

ミナムの服装を見て、あきれるミヌ

「あれを着ろというのか？」

そう言って、背中に穴が開いた鎧を指差すとそれを見て

「そうねぇ～・・」

「時間がないんだろう」

「はい！！」

「行くぞ！！」

二人は、武器庫を後にした。

英雄誕生　前編

「ミヌ・・俺につかまれ！！」

その言葉の意味がわからないミヌ

「飛ぶから・・・町はこっちでいいんだな。」

「飛ぶって？」

「この間のように・・・」

「えっ！！！」

そう言って、ミヌを抱きかかえたミナム

「えい！！」

町のほうへ向かって飛んだ。

「きゃ～！！！」

その頃、カーネルの耳にも盗賊の話が入っていた。

「えっ？」

「わたしも行かせてください！！」
カーネルは言ったが巫女達に制止された。
「みんな・・・」

その頃、空中を飛んでいたミナムとミヌ
「ところで、盗賊ってどんなやつらだ。」
「今回の盗賊は、両刀使いのミドリって言って」
「両刀使い？・・・変態か？」
「変態って・・・とりあえず部下が１００人くらいいて、惨忍で、容赦しない連中です。
特に頭領　みどりは両刀使いで・・・」
「その両刀使いってのはどういう意味だ」
「両手に剣を持つんですよ」
「それって、二刀流！！！」
「もう！！どっちでもいいでしょう。」

「ミドリ以外にも、大男でバカ力のハキオ。氷の魔導士ヒイラが両脇を固めているの」

「そうか・・・ということは、もう村に近いけど。村人たちは？」

「まだ、砦が崩壊していなければ大丈夫だけど・・・」

「とりで？」

「そう、砦に入っているはず・・」

そう言ってミヌは砦のほうを指差した。

「あれか・・」

「そうよ・・」

砦の正面では、斎宮の衛兵達と盗賊たちの戦いが繰り広げらていた。

「ミヌ・・・あそこに降りよう」

ミナムは両者のぶつかる最前線を指差した。

「わかったわ。」

ミナムたちを見つけた盗賊たち・・

「あれは？」

ミナムたちを見た村人達・・

「ミナム様」

飛んでくるのを見て、村人が大慌てで、砦に引き返していった。

それを見て、どうしたんだ？と不思議がる盗賊たち・・・

まあいい・・・と待ち構えていると

ミナムが降りてきた。

ズシーン

という音と共に地響きがなり、地面が揺れた。

その中心には、剣を持ち、びしっとスーツにネクタイを締めたミナムの姿があった。

あれがミナムが・・・盗賊たちはその地響きにたじろいだ。

そして、ミヌに話しかけた

「ミヌって雷の魔法つかえるのか？」

「ええ・・」

「じゃぁ・・これをあいつらに投げるから、これに雷をぶつけてくれ・・・」

「なに・・それ・・」

「お楽しみ・・」

「いいわ・・」

一方、盗賊たちは、ミナムたちに向かって走ってきた。

「ミナムが何だ!!!やっちまえ!!」

そこへ、ミナムは爆竹を投げた。盗賊たちはその姿を見て、一瞬たじろいだが、

何も飛んでくる様子がない・・・

「バカにしやがって!!」

再び突進を始めた。

ちょうどその時、爆竹は、彼らの真上ぐらいあった。

「ミヌ、今だ!」

「はい。」

ミヌの魔法が炸裂、爆竹が爆発した。

ちゅどーーーーん！！！！

炸裂音と共に、ものすごい爆風が起きた。

そして、爆竹が炸裂した場所を中心に小さなきのこ雲ができた。

ミナムは、目の前の光景に驚いた。少し大きな音がするだろうと思っていたのだが、

このような大爆発が起きるとは、思っても見なかった

そして、目の前には無残な死体の山が広がっていた。

「こんな・・・」

「すごい・・・」

一瞬で、盗賊の大半が死んでしまった。

英雄誕生　後編

その光景を見た、頭領ミドリは、驚いた。

「兄じゃ・・・またれい・・」

ハキオが前に出た。

「ミナム！！わしが相手じゃ！！！」

ミナムの前に現れたハキオ・・・身長は軽く５ｍを超えていた。

金棒を片手にミナムに襲いかかるハキオ、

「わっ！！」

「えーい！！この野郎！！」

「わっ！！わっ！！！」

ハキオの攻撃を何度かよけたミナムだったが、遂によけきれず、

刀で受け止めた。

ギーン！！！

やはりでかいだけある。前のゴリアテより力はある・・・

そう思うミナム

その様子を見たミドリ

「ほう・・あれを受け止めるか・・・」

次の瞬間だった。

ギン！！！

ミナムが刀をつき返したとたん、ミドリはその光景にわが目を疑った。

金棒を跳ね返されたハキオの体は宙を舞い、数メートル後ろへ噴き飛ばされ、

どすーんと後ろの壁に叩きつけられた。

倒れこんだハキオ・・・頭を振って身を起こした。

そして

「この～！！」

金棒を振りかざし、再びミナムに襲い掛かった。

パシッ！！！

今度は、その金棒を素手で受け止めたミナム・・

ぐっと・・金棒を押し返しハキオの前に近づいた・・・

両手で持っていた金棒を片手で押し返されたハキオ・・・

ただ驚愕するハキオ

「えっ・・・」

ミナムは持っていた金棒を思いっきりハキオの方へ押し返した。

ゴーン！！！

跳ね返された金棒は、ハキオの顔面を直撃し、ハキオはその場に崩れ落ちた。

「ハキオ・・」

「行くぞ！！ヒイラ！！」

「おう！！」

ミナムの前に現れたミドリ・・・

「貴様がミナムか・・・」

「あんたが両刀使いの変態か？」

「貴様、死にたいらしいな・・・」

そう言って、ミドリは刀を抜き両手に持ち構えた。

両刀ですばやく切りかかるミドリ、それをよけるミナム

ギンという音と共に剣先を火花が舞う。

一方、ミヌはヒイラと対峙していた。

「おのれ～ちょこまかと・・」

ヒイラの攻撃をよけるミヌ・・・

「これでも食らえ！！」

ミヌの足元に、冷凍光線を当てた

ミヌは、瞬時の差でよけきれず足が地面から離れなくなった。

それを見たミナム・・・

「ミヌ！！」

ミナムがそう叫んだとき

「相手はこっちだろう」

一瞬の隙を突いて、ミナムに切りかかった。

「しまった！！」

どす！！

鈍い音がした。

剣でよけきれなかったミナム・・・思わず左腕で受けてしまった。

その時だった。

切られ落ちるはずの腕は、そのまま残っていた。

そして、ミドリの刀がグニャリと曲がった。

「なに！！」

みどりが驚いた時、ミナムはにやりと笑った。

「あ・・・・」

その笑みに血の気が引くミドリ・・・

次の瞬間、ミナムは柄でミドリの横っ腹をどついた。

ガツ!!!

「ぐぁあ!!」と叫び、ミドリは数十メートル吹き飛んで行き、

ドン!!

ものすごい音と共に近くの木に叩きつけられ、気を失った。

ギギギ!!!

木がきしむ・・・

そして・・・

倒れていく木を見ていたヒイラ
するとミナムがヒイラのほうへ向かってきた。
あわてて攻撃の魔法を掛けるヒイラ
ガツッ！！
魔法の攻撃を剣で跳ね返すミナム
「うそだろう？」
何だ？あの剣は！？
ヒイラが驚いた時にはすでに遅かった
気がつくと目の前にはミナムのパンチ。

ゲシ！！！

声も出せないまま・・飛ばされていくヒイラ・・・
やがて地面に叩きつけられ、意識をなくした。
頭領が敗れたのを見た盗賊たちは、その場から逃げ去っていった。

「ミヌ・・大丈夫か。」

ミナムはミヌにスーツの上をかぶせた。

「はい・・・」

戦いが終わり、砦のほうへ向かう二人・・・

村人は二人を歓迎した。

両刀使いのミドリをミナムが倒したことは京まで聞こえていた。

報告・・・

両刀使いのミドリを倒した二人

とりあえずヤマト姫の命令で斎宮へ戻った。

そして、ミナムは相変わらず武器庫で待つように言い渡された。

ヤマト姫について行く、ミヌ・・・

斎宮の間に入れられ・・・・

「ようやった・・・」

これがヤマト姫の一言目だった。

「斎宮様・・・」

そう言って頭を下げるミヌ、

「ところで・・」

というヤマト姫の言葉を聞いたミヌが顔を上げると

「うわっ!!」

目の前には・・・ヤマト姫の顔が・・・

「何を驚いておるのじゃ。」

そういって、ヤマト姫はミヌの頭をポカッと叩いた。

「いたた・・・」

気を取り直して・・・

「ところで・・・盗賊の大半を葬った・・・魔法は・・・」

「えっ・・・」

言葉に詰まるミヌ、

「だから・・・お前が使った魔法じゃよ・・・」

「雷撃です。」

「雷撃？

「雷撃じゃと・・・雷撃で１００人もの死人がでるのか？」

ヤマト姫は、少し声をあらげ、再びミヌの頭をポカッと叩いた。

「いた～い！！」

「何が痛いじゃ・・・一体、どんな魔法を使ったのじゃ・・」

「それが、ミナムさんが・・・」

そう言って、ミヌが親指と人差し指の間に空間をつくり

「このくらいの・・・紙でできた蝋燭のような物を敵陣へ投げたんです。」

その言葉を聞いて首をかしげるヤマト姫・・・・ミヌは話を続けた。

「そして、それに向けて雷撃をかけたんです・・・そしたら・・あのようなことが・・」

「このくらいの紙でできた蝋燭のようなもの？それは・・・」

「確か、胴は赤く・・・芯は白かったかな？」

ヤマト姫にはまったく何がなんだかわからなかった。それは一体なんだ？

まだあるとすれば・・・京の方は必ず何か言ってくるはず・・・

「それと、ミナムさんの服・・・・」

「服がどうしたんじゃ・・・」

「両刀使いのミドリの剣が曲がったんです・・・」

「曲がったとは？」

ミヌは左手を挙げ右手で手刀をつくり、

「ミナムさんのここにこう当たって・・・刀がぐにゃりっと」

「えっ？」

しばらく、固まるヤマト姫・・・

「刀が曲がるとな？」

「あの鎧・・・傷も入らないし・・・軽いし・・すごいです。」

本当に？一体何なのだ・・・しばらく考え込むヤマト姫

「斎宮様・・・」

「もう・・・よい・・」

そう言って、後ろを振り向くヤマト姫・・・

そして・・・

「でておいで・・・そこにいるのはわかっている。」

「はい・・・」

そう言ってカーネルが部屋に入ってきた。

カーネルとミヌの会話

ミヌの前にあらわれたカーネル・・・

ミヌを抱きしめて

「ありがとう・・ミヌ・・・」

「あ・・・いや・・・」

「大丈夫？」

「ええ・・・？」

「二人とも行っていいぞ」

ヤマト姫の言葉に・・・二人は部屋を後にした。

カーネルの後を歩く、ミヌ・・・

あの１０日間・・・二人きり・・・

ひょっとして？

そう考えていると・・・

何かにぶつかった

「あっ！！！」

「わっ！！！」

カーネルが立ち止まったのだ

「何よぶつかって・・・」

「急にとまらないでよ・・」

「急にって、わたしはここまでなの・・」

カーネルが指差すとそこには、斎宮の境界が・・・

「あっ・・・」

「なにぼーっとしてるのよ・・」

「だって・・・」

「だって？って・・・ミヌも抜け駆けしないでね」

「え？」

その言葉に驚くミヌ

「禊の１０日間に抜け駆けしないでよ。」

「カーネルさんこそ・・・１０日間も・・」

「えっ？」

「１０日間もミナムさんと一緒にいたくせに・・」

「１０日も？」

「そう・・・１０日も・・」

「何言ってるのよ・・・１日よ１日・・しかも・・」

「しかも・・・」

カネールはしばらく黙り込んだ。そして、あの時のことを思い出した。

やがて、首を振り

「わたしも、わからないのよ！！」

「えっ？」

「この間と同じで気づくと裸で一緒に寝ていたの・・」

「えっ？・・」

驚くミヌに対し、カーネルは、ため息をついた。

「記憶がないの・・・」

「記憶？」

「した記憶が・・・」

「記憶がなくても・・・体とかに・・」
カーネルは首を横に振った
「なにも・・」
その言葉を聞いて、少し顔が微笑むミヌ・・・
そこへミヌの顔を指差すカーネル
「わかってるわね！」
その言葉にニコリと微笑み答えるミヌ
「なにを」
すぐさま反応し、襟首をつかむカーネル
「なにをって・・とぼけないでよ・・」
すーとミヌの体が浮き上がった。
「く・・くるしい・・わかったから・・・」
そう言って、じたばたするミヌ・・・
その言葉を聞いて、ミヌをおろすカーネル
げほげほ・・・としばらく咳き込むミヌを

「あ～苦しかった・・・」

「わかったわね・・」

「わかった、わかった」と言って斎宮の境界をひょいと出た。

「待ちなさい！！」と叫ぶカーネルだが境界から出られない。

「わかってるわね！！」

「わかった！！」

そう言い残しミヌは斎宮を後にした。

えくすかりばー

部屋に戻った、ヤマト姫、ミヌの話をもう一度思い出していた。

赤い胴をした小さい蝋燭のようなものとは・・・一体？

軽く剣が効かない鎧とは？

ふーむこれは、ミナムのやつに聞けば、多分わかるじゃろう・・・

それより、魔法を跳ね返す剣とは、それは・・・ミナムの能力か？

それとも・・あの剣か？

しかし・・あの剣は、わしが渡した剣・・・

あれは、”えくすかりばー”を模造したやつ・・・・

もしや・・・

ヤマト姫は、慌てて、祭壇へ向かった。

そこには、”えくすかりばー”が祭られていた。

”えくすかりばー”を見て安心するヤマト姫

もう一度、”えくすかりばー”を見ると何かが違う。

ひょっとして、ヤマト姫はそう思いその剣に近づいた。

そして、間近でその剣を見た。

「これは・・えくすかりばーではない」

ということは・・・わしが渡した剣が”えくすかりばー”

「こうしてはおれん」

ヤマト姫はすぐにミナムの元へ向かった。

その頃、武器庫に戻ったミヌ・・・・

部屋で休んでいるミナムを見つけた。

「ミナムさん・・」

その言葉に振り返るミナム

「ミヌ・・・」

立ち上がりミヌの方へ歩いた。

そして、

近づいてくるミナムをジーッと見つめるミヌ

ミヌの近くまで来たミナム

「ありがとう」

そう言って、ミヌの頭をなでた。

その時、ミヌの脳裏にある光景がよぎった

「大きくなったらね・・」

そう言って、頭をなでてもらった記憶・・・

ミヌの顔は見る見る真っ赤になり、立ち尽くしていた。

「・・・」

「ミヌ!!! 大丈夫か!!」

ミナムの声がミヌをわれに戻した。

そして、

両肩に手を置いて、ミヌの目の前で声をかけるミナム

その顔が近いのに、カーッとなって、頭が爆発しそうになった。

「大丈夫です・・・」

そう言って、少し離れるミヌ。

「本当か・・・少し休んだほうがいいんじゃ」

やさしく声をかけるミナムに

「・・・少し休んできます・」

ミヌは、ミナムのいる部屋を出た・・・・

廊下の壁にもたれ、しばらく立ち尽くすミヌ・・・

胸の鼓動が止まらない・・・

そーっと部屋をのぞき、ミナムを見ていた。

そうすると、胸の鼓動が再び高鳴ってきた。

どうしたんだろう・・・・

今までただ・・ミナムの魔導士になって・・・・

その為に、契りを結ぶ・・・ただ・・・そう思ってきたミヌ・・

ふと、頭をなででもらったことを思い出し、喜ぶミヌ・・

思わずミナムの部屋に戻った。

戻ってきたミヌを見たミナム・・・

「ミヌ・・・大丈夫か？」

ミムを見るといつもと違いもじもじしているように見えた。

次の瞬間、

「ミナムさん・・大好き！！」

そう言ってミヌはミナムに抱きついた。

急なことに驚くミナム・・・

「どうしたんだ・・急に・・・」

「だって、好きなんだもん」

抱きついたままのミヌ

「わかったから・・」

とミヌから離れようとするミナム・・・

「わ！！！」

どすん！！

二人は、倒れこんでしまった。

ミナムの上にいるミヌ・・・・・

「わたしのこと嫌い？」

「そうじゃなくて・・」

「じゃぁ・・・・」

「急に・・・」

ミナムがそう言おうとした時、

パカーンという大きな音がした。

ミヌが頭を抱え

「いたーい！！」

振り返るとそこには、ヤマト姫がいた。

「おぬしら～！！！」

「さ・・・斎宮様！！」

二人の目の前に立つ、ヤマト姫

「ミヌ！！！」

ミヌを睨んだ。

びくっとなるミヌ・・・

「出て行け！！」

「え？」

「いいから、この部屋から出て行け！！！」

「はい！！」

慌てて出て行くミヌ・・・

ミヌが出て行くのを確認したヤマト姫

杖をミナムのほうへ向けて

「刀はどこにある。」

「刀？」

「そうわしがやった刀じゃ・・・」

「ああ・・・あそこ」

ミナムが指差したところに刀が合った。

「しばらく、あずかるぞ・・・」

「えっ？」

「別の刀は外にある。」

そう言って、ヤマト姫は、刀を持って武器庫を去っていった。

しばらくして、戻ってきたミヌ

「斎宮様・・どうしたの？」

「あの刀・・持って行った。」

「えっ？」

斎宮に戻ったヤマト姫、”えくすかりばー”を回収できたことに安堵した。

英雄・・そして

ミナムと二人でいるミヌ・・・

「え～！！　斎宮様・・・刀を持って行っただけ。」

「そう・・」

ヤマト姫の行動にあきれるミヌ・・・

もうっ・・・とミヌが思っていると

「ミヌ・・・大丈夫か」

ミナムの語り掛けに、さっきまでの自分の行動を思い出した。

しばらく、黙り込むミヌ・・

「大丈夫か　　あたま」

にこやかに話しかけるミナム

「えっ？」

その言葉に拍子抜けするミヌ

「だから、あたま大丈夫か？」

そういって、ミナムはミヌの頭をなでた。

ドキッとして固まるミヌ・・・

「大丈夫・・で・・す・」

小さい声で返答をした。

その時だった。

「ミナム様！！ミヌ様！！」

ミヌの後ろから大声と共に、一人の男が入ってきた。

慌てて、ミナムから離れるミヌ・・・

その男は、ゴリアテだった。

「先日は、本当にありがとうございました。ささやかですが、簡単な宴を催すことになったので、」

「うたげ？」

「はい。そこで、主役である、ミナム様、ミヌ様を呼びに来たんですよ・・・」

「そうか・・」

こうして、二人は、カモベ村の宴に出ることになった。

「我らの英雄ミナム様にカンパーイ！！！」

この合言葉と共に宴が始まった。

一方、カーネルは、滝に打たれていた。

ミヌのやつ・・・抜け駆けしたら承知しないわよ・・・

混乱の序章

ミナムが両刀使いのミドリを倒した！！

その情報は、京にまで聞こえた。

京では、ミナム事件を英雄と取るべきか、反逆者が増えたととるべきか

議論が交わされていた。

その横を通り過ぎるマヤザキ、

不毛な議論を・・・そう思いつつ彼は、詰め所に向かった。

この頃、グレースでは、ミカドを中心とする京の求心力が衰えてきていた。

それの伴い、各地で盗賊がはびこり、治安が悪化していった。

特に、

北の国の青蛇

南海の女海賊ルーシー

東の地では、ワカタケル

かれらは3大盗賊と呼ばれ、その脅威は、京にまで聞こえていた。

そして、ここ最近、３大盗賊の活動が活発になってきていた。

そんな中、ミナム事件は起きた。

「マヤザキ様。」

詰め所で仕事をしているマヤザキの後ろに、すっと影が立った。

そして影は、報告を続けた。

「何だ。」

「両刀使いのミドリがミナムにやられました。」

マヤザキは仕事の手を止め、手にしていた筆をおろした。

「ほう・・・やられたか・・・」

「はい。」

「それで・・」

「はじめに大きな爆発が起き、ミドリの軍団はほぼ壊滅」

爆発という言葉に眉をひそめたマヤザキ

「そんな魔法が使えるのか？」

「いえ、ミナム自体は魔法を使っておりません。・・たぶん、魔導師ミヌかと。」

「ミヌ？・・・ああ・・昨年の首席か？　あの斎宮様の秘蔵っ子の・・」

「左様で、しかし、ミドリ・ヒイラ・ハキオは、ミナムが倒したようで・・」

「そうか・・・もうよい・・」

「はっ・・」

マヤザキの後ろの影は、スーと消えてなくなった。

ミドリが敗れたか・・・しばらく考え込むマヤザキ

そこへ、部下の一人が部屋の入り口に来た。

「マヤザキ様」

「どうした・・」

「ミカドがお呼びです。」

その言葉に、ため息をつくマヤザキ・・・

また、ミカドのミナム恐怖症が始まった。

いっそのことミドリが村後と葬り去ってくれれば、いや・・・

「マヤザキ様！！！」

部下の一言でわれに帰った。

「すぐ参る！！さがれ」

「はっ！！」

ミカドの前に呼び出されたマヤザキ・・・・

ミカドは明らかに平常心を失っていた。

「マヤザキ・・・ミナムがいたそうじゃ・・・・」

「はっ・・まだ真相は確かではないですが。」

「なにがじゃ・・・あの両刀使いのミドリを倒したというではないか。」

「それは・・・」

「しかも、おぬしが偽者と言っておった。カモベ村というではないか。」

「は・・それがしの情報では、偽者と・・・」

「ミナムを何とかしろ!!」

ミカドは何をうろたえてるのだ。ミカドを見てマヤザキはそう思っていた。

「何をしておる!!」

「はっ・・」

マヤザキがそう言ったときだった。

陸軍大臣が急に入ってきた。

「ミカド様・・・ポメラが・・・ポメラが・・・」

「ポメラがどうした・・・」

「ワカタケルが占領、独立を宣言しました。」

「ど・・ど・・独立!?」

独立という言葉に腰を抜かすミカド

ポメラが落ちたことに焦りを隠せないマヤザキ・・・

ポメラ・・・そこは、グレース東部の拠点都市
鉄製品の産地として、京としても重要な拠点だった。

しばらくして、怒り狂うミカド・・・
「ミナムといい・・ワカタケルといい、どうなっておるのじゃ。！！！」
そう叫んでいると陸軍大臣が
「しかも！！」
「しかも？まだ何かあるのか？」」
「同時に青蛇、ルーシーも同時にほう起しました。」
「なに！！　すぐに各大臣を招集しろ。」
ミカドは、叫び、御前会議を緊急に行うこととなった。

その頃、ミナムとミヌの宴は深夜まで続いた。
飲んだり、歌ったり、踊ったり。
そして、けっこう飲まされた二人

宴が終ることには、うとうとしていた。

村人に連れられ、武器庫に戻った二人は、

そのまま眠ってしまった。

御前会議

「まず、戦況を・・・」

右大臣が話をはじめると真っ先のその言葉をさえぎったのは、ミカドその人だった。

「総攻撃せよ!!すべて抹殺するのじゃ!!」

その言葉に右大臣も話しができない状態になった。

そこへ入ってきたのは、前の右大臣フトーだった。

「ミカド様・・・落ち着きなされ」

「おお・・フトーか丁度よかったぞ。」

「ところで、ワカタケルはどんなことを言っておるのですか。」

「そうじゃ・・どうなっておるのじゃ」

「恐れながら申し上げます。ポメラを占領したワカタケルは自らを新王となのり、ポメラをギオンと称し、独立・・・兵力は、約1万と思われます。」

そう説明をする陸軍大臣。

「1万・・・」

どよめく・・・議会・・・・

そこへ・・・ヤマト姫が現れた

「なにをしておるのじゃ・・・・」

「さ・・斎宮様・・・」

「おばさま・・・どうして、ここへ？」

ヤマト姫の登場に驚いているミカド、一方で、その言葉を聞いて呆れるヤマト姫、

「おぬしが呼んでおいて、何を言うのじゃ！！」

「えっ・・・・」

「ほれ・・」

そう言ってミカドに通達を見せるヤマト姫

「ミカドよ・・何うろたえておるのじゃ・・・」

「あ・・・いや・・・」

ヤマト姫の言葉にたじろいでいるミカド・・・

そんな姿を見て、ヤマト姫は、ため息をつき、そして、フトーのほ

うを見た。

「フトー、どうじゃ。」

「1万の兵とは・・・ポメラにも内通者がいたのでは・・ひょっとすると」

「何をいっておられるのですか。」

そういったのは、ポメラの長であった。

「これは、ポメラの長・・・どうして、あなたがここに?」

フトーは、やんわりと質問をする。

「たまたま京へ戻る用事があり・・・」

「ほう・・たまたま・・ねぇ・・」

「もうよいではないか・・」

今度は、ミカドが言葉をさえぎってきた。

「とりあえず、ワカタケル討伐隊を直ちに派遣せよ。」

「はっ!!それでは、アキ大将率いる第一師団1万を討伐隊とし、派兵します。」

「そうか・・頼んだぞ・・・」

こうして、御前会議が終了し、第一師団の派兵が決まった。

しかし、これが悲劇の始まりだった。

数日後、第一師団全滅の報告が入った。

アスケ原に到達した第一師団・・・・

彼らを待ち受けていたのは、第一師団の3倍の兵力・・・・

ギオンは、すでに第一師団のルートで待ち構えていたのだった。

そして、アスケ原に進軍した第一師団を3方から囲んだ

しかも、その戦力の中心に強力な兵力が・・・

第一師団はなすすべもなく、全滅した。

「何!!全滅じゃと!!!!」

今にも切れそうなミカド・・・・

というより切れていた・・

「それでは・・・坂上田次郎を行かせましょう。」

陸軍大臣がこの男をを推薦した。

「あの・・勇猛果敢な・・・」

陸軍大臣の言葉に納得するように話す右大臣・・・

しかし、ミカドは、納得がいかない。

「黒騎士団をだせ！！」

「陛下・・・！！」

皆がその言葉を止めようとした

「黒騎士団を出すのじゃ！！」

言うことを聞かないミカド・・

「それでは。トモチカ率いる2番隊を出します。」

こうして、第2次伐隊が決定した、

御前会議が終わり、マヤザキがその場を去ろうとしたときだった。

「マヤザキ　来るのじゃ」

ミカドに呼び止められたマヤザキ・・・

「早くミナムをなんとかせよ。」

「ミカド・・・」

「何じゃ」

「私に妙案が・・・」

「ほう・・・」

「ミナムを討伐隊にいれては？」

マヤザキの言葉に顔が曇るミカド・・

「どういう意味じゃ・・」

「ミナムは、まだ、叛旗を翻したわけではない。」

「ほう・・しかし、いつ翻すか。」

「ですから、英雄として、京へ迎え入れるのです。」

「は？やつを京へとな？」

「そして、討伐隊として、参加させるのです。」

「ほう・・毒をもって毒を制すか。」

「左様で・・・」

「そうか・・ぬかる出ないぞ・・・」

「はは～!!、早速、ソウシ率いる3番隊をカモベ村へ向かわせます。」

ミナムとミヌ・・・

宴があった翌日のことだった。

目を覚ましたミナム・・・

目の前に広がる光景は、自分の部屋・・・・

やっぱり・・・夢だったか・・・

しかし・・・

自分の横にぬくもりが・・・・

待てよ・・・また・・おれ・・はだか・・・

えっ・・・

横を見ると、ミヌの姿が・・・

図ったようにミヌも目を覚ます・・・

「ミナムさん・・・ここは?」

ミヌは、固まった・・・自分が裸であることに気がついた。

ちょっと・・・なに?

ひょっとして・・・・

目の前にはミナムさんが・・

しかも・・・裸で・・・

「きゃー！！！」

そう叫んで、ミナムから慌てて離れるミヌ・・・・

目の前に素っ裸のミヌをみて

「わ～！！」と驚くミナム

自分が裸であることに気づいたミヌ

慌ててミナムの布団を取った。

その直後・・・ミヌは硬直した・・・・

布団を取ったミナムの股間が・・・

しかも・・・

硬直しているものが・・・

目にはいった。

「きゃー！！！」

「わ～！！！」

叫びあう二人・・・

ミナムは慌てて股間を押さえた。

ミヌは、目を瞑って、布団にくるまった。

う～・・・記憶がない・・・Hしちゃったんだろうか？

ミナムさんに聞くわけにいかないし・・・

最悪・・・こんな初体験なんて・・・

一方、ミナムは、まずい・・・ミヌもしちゃったんだろうか？

記憶がない・・・どうしたらいいんだ・・・俺・・・

そう迷っていると、

ピンポーン

ピンポーン

呼び鈴が鳴り

ドンドンドンドンとドアを叩く音が

「よっちゃん　いるんでしょ！！早く出なさいよ！！！」

由美の声がした。

ミナムは慌てて服を着た。

そして、近くにある服を持ってきて

「ミヌ・・これを着ろ」

そういって、慌てて玄関へ向かった。

扉を開けると血相を欠いた由美が立っていた。

「よっちゃん・・どうしよう」

そう言って泣きついてきた。

そこへ、ようやく服を来たミヌが来た。

ミヌの目の前には、ミナムに抱きつく女の人が・・・

その光景にミヌは、ショックを受けた。

一方、ミナムは、

「由美・・どうしたんだ・・」

「みゆが・・・みゆが・・」

「みゆが・・どうしたんだ？」

「目の前から消えたの」

そう言って、由美は泣き崩れた。

しばらくして、落ち着いた由美

「ごめんなさい・・・」

「どういうことだ・・・由美」

「家に戻って、片づけをしてたの

そうすると、みゆがいた部屋が急に光って・・

慌てて見に行ったら。すでにみゆがいなかった。

わたし・・どうしたらいいか・・・」

「それで・・・俺のところに来たのか」

「そう・・」

ふと由美がミナムのほうを見ると横には、見知らぬ女性がいた。

「ところで・・・よっちゃん・・・」

「なんだ？」

「この娘は？どう見てもカーネルさんに見えないけど・・」

由美は、ミナムのほうを半分軽蔑したような目で見た。

「あ・・・この娘・・・ミヌ・・・もう一人の魔導師・・前に説明したろ」

ミナムは、横にいるミヌを指差して説明した。

「そうかしら・・」

そこへ

「あの～」

ミヌがミナムに声をかけた。

「ミヌ・・・この人のことだろう。姉の由美・・・」

「え～！！！」

ミヌは、驚いて声を上げた。

ミヌのことを無視して、ミナムは

「ところで・・・みゆの件は・・」

「だから・・・どこにもいないのよ・・・」

「さっきの話、俺達が、向こうと行ったり来たりする現象と同じだ・」

「えっ？」

ふと顔をあげる由美

「どういう意味？」

「だから・・・俺達が、向こうへ行く時と同じだ。」

「どうやって？」

「こいつの気まぐれだけど・・・」

そういって、ミナムは由美の前にパソコンをだした。

「これが？」

「このパソコンが急に光るんだ・・そして、俺たちは向こうの世界に飛ばされた・・」

「で？何で今、ここにいるの？」

「わからないんだ・・・」

「ということは？」

「俺達もいつ向こうの世界に行くかわからないんだ。ただわかっているのは、こいつがあれば向こうと行き来できるってことだけ。」

そう言って、ため息をついたミナム

その言葉を聞いて、落ち込む由美

「じゃぁ・・みゆは・・・」

「このパソコン以外に、向こうと行き来できる何かがまだあるんだろう・・」

「どういうこと？」

「案外、向こうの世界で会うかも・・・」

「何のんきなことを言ってるの！！！」

由美は、ミナムを怒った。

「しかし・・・」

ミナムが話をしようとした。その時だった。

ぐー！！！

ミヌのおなかがなった。

「あ・・・」

「えっ？」

「みゆの件は、俺が向こうの世界で探すから・・・」

「そうね・・それしか・・ないわね・・」

「ところで・・・俺達、朝から何も食べてないんだ・・・」

「何言ってるのよ・・・さっき、お祝いしたじゃない・・」

そういって呆れる由美・・・

「えっ・・・？」

しかたなく、その辺を探すミナム・・・

「あった・・」

そう言ってカップ麺を2個出してきた。

「これは？」

ふたを開けると、そこにはぐにゃぐにゃしたして固まったものがあ

った。

それを不思議そうに見るミヌ

そこへ、お湯を注ぐミナム

「ミナムさん・・何しているの？」

「まぁ・・・待って・・・」

ミナムの行動がまったく理解できないミヌ・・・

その間に由美はおにぎりを握ってくれた。

「由美・・ありがとう・・ミヌ、食べれるぞ・・」

そう言ってミナムはミヌへカップめんを渡した。

それを恐る恐る口にするミヌ・・

一口食べると・・・

「ミナムさん・・・おいしいです・・」

そう言って、黙々と食事をするミヌ

「由美・・向こうへ行ったら、みゆのことも聞いてみるから・・」

「わかったわ・・・」

「お互い連絡の仕様がないけど・・・」

「まぁ・・そうなんだけど・・・」

「じゃぁ・・」

「うん・・じゃぁ・・」

そういい残して由美は帰っていった。

ふと横を見るとミヌは、寝ていた。

ミナムはミヌをベットに寝かし、時計を見た

１１時をすでに回っていた。

こんなに遅い時間だったのか・・・

そう思い、パソコンを近くに置き、ミナムは、ベットの横の床場に寝た。

逆情のカーネル

禊を終えたカーネル

ミヌのやつ・・・ぬけがけしてないわよね・・・

武器庫の前に立っていた。

そして、

「ミナム・・ただいま・・」

そう言って、ドアを開け中に入って行った。

反応がない・・・

あれ？いないの？

そう思いつつ、ミナムの寝ている部屋に向かう・・・

やがて、ミナムが寝ている部屋に入るカーネル

そこで見たものは・・・・

「！！！」

その光景を見て、愕然として声が出ない・・・

「・・・・」

カーネルは、一瞬で頭が大爆発した。

そして、

足元が崩れ・・

心は奈落のそこに落とされた。

それは、やがて、わなわなと身震いを起こし・・・

えも言えぬ・・・怒りへと化学変化を起こした。

その光景とは、ミナムとミヌが裸で抱きあって寝ていたのだ。

「ミナム！！！」

大声で叫ぶ、カーネル

その声に驚き、起きる二人・・・・

二人が不思議そうにカーネルを見る。

「あなた達！！！」

ぶちきれるカーネル

ミナムとミヌは顔を合わせて、二人は驚いた！

「きゃー！！」

「わー！！」

お互い反対を向き、体を隠した・・・・

その光景に呆れるカーネル・・・

すぐさま、ミナムのところへ行き、耳を引っ張った。

「痛たたた！！」

「ちょっと！！どういうつもり？」

「待ってくれ・・・」

そういうミナムのほっぺをつねるカーネル

「すびばせん・・・おぎだら・・・」

「カーネルさん・・・」

ミヌが横から声をはさむ。

「カーネルさん・・」

「ミヌは黙ってって、この浮気者を・・」

ミヌのほうを見るカーネル

ミヌは、ミナムの方を指差していた・・・

その先を見たカーネル、

「きゃー！！！」

それは、ミナムの股間の部分だった。

「ミナムどういうつもりよ。」

とりあえず、服を着た二人・・・

正座して、カーネルの前に座る・・・

「で？」

「で・・とは・・」

「わたしが禊に行ってる間、楽しかった？」

カーネルは両腕を組んで、半身に構え、二人を睨んだ。

「それが・・・」

二人は、宴の後、気づくとミナムの世界に行って、

再び気づいたら、裸で戻っていたと説明した。

「じゃあ・・二人はHしたの？」

怒りのあまり・・・ストレートに聞くカーネル

「それが・・・」

二人の返事が歯切れの悪い二人・・・

その光景を見て、呆れるカーネル・・・

わたしを愛しているようなこと言っといてこれ？

ミナムって、女好き？

こんな男と・・・

わたしHしちゃったんだ・・・

そう思うと少し惨めになった。

しばらく考えたカーネル

「もう・・・いいわ・・」

そういい残し、部屋を出ようとした。

「カーネル・・・」

ミナムの言葉に立ち止まり、

バチーン！！！

思わずミナムにびんたを食らわせた

「ばか！！！」

カーネルは、そう叫んで部屋を飛び出した。

「カーネルさん・・・」

「カーネル」

カーネルを追いかけようとするミナム・・・

「ミナムさん。」

ミヌがミナムを止めた。

「ミヌ・・・」

「わたしが、カーネルさんと話してきます。」

「なぜ？」

「ミナムさんだとややこしいと思うの。」

カーネルとミヌ

木陰で泣いているカーネル

何であんな奴と・・・・

Hしちゃったの・・・・

そう思っても・・・・

記憶がないだけなお悔しい・・・

自分が惨めで仕方がない。

最低！！！

あんな奴・・

そう思っても

つらく。悲しみが襲ってくる。

その後ろから

「カーネルさん・・・・」

ミヌが声をかけてきた。

「なによ！！！」

ミヌを見ようとしないカーネル

「カーネルさん！！」

ミヌは、カーネルの両肩を持った。

しかし、視線をそらすカーネル

「Ｈした後ってどんな感じだった。」

「はぁ？　どういう意味？」

ミヌの質問に戸惑うカーネル

ミヌは、うつむいて・・・

「Ｈしたみたいなんだけど・・・・まったく記憶がないの・・・

というか・・・体とかもぜんぜん・・・」

言葉がだんだん小さくなるミヌ・・・

「それって・・・」

わたしと同じと言いそうになり、飲み込んだカーネル・・・

「初体験なのに・・・まったく記憶がないの・・・」

「ひょっとして、ミナムの世界に行った時の話。」

「うん・・歓迎の宴の後、目を覚ましたら、ミナムの世界だったの。気がついたら、ミナムの横に寄り添って寝てたの、しかも、裸で・・・」

「えっ!!、ちょっと待って、さっきも裸だったわよね。」

「うん・・」

「ミナムの世界からのいつ戻って来たの。」

「向こうですぐに眠たくなって・・・気がついたら・・・」

しばらく、考え込むカーネル。

ひょっとして、あの時、わたしもHしていなかったのかしら。

「どうしたんですか?」

「ひょっとしたら、向こうへ移るとき服が脱げるのかも・・・」

「えっ?」

「だから、裸になっていくってこと・・」

「じゃぁ・」

「Hしてないかも。」

「でも・・・それは、憶測でしょう？」
「わたしも同じだったから・・・・」
「でも・・・」
「そんなに疑うの。」
カーネルは両手に腰をあて、ミヌを睨んだ。
「そんなことないわ。」
なんとなく納得がいかないミヌの様子を見て
「じゃぁ、調べてあげるわ。」
「えっ・・・調べるって？」
カーネルの言葉に戸惑うミヌ・・・
「わたしが見てあげるわ。あそこ見せて」
そう言って、カーネルはミヌのスカートをまくった。
「きゃー！！やめてください！！」
慌てて、めくれたスカートを抑えるミヌ・・
「もうっ！！！」

「ははは・・ジョーダンよ」

そう言って、カーネルは手を差し伸べた。

「これは・・・」

「わたしも同じよ」

「カーネルさん・・・」

二人は握手をした・・・しかし、その手にはかなり力が入っていた。

「負けないわよ」

「わたしこそ・・」

行きたくないのに

武器庫に戻った二人・・・

彼女らは、その周囲の光景を見て思わず身を隠した。

それは、５０名くらいの黒い鎧を着た者達が武器庫を取り囲んでいたからだった。

そして、

隊長らしき人物が、カモベ村の村長と一緒に武器庫の中に入って行った。

「ミナムさん！！」

飛び出そうとするミヌを

「待って！」

そう言って、ミヌの手をつかむカーネル

「なぜ？」

「黒騎士よ！」

「えっ」

しばらく固まるミヌ・・・・

「しばらく・・・」

一方、ミナムは、目の前には、３番隊隊長隊長、ソウシがいた。

その横には、カモベ村村長・・・

「この村の英雄・・・ミナム殿・・・」

「はぁ・・・」

村長の言葉になんとなく答えるミナム・・・

「この村の英雄!!!ミナム様・・・」

その言葉に怪訝そうな顔をするミナム・・・

「何でしょう?」

「ミカドから!!、謁見の声が・・・」

「えっけんって?」

村長の言葉に戸惑うミナム・・・

「そう・・・ミカドに・・・」

「みかど?」

「そう・・わが村の英雄が・・・」

「ひょっとして？」

自分のことを指さすミナム・・・

「そう・・あなたがです。」

ソウシが二人の会話に入ってきた。

「えっ？俺が・・・」

ただ・・・ただ・・・驚くミナム

「そう・・・」

「ミナム様、すごい栄誉ですぞ」

大喜びする村長、その様子を横目で見るソウシ

「ミナム殿の行動いかんによりますが・・」

ソウシの言葉に固まる村長

「ジョ・・ジョーダンでしょう。ソウシ様・・」

ソウシはその鋭い目で村長を睨んだ。

「ミナム殿に謀反の疑いがあれば・・・即座に対処せよと聞いておる」

その言葉に青ざめる村長

「そ・・それは。・・・・」

「この村も含めて・・・」

「そんな・・」

ミナムはその言葉に、ソウシを睨んだ。

そして、

「この村はまったく関係がない・・・」

「ほう・・」

「それに・・・」

「それに？」

「俺が、ミカドに叛旗を翻す理由がない。」

ほっと胸をなでおろす村長・・・

「では・・・」

「行かせていただきます。京へ・・・」

ぢたばた

その頃、物陰に隠れていた。

カーネルとミヌ・・・

その後ろから怪しげな手が近づいていた・・・

「どうしよう・・ミヌ・・・・」

「あれって・・黒騎士よね。」

「そうよ・・」

そう言いながら二人は、ミナムの元へ行こうかどうか迷っていた。

その時だった。

怪しげな手が二人のお尻をなでた。

ぞくっとした二人・・・

「「きゃーーー!!!!」」

二人の悲鳴があたりの静寂を破った。

あっという間に黒騎士団に囲まれた二人・・・

「ミヌ!!何、人のお尻触ってるのよ!!」

「カーネルさんこそ！！！見つかったじゃない！！」

二人はそんなことお構いなしで、喧嘩を始めた。

言い合ってい場合か普通・・・二人の行動を見て・・・あきれる黒騎士達・・・

「そこの3人、何している！！」

「えっ？3人？」

声を合わせ不思議そうにお互いを見つめるカーネルとミヌ・・・

ふと後ろを見ると・・そこには、ヤマト姫の顔が・・・

「わ～！！！ばけもの！！」

驚き悲鳴を上げる二人。

パカン！！

パカン！！！

次の瞬間、二人頭からいい音がした。

「いた～い！！」

頭を抱える二人・・・

「だれが！！化け物じゃ！！誰が！！！」

怒るヤマト姫に二人は、

「ごめんなさい・・・斎宮様・・・・・つい・・本音が・・」

「なに～！！！」

パカン！！

パカン！！！

再び、二人頭からいい音がした。

その光景を見ていた黒騎士達

「あれが・・・斎宮様か・・・」

そこへ武器庫からミナムとソウシが出てきた。

ミナムを見た二人

「カーネル！！」

「カーネルさん！！」

そう言って、ミナムに近づこうとした。

それを阻む黒騎士・・・

「なによ！！」

しばらくにらみ合いをする黒騎士と3人・・・

そこへソウシが大声を上げた。

「下がれ」

その言葉に、従いスーッと下がる黒騎士達。

「これは・・・斎宮様、お目にかかれて、光栄です。」

「相変わらずじゃな・・・ソウシ」

ソウシがヤマト姫に頭を下げたときだった。

「貴様がミナムか！！」

動揺

声をするほうを全員が見るとそこには、

背中に羽が・・・頭には、金のリングが・・・・

鼻は高く、目はパッチリとして・・・どことなく馬面・・・

しかも、小太り・・・・

そんな、天狗とも天使とも言えない、間抜けな姿をした奴が彼らの上を飛んでいた。

少なくともミナムには、そう見えた。

しかし、ミナム以外には、そう見えていなかった。

「なぜ・・・アクバが？」

そう言って驚いているヤマト姫・・・

「貴様がミナムか」

アクバは、そう言いつつ、ミナムではなく、ソウシを見た。

一方、ソウシは、ミナムのほうを見て、

「お前の相手だ。」

「えっ？俺？」

そう言ってミナムは、アクバの方を見た。

「行くぞ！！ミナム！！」

するとアクバは、ソウシの方へ、炎の矢を放った。

ソウシは、自分に関係ないと思い、アクバに背を向けていた。

〜危ない！！」

そう叫んで、ミナムがソウシの方へ駆け寄る。

「何をする。」

そう言って、剣を抜き、ミナムに切りかかるソウシ

「うわぁぁ！！」

ミナムは、剣先をよけたが、すぐにソウシに飛びつき、頭を抱きかかえ

「何をする！！」

ソウシの言うこをを無視し、そのまま二人で倒れこんだ。

すぐさま

「貴様！！」

きっと睨むを聞かしたソウシだったが、

バーン！！！

ものすごい音と共に、火の矢が地面で炸裂した。

その爆風が、二人を襲った。

「ミナム！！」

「ソウシ様！！！」

そう、皆が叫んだ・・・

爆風の中、ソウシは、ミナムに抱かれ・・・

自分の鼓動が高くなっているのを感じていた。

どきどき・・・どきどき・・・と

「ミナム・・・貴様・・・そんなに鈍い奴だったとは。」

不適な笑みを浮かべるアクバ

黒騎士団が二人の周りを固めた。

「ソウシ様大丈夫ですが？」

その時だった。

ソウシを抱いていた手が優しく離れた。

そして、

「大丈夫ですか？」

そうミナムが声をかけた。

バーン！！

再び、巨大な火柱が立った。

ミナムは、立ち上がった。

これが、ソウシを動揺させた。

ソウシが顔をあげると、そこには、ミナムのあれがあった。

そう・・さっき、ソウシが切りつけた時に、ミナムのズボンとパンツをのゴムを切っていた。

それが、はらりとソウシの前で落ちた。
あれを目の前にして、じっと見つめめる。
ソウシは、驚いたごくりと生唾をのんだ。
そして、そのまま、ソウシは固まってしまった。
その光景を目にしたカーネルとミヌ・・
「あ・・あ・・・」
声がでないカーネルとミヌ
しかし、自分のズボンがパンツごとずりおりていることに気づかないミナム
ようやく・・・
「ミナム〜！！！　下！！！下！！」
そして、ミナムには
「下！！下！！！」と叫んで暴れる二人が見えた。
何が下なんだ？と思ってまだ目の前に座り込んでいるソウシを見て
「ソウシ殿・・大丈・・・ぶ・・・」

そう言おうとした瞬間、自分の下半身が露出していることに気づいた

「わ～！！」

慌てて、あそこを隠すミナム・・・

その行動にようやくわれに返ったソウシ・・・

「あ～！！！」

そう叫んで、衝波をミナムに放った。

「うっ・・わ～！！！！」

衝波を受けて、飛んでいくミナム・・・

そのまま・・・

ど～ん！！！

その響きと共に、ミナムは武器庫に放り込まれた。

「ミナム！！！」

「ミナムさん！！」

カーネル・ミヌの叫びが響いていた。

リーマン戦士、再び

武器庫に放り込まれたミナム・・

やがて、起き上がり、あらわになっている股間をどうしようか考えていた。

やはり、あれを着るか・・・

とりあえず服を着たミナムは、武器を探していた。

この間まで使っていた剣は、ヤマト姫が持って行ってしまったからだった。

武器庫を歩くミナム、そこには、ブーメラン？が・・・

それと、剣と盾を適当に持ち、武器庫の入り口へ向かった。

その頃、黒騎士団は、苦戦を強いられていた。

「くそ～！！」

必死に立ち向かうソウシ

「ミナム・・・貴様もここまでだな・・・俺が食べて、霊力の足しにしてやる。」

上空のアクバは、新たに攻撃をしようと準備をしていた。

「斎宮様・・・どうにかならないのですか？」

「アクバは・・・のう・・」

「アクバって？」

ミヌがヤマト姫に問いかける

「アクバは、神馬と表裏一体なのじゃ・・・」

「それって？」

「悪魔に仕えた馬のことじゃ・・」

「じゃぁ・・」

「能力は、神馬と変わらないのじゃ。」

そうこうしているうちに、アクバが最後の攻撃をかけようとしていた。

「これでも食らえ！！！」

ズドーン！！！

一撃目をかろうじてよけるソウシにすぐ差し迫ってきている第2波をよける体力はもはやなかった。

もう・・だめだ・・・

ズドーン!!!

「やったか?」

上空から見ているアクバ・・・ソウシの姿を探すが見つからない。

「どこへ逃げた。」

立ち込める煙の中・・・ソウシを抱きかかえ、一人の男が立っていた。

気がつくと、スーツにネクタイをしている男の手の中に包まれていたソウシ・・・

その男がミナムであることに驚く。

「大丈夫か?」

「ああ・・」

ミナムは、すばやく動き、近くの黒騎士にソウシを渡した。

「やい！！！バカ馬！！！」

その声にムッと反応するアクバ・・・

その声の主はミナムだった。

「あのバカ・・・・アクバを怒らせてどうする？」

頭を抱えるヤマト姫・・・

「貴様！！！！今なんていった？」

「俺がミナムだ。そんなことも気づかないバカ馬！！」

「貴様！！、俺を怒らせたな。これでも食らえ！！！」

火の矢をミナムに向け放った。

ミナムは、その火の矢を刀をバットのように振り打ち返した。

ギャン！！！

その矢を何とかファールしたものの、刀はものの見事に曲がってしまった。

「何がミナムだ！！すぐにあの世へ送ってやる。」

アクバがそう叫んだ瞬間、ミナムが飛んで、アクバのそばまで来た。

そして、蹴りを入れた。

グシャ！！

そのまま、アクバは、地面に叩きつけられた。

「斎宮様！！ミナムが！！とんでます。」

「ああ・・なんというやつだ。」

地面から立ち上がったアクバが再び飛び上がってきた。

「貴様！！」

そして、ミナムも飛び上がり、再び格闘をしようとした。

ふっと目の前から消えるアクバ・・・

「どこだ？」

「ここだよ！お返しだ！！」

今度は、アクバがミナムに蹴りを入れた。

「うわ～！！」

そのまま地面に叩きつけられたミナム・・・

「おわったかな？手間かけさせやがって。」

上空で、ミナムが落ちた位置を確認するアクバ・・・

「ミナム～！！！」

あれ？

「お～痛てて！！」

やはり空中戦では、こちらが不利か・・・そう思いながら・・・

「まだ生きていてか！」

ミナムの上空を飛ぶアクバ・・・

ミナムは、とりあえず曲がって使い物にならない刀をアクバの方へほぼ真上に向かった投げた。

ひょいっとよけるアクバ

「そんなものがあたるか！！！」

とりあえずミナムは手当たりしだいアクバに向けて、石を投げ続けた。

「当てて見ろってんだ！」

らくらくとよけるアクバ、そんな中、ミナムはブーメランを見当違いのほうへ投げた。

「どこへ投げてるんだ！！お前こそばかじゃねぇか？」

次の瞬間、

カーン！！

アクバにブーメランが直撃した・・・・

「貴様！！！バカにしやがって。」

そんな言葉も聞かず、ただ、石を投げ続ける

「ミナム！！！」

「ミナムさん！！」

そう言って近づくカーネルとミヌ・・・

その動きを見たアクバが一瞬動きが鈍くなった。

それを見て、黒騎士団が一斉に衝波を放った。

「うわ～！！」

その立て続けに襲ってくる衝波を掻い潜り、反撃をするアクバ

「この！！！」

黒騎士団の近くで爆煙が上がる・・・なかなか捕らえきれないアクバ

そこへ・・・ミナムは、狙いを済まし、思いっきり石を投げつけた。

一投目、飛んでいるアクバのわずか後方を通過・・・

そうか・・・もう少し手間か・・・

二投目・・・

ミナムの投げた石に気付き、急ブレーキをかけるアクバ。

それを見て3投目を投じた。

そして、アクバがミナムの2投目をよけ睨んだ時、

目の前に3投目が来た。

「うわ～！！」

カーン！！！

直撃・・・

次の瞬間、

集中砲火を受けるアクバ・・

「くっ・・・！」

直撃に必死に耐えるアクバ・・・

ミナムはころあいを見はかりアクバの上に大きな岩を投げつけた。

その石はアクバをそれ・・・はるか上空へ向かって行った。

やがて、重力に逆らえなくなり、徐々に加速し落ちていった。

一方、集中砲火に耐えていたアクバ、己の魔力を最大にし、攻撃を跳ね除けた。

「ぐぁぁあああ！！！！」

その光景に驚く、カーネル・ミヌそして、黒騎士達・・・・

「なんてやつだ・・」

「え！！」

その時だった。

ガーン！！！

「ぐぇ？！」

アクバの頭に何かが直撃した。

ミナムが投げた大きな岩がアクバの上から直撃した。

気を失ったアクバは、墜落しその岩の下敷きになった。

すぐさま、ミナムと黒騎士は、アクバを縛り、ヤマト姫は結界を張った。

黒騎士団　3番隊隊長　ソウシ

ため息をついたソウシ・・・

目の前には、岩の下敷きになっているアクバがいた。

捕らえられたアクバを見て、さっきの悪夢を思い出し頭をふった。

つまらぬものを・・・

黒騎士団3番隊、隊長ソウシ、黒騎士団の中にあって、

隊長にまで上り詰めた女は、彼女だけだった。

彼女は、カーネルのように裕福な家庭ではなかった。

グレースでもやはり、身分制度があり、政府の役人である常民と

一般的な公民に分かれていた。

この中で常民には、文官・神官・武官・魔導士にわかれていた。

特に、文官・神官・武官は特権階級の貴族が大多数を占めていた。

常民になるためには、それぞれ試験があるが、実力で上がれるのは

魔導士がだけだった。しかも、この時代で、黒騎士団は、特に実力を

必要とし、魔導士の力だけでなく、武官と同等の戦闘力も必要だっ

た。

そんな中、ソウシは、カーネルやミヌと同じように、魔導士試験を首席

で合格し、黒騎士団に志願し、女性としてはじめて隊長まで上り詰めのだった。

ソウシは、再び目の前のアクバを見ていた。

そこへ黒騎士団の隊員が、

「いかがいたします。」

「何を・・」

「こやつの処分です。」

隊員は、アクバを指差し、剣を差し出した。

「そうだな～」

しばらく、考え込むソウシ、そして、おもむろに剣に手をかけた。

ちょうど、そこへミナムたちがやってきた。

ミナムがアクバの方を見ると、ソウシが上段に振りかぶったところだった。

「ちょっと、待った！！」

その言葉に一瞬、止まりミナムのほうを見るソウシ・・・

「ミナム殿・・・こやつを処分するのです。」

目の前まで来たミナム

チラッとアクバを見て

「このままでもいいのでは？」

「だめだ・・・アクバは処分しないと」

「けど・・この状態では害がないのでは？」

「こいつは、悪と契約した馬だ！！処分しないと災いの元だ！！」

ソウシの言葉を聞いて、アクバのほうを見るミナム・・

「けど・・・こいつが本当に悪魔と契約した証拠があるの？」

ミナムの意外な言葉に驚くソウシ、振り返ると間近にミナムが立っていた。

ミナムを見て、ドキッとするソウシ・・・・

そして、また、あのつまらぬもの脳裏をよぎる・・・・

そんなソウシを尻目に、ミナムはアクバの前にしゃがんみこんだ。

「お前、俺の仲間にならないか？」

「誰が！！お前なんかと！！」

「ミナム！！何言ってるのよ。」

「そうです。ミナムさん！！」

カーネルとミヌの方を振り返り、笑顔を見せるミナム

そして、

「カーネル、ミヌ、俺、こいつを仲間にするわ」

「ええっ～！！」

驚く二人、

「ミナム殿！！正気か？」

ソウシの言葉に、

「俺の仲間になれば、殺さなくてすむよな！」

「まぁ・・」

「じゃぁ～決まった。アクバお前は今日から俺の仲間だ。」

「フン！！」

プイっと顔を背けるアクバ・・・
それをミナムは無視し、アクバの頬を引っ張った。
「今日から仲間だぞ！！」
「いひゃい！！ひゃへろ！！」
「わかったな！！」
しばらく、アクバの顔をつねり続けるミナム、
「強情な奴め、あとで絶対に仲間にしてやるからな」
その様子を見ていたソウシ
「よくやってくれる」
ため息をついたソウシは、ミナムに握手を求めた。
手を出しソウシと握手をするミナム
「ソウシ殿、ありがとうございます。あっ・・それと・・・・さっきは・・・」
そう言おうとしたときだった。
ミナムの口を押さえるカーネルとミヌ・・・
「む～！！」

「ごめんなさい！！ソウシ様！」

カーネルが慌てて謝る。

なんとか、口を塞いでいた手を何とか振りほどいた。

「なにすんだよ！！！」

「ミナムは、黙って！！」

逆にカーネルに一喝され、たじろぐミナム・・・

そこへ、ミナムの耳元でミヌがささやいた。

「ミナムさん・・・ソウシ様は、女性です。」

「えっ？」

「だから・・・」

ミヌの言葉が終る前にガクッとうなだれるミナム

「ミナムさん？」

「は・・は・・・」

「だいじょうぶですか？」

ミヌの声が聞こえないミナム・・・・

ミナムは、しばらく、呆然としていた。

そして、

「すみませんでした。」

深々とソウシに頭を下げるミナム、

「別に・・・こちらこそ・・」

「あ・・それと・・・」

ミナムがあれを見せたことを誤ろうとすると

「えっ？」

固まり言葉を失うソウシ・・・

ギュッ

「いて！！」

カーネルは、ミナムの尻をつねった。

その様子をアクバは、見ていた。

そして、考えていた。

アクバ　クオン

ミナムたちが去った後、岩の下敷きになっていたアクバ

変な奴・・・特にあのミナムってやろう

なんで俺みたいな奴を仲間に？

どういうつもりだ？

俺をだまそうとしているのか？

一方、ミナムは、カーネルとミヌに睨まれていた。

「どういうつもり？」

仁王立ちをしたカーネルが問い詰める

「ただ・・仲間に・・」

「ミナムさん、気は確かです？あのアクバですよ。」

「だから？」

カーネルは頭を抑え・ミヌは肩を落とし、大きなため息をした。

「あのね・・・アクバってのは、悪魔と契約してて・・・」

「そんなの関係ないよ。」
「関係ないって」
「俺が気に入ったんだ。」
ミナムの言葉にあきれる二人。
「無理じゃよ」
そこへ、ヤマト姫が入ってきた。
「斎宮様・・・」
「斎宮様も言ってくださいよ。」
「ミナムよ。仲間にしたければ、すればいよい。」
「「ええ～っ??!!」」
ヤマト姫の言葉に驚くカーネルとミヌ
「斎宮様まで・・・」
その言葉を聞いて、ミナムは立ち上がった。
「どこ行くの?」
「アクバのところ・・・」

部屋を出ようとしたミナムが振り返り

「斎宮様・・・」

「なんじゃ・・・」

「アクバってのは、何を食うんだ？」

「神馬と同じじゃ。厩舎から持っていけば良い。」

「ありがとう・・」

ミナムは、3人を残し、部屋を後にした。

残された3人・・・

「斎宮様・・・」

心配そうに話すカーネルとミヌ・・

「アクバって・・・普通、斎宮である場所に隔離されているんでしょ。」

ミヌの言葉を聞いて、頭を掻くヤマト姫・・・

「どうしたんです？」

「あやつは・・・特別じゃった・・・

あやつは・・・そう・・・クオンレオパルドは・・・
もともと神馬になる予定だった。」
ヤマト姫は、アクバのことを語った。
それは、ある日のことだった、
神馬候補として斎宮に来たクオン・・・
まだ、生後間もないクオンは、神馬となるため無理やり母馬から引き離された。
斎宮では、神馬を育て、そして、ミカドに治める役割もあった。
厩舎には、ほかの神馬候補がいた。
しかし、ある日のことだった。突然、まばゆい光と共に、クオンは消えた・・・
数日たったある日、まばゆい光と共に、突如戻ってきた。
そんなこともあって、仲間の神馬から警戒され・・相手にもされなくなった。
そして、徐々に、体型が変化していき、異様な雰囲気をかもし出してきた。
やがて飼育員も気味悪がり近づかなくなった。

独りぼっちになったクオン・・・

その様子に、斎宮では、アクバが出たと大騒ぎになった。

こうして、クオンは、隔離され、

さびしい日々を過ごした。

そして、処分の日、クオンは、隔離厩舎から消えていた。

斎宮では、方々探したが見つからなかった。

「じゃから・・・あいつは、人間を信頼しとらんのじゃ」

そのことを聞いて、黙り込むカーネルとミヌ

「しかし、何故、今頃現れたのだ？」

一方、ミナムは、メシを持って、アクバの前に立っていた。

「お前・・・アクバっていうんか？」

「ふん」

横を向いてミナムを見ないアクバ・・・

ふとミナムは、アクバの首元にプレートがあるのを見つけた。

そして、手にして見た。

そこには、クォン・レオパルドと書かれていた。

「お前・・クオン・レオパルドって言うんか」

「関係ねぇだろ・・」

「いい名じゃないか」

「ふん!!」

「ほれ・・」

そう言って、ミナムは、アクバにメシを与えた。

しばらく・・・顔を背けていたアクバ・・・

メシが目に入ったとたん

ぐ〜!!

腹の虫がなった。

そして、気がつくとメシにがっついていた。

その様子をじっと見るミナム・・・

「なんだよ！！」

そういいつつもメシを食べ続けるアクバ

そこへ

「俺の名は、ミナム、今日から俺の仲間だよろしく！！」

「勝手に仲間にするな！！」

「じゃぁ・・明日、来るわ　クオン」

そういい残しミナムは去っていった。

残ったクオン・・・

久しぶりに自分の名前を呼んでくれたことがうれしかった。

転機

翌日のことだった。

朝、クオンにメシを与えに行こうとしたミナムに

「ミナムさん！！大変！！」

そう叫んで武器庫に入ってきたのはミヌだった。

「どうしたミヌ・・」

「さっき、黒騎士団が・・クオンを処分するって・・」

「えっ？わかったすぐ行く。」

ミナムは、すぐに背広に着替え、クオンのいるところへ向かった。

その頃、黒騎士団に囲まれていたクオン・・・

その様子を見て、あいつの言うこともあてにならねぇ

所詮、人間ってやつは、自分の都合のいいことしかいわねぇんだ。

そう半ばあきらめていた。

「刀を・・・」

ソウシが右手を出し、刀を受け取る。

「悪いが・・・お前には死んでもらう・・」

そういって、上段に刀を構えるソウシ・・・

これまでか・・・そう思った時、

「待て！！」

ミナムの叫び声がした。

その声を聞いてぴくっと止まったソウシだったが

次の瞬間、刀を振り下ろした。

目をつぶるクオン

どす・・・

鈍い音がした。

「なっ！！」

その光景に驚くソウシ・・・

そこには・・・

クオンを切りつけた刀の先には、
ミナムの右手が・・・・
そして、
ぐにゃりと曲がった刀が・・・
一斉に、ミナムに対し構える黒騎士団
「ソウシ殿、こいつが俺の仲間になったら、殺さない約束でしょ。」
「そうだが・・」
「今朝聞いたら、違うと・・」
「じゃぁ・・明日聞いてくれよ。」
「今、違ったら無駄だぞ・・・それともミカドへの謀反か？」
「そんなつもりはない・・大体、馬一頭で謀反とは、」
「しかし、」
「もし、謀反だと、先にソウシ殿を攻撃するでしょ。」
「そうだが・・・」

「皆のものそこまでじゃ・・・」

そこへヤマト姫があらわれた。

そして、グニャリと曲がった刀を見て、

「ほう・・これは・・」

「斎宮様・・・このアクバを今処分しないと災いが・・」

「ソウシ殿、心配する出ないぞ。この状態からは逃げられん。」

「斎宮様・・・・」

「まぁ・・・待たぬか・・」

「明日も同じ状況でしたら本当にきります。」

ソウシはその鋭い眼でヤマト姫を見た。

「ええよ・・」

「斎宮様!!」

ミナムが叫んだ。

ヤマト姫はミナムを制し、

「お前ら、よいか・・時間がないのじゃ　わかったな」

「約束しましたよ。斎宮様」

黒騎士団は、ミナムたちを残しその場を撤収した。

陣屋に戻った黒騎士団達

「ソウシ殿、いかがなさいます。ミカドに報告の使者を送ったほうが」

「まぁ、待て」

ソウシは、椅子にどっかりと座り込み、大きく深呼吸をした。

斎宮様は一体何を考えているんだ

「斎宮様のお考えだ、何かあるのだろう」

「そうですか・・」

「もうよい・・下がれ」

「はっ！！」

ソウシはため息をつき、頬杖を突き、しばらく、考えていた。

すると、またあの悪夢がよみがえる。

いい加減に離れろ！！

イラつくソウシであった。

一方、今日では、マヤザキは、影からアクバについて報告を受けていた。

そして、ある人物にあっていた。

「アクバがでたそうだな。マヤザキ」

「は・・」

「これであやつがミナムと確定したな。」

「は・・」

「それで、ミザキ様はどうだ。」

「それが・・・」

「そうか・・まだか・・」

「は・・」

クオン・・・

ヤマト姫の前に呼び出されたソウシ・・・

驚きの言葉を聞かされた。

それは、

「アクバは、お前達が退治したことにしておく。」

しばらく、その真意がつかめないソウシ

「それは・・・」

なかなか声が出ない、ヤマト姫はソウシの方をしばらく見つめ

「先程、アクバの処分をした。」

わが耳を疑うソウシ

「それは、真か・・」

ひょっとして、斎宮様は隠しておるのでは、そう疑っていた。

しかし、目の前に出されたものを見て、絶句した

それは、アクバの首だった。

こうしてアクバは黒騎士団が倒したとミカドに報告された。

その報告の中は、黒騎士団が大活躍し、アクバを倒したことになっていた。

黒騎士団は、怪我人はいるものの全員何とか無事だった。

一人を除いて、そう・・・あの衝撃を受けた・・・ソウシを除いて、

しかし、クオンは生きていた。

それは、ソウシたちが撤収した後に、それは起きた。

「よかったな・・クオン、いい加減に仲間になれって」

そう言って、悪罵に食事を与えるミナム・・

やがて・・・ポトリ・・・ポトリ・・・

クオンの目から涙が・・・

「どうした・・クオン」

「う～！！！」

「本当に！！信じて」

そう言って涙の量が増すクオン

「信じていいんだな・・・」

「俺を信じてくれ。」

その言葉に涙が滝のようになだれ出てきた。

しばらく、泣き続けたクオン・・・

ヤマト姫がクオンに近づいて

「ミナムをお前の主人として忠誠を誓うのか。」

「はい。」

「ミナム、クオンと契約するのじゃ。」

「どうやって」

まったくやり方がわからないミナム、ただ呆然と見ているだけだった。

「ミナム・・クオンと結ぶ契約があるのじゃ」

そう言ってヤマト姫が入ってきた。そして、ミナムの前に腰かけ

ミナムに契約の仕方を教えた。

ヤマト姫は、ある首輪を持ってき、クオンの首にかけた。

そのことに抵抗するクオン・・・

ヤマト姫はクオンの耳元手ささやいた。

「悪いようにはしない。」

しかし、抵抗するクオン

「クオン、俺を信じろ。」

ミナムの言葉でようやく落ち着いた。

「ミナム、岩をどけろ」

ミナムは岩を持ち上げ、その隙間からクオンは、外に出た。

左足をひきずるクオン。

元の位置に岩を戻したミナム

「契約をしろ。」

ヤマト姫がせかした。

そして、ミナムはクオンに契約の呪文とサインをした。

すると、ミナムとクオンは金色に輝き、あの異様な格好をしていた

クオンが徐々に変化する。

その時だった、クオンの首がポトリと地面に落ちた。

落ちた首を見たカーネルとミヌは、驚き悲鳴を上げた。

「く・・首が落ちた～！！」

「やかましい！！」

一喝するヤマト姫。

やがて輝きがおさまり、ミナムとクオンを見る3人・・

ミナムの横には・・

あの醜い姿のクオンはなく

そこには、全身をやや赤みがかったつややかな黒い毛で覆われ

真紅のたてがみをなびかせ、頭には一本の角、鋭く青い目をして

凛と立つクオンの姿が

そして、ミナムとクオンの前には首が落ちていた。

「これは？」

「これが、クオンを支配していた魔じゃ。」

そう説明するヤマト姫

「しかし、この足では、しばらくは、無理じゃ」

こうして、クオンは斎宮で養生することになった。

旅立ち

「明日には、出発ですぞ。ミナム殿」

相変わらず、武器庫にいるミナム、彼が食事しているのも

お構いなしで、話しかけるソウシ

「わかったから。けど・・」

「けど？」

ミナムの言葉がひかっかるソウシ

「メシぐらい、ゆっくり食わしてくれ。」

そういいながら、メシをかきこむミナム。

その横で、せっせとミナムの世話をするカーネルとミヌ

二人を見てミナムは

「俺のことはいいから、二人とも食べないか。」

「わたしたちは？　ねぇ～！！」

顔を見合す二人は、いきなりミナムに抱きついた。

「こうして横にいたいの。」

「ちょっと・・恥ずかしいじゃないか。」

「なぜ？」

その光景にあきれるソウシだが、ミナムを直視できないでいた。

「コホン・・」

「あ・・あ～」

ささっとミナムから離れる二人。

ミナムをチラッと見るソウシ・・・

何故、こいつが？　そう考えるとあの忌々しい記憶が・・・

いかん！！

「では、これにて、明日迎えに来ますゆえ。」

「わかった。」

外に出たソウシ・・・

一度、ため息をつき、頭を横に振った。

何なんだ一体？

食事を終えた3人は、ヤマト姫のところにいた。
実は、この日、ヤマト姫から話があると呼び出しを受けていた。
「ミナムよ、前へ」
「はい」
「これを・・」
そこには、決闘で使っていた剣が・・・
「これは・・」
「お前の剣じゃ・・・」
「でも・・これは・・」
ミナムは、その剣がえくすかりばーだとわかり、戸惑った。
「この剣は、もうひとつの”えくすかりばー”じゃ」
「えっ？」
「”えくすかりばー”と同等の能力を持つ剣じゃ」
「しかし・・・このような剣・・」
「ここには”えくすかりばー”がある。だから、大丈夫じゃ」

「ありがとうございます。」
深々と頭を下げるミナム。
「あと・・これじゃ」
そこには、盾とブーメランがあった。
「何かの役に立つであろう。持って行け。」
「はい・・」
「それと・・」
「あの・・」
「みなむ・・しばらくクオンと会えないから、挨拶に行って来い。」
ヤマト姫は、そう言ってミナムを追い出した。

ヤマト姫の前に残ったカーネルとミヌ・・・
「おぬしら・・いつまで・・・遊んでおるのじゃ？」
二人の前に、アップで話しかけるヤマト姫
「斎宮様・・・」

近いってば・・・そう思う二人・・

「早く、契りを結ぶのじゃ」

その言葉を聞いて、真っ赤になる二人！！

「そ・・そん・・」

「いいか。とっととするのじゃぞ。」

何もそんなストレートに・・と思いつつも声が出ない二人

「それと、ちゃんとする時は魔法を忘れんように。　天国に行きたくなければ」

「は・・い・・・」

斎宮を出た二人。

さっきのヤマト姫の言葉にため息が出た。

とぼとぼ歩く二人、同時にため息が出る

「ミヌ・・・どう思う？」

「カーネルさんこそ・・」

また、ため息が出る二人・・・

初体験を・・・

そんな・・・

やがて顔をあげる二人・・

そこには、クオンいるミナムの姿が・・・

「クオン・・・戻ったら乗っけてくれよ・・その背中に・・」

「はい・・」

別れを惜しむにミナムの姿を二人は、見とれていた。

しかし、この日、二人は何もできなかった。

翌日、万歳、万歳と村人に見送らえる中。

はずかしいと思いつつ、ミナムたちとソウシ達黒騎士団は、京へ向かった。

旅の途中

セイの地、カモベ村から京までは、３日を要する。
特に、セイの地とガイの地との国境のカスズ山地の峠は、
難所で、時々、死者が出ることもあった。
「はぁ～」
ため息をつく、カーネルとミヌ・・・・
「どうした二人」
二人のほうを振り向きミナム、二人は慌てて
「な・・・なにも」
「そうか・・・」
そう言って前を歩くミナム・・・
その様子を見て、顔を見合わせため息をつく二人・・・
ヤマト姫の言葉を思い出していた。
「お前ら・・・契約したんだろう」
「はい・・・」

そう答えるカーネルとミヌに

「お主らわかってるんだろうな？」

その言葉にしばらく不思議そうな顔をしお互い顔を見合わせる二人

「なにを？」

「二人は、契約したんだろう・・・」

「それが？」

「契約して、一ヶ月以内に契りを結ばないとお前らの命が・・・」

「えっ？」

その言葉に驚く二人

「命がなくなるのじゃ。」

「いのち・・・ですか？」

「そうじゃ・・」

「誰の？」

「お前ら3人のじゃ・・・戦士と魔導士が異性で契約をする時は、1ヶ月以内に・・

・・・契りを結ばないと・・・両方が死ぬのじゃ」

二人は、顔を見合わせ再びため息をつく二人・・・

こんなかたちで、初体験を・・・

とにかく二人は、京につくまでに契りをむすばなければならない

ただ、二人はため息をつくだけたっだ。

そして、ミナム達が峠を越えようとした時だった。

「貴様がミナムか！！」

「はぁ？」

その声に間抜けな返事をするミナム

「ミナム殿！！こちらへ」

ソウシの言葉で、すばやく、ミナムを警護布陣を取る黒騎士団

「ふっふっふ・・・」

不適な笑い声がする

急襲

ミナムたちは黒騎士団に守られボー然としていた。

そこへ黒ずくめの男達が出てきた。

「誰だ！！貴様ら！！」

そう叫ぶソウシ

「ふっふっふ・・・ミナムとアクバの首をもらいに来た・・やれ！！」

黒ずくめの男達をバッサ　バッサと切り倒していく

その様子に驚く黒ずくめの男達

「何だ！！貴様ら！！」

「黒騎士団　３番隊」

「く・・・黒騎士団？」

「まずい・・・逃げろ！！」

そそくさと逃げる男達！！

その光景を見て呆然と見ていたミナムたち

「ソウシ達って・・・強いんだ」

感心するミナムがそこにいた。

1日目の宿営地に着いた一行・・・

部屋に入ったカーネルとミヌ・・

ミナムは一人別の部屋だった。

無言の二人・・・

やがて、ミヌが重い口を開いた。

「じゃぁ・・・カーネルさん。行って下さい。」

「ミヌ・・・」

「あなた・・・」

「私大丈夫だから・・・・」

「ミヌ・・・」

じーっと涙をこらえるミヌ・・さっと立ち上がり、

「ちょっと出てくるね。」

部屋に残されたカーネル
意を決して。
ミナムの部屋や向かった。
その頃、ミヌは、ソウシに呼び止められていた。
「ミヌ殿。」
「何でしょうか？」
「ちょっと、いいですか？」
「ええ？」
お茶を囲むソウシとミヌ・・・
「あのう・・」
「ミヌ殿、こんな時間に・・・」
「ちょっと、気分転換に・・・」
「そうですか・・・ところで」
「ところで？」
「どうしてミナム殿と・・・」

その言葉にしばらく、黙り込むミヌ、その様子を見ているソウシ

やがてミヌは口を開いた。

「それは・・」

「それは・・」

「ミナムの予言を聞いたときから・・・」

「予言？」

「そう・・斎宮様から・・聞いたときから」

「何故？」

「なんとなく。」

「なんとなく？」

「そう感じたから。そして」

「そして？

「本当のミナムを見て。」

「見て？」

「確信したの、この人だと・・」

この言葉を出した後、うつむき、しばらく黙り込むミヌ・・・

「ミヌ殿・・・」

ソウシが声をかけると

ポタ・・・ポタ・・・

ミヌの目から涙が落ちていた。

その様子を見ていたソウシ

どうしよう・・・

「ミ・・ミヌ殿？」

一方、ミヌは、今頃、ミナムとカーネルが・・そう思うと

いやだ・・・

ただ、それだけだった。

その頃、ミナムの部屋では・・・

「ミナム・・・入っていい」

夜の・・・

「どうしたんだ・・こんな時間に・・」

扉をあけるとそこにカーネルが立っていた。

「ミナム・・・」

震える声でもう一度ミナムの声をかけ、見つめるカーネル

カーネルの様子がいつもと違うのに気付いたミナム

「だから・・・どうしたんだ?」

カーネルはただ黙って入ってきた。

扉を閉めたミナムは、カーネルの肩をつかみ

「どうしたんだ?」

カーネルはただじっと見つめミナムに近づいた。

後ずさりするミナム、気付くと後ろにはベットが・・・

「あ!」

思わずベットにへたり込むミナム

それを見てカーネルはすーっとミナムのそばに座った。

その行動に驚いたミナム、ひょいっとカーネルとの距離をおいた

すかさず身を寄せるカーネル・・・

ミナムに逃げ場はなくなった。

「どうした？」

「ミナム・・・」

ただ、じっと見つめてくるカーネル・・・

そして

両手でミナムの頬を包んだ。

「一体・・・さっきから・・・」

その言葉を塞ぐ様にカーネルは、ミナムにキスをしてきた。

ロウソクの炎が重なる二人の影を揺らしていた。

重なった唇が、ただ・・・ミナムを驚かした。

唇が離れた瞬間、カーネルはミナムに抱きつき

「抱いて」

そう耳元でささやいた。

その言葉を聞いて、戸惑うミナム・・・

いつもだと、こういう時・・・たいていミヌがあらわれる・・・

そう思うと・・・

抱きついているカーネルの手を解き、カーネルを見た。

「今は、京へ向かう途中だ・・・」

「大丈夫・・・」

今度は、カーネルがミナムの両肩を持ち

「誰もこないから・・・」

一方、ソウシの前で泣いていたミヌ・・・

やっとおちついて、

「ソウシ様・・・ごめんなさい・・・」

「大丈夫か？」

「はい・・」

「そうは、見えないが・・・」

「まぁ・・・」

今、ミナムとカーネルが契りを結んでいるなんて到底言えない。

そう思っていると

「さっきの話だけど・・・ミナム殿を見て何を確信したんだ。」

ソウシの質問にしばらく考えるミヌ

「あ・・・あ～・・・それ・・私が結婚したかった人」

「結婚？」

「うん、結婚」

「それは？」

「わたし・・・孤児なの・・・」

「けど・・斎宮にいるってことは斎宮様の何か縁があるもの・・」

「ううん・・ぜんぜん、違うの」

ミヌの言葉に驚くソウシ、ミヌは、斎宮様の秘蔵っ子として、

世間では言われ、しかも、魔導士試験に首席で合格・・・

斎宮様のあとを継ぐのではとさえ言われていた。

「それじゃ・・」

「わたし・・斎宮様に助けられたの・・・」

ミヌも突如あらわれたとは、いえなかった。

「その時、結婚したい人の記憶だけがあって。」

「そうでしたか・・」

しかし、ソウシは、ひょっとして・・・彼女が・・・そう疑った 。

その頃、カーネルはミナムの胸の中にいた。

翌朝

ミナムが目を覚ますと横には、カーネルが寝ていた。

じっとカーネルを見つめるミナム・・・

ふと、カーネルの髪をふれ、おでこにそっとキスをした。

「んんん・・」

カーネルがふと目を開ける

目の前にミナムが・・・

昨日のことを思い出し真っ赤になるカーネル

しかし、次の瞬間、悲しみが襲ってきた。

そう・・今日は、ミヌが・・・・

ふと・・涙が落ちてきた・・・・

それを見て慌てるミナムに

「どうした・・・カーネル・・・・」

そのまま、カーネルはミナムに抱きついていた。

しばらくして、落ち着いたカーネル

「カーネル・・・大丈夫？」

「うん・・・」

うつむくカーネル・・・

そして、そそくさと服を着始めた

「カーネル・・どうした？」

カーネルは服を着終わると無言のまま部屋を出て行った。

呆然としているミナム・・・

どうしたんだろう？ひょっとして・・はずかしいのかな？

そう思いミナムは服を着ていた。

部屋を出たカーネル少し歩いたところで待っていたのはミヌだった。

ミヌについて歩くカーネル

しばらく歩いて立ち止まり振り返ったミヌ、それに合わせ立ち止まるカーネル

カーネルを見た時、その雰囲気にミヌは驚いた。

無言で向かい合う二人・・・

「今日はあなたの番よ・・・」

最初に口を開いたのはカーネルだった。

「は・・い・・・」

朝食をとりに来たミナム、そこには、カーネルとミヌがいた。

「おはよ・・」

カーネルは一瞬視線をミナムのほうへ向けたが、すぐにその視線を落とした。

あれ？拍子抜けするミナム・・・

カーネルの横に座ろうとしたが、横には、ミヌが座っていた。

しかたなく、二人の前に座るミナム

「おはようございます。ミナムさん」

ミヌの元気な声が返ってきた。

それに対し、カーネルは、ボソッと返事してきた。

まだ・・・照れてるのかな？

そう思いつつ朝食を食べ始めるミナム

「ごちそうさま」

まだ食べているミナムをおいてさっさと席を立つ二人

一人取り残されたミナム、どうしたんだ二人とも・・・

部屋に戻ったミナム、いつもと違う雰囲気にひょっとして昨日のことミヌに

ばれたのでは？

そう考えると少し気まずい・・・・

ミナムは、そんなことを考えながら出発の支度をしていた。

「ミナム殿、時間です。」

ミナムを呼びにきたのはソウシだった。

「はい。」

外でカーネルとミヌを待つ一行、二人が出てくると

カーネルの雰囲気にソウシは驚いた。

昨日とはまったく違う、ミナムと契りを結ぶと

こんなに魔力が上がるのか？

しかし、ソウシはそれを隠し、

「そろそろ、行きましょう」

こうして、ミナムたち一行は、今日を目指し次の宿場　南光を目指し旅立った。

急襲2

一行は、次の宿場を目指し移動していた。

カーネルはいつもと違った。

ミナムが話しかけても、話をしないカーネル

そんな中、ミヌはミナムの腕をつかみ、いつものように話しかける

いつもなら少しやきもちを焼くカーネルだったが、

この日は気にも留めないというより何か考えているようだった。

昨日までの幸せのような時間、一転して今日は地獄・・・

今晩、あの人は、別の女を抱く・・・

しかし・・・

そうしないと、あの人は死んでしまう。

結局そのことを昨日言うことはできなかった。

カーネルの頭の中は、ミナムがミヌを抱くことへの嫌悪と

ミナムが死なないでほしいという葛藤が渦巻いていた。

一方、ミヌは、心ここにあらずだった。

今晩・・・ミナムと・・・どうしよう・・・

そんな時だったあたりから不適な笑い声がしてきた。

「ふっふっふ・・・」

「ミナム殿！！こちらへ」

ソウシの言葉で、すばやく、ミナムを警護布陣を取る黒騎士団

「ふっふっふ・・・今日こそ、ミナムとアクバの首をもらいに来た・・やれ！！」

そこへ黒ずくめの男達が出てきた。

その数、ざっと５００人？そのうち上空に約１００人

「何とことだ。」

あせるソウシ、いくら黒騎士団でも１０倍の数ではどうにもならない

「ミナムとアクバの首を置いていけ！！」

そう迫る黒ずくめの男たちが攻撃を始めてきた。

黒騎士団は必死にミナムを守ろうとするが、相手が多すぎた・・・

黒ずくめの男達は、黒騎士団をすり抜け、ミナムに迫ってきた。

「ミナム覚悟！！」

そう言って、衝波をミナムに打つ込む、男達

慌てて盾で防御するミナム

ズババババ！！ドカ！ドカ！ドカ！

衝波が盾に直撃し爆煙があがった。

「やったか？」

防ぎきれなかったカーネルとミヌがミナムの方を振り返った叫んだ。

「「ミナム！！」」

立ち込めていた爆煙が薄れ、覗き込む男達は驚いた。

そこには無傷のミナムの姿が。

「衝波が効かないぞ！！」

「なんて防御力！！！」

「バ・・化け物！！！！」

気がつくとミナムは目の前にいた。

「えっ？」

どか！！

「ぐぁ～！！」

吹き飛ばされ近くにあるものにたたきつけられる男達

キーン！！！　どん！

「なんて奴！！」

その光景を見ていた頭領は、ミナムを見て驚愕していた。

「ミナムは、化け物か！！」

一方、制空権を敵に取られていた黒騎士団、

飛び出したくても倍の兵力にそんな無理はできない。

衝波を上空に撃ち、敵を打ち落とそうとするがなかなかあたらない。

上空へ衝波を撃ちつづける黒騎士団

カーネル・ミヌは、ミナムの防御をしていた。

「もう！！きりがないわ！！」

カーネルは、対魔シールド

ミヌは、衝波を打ち続けていた。

「こいつら～！！ちょこまかと！！」

上空の一団３０名ほどが集まり

「ミナムをやるぞ！！」

「おう！！」

編隊を組んで、ミナムたちに襲い掛かった。

「カーネルさん！！」

防ぎきれないミヌが叫ぶ

「え！！」

上空を見上げるカーネル

次の瞬間、ミナムたち3人を上空から一斉射撃が襲い掛かった。

慌てて、対魔シールドを張るカーネルとミヌ

ズババババッバ

シール上で爆煙をあがった。

一部は、シールドを抜け、カーネルやミヌの近くで被弾した、

ドカーン！！

ドカーン！！

「きゃー！！」

「カーネル！！ミヌ！！」

ミナムが叫ぶ、

「だいじょうぶです！！」

ミヌが反応する。

「大丈夫よ！！この～！！」

そして、カーネルは、そう叫んで振り返り上空へ向け構え衝波を撃った。

ピカッ！！　パシューーーン！

次の瞬間、戦場にいた全ての者が目を疑った。

急襲3

ミナムたちの周囲は爆煙でほとんど周囲が見えない状態だった。

いまだに、ミナムたちを襲っていた一団はまだ上空から攻撃を続けていた。

その時だった。

爆煙の中から閃光が近づき彼らを襲った。

「なんだ！！！」

「うわぁー！！」

カーネルが撃った衝波は轟音を轟かせ光狂いミナムを襲っていた30人を一瞬で消し去った。

そう普通の衝波は、機銃くらいの威力しかないのに対し、

カーネルが撃った衝波のすさまじい威力は、なんとも言いようがなかった。

一瞬で戦場の空気は変わった。

ほかの誰よりも驚いたのは、カーネルだった。

「いいぞ！！カーネル」

ミナムの一言に、カーネルも続けざまに衝波を撃った。

「何だ？あの魔導士・・・ミナムと言い、あいつらは化け物か？」

それまで優勢だった黒ずくめの男達は、たじろいだ。

そこへカーネルの第2波・第3波が襲ってきた。

慌てて回避する彼ら、一方、地上では、ミナムを中心に反撃・・・

統率が取れなくなった男達は、ばらばらに逃げ始めた。

「くそ！！こんなはずでは！！」

その男達の頭領が振り返るとそこにはソウシが

「貴様！！」

「残念だったな！！」

そう言って頭領に切りかかり、首をはねた。

ようやく宿に着いた一行・・・

部屋に着きひと段落下、カーネルとミヌ

昨日とは逆だった。

「ミヌ・・・」

「カーネルさん」

「じゃぁ・・・・」

「はい・・・」

そう言ってカーネルは、部屋を出た。

廊下を歩きため息をつくカーネル・・・

「カーネル殿」

「ソウシ様」

「立ち話でもなんですから・・・」

声をかけてきたのは、ソウシだった。

一方、ミヌは、ミナムの部屋に行った。しかし、ミナムはいなかった。

その頃、ミナムは一人風呂に入っていたからだった。

ミヌは、ミナムの部屋でジーッと待つことにした。

カーネルを座らせ、目の前でお茶を入れるソウシ・・

コップに注がれるお茶をただじっと見つめるカーネル

「こうして、話をするのは初めてですね・・」

「はい・・」

「まぁ・・・お茶でも飲んで、気を落ち着かせてください。」

「はぁ・・」

カーネルは、ソウシの言われるがままお茶をすすったほんのり柑橘系の

香りがするやさしい味のお茶だった。その様子を見てソウシはおもむろに

話し始めた。

「昨日は、ミヌ殿、今日は、カーネル殿、一体どうしたのですか？」

「あ・・いや・・」

ソウシを直視できないカーネル、ソウシにはなんとなくわかっていた。

昨日、二人は契りを結んだんだと、それにしても、おかしい。

普通、そんな中なら目の前にいるカーネルの悲しそうな姿は一体何なんだ。

「昨日は、ミヌ殿も・・」

その言葉に、カーネルは、ミヌも同じ苦しみを・・・そう思うが

やはり・・いやだ・・・と心は叫ぶ

「ところで、カーネル殿は何故、ミナム殿と？」

しばらく・・・黙り込んでいたカーネル

「あ・・・ごめんなさい・・・えっ・・・と」

「ミナム殿とは？」

「あ・・ああ・・・ミナムと・・・彼は、突然目の前に現れたの」

「あらわれた？」

「そう・・・私が斎宮へ向かう途中で・・・」

「ただ？それだけ？」

「まばゆい光と共に目の前にあらわれたの。」

「それで？」

「わたし・・・その出会いに・・この人だと・・・」

そう言うと、カーネルの目から涙が・・・

また・・・わたしにどうしろというのだ、

そう悩むソウシだった。

その頃、部屋に戻ったミナムの前には、裸のミヌが座って待っていた。

困惑のミナム

裸のミヌを見たミナム・・・

「ミヌ・・どうして？」

そう困惑しているとミヌは、三つ指を突き

「今夜は、私とすごしてください。」

「ちょっと、待て！！ミヌ！！」

ミナムがそういうと、ミヌは真剣な顔をして、

「カーネルさんは抱けても私は無理なんですか？」

ただ、ただ、驚くミナム・・・何故？

「わたし、昨日のこと、知っていたんです。けど、けど・・」

そう言ってミナムに抱きつき泣き始めた。

しばらく、ミナムの胸の中で泣いていたミヌが落ち着いた頃

「どうして？」

「あなたがカーネルさんを抱いているのをじっと耐えていたの」

そう言って、ミナムの胸の中から顔を出し、涙目で訴えた。

「ミヌ・・・」

「わたしも。好きなんです・・・だから」

「けど・・」

否定しようとするミナムの口をミヌの唇が塞いだ。

キスされたミナム・・・ボーとしていた。

しばらくして、

「今日だけは、カーネルさんのことは忘れて、私だけを見て」

どうしていいかわらないミナム

「けど・・」

「カーネルさんのことなら心配ないから」

「えっ？」

どういう意味、ひょっとして、

「どういう意味だ」

「二人で決めたんです。昨日はカーネルさん、今日はわたし・・と」

「ちょっとまて・・・じゃ・・昨日」

「そう・・」

ミナムは焦った・・・

「けど・・ミヌ・・こんな形でいいのか？」

びくっとするミヌ・・・しばらく無言になった

しかし

「でも・・・もう・・・時間がないの」

「どういう意味だ。」

「今日、私と契りを結ばないと二人とも死ぬんです。」

「え？」

「じゃぁ・・・昨日は、」

「そう・・・明日までに二人がミナムさんと契りを結ばないとみんな死んでしまうの」

しばらく考えるミナム・・・

カーネルもミヌも俺のために命がけで・・・

そう思うと目の前のミヌもいとおしく思えてきた。

腕の中で必死に訴えるミヌの姿を見ていたミナム

「だから、わたし・・・」

ミヌの言葉をさえぎるようにミナムがキスをした。

その感触に両目を見開き驚くミヌ・・・心臓は爆発神前だった。

ミナムはミヌを抱きかかえ、おでこをくっつけてしばらく見つめあった。

「今日は、俺だけのミヌだから・・・」

そのまま二人は夜をすごした。

混乱の序章

目を覚ますミヌ・・・

横にはミナムの寝顔が・・・

このまま、一生、横にいたいそう思いにこやかにミナムを見つめていた。

彼の顔を見ていると昨日のことを思い出し、顔を真っ赤にした。

しばらくして、カーネルの顔が浮かんだ。

「う～ん・・・」

ミナムが目を覚ました。

「おはよう・・」

びくっとしたミヌ、ミナムをしばらく見て・・・

「おはよう・・」

ミナムが起き上がりミヌを抱きしめた・・

ミヌは、ドンとミナムを突き飛ばし、慌てて服を着た

そして、

着終わるとミナムが声をかける暇もなく

ミナムの部屋から出て行った。

突き飛ばされたミナム・・・呆然としていた。

どうしたんだ？ミヌの奴？

部屋を出たミヌ、しばらく歩くとそこにはカーネルがいた。

「終ったの」

「ええ・・・」

「そう・・」

これ以上ミナムは渡さないそう誓うカーネルだった。

そんなカーネルを見ていたミヌ。

ミナムさんは渡せない・・・そう誓っていた。

「お二人さん・・・どうしたんです。」

そう声をかけてきたのはソウシだった。

そして、ミヌを見て、その魔力が高まっていることに気付いた。

そうか・・・昨日、ミナムと契りを結んだんか

二人を見ていると、女として、うらやましい反面、
二人の女を相手にしてミナムはひどい奴・・・そう思った。
そうこうしているうちに京へ向い出発した。

一方、京では、ミナムが来るということで、ミカドがぴりぴりしていた時
とんでもない報告がマヤザキに入った。
「何！！2番隊が行方不明だと？」
ギオンに出兵していた軍のうち黒騎士団2番隊が忽然と姿を消したというのだ。
これには、ミカドも慌てふためいた。
「早く！！マヤザキを呼べ！！」
予想外のことにマヤザキも慌てていた
2番隊５０名が消えるなど、考えもしない事態だったからだった。
ミカドの前に呼び出されたマヤザキ

そこでは緊急の御前会議が行われていた。

「マヤザキ！！どうなっておるのじゃ！！」

「はっ・・・今、確認中です・・」

「ところで、ギオンとの戦局はどうなっておるのじゃ」

陸軍大臣が前に出て、説明を始めた。

「わが軍は、現在のところ、アスケ原の前にて、ギオンと硬直状態です。」

「何故じゃ・・すぐ攻めぬのじゃ」

「それが・・・鉄砲なるものを装備しており」

「鉄砲？・・それは一体いかなるものか？」

「筒状のものに、鉄の玉をこめて、パンと撃ってくるそうです。」

「パン？とな？」

「はい・・すると、その鉄の玉がこちらに向かって飛んでくるとのことです。」

「鉄の玉が？飛んでくる？」

会議場はどよめいた・・・

「それは、衝波見たいなものなのでは？」
そう話したのはマヤザキだった。
「しかし、それが・・・」
「どうした・・・」
「対魔シールドが効かない・・・」
大臣の言葉にさらにどよめく、
「どういう意味じゃ・・・」
「鉄砲の弾は、対魔シールドの鎧を貫通した。」
一同に衝撃が走る。これまで、衝波は対魔シールドを張った鎧で何とかなった。しかし、それが効かないとなると・・・
「どうしたらいいんだ。」
「しかも・・・」
「しかも？」
「鉄砲を持っているのは、魔導師でもなんでもない。」
「それは・・・」

「そう・・・魔導師じゃなく、普通の兵が持っている。」
「このままでは・・・」
「ところで、メリーと青蛇はどうなっておるのじゃ」
「あちらもこう着状態です・・・」
「何故じゃ・・・」
「兵力不足です」
「それがしに妙案が・・」
「マヤザキ殿・・何か？」
「今話題のミナムをメリーと対峙させようかと」
「大丈夫か？叛旗を翻すのでは？」
「3番隊をつけようかと・・・」
「それはならぬ・・」
マヤザキの言葉を制したのはミカドだった。
「2番隊がいない今、京に3番隊は必要だ」
「では・・・ソウシをつけます」

「マヤザキ・・そうか・・とりあえず、ミナムはお前に預ける」

「ハッ」

「陸軍大臣！！鉄砲対策を早く何とかしろ！」

「はっ！！」

こうして御前会議が終った。

前線にて

溯ること、数日、坂上田次郎率いる軍勢はアスケ原まで到達していた。

「ここか・・アキ大将と第一師団が全滅したのは、」

「は・・・将軍・・・ここは、すぐに退却できる体制を」

そう答えたのは、坂上の部下、ガンツであった。

「何！私に退却と」

「は・・・」

「ガンツ・・・どういう意味だ。」

「それは・・・アキ大将は、1万の兵力で3倍の軍に敗れております。」

「しかし」

ガンツは言葉を詰まらせた。

「しかし？よい続けよ」

「アキ大将もそんな方ではないはずです。」

「それは？」

「3方向から1万ずつの兵力であれば、退却の余地があったはず。」
「それもそうだが鉄砲とやらがすごいのでは？」
「鉄砲の威力も気になりますが、それ以外にも・・・・」
その時だった・・・前衛にいた黒騎士団が消息を絶ったのは
二人が話している最中に、その一方が入ってきた。
「前衛の１００名と黒騎士団が・・・行方不明です。」
「何！！」
すぐに坂上田次郎は決断した。
「特殊部隊１０名を先方へ送り出せ？」」
「１０名ですか？」
「なぜ？」
「１０名でも多いくらいだ！！　彼らにも前衛の様子を確認したら
すぐに退却するように指示せよ」
「は！！」
「直ちに退却だ！！ユウ城までもどるぞ」

「は！！」

ユウ城は、街道の要所であった。

ここが落ちていないのは、坂上大将にとっては、幸いだった。

「兵による監視を強化せよ！！」

前線では・・・特殊部隊１０名が、陽動兵（人形であるが）４０と共に進軍していた。

「何打あれは？」

目の前には、兵の死体・・・それも・・・つぶれいていた。

「どういうこどだ？」

「隊長。これは前衛の１００名です。」

そこに、少し息のある兵がいた。

「どうした？」

「ば！！化け物だ！！」

「ばけもの？」

「魔法も何も効かない・・・奴は化け物だ・・・」

そう言い残し、その兵士は最期を遂げた。

「ばけもの？」

「魔法も効かない？」

「どういう意味だ」

その時だった。

ずーん

大きな音がした。

音がした方を見ると陽動兵が吹き飛ばされていた。

「何だあれは？」

そこには、人の姿が・・・・

「一人のようです・・・・」

「あれが化け物か？」

様子を見る特殊部隊・・・・

次の瞬間だった。奴が消えた。

「どこへ行った？」

「ぐぁ！！」

目の前の部下が一瞬で吹き飛ばされた。

「まずい！！退却だ！！！」

そう叫んだ隊長の目の前には、奴がいた。

「あ！！」

「フーーー！！」

「隊長！！」

部下の一人が衝波を撃て、奴に数発直撃した。

奴は部下のほうを振り向いた。

まったく効いていないようだった。

「ば！！化け物！！」

奴は部下の方へ向かった。その時だった。

数人の部下が奴を抑えた。

「隊長！！逃げてください！！！」

吹き飛ばされ、叩きつけられる中、部下は必死に隊長を護った

「すまぬ・・」

そういい残し、隊長はその場から去った。

その報告を聞いて、驚く坂上大将・・・

「何！！魔法も何も効かないと・・・どんな奴だ！！」

「姿は人・・・しかし、化け物です・」

「そやつがここへ来たら？」

「ひとたまりもありません・」

言葉を失う坂上大将・・・

戦況

ギオント、ギオンとして独立するまで旧ガガの国の国府ポメラ、近くに白鉄山を拝し

グレース有数の工業都市である。

ギオン国内では、前の戦いでグレース軍を全滅させたことに酔いしれていた。

そして、今度の第二次討伐隊が尻尾を巻いて逃げたことがワカタケルの重鎮達まで

浮かれる事態になっていた。

ギオン総帥ワカタケルはその様子を見て、ため息をついた。

ワカタケル

彼の出生はまったく不明であった。

それは、８年前のことだった。ワカタケル義賊団がガガの国矢作村役所を襲撃した矢作事件が

ワカタケル義賊団活躍の第一歩だった。

数十人だった義賊団は、いつの間にか数千人膨れ上がり、あのポメラ攻略では１万人に

そして、ギオンとして独立した。

ワカタケルは昔のことを思い出していた。

そうこの世界に飛ばされたときのことだった。

この世界に来た時、そのＰＣはすでになかった。

すぐに衛兵がやって来てワカタケルを投獄した。

行き着いた先は、白鉄山（しろかねやま）での過酷な労働であった。

そこには、この世界の荒くれ者達が生死をさまよいながら生きていた。

そして、ワカタケルは白金山を数人の仲間と共に脱走した。

その時の名は、ミヤマだった。

やがてミヤマの勇猛果敢な戦いとその若さから”ワカタケル”そう呼ばれるようになった。

「総帥」

その言葉で、目を覚ますワカタケル。

「ユウ城攻略の絶好の機会ですぞ！！」

「いかん・・・ユウ城へは、兵を進めるな！！」

どよめく議場

「何故です！！ユウ城攻略の絶好の機会ですぞ」

反対する部下達

「彼らもバカではない。すぐに対策を打つはずだ。」

「しかし・・今が絶好の機会です」

「その気の緩みがまずい。」

「そ・・・それは・・」

「両刀使いのミドリがたった一人に敗れたと聞く。」

「ミナムの話ですか？」

「そうだ。」

「あれは、グレースの芝居です。」

「そんなはずはない。」

その時だった。

「総帥」

五大将軍の一人、カクサンがやってきた。

「どうしたカク」

「こやつが鉄砲を盗みに・・・」

「そうか、処分せよ」

「それと」

「それと？」

カクサンはワカタケルに耳打ちした。

「そうか・・・来たか・・すぐに参る、皆のものユウ城へ兵は進めるな」

「しかし・・」

「いいな！！」

「は・・」

ワカタケルは、カクと共にある場所に向かった。

そこには、トリニィ率いる黒騎士団2番隊がいた。

「このことか」

そこへ、トリニィがおもむろに近づきワカタケルに書簡を渡した。

それを開いて見るワカタケル・・・

一方、ユウ城において坂上大将とその部下達は会議をしていた。

ユウ城、ポメラと京を結ぶ街道に関所を出城として築造、城本体は、険しいユウ山脈の頂にあり、難航不落の要塞であった。

「とりあえず護りを固めよ」

「しかし・・・京は、ポメラを攻略せよと」

「う～む・・」

考え込む坂上大将・・・

そこへ一人の若い士官が声を上げた。

「大将殿!!」

「誰だ!!お前は!!」

「すみません。第7師団、ドレイクです。」

「それで?」

「一個師団でアスケ原まで進軍、そして、敵が打って出たところで退却」

「貴様！！」

「何がしたい！！」

大将の部下たちが怒鳴りつける。

「待て！」

坂上が制した。

「続けよ！！」

「大将！！」

坂上はぎろりとあたりを見渡した。

威圧され黙り込む部下達・・・

「いいから続けよ！！」

「それを繰り返すのです」

「甘いな！！」

「えっ？」

「敵が待ち伏せておったらどうする。」

「それは・・」

若き士官は言葉を詰まらせた。

「貴様、兵を何だと思っている！！」

「大将、しかし、敵が待ち伏せするような状況だったら、なお更好都合です。」

「好都合とな？」

「敵はそれだけの準備をしないといけません。」

「ほう・・・消耗戦か・・・・」

「しかし、まだ甘いな・・」

「では。いかがせよと・・・・」

「消耗戦に必要な準備を全てせんとな・・」

「はい・・」

こうしてしばらく、ギオンとグレースの戦いは硬直状態を迎える。

その頃、ミナムたち一行は、京に向かって歩いていた。

「腹が減ったんだけど・・」

「ミナム殿もう少しです。」

そう言ってミナムをなだめたのはソウシだった。

「そう少しとは？」

「もう少しで京です」

京

京の宿舎に着いた一行は、早速、寄宿舎に入った。

ソウシは宿舎の食事の時間や取り決めについて一通り説明したあと、

ミナムたち3人を宿舎のそれぞれの部屋に案内した。

「ソウシ殿」

「何か？」

「これから、どうなるのだ？」

「まず・・明日、午前中にマヤザキ様に会って頂き、午後からミカドへの謁見があります。」

「じゃぁ・・」

「それまで自由行動で・・と言っても休む程度でしょう。」

「まぁ・・そんなところだ。」

「それでは、私は、報告がありますので。」

そういい残し、ソウシは宿舎を去った。

ミナムが部屋でくつろいでいるとカーネルとミヌが入ってきた。

「どうした・・・二人して・・・」

「あの～ちょっと出かけてきます。」

話し始めたのはミヌだった。

「斎宮様の使いで本宮様に書類を渡しに」

「そうか・・」

「私は、親友が近くにいるので、挨拶に・・・」

「そうか・・・」

その頃、ソウシはマヤザキの前に立って報告をしていた。

カモベ村での一件から京に着くまでの一部始終を・・・

その報告にほとんど驚きすら見せないマヤザキ

まるで全てを知っているかのようだった。

一通り報告を終えたソウシ、マヤザキの一言に驚いた。

「そうか・・・ご苦労であった。ところでソウシ・・」

「はい・・」

「お前、どうしたんだ。そんな目をして・・・」
実はソウシには、想う人がいた。
しかし、現実的には無理があった。
黒騎士団3番隊隊長ソウシ、
鷹のように鋭い眼と一部の隙もないその姿に
京の女たちの中には、彼女が女であること忘れる程だった。
また、女性の魔導士でも憧れの存在だった。
だがその想いは、知られるわけには行かない・・・
だから、いつも隙を作るまいと常に自分を戒めていた。
まずい・・・
次の瞬間、いつものソウシの戻った。
「いえ・・別に・・少し疲れただけです。」
「そうか・・なら・・いい」
そう言って、マヤザキは席を立ちソウシに近づき方をポンと叩いた。
「ソウシよ。お前はミナムを見張れ」

「えっ？」

「ミカドの御意向だ。」

「はっ！！」

またミナムをか・・・そう思うソウシに

「それとお前に謝ることがある。」

「謝るとは？」

「3番隊は京に残す。」

「は？」

「すまぬ・・」

「マヤザキ様！！おっしゃっている意味がわからないのですが。」

「実は・・・ミナムをルーシー討伐に行かせる。」

「えっ？」

「それにお前は同行するのだ。」

「それはかまいませぬが、何故、3番隊を・・・・」

ソウシの質問にしばらく沈黙するマヤザキ、くるりとソウシに背を向け

「2番隊がいなくなった。」

「えっ？」

「ギオン討伐に向かった2番隊が消息を絶った。」

「それで・・・」

「そうだ・・・京の兵力が不足する」

「そうですか・・」

「すまぬ　ソウシ　・・・」

ソウシはしばらく考え、顔をあげた。

「わかりました。ミナムに同行します。これにて・・」

ソウシがマヤザキの部屋を出てしばらくしてマヤザキの部屋にある人物が入って行った。

そして、マヤザキには同じ報告をしていた。

「そうか・・・引き続き・・たのんだぞ・・」

「はい・・・」

一方、ミヌは、本宮にいた。

本宮・・・そこは斎宮が対魔を行うために聖地、セイの地にあるのに対し、
京における対魔の役割を果たす前線基地みたいなものある。
ここには、ヤマト姫の双子の妹ナラ姫がいた。
「本宮様」
「ミヌか・・・」
ナラ姫はミヌを見てその魔力に驚いた。
「お前・・・一体・・・」
「どうなさったのですか。本宮様。」
「どうしたんじゃ・・・その魔力は・・」
自分の魔力に全然気付いていないミヌ
「えっ？魔力がどうしたんですか？」
「お主・・・契りを結んだんか」
その言葉に顔を真っ赤にして、しばらく黙り込むミヌ・・・
「そうか・・よかったの・・・それで姉からの書面は？」
その書面を見てしばらく黙り込むナラ姫・・・

「本宮様？」

「あ・・・いや・・・ありがとう。ミヌ・・・」

一方、カーネルは、親友のホーミズに会っていた。

お茶をしながら・・・ミナムの愚痴を言っていた。

その頃、宿舎に戻ったソウシ・・・

目の前には、ミナムの姿があった。

その姿を見てため息をつくソウシ

「おいおい・・・俺を見てため息つくなよ」

「あ・・いや・・」

ふと見るとカーネルとミヌの姿が見当たらない・・

「カーネル殿とミヌ殿は？」

「あっ・・・二人・・・なんか用があるってでかけたよ。」

「そうですか。」

謁見

この日は、ミナム、カーネル、ミヌの3人は緊張していた。
なんといっても、この国の皇帝であるミカド様に会うのだから、
そう思うと・・・あれ・・・3人ともよく寝ていた。
実は、旅の疲れがどっと出たのだった。
3人ともが、心地よい目覚めと共に謁見のことを思い出し、
急に緊張がこみ上げてきたのだった。
謁見の前に、マヤザキと会見があった。
「あなたがミナム殿でしたか。」
言葉とは裏腹に、眼光鋭く、一部のすきもない様子のマヤザキに
ミナムは圧倒された。
「ええ・・まぁ・・・」
手で頭を掻き、頭を下げるミナム
「うわさは、京まで広がっております。」
「そんな・・・たいしたこと・・・」

「いえいえ・・・あの両刀遣いのミドリを倒すとは」
「はぁ～」
「なに、ご謙遜なさってるんですか。」
「ええ・・まぁ・・・」
「ところで、ミナム殿、ミカドにもちろん忠誠を誓うんでしょうな。」
その言葉を聞いて、ヤマト姫の言葉をおもいだした。
「絶対に、忠誠を聞かれたら有無を言わさず、はいと答えるのじゃ・・・
よいな・・・さもないと、即謀反にとして、処分されるぞ。」
「はい、忠誠を誓いに来ました。」
「ははは・・これは、心強い」
一通り話を終えた二人、マヤザキはミナムを送らせた。
大臣の使いがマヤザキに話しかけた。
「ミナムはどうであった？」
「くえんやつだ、本性が見えぬ。」

しばらくして、謁見を許された3人は、京の大極殿へだされた。
そこで、ミカドの前にひれ伏す3人・・・
「そちがミナムか。」
「はい。」
「よくきてくれた、あの両刀使いのミドリを倒したというではないか、余は満足じゃ、」
「ありがたきお言葉」
そこへ、右大臣がミナムに話し、その言葉をミカドに伝えた。
「ミナム殿は今、ここで陛下に忠誠を誓うそうです。」
「そうか、そなたが見方に入れば、グレースも安泰じゃ、のぉ右大臣」
「陛下の仰せのとおりで・・」
「褒美をとらす」
「ありがとうございます。」
ミナムは頭を下げ、しばらく、

「ところで、ミナム・・・急で悪いのだが。」

その言葉にミナムは悪い予感がした。なんだろう一体

急に話を変えるなんて。そう思っていると

「おぬしに頼みがある。」

やっぱり

「は？」

「聞いてくれるよな」

「もちろんでございます。」

「今、わがグレースは危機的状況じゃ、ギオンの反乱に呼応して、南では海賊ルーシーが

北では青蛇が暴れておるのじゃ。」

「はい・・」

「そこでじゃ・・ルーシーの討伐してほしいのじゃ。」

「はい・・」

ミナムはただはいと答えるしかなかった。ここで、いいえというと自分が謀反人として

処罰されるからだった。

「ルーシーを投降させて、味方にしてもよいのじゃ。」

「はは・・・ありがたき幸せ・・」

「よく言ったぞ！ミナム！余は期待しているぞ」

「ところで」
ミナムが顔を上げ、ミカドを見上げた。
「何じゃ？」
「私たちだけでですか？」
「お・・・」
しばらく固まるミカド・・・
「そうじゃ・・・ソウシをつけるぞ」
「そうですか・・」
ほっと胸を下す3人だった。

しかし、謁見が終った3人にはため息しか出なかった、
歩くたびに3人はため息を着いた。
「どうするの？　ミナム」
「どうするって・・・やるしかないだろ。」
「まぁ・・・そんなに間単に」

「多分・・・」

「たぶん・・・て」

「どうするのよ。」

ミナムたちがとぼとぼ歩いていると、後ろから声がした。

「何をお話で・・・」

びくっとする3人は、振り返るとそこにはソウシが立っていた。

「どうしたのですか？狐につままれたような顔をして。」

「あ・・・いや・・・」

「それとも・・・何か聞かれたら・・まずいことでも？」

「な・・な何でもないですよ！！」

3人の慌てぶりを見て、ソウシが言った。

「その様子は、やはり何か・・・」

ソウシの言葉に観念した3人、肩を落としソウシのほうを見てミナムがその重い口を開いた。

「実は、ルーシーのことで・・」

「ルーシー？・・・ああ・・あのことですか。」
「あのことって・・ソウシさんが同行することですか？」
「え・・・そうですが・・何も聞いていないんですか？」
ソウシの言葉にある意味、ほっとするミナムたち
「え・・いや・・そうですよね」
「そうよ・・黒騎士団がついているんだもの・・・何とかなるわ」
ミヌの一言に眉をひそめるソウシ・・・
その顔を見て、カーネルが不思議そうに聞いてみた。
「どうしたんですか。ソウシさん・・」
「なにも・・聞いていないのですか？」
「それはどういう意味？」
「私だけが同行するんです。」
ソウシの言葉を聞いて固まる3人・・・
「ええっ？」
「何驚いているんですか？」

呆然とソウシを見つめる3人に

「そ・・・それは・・」

「聞いていないのですか？」

「なにも・・・」

しばらく、奇妙な空気が流れた。

ミナムの後ろではカーネルとミヌがひそひそ話をしていた。

「ソウシさんだけってどういうこと？」

「それって・・たった4人で戦えってこと？」

「まさか・・・」

「そうよね・・無理よね・・」

「ということは・・現地にきっと本隊がいるはずだから・・」

「じゃぁ・・ソウシさんは一体何のために？」

「そうよねぇ・・ソウシさん本当に戦うのかしら？」

「ひょっとして・・・私たちの監視だけ？」

「そうよ・・絶対に」

その声はソウシまで聞こえていた。

あの～聞こえているんだけど・・・心の中でつぶやくソウシ・・・

そこへ、ミナムが二人のほうを向いて、叫んだ。

「カーネル！！！ミヌ！！！監視だけって言ったら、ソウシさんの立場もないだろうが」

その言葉にソウシも頭を抑えた。

「ミナムさん・・そんなこと言ったらソウシさんがかわいそうじゃない・・・」

「そうよ！！」

3人の後ろから・・・ソウシが声をかける

「あの～！！」

「はい！！」

慌ててソウシの方へ振り返るミナムたち、顔はひきつっていた。

「あ・・・いいんですよ・・・本当のことですし。」

「いや～すみませんでした。」

3人は、ソウシに謝っていた。

「そんなに・・・」

そこでミナムはあることを思いついた。

「じゃぁ・・・新しい仲間のソウシさんの歓迎会をしないと。」

「賛成～・・・褒美もあるし・・・」

そうカーネルがミナムの話にのってくると間髪いれずにミヌがソウシに聞いた。

「ところでソウシさん、このあたりでおいしいところあります？」

なんて立ち直りのはやい連中だ・・・ソウシは思ったが、とりあえず歓迎会とやらについていくことになった。

うたげ？

ソウシを先頭に歩くミナム達、気がつくと周りは人、人、人

ミナム達の姿をひと目見ようと人だかりができ、身動きが取れなくなってきていた。

そう彼らが両刀使いのミドリを倒したという噂はすでに京中に広まっていたのだった。

ソウシが振り返りミナムに話しかけた。

「ミナム殿」

「はい。」

「宿舎にもどりませんか？」

「そのほうがよさそうですな。」

何とか宿舎に戻れた3人・・食堂でとりあえずお酒を片手に

小さな歓迎会をはじめた。

コップを持った4人、ミナム、カーネル、ミヌの3人はニコニコしているのと

対照的に、一人落ち着いた顔のソウシ

「ソウシさんの加入に乾杯！！」

互いのコップがなった。

歓迎会とはいえ、多少のあてと酒がある程度だった。

まず一口を飲んだ４人、コップを置いて話しかけたのはミナムだった。

「ところでソウシさん」

「なんですか？」

「いつ出発ですか？」

「明日、ミカドから連絡があります。」

そう言って一口飲むソウシ・・・

「いきなり明日ってことはないですよね。」

「それはありません。大体、通常２～３日後くらいです。」

「そうですか。」

ふとミナムが見るとソウシのコップが開いていたので、注ごうとすると

「いいですよ。そんなに気を遣わなくても。」

「まあ～そう言わないで」

ミナムはソウシのコップに酒を注いだ。それを見ていたカーネルとミヌが

「私たちも、カラなんだけど・・・」

ミナムが二人を見ると確かにコップがあいていた。

「二人ともそんなに強かったっけ？」

そう言いながら二人に注ぐミナム

「ところで、ソウシさん、今回なぜ一人なんですか？」

徐々に酔ってきているカーネルがミヌに注いでいるときに声を挟んできた。

その言葉に、思わずぐびっとコップのお酒を一気に開けてむせるソウシ

今度はそれを見ていてたミヌ

「やはり・・見張り役？」

しばらく、むせていたソウシは、やっと声を出した。

「実は・・・」

「実は？」

「3番隊は京の警護で動けなくなったんです。」

そのソウシの言葉に納得がいかない3人、首をかしげていたミナムが

「でも、この間まで一緒に・・・」

「そうですけど・・・」

「じゃぁ・・なぜ?」

ソウシはため息をついて、観念したかのように

「ちょっと・・」

3人を近くに来るように手招きをした。

しかたなく、耳を寄せる3人にソウシはこっそりと話した。

「実は、ポメラ討伐に行った2番隊が行方不明なのです。」

しばらく、固まる3人・・・

「ええ〜!!」

「黙れ!!」

大声をあげる3人を大慌てで鎮めようとするソウシ・・

「ということは?」

ぽつりと言って、顔を暗くするミナム

「ひょっとして・・」

ミナムに合わせるように暗くなるカーネル

「グレースもやばいってこと？」

どーんと暗くなるミヌ

「え～い！！！大声を上げたり、暗くなったり！！」

その様子を見て、苛立つソウシ

「まっ・・いっか」

楽天的な声をあげたのはミナムだった。

「でも・・」

「ルーシーってのを何とかしたらいいんだろう」

「ミナム殿、なにか秘策でも？」

そう聞くソウシに

「いや・・何もない・・・ところでルーシーってどんな奴？」

その言葉を聞いてガクッとうなだれるソウシ、カーネル、ミヌ

「何も知らんのに、いい加減なことを言わないの！！」
ミナムに吠えるカーネル
「カーネル・・そんなに吠えなくても聞こえてるよ。で？どんな奴なんだ」
その発言を聞いて、頭を抱えるソウシ、カーネル
様子を見ていたミヌがミナムに声をかけた。
「ところでミナムさん・・それを聞いてどうするんですか？」
「あ・・敵を知っとけば、なんとかって、兵法の基本だよ」
「なんとかって、えらくいい加減な兵法ですね。」
「まぁ・・いいじゃねぇか。で、どんな奴なんだ。」
そして、ソウシはおもむろにルーシーのことを語った。
「女海賊ルーシー、約１０００人の部下と大小約１００隻の船団を有し、南の海で暴れている大海賊
特に、船長ルーシーは、魔法だけでなく武力も強く、しかも、美人。」
「女で？」

驚くミナムを3人がギロリと睨む、

「あ・・・」

息をのむミナム、ここにも強いのがいたんだ3人も・・・

ミナムが黙ったのを見て、ソウシは続けた。

「そして、ルーシーには5人の大将がついている」

「5人も・・・」

「そう5人もです。」

「ルーシーを入れると6人か・・」

そういうとミナムは酒を一口飲み、

「今日はここまで!!」

「えっ?」

話を折られたソウシは、きょとんとした。

そして、しばらくたわいもない話をし、打上げの時が来た。

「さて、よく飲んだし、もう休もうか・・・」

「ミナム殿。」

「なにか？」

「今日は、先にお風呂に入ってください。」

ソウシの言葉に酔いながらも耳を立てるカーネルとミヌ

「えっ？」

「今日は、風呂が一つしか開いていないんですよ。」

「えっ？だったら、ソウシさん達女性が先で。・・」

「たぶん、今日は、私たち４人だけしかここに泊まっていないので、ミナム殿が

先に入られたほうが、ゆっくり入れるんで私にとってはいいんですが・」

「わかりました。お言葉に甘えて先に入らせてもらいます。」

こうして彼らは、自分の部屋に戻った。

たくらみ・・

部屋に戻ったカーネルとミヌ・・・

二人とも今ミナムが風呂に入っていることを考えながら、身の回りの整理をしていた。

思い切ってお風呂に行って・・・きゃ・・・などど酔いに任せ勝手な妄想をそれぞれ考えていた。

そして、ミヌの方を向いたカーネル

「あれ？ソウシさんは？」

ビクッとするミヌ・・そーとカーネルのほうを振り返り

「ソウシさん・・は・・自分の部屋に行きましたけど・・」

カーネルは挙動不審なミヌをよく見て

「ミヌ！！」

「はい・・・」

そう答えるとミヌの手元から下着がポロリと落ちてきた。

「あ・・・」

落ちた下着を拾うカーネル、そして、それをミヌの目の前に見せた。

「これは？」

「下着・・・です。」

「それくらいわかるわよ」

「ですから・・」

「ひょっとして？」

「ちがいます。ただ・・・単に風呂の準備を・・・」

「ふ～ん・・風呂ねぇ～」

横目でミヌを見るカーネルは、ミヌのほほを指でつついた。

「・・・」

「本当に準備だけ？」

「あ・・」

真っ赤な顔をするミヌ・・・その光景を見て、カーネルは

「お風呂・・・入りに行こうとしたでしょう。」

黙って、コクリとうなずくミヌ・・・

なんて・・・大胆なの・・と思いながらカーネルも準備をしていた。

ミヌがふとカーネルの荷物を見ると、そこには、下着が・・・

「カーネルさん？」

「はい？」

「ひょとして・・」

ミヌが言おうとした瞬間にカーネルはミヌの両手を握り、

「一緒に行きましょう」

ひきつったにこやかな笑顔で話した。

「そうね・・・」

言い返すミヌの顔もひきつっていた。

その頃ミナムは、湯船の中にいた。

結局、今度は海賊退治・・・か・・さてと、と湯船から上がりミナムは頭を洗い始めた。

廊下を歩く二人をソウシが見た。

「カーネル殿、ミヌ殿、どちらへ・・」

「あ・・・お風呂です・・・」

二人の頭の中はミナムのことでいっぱいだった。

「ミナムさんあがったのですか？」

ソウシの言葉を聞いていない二人、適当に頭を下げた。

「それでは・・」

そう言い残し、そそくさと風呂に向かった。

二人の行動に頭をかしげるソウシ・・・

変だな～と感じながら、風呂があいたのなら入ろう・・そう思い自分の部屋に戻った。

脱衣場でそそくさと服を脱ぐ二人・・・

風呂場のドアをそーっと開けるとミナムが一人頭を洗っていた。

二人はドキドキしながら、そのまま湯船につかった。

あれ・・なんか音がしたような・・・とミナムは思ったが・・・とりあえず

頭の石鹸を落とし、体を洗い始めた。

その頃、ソウシは、脱衣場につき服を脱ぎ始めた。

体を洗い始めたミナムを見て二人はそーっとミナムの後ろについた。

そして、ミナムの耳元で二人は囁いた。

「ミナム」

「えっ・・・？」

振り返るミナム・・・そこには全裸のカーネルとミヌが・・・・・

「◎×△？◎□×！！」

驚き声が出ないミナムを二人がむぎゅうと抱きしめた・・・

「あ・・・あ・・」

旅立ち

ミナムは石鹸を持ったまま、しばらく固まった。それと同時にあれも固くなっていた。

その様子を見たカーネルとミヌ・・・

鼓動が止まらずしばらく見入っていた。そのとき二人が力が緩んだ・・・

次の瞬間何を思ったかミナムは、起き上がり、あわてて脱衣場のほうへ走り出した。

「あ・・・」

「わ・・・」

「ミナム!!」

ミナムを追いかける二人・・・

一方、脱衣場では、服を脱ぎ終わり、浴槽へ歩き出したソウシが物音に気付いた。

さわがしいなぁ・・・二人して何してんだ?

そう思った瞬間だった。

目の前の浴槽の扉が開き、素っ裸のミナムが目の前に飛び出してき

た。

「わ！わ！！」

「！！！」

ミナムは目の前の全裸のソウシを見て固まった。

そして

手に持っていた石鹸を落とした

そこへカーネルとミヌが後ろからミナムにぶつかってきた。

ドンと二人に突き出されたミナム

さっき落とした石鹸でミナムはソウシの方へ滑って行き、

そのままミナムはなすすべもなくソウシとぶつかった。

「わ～！！！」

どん！！！

その場の全員が驚いた。

衝突した瞬間、そのまま宙に浮くミナムとソウシは、ひっくり返り床にたたきつけられた。

どしん！！

気が付く二人・・・

「え？」

「うそ・・・」

「！」

目の前の光景に全員が固まった。

倒れこんだ二人

ソウシはミナムの上にのっかていた。

そして、

偶然にも唇が触れ合っていた。

「ーーーーー！」

ただ、驚くふたり

「ちょっとぉお！！！」

その様子に声を上げるミヌ・・・

呆然としていた二人は、大慌てで離れた。

「ごめん・・！！」

頭を下げミナムが謝る。

しかし、ソウシはミナムを見てその衝撃のあまり硬直した。

裸だったミナムの股間が目に入ってきたのだ。

ソウシにとっては、初めての経験だった。いきり立つのを見たのは、

しばらく、ただ、それを見ていた。

鼓動が止まらない・・・

慌てて二人を引き離すカーネルとミヌ・・・

しばらくして、我に返ったソウシは叫んだ。

「あ～！！！！」

湯船につかり呆然とするソウシ・・・胸の鼓動は高鳴るばかりだった。

そのたびに顔を洗い振り払おうとするソウシ・・・

しばらくして、やっと落ち着いたソウシ、風呂から上がると廊下でミナムたちが待っていた。

ソウシを見て土下座する三人。

「すみませんでした！！」

その光景を見てただため息をするソウシ・・・

ミナムが顔をあげた瞬間、

どきん！！

また、あれを思いだした。

「あ・・・もう・・・頼むから一人にしてくれ・・」

部屋に戻ったソウシ・・・ミナムのあれが頭から離れない・・・

やがて・・少し落ち着いたソウシは、あることを思い出した。

あ・・・キス・・・

そして、ため息をついて、ダメだ、忘れるんだ。

そう自分に言い聞かせた。

その頃ミナムは、落ち込んでいた。

どうしよう・・・ソウシさん怒ってるよな絶対

そう思うと寝れなかった。

カーネルとミヌは、どうしよう・・・ソウシさんにどう謝ろうか

それをずーっと悩んでいた。

翌朝、いつものソウシが立っていた。それを見かけたミナムは、かけつけ。

「昨日は誠に申し訳ない。」

深々と頭を下げ謝った。

「大丈夫ですよ・・・事故ですから・・」

顔を見合わせる二人・・・

「はは・・事故・・ですよね・・」

「ははは・・・」

しばらく、顔を赤くして固まる二人、

「それでは・・」

その光景を見てカーネルとミヌは、ため息をついた。

「大丈夫かしら?」

ミヌは、ちらりとカーネルに目をやりもう一度ため息をついた。

「なにが?」

「ふたり・・・くっつかないわよね・・」

心配そうに二人を見るカーネル

「そんなことないわよ。」

こうして数日が過ぎ、出発の日がきた。

出陣式

「これから出陣式を行う！！」

その声とともになり響く太鼓の音

出陣式、ミカドが直接出陣を命ずる儀式で、各大臣や主要な役人が参列し行われる。

そんな出陣式に呼び出された、ミナム、カーネル、ミヌ、そして、ソウシの４人は大極殿の前庭にいた。

そこでは、ミナムたちを中心に両脇に文官、武官が立ち並んでいた。

やがて、大極殿の中から青い服を着たミカドの警護武官、その後ろに紫の服を着た大臣たち出てきた。

そして、おもむろにミカドが現れた。

ミカドに礼をする一同・・・

「面をあげよ」

ミカドの号令に顔をあげたミナム、周りを見ると自分を入れて４人しか立っていない。

「ミナムよ！」

「はい・・」

「この度は、この国難によく馳せ参じてくれた。余はうれしいぞ・・・」

「は・・ありがたきお言葉・・・」

ミナムの言葉を聞いてうなずくミカド

「まず、そなたたち４名は、隠密行動でビキニの国へ行くのじゃ」

「へ？・・ビキニ？・・・」

「どうしたのじゃ・・・」

「あ・・いや・・・わかりました。」

そう返事をしたミナムだったが、ビキニの国ってどこだよ一体？

「そこへ行けば、ビキニの国府軍が協力してくれるはずじゃ。」

ミカドの言葉を聞いて安心したミナム、なるほど、現地軍と共同で戦えれば、何とかなるそう思い。

「は・・・ミカドの仰せの通りに」

「そうか・・ところで今回のルーシー討伐に関しては、極秘任務であるから、ビキニ国府軍も

何も知らぬ、よって、ここに書があるので、これを国府長へ渡すのじゃ・・・よいな・・」

そう言ってミカドは、一通の書を渡した表には、金色の字で”帝”と書かれ裏面にはミカドの紋章が封印

として、張られていた。その書面を受け取ったミナムを見てミカドは

「頼んだぞ・・ミナム」

「は・・・」

「ところでソウシ・・・おぬしにも無理言ったが、今回のことよろしく頼んだぞ」

ソウシは右腕を胸のあたりに水平に出し、一礼をして

「陛下、ありがたき、お言葉、命に代えてもこの任務遂行いたします。」

「そうか・・それは頼もしい、それでは、頼んだぞ・・」

こうして、出兵式は終わった。本来ならこの後、南大路を朱雀門まで隊列を組んでいくのだが

隠密行動の今回は、それはなしということになった。

日が変わるかどうかの時刻、ミナムたち４人は、密かに京を旅立った。

逢坂の関を日の出までに通過しなければならなかったからだった。

その頃、ルーシー海賊団には、変な訪問者が来ていた。

「なんだい？」

ルーシーが訪問者に質問をする

「ですから・・京から討伐隊が来ます。今のうちに和解されては，如何かと」

「今・・何と言った。」

「ですから、京と和解を・・・」

訪問者の言葉に、突如大笑いをするルーシー、その様子を見て、きょとんとする訪問者

「わらわが？　和解？　とな？　その方、なかなか面白いことを言う」

ルーシーの一言で、再び笑い出すと船中が大笑いをしだした。

しばらく、笑いが続いた後、突如、静寂が訪れた。

その静寂に驚く訪問者、ルーシーを見ると、恐怖のオーラが伝わってきた。

「あ・・？」

慌てて周りを見た訪問者は、声を失った・・・船中殺気に満ち溢れていた。

「その者の首をはねよ！」

「え？」

訪問者は、驚く暇もなく、両脇を抑えられそのまま、舷側へ連れて行かれた。

「待ってくれ！！助けてくれ～！！」

叫び命乞いをする訪問者、

ダン！！

ザブン！！

彼の頭は、体から離れ、その遺体はそのまま海に投げ込まれた。

「ところでミナムとやらは一体何者だい？」

ルーシーが首をかしげて、部下のファーファに聞いた。

ファーファ、ルーシが信頼する5人の部下の一人、特に、戦線が拡大し

４方面でグレースと対峙している状況で、一番身近な人物だった。

「お頭、ミナムって奴は、あの両刀使いのミドリをたった二人で全滅させた奴のことでさ。」

「なに？ミドリを？　１００人以上はいたろうに・・」

「はい・・・しかも、部下の１００人は一瞬で全滅したそうです。」

「一瞬で？」

その言葉に疑心暗偽のルーシー

「はい・・ところで如何なさいますか。」

「ほおっておけ、そのうちに来るだろう。実力があればな」

その頃、ミナムたちは、逢坂の関に着いていた。

「なんとか夜明け前についたわね。」

「なんとか・・・ね」

3人は、だらしなくへたり込んでいるミナムを見た。

「ミナム・・・しっかりしなさいよ。」

「こんなに遠いとは・・」

息を切らし、なんとか答えるミナム

「ミナムさんって、体力ないですね。」

クスクス笑いながら、へたり込んでいるミナムを覗き込むミヌ

「さ・・行きましょうか。」

ソウシが冷たくミナムを即した

「へい・・へい・・・」

仕方なく立ち上がるミナムは、トボトボと3人について行った。

一方、京では、ミカドがマヤザキを呼び出した。

「マヤザキ・・・ミナムはあのままで大丈夫か？」

「陛下・・・ご心配には及びません。」

「なぜじゃ。」

「逢坂の関で少し手を打っております。」

「何をじゃ。」

「それは・・・・」

「ほう・・・そうか・・・・」

逢坂の関

逢坂の関、京を守る４つの関所の一つ、京は、四方を山に囲まれた盆地にあった。

基本的に今日の中心を守る城郭以外に主要な道路を守るための関所として

城郭門がそこにあった。その扉は分厚い鋼鉄製で開門時間以外は固く閉ざされていた。

夜明け前、逢坂の関についたミナムたち一行、ソウシが警護隊と話をしていた。

「いくら京を守る黒騎士団隊長の依頼でも、ここを開けるわけにはいかん。」

頑なに断る警護隊隊長。

「では、どうしろと・・・」

「開門まで待つのだな。」

ふと時間を気にするソウシ、本来であれば、小さな勝手門と呼ばれる有事に奇襲をかける為の門から

出してもらえるのだが今回は何故かそうはいかなかった。

「開門までどのくらいだ。」

「あと2時間ぐらいかな？」

適当にこたえる隊長、ソウシは焦っていた。今、ここを通過せねば、隠密行動がばれてしまう。

どうすれば・・・一体？

俯き考えるソウシを見ていたミナムは、ソウシに声をかけた。

「どうしたんですか。」

「わ！！」

その声を聴いて顔をあげ驚くソウシ、目の前にはミナムの顔があった。

パチーン！！！

「痛てて」

驚いたソウシは、思わずミナムのほほを平手打ちをした。叩かれた頬を押さえるミナム

「ミナム！！」

「ミナムさん！！」

ソウシの行動に驚くカーネルとミヌ、それよりもっと驚いたのは、ほかならぬソウシだった。

次の瞬間、

「すまぬ・・・」

素直に謝るソウシ・・

「おー痛てて」

その声に駆け寄るカーネルとミヌ

「ミナム・・・大丈夫？」

そう言って二人はミナムの頬を見ていた。

「見せてくれるねぇ～、お兄さん！！」

横からチャチャを入れたのは、警護隊員だった。

「ねぇ～ちゃん、おじさんにもやってよ！！大丈夫って？」

そう言って大笑いをする警護隊たち。

「すまぬ・・・」

そう言って再び謝るソウシ

「それはいいけど、一体どうなってるんだ」
「なにかの手違いでここは通れないらしい。」
「え～！！」
ソウシの言葉に驚く3人、ふとミナムはあることを思いついた。
「あの扉、壊せば？」

「何をバカなことを。」
ミナムの言葉に驚き、言い返すソウシその言葉にカーネルとミヌが言葉を重ねた。
「そうよ！！」
「あの扉は、簡単に壊れないわよ」
「それに、そんなことしたら今度こそ反逆罪になるわよ。」
「そうか・・・じゃぁ・・・あの城郭を飛び越えるか」
簡単そうに言うミナムを見てあきれるソウシ・・
「それは無理です。」

「なぜ・・・」

「どう見ても無理でしょう。」

「だからなぜ？」

「この門自体も結界の中だから魔法で飛んだとしてもこの門の上を超えることはできない。」

そう答えるソウシを見て、横からカーネルが言った。

「例えできたとしても私嫌だから・」

「どういう意味ですか？」

カーネルの一言に不思議そうに聞き返すソウシ、それに対して今度はミヌが人差し指をあげ、ウインクしながら言った。

「ミナムさんのジャンプだったら、楽勝だけど・・・」

「だけど・・・」

ミヌの言葉にさらに顔を険しくするソウシ

「とんでもない高さなのよ。」

「あ～思い出しちゃったじゃない・・・」

そう言って身震いをしてみせるカーネル

「どういうことです？」

「決闘のこと、ご存じ？」

そういうミヌの言葉に、ソウシは

「あの竜巻が起こったやつですか？」

「実は違うの？」

「何が？」

「あれは、ミナムがとんでもない高さに飛び上がって、落ちてきた時の衝撃波なの！！」

「えっ？」

「しかも結界の中で飛び上がったから・・・」

「結界が効かないのですか。」

「そう・・」

その言葉を聞いてソウシはあることを思い出した。

この間の戦闘で、一瞬で吹き飛ばされていく敵兵の光景が

ミナム殿の力でひょっとすると・・・そう思いミナムに声をかけた。

開門

ミナムの方を振り返ったソウシは、手招きをしてミナムを呼んだ。

「ミナム殿」

えっ？おれ？という感じで自分を指差したミナム、思わず変な返事をした。

「俺？」

ソウシは、頷き、門の方を指差した。

「あの門・・開けられるかな？」

ミナムはソウシが指差した方を見た。そこには幅５ｍ高さ１０ｍの鋼鉄製の扉があった。

それを見てただ驚くミナム・・・

「え・・・あれ？」

その会話にカーネルが割って入ってきた。

「無理よ、あの門は、そう簡単に開かないわよ。いくらミナムの力でも・・・」

しかし、ソウシは少し笑みを浮かべ

「空いたらどうします？」

ソウシの言葉に驚くカーネル・・・

一方、ソウシの笑みが気になったミナム

「ソウシ殿、何か良いアイデアでも？」

そう聞いてみるとソウシが3人を手招きした。

こそこそ話すソウシ・・

「えっ？本当に？」

「そうです。」

「そんなことできるの？」

「やる価値は十分あります。」

その光景を見ていた警護隊員がいい加減にしろよ。どうせ開くことないんだから早くどこかに行ってくれそう思いつつ、こそこそしている4人に声をかけた。

「何こそこそしてるんだ。」

その言葉を聞いて振り返るソウシは、門を指差して

「この門が勝手に開いた時、お咎めはないよな」

警護隊長はその言葉を聴いてあきれた。

「何を言ってやがる。この門が勝手にあくはずがないだろ！」

ソウシはもう一度繰り返した。

「もう一度聞く、この門が勝手に開いたときは、お咎めはないよな。」

ソウシの言葉にあきれた警護隊長は叫んだ。

「ああ・・・そうだ・・勝手にしろ！！」

普段、この門は、警護隊が開閉しない限り、決して開くことはない。

しかし、かつてこの門が勝手に開いたという伝承があった。

それは、グレースの伝承で、初代ミカド　超神帝がこの門の前に立つとひとりでに門が開いたというものであった。

この伝承に基づき、門が開いた時は神が通ったとされ、その時に、門を勝手に通過しても罪に問われないことになっていた。ただし、門を壊さずにという条件が付いていた。

しかし、これまでこの門を開けた者はいなかった。

ソウシは、ミナムの方をポンと叩き、門を指差し

「さぁ・・・ミナム殿。この門を開けるのです。」

「え？・・・俺？」

驚き自分を指さすミナム

「そうです、この門は押すと上へ開く構造になっています。ですから外向きに押してください。」

このソウシの言葉が警護隊員の笑いを誘った。

「そんなに簡単に開くものか。」

警護隊の笑いが渦巻く中、ミナムは自分を指さし

「俺が？　こう？」

門を押すしぐさをしてソウシの方を見る。

すると頷くソウシ。

再びミナムは自分を指さし今度はカーネルとミヌを見ると

腕を組んでいたカーネルは

「まぁ・・・やってみれば？」

ミヌはグーにした両手を顔の前に出し、ガッツポーズをして

「ミナムさん、ガンバ！！」

「ガンバ・・か？」

ミナムはやれやれと言った表情で両手を上げ天を仰いだ。
そして、おもむろにその扉の前に立ち、両手を扉にあてた。
「無駄！！無駄！！」
そう言って大笑いする警護隊員達・・・
ミナムが少し力を入れるが・・・
やっぱり動かない・・・
「やっぱり。うごかねぇだろう・・・がはは！！」
警護隊員は、ミナムの光景を見てさらに大笑いした。
ミナムは、扉を押している体制のままだった。
もう少し入れるか・・・
壊さないようにと・・・さらに力を入れた。
すると
ギギギ
扉から物音がしだした。

「へ？」

その音を聞いた警護隊員たちは驚き、笑いが一瞬で止まった。

ギギギギー

徐々に開いていく扉・・・・

その光景を見て、ただ驚く警護隊員達

対照的にミヌははしゃいで叫んだ

「ミナムさん！！すごいです～！！」

やがて、その扉はミナムたちが通れるほどまで開いた。

ソウシは何事も無かったかのように扉の外に出て、カーネルとミヌに話しかけた。

「さっ・・・カーネルさん・ミヌさん。こちらへ・・・」

ソウシに即され門の外に出たミナムたち、ソウシは振り返り隊長に声をかけた

「隊長、扉は勝手に開いたぞ。」

その言葉を聞いても目の前の状況が理解できない隊長

「隊長！！！」

ソウシが声を荒げた！！！

「は・・・はい！！！」

「扉は、どうなった？」

「はい・・・勝手に開きました」

「では・・・これにて・・・」

そう言い残しソウシは頭をさげて

「ミナム殿、手を放して下さい」

「はい・・」

バーン！！！

ミナムが手を放した瞬間、扉はしまった。

その光景に圧倒された警護隊員達、しばらく、呆然としていた。

「あ・・・・」

「隊長・・・」

「これは・・・勝手に開いたことにしよう、さもないと・・・」

「さもないと・・・」

「俺たちの命が・・」

逢坂の関を通過したミナムたちは、次の目的地、カサオへ向かった。

その頃、京ではミナムたちが逢坂の関を通過したことがミカドに報告された。

「何、勝手に開いた?どういうことじゃ?」

「は・・陛下・・・ミナムが通ろうとすると扉がひとりでに開いたそうです。」

「扉が?　一体どうなっておるのじゃ!!真相を究明せ」

開くはずがない・・・・あの鋼鉄製の扉が何かの間違いじゃ。そう願うミカドだった。

カサオ

グレース第二の都市カサオ

ここは、京から南東の方角にあり、陸路で半日といった距離にある大都市

また、天然の良港であり、隣接するベコウ共に京への玄関として発展し、

グレース経済の中心地であった。また、ここには海軍司令部をおかれ、

真の意味で海への拠点となっていた。

カサオに着いたミナムたち一行・・・

「さてと・・・とりあえず、今日はここで休みましょう」

振り返って話しかけるソウシ、

「そうだな・・・腹も空いたし、何か食べるか。」

ミナムがそう言うとミヌが両手を上げ叫んだ。

「賛成！！」

「もうっ・・ミヌったら。」

ミヌの行動を見て呆れるカーネル

とりあえず４人は近くで食事をとることにした。

食事の中、話を切り出しのはカーネルだった。

「これからどうするの？」

カーネルの質問にソウシは、箸をおいて

「とりあえず、海路でビキニのへ向かおうかと。」

ソウシの海路と言う言葉を聴いて、会話に割り込んできたのはミヌだった。

「でも・・・海路は海賊が多いのでは？」

「大丈夫ですよ。」

「だって、一般の商船だと、襲われる可能性があるんじゃ。」

「それも大丈夫です。」

そう言ってソウシは、ある紙を見せた。それはビキニ向け軍艦の予定表だった。

「この船がビキニに向け、明日出港予定です。これに乗れば、間違いなくビキニの国、ズミシマ港に着きます。」

ソウシから軍艦に乗ると言うことを聞いたカーネルは納得した。

「そうね・・それが一番早いわね・・」

しかし、ふとミナムを見るとミナムは、一人話も聞かず、一生懸命に飯を食っていた。

ミナムの様子に唖然とするカーネル、ミナムに声をかけた。

「ミナム聞いた?」

カーネルの言葉に食べている動作を止め、目だけ3人のほうを見るミナム

「へっ?」

しばらくして、再び食べだそうとしたのに気付いたミヌが

「ミナムさん?ひょっとして、聞いていなかったの?」

そのミヌの言葉でようやく箸を置き、ミナムは顔をあげた。

その顔は不思議そうな3人を見つめていた。

「何を?」

「ちょっとしっかりしてよ。」

「ミナムさん」

あきれるカーネルとミヌ・・・ミナムの一言が火に油を注いだ。

「だから何を？」

カーネルはこの言葉に思わず怒りを覚えた。

「これからの予定を打合わせているのよ！！ちょっと位聞いたら！！」

カーネルの言葉にキョトンとするミナム

「だから？」

「だからって、あんたねぇ～！！やる気あるの？やる気！！」

あまりの剣幕で怒るカーネルに逆に呆れるミナム

うるさいなぁ～。そう思いながら右手を出して。

「ストップ！！」

その行動に目が点なるカーネル

「ストップ・・・て？」

「あのさぁ～カーネル、俺の状況知ってるよなぁ。」

ミナムの言葉にしばらく固まるカーネル・・・はっきり言って何を言っているのかわからない。

「えっ？」

ポリポリと頭を掻くミナム、そして、徐にしゃべった。

「俺は、ここの状況がまったくわからないんだ。わかる？」

「えっ？」

「ビキニの国がどこにあるかすらわからないんだ。なんなら、もっと言おうか？」

「なにを？」

「文字すら読めないんだ。だから、移動のことはソウシ殿を中心にお願いするしかないんだ。わかったか！！！」

「でも何か・・言うことでがあっても・・」

「余計なことを言ったら、みんなが混乱するだけだろう。だから黙ってついて行くから。」

この会話を聞いていたソウシが徐に口を開いた。

「その通りです。」

「それ見ろ・・」

なんとなく納得がいかないカーネルとミヌ

食事を終え、一行は今日の宿へ向かった。
その途中とある橋にさしかかった時、ふとミナムが話出しだ。、
「ソウシ殿」
「なにか？」
「今日のうちに軍艦の方へ行って、確認だけでもしとかないか？」
「それには及びません。」
「どうして」
「出発前に、この文書をカサオの海軍司令殿から受けておりますゆえ。」
「そうか・・ならいいんだけど。」
ミナムの言葉が気になったカーネル
「どうしたの？急にそんなことを聞いて？」
「そうですよ。」
ミヌが言葉を重ねた。ミナムは右手の人差し指で上を指し
「基本だよ。基本・・・」
あたりに寒い風が吹いた・・・

「ははは・・・」

その時だった。４人の後ろから数人の男たちが声をかけてきた。

「お嬢さん！！」

その声に立ち止まり振り返るカーネルとミヌ

「はい？」

いざこざ

「かわいいねぇ～君たち。」

ある男が話しかけてきた。その男たちを呆然としてみるカーネルとミヌ・・・

カーネルとミヌはヒソヒソと何か話していた。

「何なのこいつたち・・・」

「気持ち悪いし～」

二人の様子を見ていた男達は、再び声をかけた。

「ちょっと、彼女たち・・・一緒にどう？」

それを見てたナンパだと感じたミナムは、二人に声をかけた。

「カーネル、ミヌ、行くぞ」

「えっ・・はい。」

そう言ってミナムのほうへ歩こうとした時、ぐっと手をつかまれた二人

「あんな男なんか、ほっておいて、俺たちと飲み行こ」

「いいところ、知っているからさ～」

その言葉を聞いていたミナムとソウシは、振り返った。先にソウシが言った

「カーネル殿、ミヌ殿、先を急ぎますぞ。」

男たちは、ナンパをやめようとしない。

「そんな奴らほっといてさ～」

カーネルとミヌもいい加減にイラついていた。そして、

「「いいかげんにしてよ」」

そう叫んで手を振りほどこうとした。

「おっと」

手をぐっと握り離そうとしない男たち。

その時だったミナムがカーネルとミヌの前に出て彼女らを持っていた手を握った。

「やめろ」

「なんだ～貴様。」

「俺の女に手を出すな。」

「ははっ～　俺の女だってさ～？」

ナンパをしている連中が笑い出した。連中の方がどう見てもミナムより体格がよかった。

「俺たちに勝てるのか？」

そう言ってミナムがつかんでいた手を離そうとする二人。

しかし、その手が動かない・・・

「おい。どうした。」

もう一人が二人に声をかける。

「ぐ・・・うごかねぇ・・」

「どうなってる？」

やがて、ミナムの手に力が入った。

「いてて！！」

そう叫んで二人は、カーネルとミヌを持っていた手をはずした。

それと同時にミナムは二人の手を離した。

「いてて！！何しやがる。」

「おい！！」

そう言うとそれまで数人しかいなかった連中が一気に十人に増えた。
そして、その中の一人がこう叫んだ。
「俺たちを海軍と知ってるんだろうな！」
「は？」
その男の一言は、しばらく呆気に取られるミナム
しばらくして、ようやくミナムは答えた。
「おまえら・・・今、なんて言った？」
「俺たちは、海軍だ！！」
その言葉を聞いて、ため息をついたミナム、そして、ソウシのほうを見た。
「ソウシ殿、このバカ共を黙らせてくれ。」
「バカ共となんだ！！」
そう叫んで今にも殴りかかりそうになる男たち
そこへ、ツカツカツカと前に出てきたソウシ
「貴様！！一人で俺たちを黙らせると思っているのか？」
「貴様ら、本当に海軍か？」

「おうよ！！」

「情けない・・」

その言葉に過敏に反応する男達、その中の一人がソウシに切りかかった。

「何を貴様！！！」

次の瞬間、ソウシに切りかかった来た男は、吹き飛ばされ、後ろにいた4～5人の仲間に直撃し、その場で気を失った。

「な！！」

「貴様ら、私を黒騎士団3番隊隊長ソウシと知ってのことか！」

ソウシの一言に言葉を失い立ちつくす男達

「何故・・・ここにいるんだ。」

「あの・・鬼神が・・」

その様子を見たソウシが

「どうする？まだ、やるのか？」

ソウシの気迫に圧され、たじろぐ男達・・じわりじわりと後退していった。

「覚えてろ！！」

彼らはそう叫んで逃げて行った。

宿に着いたミナム達一行、

「やっと着いた・・・・」

そう言って部屋に向かおうとした時、ふと振り返り

「ソウシ殿」

「なにか？」

「あいつら海軍とか言ってたよな。」

「まぁ・・・それが？」

「いや・・・ちょっと、気になっただけだ。」

「そうですか・・」

ミナムは明日のことが少し心配になってきた。

戦艦マリハへようそこ

翌朝、カサオ海軍司令部に着いたミナム達一行を迎えたのは、海軍司令長官、ハリー提督だった。

「これは、これは、ソウシ殿、そして、ミナム殿・・・長旅ご苦労でしたな。」

「ハリー提督、この度、有難く思います。」

そう言って、頭を下げるソウシ

「いや・・礼に及ばんよ。」

ハリーはそう言うと蓄えた髭を自慢げに触りミナムの方を見た。

「君がミナム殿か？」

その言葉にミナムは、思わず名刺を探し始めた、ヤベーどこ行ったかな？

ごそごそしているミナムに、カーネルが肘でつついて

「何しているのよ」

それに気付いたミナムは慌てて笑顔を作った。

「私、ミナムです。よろしくお願いします。今日は・・名刺を忘れたみたいで・・」

そう言ってお辞儀をした。

「め・・・めいし？」

その言葉に驚くハリー・・・

「何・・言ってるのよ」そうつぶやき頭を抱える3人、しかし、ハリーは至って冷静に

「かねがね・・噂は聞いているよ。」

そう言うとハリーはミナムの目の前まで来て手を差し伸べた。

「はぁ・・たいしたことはしていないんですけど・・」

ミナムは、ハリーの求めに応じ握手をした。

「まぁ・・座ってください。」

言われるまま座るミナム達。やがて、机を挟んでハリーがミナム達の前に座り、その机に両肘をつき、顔の前で手を組んだ。そして、

「実は、予定していた戦艦”ビキニ”が故障しまして・・・船が変わります。」

その言葉に聞いてソウシが顔を上げハリーに聞いた。

「それでは、今日の出港は？」

「それは問題ないです。”ビキニ”よりは一回り小さいですが”マリハ”を急いで準備にかからせておりますので。」

「そうですか。」

ハリー提督の一言に安堵するミナム達。

「それと出港は、予定通り午後１２時ですのでご安心を。」

「それは、乗船させていただけるだけでも有難いことですので。」

そこへドアをノックすると音がした。

「マリハ艦長ベッツィーです。」

「入りたまえ。」

はやに入ってきたのは、青い目をした長髪の一瞬女かと見間違えるほど美人の男が立っていた

しかし、その顔には大きな傷があった。その男は、物静かに入ってきて提督に敬礼をした。

「ベッツィー君、座りたまえ」

「はっ」

そして、ベッツィーは、軽くミナム達に頭を下げミナム達の横に座った。

「彼が戦艦マリハ艦長ベッツィーだ。」
そう言って、ベッツィーを紹介する提督
「そして、彼らが、ルーシー討伐隊だ。」
その言葉を聞いて眉をひそめるベッツィー、チラリとミナム達を見て、
「提督正気ですか？」
「ミカドの御意向だ。」
「そうですか。ところで、今回の作戦に本艦だけではないでしょうね。」
しばらく、黙り込む提督
「すまぬ・・」
「それも・・・ミカドの」
「そうだ・・」
ベッツィーは、しばらくうつむいていた。
そして、
再びミナム達の方をしばらく見たベッツィー

「わかりました。」

その言葉を聞いて、提督は、

「さ・・・挨拶を・・」

ミナム達は、ベッツィーと挨拶を交わし、提督の部屋を後にした。

ベッツィーの後を着いて行くミナム達を見て、本当に大丈夫か？こいつらで？

ソウシ殿は別として、あのミナムって奴。何なんだあの軽い格好は、しかも

首に紐をぶら下げて・・・本当にこいつら・・・あのミドリを始末したのか？

そう考えるベッツィーは、ソウシに話を聞いてみた。

「ソウシ殿、ルーシー討伐は、真にこの４人だけなのですか？」

「いや・・・ビキニ国の衛兵が参加すると聞いておるのですか。」

「そうですか・・」

こいつら何も聞いていない・・そう悟ったベッツィー

やがて、岸壁に着いたミナム達一行

「あれが”マリハ”です。」

ベッツィーが指したその先には全長約２０ｍの戦艦”マリハ”の勇姿がそこにあった。

「ミナム殿、戦艦マリハへようそこ、艦長ベッツィーだ、短い航海だが宜しく。」

そう言って右手を差し伸べた。

戦艦マリハ出港　！！

乗船したミナムは、甲板にいた水兵を見て驚愕した。

そうミナムが見たものは、上はセーラー服、下はミニスカートの水兵だった。

そのミニスカートからはすね毛の生えた図太い足が・・・

その光景を見たミナム・・・頭が痛い・・・・そう思っていると

そんな中に、昨日ナンパして来た男がいた。

「あっ！！」

「えっ！！」

声を上げ驚くミナム達一行、

「貴様！！」

そう叫んだ水兵たちの一部はミナム達を取り囲んだ。

「昨日の！！」

そう叫んだ時だった。

「何をしてる！！」

そう声がした瞬間、水兵の一人が横へ吹き飛ばされた。

「ベッツィー艦長！！」

そう言ってミナム達を取り囲んでいた水兵達は思わず後づさりをした。

「客人に何をする！！」

ベッツィーの一喝にたじろぐ水兵達・・・

「え？」

「きゃ・・客人？」

呆然としている水兵達に睨みを利かすベッツィー

「そうだ。この度、ミカドからルーシー海賊団討伐の命を受け、われわれと一緒に戦う方々だ。」

ベッツィーのこの言葉に驚いたのは水兵達だけでなく、ミナム達も同じだった。

「えっ？」

「一緒に戦う？」

「どういうことですか？ベッツィー殿」

驚きのあまり思わず聞きなおすソウシ、一方、水兵達もベッツィー

の一言に驚きを隠せない。

「か・・艦長・・・たった・・四人・・・ですか？」

愕然とした表情でミナム達を指した指をわなわなと震わせ聞き返す中に仕官の格好をしたものがいた。

「そうだ。副長。」

「そ・・そんな・・・」

副長を含め、水兵達はひざを落とし、呆然とした。

それを見ていたソウシはベッツィーの肩を叩き、再び聞き返した。

「ベッツィー殿、それは、真か？」

ソウシの方を振り返るベッツィー、黙ってうなずいた。

それを見て、気付いたミナム

「ひょっとして・・・討伐隊って・・・」

「そう・・この戦艦マリハと君たち４人だけだ。」

ベッツィーのこの一言が、その場にいた全員に衝撃を与えた。

うそだろう・・・おい・・・そう考えしばらく立ち直れないミナム達。

それをよそに、水兵達は、ひそひそ話し始めた。

「ま・・・しゃぁないわ。」

「俺たちには、ベッツィー艦長もおられるし、あの鬼神ソウシ殿もいる。」

「あの・・ミナムってのはわかんねぇけど。」

「かわいい娘二人も連れて・・」

「魔導師らしいぜ・・」

「おい、何ごちゃごちゃ言っている！」

ベッツィーの一言で、ざわめきは一瞬で無くなり、その場から水兵達が動き始めた。

「さぁ・出港準備にでも取り掛かるか。」

やがて、水兵達は、出港準備にかかった。

その頃、ルーシー海賊団にも、マリハが討伐隊に加わるとの情報がすでに入っていた。

「ベッツィーか・・・」

「そうです。ルーシー様、いかがいたしましょうか。」、

「そうだな・・・マリハ方面のスクイニーへ連絡しろ!!マリハから出すなと」

「はっ!!」

一方、京では、ミカドが重鎮たちと話していた。

「予定通り、ミナム達は、あの戦艦マリハに乗船しました。」

「海軍大臣。戦艦マリハ・・・とな?」

「戦艦マリハには、海軍の荒くれ者を集めております。陛下の期待通りになるかと」

「そうか・・・これで、ミナムもいなくなるのじゃな・・・」

「そうなるかと・・」

そして、当のミナム達は、船室に通されていた。

そこでは、飲み物を片手にベッツィーが外を見ていた。
「ベッツィー艦長」
そう声をかけたのはソウシだった。
「何も聞いていないのかね。」
「ええ・・・ただ、ビキニにつけば、国府の衛兵隊が支援してくれると。」
ソウシの言葉を聞いたベッツィーは、ちらりとソウシのほうを見て、
「それは、真か？」
「そう聞いております。」
「それは、何かの手違いだろう・・・」
「手違い・・とは？」
「最初から本艦のみと聞いているぞ。」
「じゃぁ・・・この船一隻で、５０隻もの海賊船を相手にしろと？」
「そうだ。」
「なぜ？」
ソウシの疑問に、しばらく答えないベッツィー、ソウシはもう一度

聞きなおした。

「何故、このような任務を受けたのですか？」

「それは・・・来て、感じたと思うが、本艦の水兵は、荒くれ者ばかりで、他の艦から追い出された連中ばかりだ。だから、こういう任巣しかこないんだ。」

「しかし・・・」

「拒否する権利がある？と言いたいだろうが・・・俺たちにはこの仕事しかないんだ。」

「そうですか。」

「じゃぁ・・あとは、船旅をお楽しみに・・・あっそうそう、船室が二部屋しかないから。ソウシ殿とミナム殿相部屋になるがよいな？」

ベッツィーのこの言葉に、慌てたのは、カーネルとミヌだった。

「それだったら私が！！ミナムの部屋に！！」

率先してベッツィーに話し出すカーネルとミヌ

「どうしたんだ？この二人は？」

「「ミナムの魔導師です。」」

二人をしばらくジーット見るベッツィー

「名・・・なんですか？」

「女だろう」

「そうですが。」

「だったら、別々の部屋に。」

ベッツィーの話が終る前にカーネルとミヌは、二人で叫んだ。

「ソウシ様も女です。」

「えっ？」

二人の言葉に驚き、ソウシのほうをしばらく見るベッツィー、やや頬を、赤らめながら

しかし、顔は険しいソウシの姿がそこにあった。

「わかった。とりあえず3人は同じ部屋だな」

その時だった。

コンコン

ドアをノックする音が

「入れ！！」

部屋に入ってきたのは、副長だった。

「艦長、出港準備が整いました。」

「そうか。今から行く」

「碇を揚げろ。！！」

航海中の出来事

ミナム達を乗せた戦艦マリハは、サカオ出港後、南進一路マリハの中心メイジへ向かった。

艦長ベッツィーは船内及び航海の状況報告を受け艦長室へ戻った。

そして、ミナム達を艦長室に呼んだ。

艦長室に向かうミナム達、その中ソウシが自分の体の異変に気付いた。

なんだ？この気持ち悪さわ？そう思いつつも持ち前の気迫で耐えていた。

艦長室についたミナム達にベッツィーが今回の予定を説明した。

「本艦は、まずメイジへ向かいます。」

「メイジ？」

そう言って言葉を詰まらせるソウシ、そして、カーネルが

「メイジって。ビキニの手前のマリハの国でしょ？」

「そうだが・・・」

「それじゃ・・・」

あせるカーネルに対し、至って冷静なベッツィーは胸から差し棒を取り出し、伸ばした後

その棒で机の上の海図を指し示した。

「ここが、ビキニです。そして、カーネルさんの言う通り手前がマリハです。」

「じゃぁ・・・どうして、直接、ビキニへ向かわないのですか？」

「ここが、ルーシー海賊団の本拠地です。この海域にはルーシーとファーファを中心に約２０隻の海賊船がいます。」

ベッツィーが示した先は、ビキニの国の沖合いにある鬼岩島であった。そして、次にマリハの沖合いを示し。

「そして、ここの海域にはにはスクィニーがそして、マリハとビキニの間の海域には、クリオ、キアにはヘイオが展開している。」

そう言って、次々とその場所を指し示した。その状況を聞いたミナム達、いつも真っ先に質問をするソウシだが、黙り込んでいた。

う～気持ち悪い・・・・そう思い必死に耐えるソウシ、ミナムは、ソウシが何も聞かないことをおかしいと思いながらもベッツィーに確認した。

「じゃぁ・・・このスクィニーをまず倒さないと、ビキニへは、行けないってことですか？」

「まぁ・・・そうだ・・・仮に行けたとしても、討伐隊が来たとな

ると、スクィニー、クリオ、ヘイオ、がビキニに集合することになる。」

「ってことは、」

「まったく勝ち目がない・・」

ベッツィーの言葉にしばらく固まるミナムだったが

「じゃぁ・・各個撃破しかないってことか？」

「その通りです。」

「しかし、スクィニーって一体どんな奴だ？」

「スクィニーは、元々マリハを中心とした海賊団で、現在はルーシー海賊団に吸収されています。１０隻の海賊船でこの海域ににらみを利かせてます。」

「うわ～１０対１か～厳しいな・・・」

ミナムの言葉にニヤリとするベッツィー

「大丈夫です。」

「え？大丈夫って？」

「海賊船は基本的に１隻毎で行動します。ですから、１対１になります。それに」

「それに・・・メイジには、コウアとセツの2隻の軍艦が待機しております。」

その言葉を聞いてほっとしたミナム達、その時だった。

「う・・ごめん・・・」

そういい残しソウシが、艦長室から飛び出していった。

「ソウシ殿？」

「ソウシさん？」

「艦長、申し訳ないソウシ殿を連れ戻してきます。」

カーネル、ミヌは、慌てて部屋を飛び出しソウシを探しに言った。

「ミナム殿」

呼び止められたミナム、自分を指差し立ち止まった。

「俺？」

「たぶん、トイレですよ・・ソウシ殿は？」

「トイレって？」

「船酔いでしょう・・・それとトイレはそこを出て、右にありますから・・・」

甲板所へ飛び出したカーネルとミヌ・・・甲板上でソウシの姿を探した。

その頃、ソウシの姿は、ベッツィーの予想通りトイレにあった。

便器に向かいもよおすソウシ・・・情けない・・・一体どうしたんだそう自問自答しながら

身動きが倒れなかった。そんな時だった。

トントン

扉を叩く音がした。そして

「ソウシ殿・・・大丈夫ですか？」

ミナムの声がしてきた、ミナム殿何故？ここが・・・・自分の醜態が恥ずかしい

なんとかせねば・・・

「だ・・・だいじょうぶ・・・・です・・・・」

かすかな声をあげたソウシ・・その声を聞いたミナムがもう一度ノックをしようとすると扉がひとりでに開いた。

そこには、便器を抱え、座り込んでいるソウシの後姿があった。扉が開いたことに気付かないソウシ・・・

ミナムはソウシの横にしゃがみ両肩に手を添えた。そして、耳元で

「ソウシ殿・・・大丈夫ですか・・・」

そのことに驚愕したソウシ、うわぁーこんな醜態・・・見せたくなかった・・・そう思っていたが、ミナムの優しい言葉に戸惑いを覚えた。

その時だった。

「うっ・・・」

もう一度もよおしてしまった。その時、ミナムはやさしくソウシの背中をさすり、

「落ち着いたら休んでくださいね・・・」

ソウシが落ち着いたのを見計らって、すーっとソウシから離れ、しばらくして、コップ一杯の水を汲んできた。

「これでゆすいでください。」

ミナムの言われるがまま、口をゆすいでぐったりしたソウシを見て、

「歩けますか？風当たりの言い場所に行きましょう。」

うつろな目を上げただじっとミナムを見つめるソウシ、その様子を見てミナムは両手でソウシを抱き上げた。

自分の体ふあーと持ち上がった時、、今まで男に抱きかかえられたことのなかったソウシは、

カーっと血が頭に上っていく自分に戸惑いを覚えた、俺は一体どうしたんだ。ただ朦朧とした意識の中

黙って自分を持ち上げ運ぶミナムの顔をジーと見つめていた。やがて甲板に出てきたミナム、その姿を見た

カーネルとミヌが走って近づいてきた。その様子を見て慌てた降りようするソウシだったが力が入らない。

ミナムのそばに来た二人、まずカーネルが

「ミナム、どこに！」

と言おうとして、ミナムがソウシを抱きかかえているのを見て言葉に詰まった。

「ソウシさん・・どうしたんです？」

そう聞いてきたのは、ミヌだった。

「船酔いだ・・・」

ミナムはあたりを見回しながらそう答え、やがて、風通りのよさそうなところにソウシを降ろそうとした。

「船酔いって？」

陸上でしか過ごしたことがないカーネルとミヌは、不思議そうな顔をした。

「船って揺れてるだろう・・・これで・・・人は酔うころもがあるんだ」

ミナムの適当な説明にまったく意味のわからない二人、次の瞬間、ミヌがボソッと

「うらやましぃ・・」

「あのなぁ～・・・」

そう言ってミナムはようやくソウシを降ろした

「ソウシ殿、大丈夫ですか？」

ミナムの言葉をかすかに聞いたソウシ・・・

「ああ・・」

「意外と軽かったですよ」

ミナムの冗談にドキッとしながらソウシは

「バカ・・・」

カーネルがミナムの背中を手で引っ張って

「いいなぁ～」

そんな時、ベッツィーがやってきた。そして、ソウシの様子を見て

ミナムに話しかけた。

「落ち着きましたか？」

「まぁ・・」

「じゃぁ・・・これを・・・・」

ある薬をミナムに渡した。

「これは？」

「宵止めです・・・眠くなるので・・・もう少し落ちついたら飲ませてください・」

しばらくして、ミナムはソウシに宵止めを飲ませ、ベットまで連れて行った。

静かに眠るソウシだった。

しかし、この後、ミナムがどういう目にあったのかは、知りもしなかった。

海賊スクィニーあらわる

部屋に戻ったミナムを待っていたのは、カーネルとミヌだった。

「どういうこと？」

この後ミナムは、二人にこってりと絞られた。そして、カーネルとミヌが部屋を出て行った後、ミナムは、なにもそんな言わなくても・・・そう思っているとある水兵がミナムを呼びに来た。

「夕食です。仕官サロンへきてください。」

「はい・・」

仕官サロンへ行くとすでにカーネルとミヌがそして机にはベッツィーと数人の仕官が座っていた。

「遅れまして・・・」

「いえ・・・さぁ、食べましょうか」

船長の一言で食事が始まった。ミナムが周りを見るとやはりソウシが来ていないそう思っているとベッツィーがミナムの様子を察したのか話しかけてきた。

「カーネル殿、ソウシ殿は？」

「まだ・・・気分が優れないようで・・」

「そうでしたか・・・では、跡で軽い食事でも」

そう言ってベッツィーはボーイを呼んで、ひそひそとボーイに耳打ちした。しばらくして食事が終わりそうな頃、ベッツィーがミナムに話しかけてきた。

「ところででミナム殿」

「はい？」

ミナムが返事をしようとした時だった。バンと扉が開いた

「艦長！！」

「何事だ。」

「か・・海賊船です。」

「近くなのか？」

「まだ、帆先しか見えていません。」

「ということは、敵もこちらを確認しているのか？」

「たぶん、われわれの方へ向かってきております。」

「後手か・・・総員戦闘用意！！すぐ艦橋へあがる。」

「はっ・・・」

この瞬間から艦内は、騒然となった。あるものは武器をあるものは、帆をたたみにマストに登り戦闘に備えた。
外の騒がしい様子に目を覚ましたソウシ・・・気が付くとベットの上に横たわっていた。甲板で薬を飲んだ時までの記憶しかない。ゆっくりと体を起こし、さっきまでのことを思い出していた。
そして、ミナムの腕の中で抱えられていた記憶が蘇ってきた。なぜかその記憶が嬉しい自分がそこにいた。気がつくとミナムが持っていた右の二の腕をさすっていた。
そこへカーネルとミヌが戻ってきた。はっとソウシは慌ててさすっていた手をはずし、二人のほうを見た。カーネルは無言のまま、服を着替え始め、ミヌはソウシの横まで来て

「ソウシさん、大丈夫ですか？」

「何事ですか？」

「海賊が現れたんです。」

「それは」

慌てて起きようとしたソウシだったが立ちあがった瞬間、よろめきミヌにもたれかかった。

「大丈夫ですか？」

「いや・・行かねば・・・」

着替えが終ったカーネルがミヌの肩を叩いた。

「ミヌ、ソウシさんを頼んだわよ。」

「カーネルさんこそ、ミナムさんを頼みましたよ。」

「わかってるわ。」

カーネルはそう言い残し船室を後にした。カーネルを見送ったミヌは、ソウシをベットに寝かそうとした。

「ゆっくり、休んで・」

それに抵抗するソウシだが、ミヌの力に負ける。なぜだ？

「わたしは・・・行かねば・・」

「もう！！言うことを聞いてください！！」

ミヌはソウシを無理やりベットに押し倒した。ソウシの上に乗っかるミヌ・・・

「んっ？」

「ん？」

気が付くとミヌとソウシの唇と重なっていた。２人の唇が離れ呆然とミヌの目を見つめるソウシにミヌは、思わず謝った。

「あ・・・ごめんなさい。」

「いや・・」

ソウシは唇のことより、ミヌに力負けしたことのほうがショックだった。負けた・・・私がこの娘に・・力で負けた・・・そう思いミヌを見つめるソウシ

「そんなに見つめないでくださいよ。照れるじゃないですか・・・」

身を起こしソウシに話しかけるミヌ、しかし、無言のソウシ

「今日はゆっくり休んでくださいよ。」

そう言うとミヌも着替えを始めた。

しばらく、呆然とするソウシ、そして、自分の唇に触れて先日ミナムとキスしたことを思い出した。

そして、またあの悪夢がよみがえってきた。

一方、スクイニーも食事中だった。戦艦発見を聞いて、頬張っていた肉を引きちぎり噛みながら、

「相手は」

「マリハです。」

「マリハだと!!」

「ちょこまかと動く・・・」

「知っとるわい！！2番船、3番船を先に行かせろ、わしは後から行く」

スクイニーはもう一口肉を頬張り、討伐隊がベッツィー・・・か・・・とうとう決着のときが来たな。

そして、昔のことを思い出した。

ベッツィー過去・・・

「頼む！！」

ベッツィーの父に頭を下げるスクイニーの姿があった。その光景に驚くベッツィーの父、ホリー、彼はグレース海軍マリハ方面、戦艦カコの艦長で幾度となくスクイニー海賊団と対決していた．そのスクイニーが突如、乳飲み子を抱え一人でホリーの前にやって来たのだった。

「この娘を頼む！！」

「そう言われても・・・」

目の前でひたすら土下座をするスクイニーに戸惑うホリー、当時ホリー自身もちょうど同じくらいの娘を亡くした頃だった。スクイニーの願いにわしの一存では・・・そう迷っているとスクイニーはさらに続けた。

「何も、聞かないでくれ！！」

スクイニーの姿にホリーも困り果てていた。そこへホリーの妻が入ってきた。

「私が預かろうじゃない・・・」

「お・・お前・・・」

その言葉に驚くホリーをよそ目に彼女はスクイニーの横に行き右肩

に手を触れた。
「よほどの事情がおありのようだね。けど、ひとつだけ効いてもいいかい」
スクイニーは、ホリーの妻の方をしばらく見て、コクリとうなずいた。
「この子のお母さんはどうしたの？」
「生んで・・・すぐに・・・」
「そう・・・これから、この子の母親は、私一人だね」
彼女の言葉に驚く、二人、スクイニーはただ呆然と彼女を見ていた。
ホリーが妻に声をかける。
「お・・・おまえ・・・」
彼女は、ホリーの言葉をよそにその女の子を抱き上げた。
「いい？今日から私が預かるわ」
その言葉を聞いたスクイニーは、地面に頭をすりつけ
「ありがとうございます」
そう何度も叫んだ。

その後、スクイニーは、ルーシー海賊団に破れ、ルーシーの配下になった。

そして、マリハ海域の制海権をとれないことに苛立ったルーシーは、マリハ海域まで来て、幾多の戦闘を繰り返した。

それを持ち前の智力と体力で防ぐホリー、ルーシー自身もホリーのことを賞賛し退却をしようとした時、事件が起きた。

裏切り者のギタがホリーの妻と子供を誘拐したのだった。しかも、ギタは、スクイニーの名をかたり、そして、妻と幼ベッツィーの前でホリーを殺したのだった。

ルーシーとスクイニーがギタの船についた時には、すでに遅かった。偉大な艦長である父ホリーの亡骸にしがみ泣く妻とベッツィーの姿がそこにあった。

その頃、ベッツィーは父親を殺したスクイニーのことを思い出していた。両目を見開き、スクイニー今日こそ決着をつけてやる。

そう言い聞かし戦闘指揮を始めた。

夕暮れの海・・・マリハ沖会戦

艦橋に立つベッツィー、視線の先には三隻の海賊船、スクイニーの艦・・・

「艦長、海賊船3隻、本艦の真正面、距離約2マイル・・・中央に

「よし、全速前進、魔導師を左舷に配備、船首を風下に向けるぞ！！距離1．5マイルで舵を右に取れ！！」

漕ぎ手が必死の形相でオールをまわしていた。

「敵までの距離、1．5マイル！！」

「面舵一杯！！」

「面舵一杯！！」

マリハの針路が徐々に右に変わっていく・・・

一方、スクイニーの方では船首が左に変わっていくマリハの姿が見えた。

「船長！！マリハが左に変わっていきます。」

「そうか・・取り舵一杯！！」

スクイニーはにやりと笑った。

「戦闘準備！！戦闘員は右舷に集まれ！！」

「艦長、海賊船3隻とも船首を右に向けました。本艦と併走する模様です。」

「そうか・・・」

その時だった。ミナムとカーネルが船橋に上がってきたのは、それを見つけたベッツィー

「ミナム殿・・・ここは、危ないので、右舷側へ退避してください。」

「えっ・・でも・・」

「ミナム殿、私がこの艦の艦長です。私の言うとおりにしてください。」

「はい・・・」

ミナムとカーネルは船員につれられしぶしぶ右舷側の開いたスペース待機した。

「なによ！！せっかく応援にきたのに、どう思うミナム！！」

「まあそう焦るなよ」

「だって、腹が立つじゃない」

「まぁ・・そうだけど、俺たち船での戦い方なんて、まったくわからんし。」

「そうだけど・・」

もうっ・・しかたないかとため息をついた

そして、カーネル座っているミナムを見ていたがふと視線を上げるとその先には、なにやら棒状のものが・・・水平線から出ていた。

「なに!!あれ!!」

「えっ・・・カーネルどうした?」

「あれよあれ!!」

カーネルの指差す先にはマストの先端が徐々に水平線から映えてきた。

その頃、船橋のベッツィーにも右舷に海賊船を発見との報告が入った。

「くそ・・・もう1隻・・いや・・2隻いたのか・・」

徐々に迫ってくる海賊船・・・やがて戦艦マリハの左舷には3隻・・・右舷には2隻の海賊船が併走しつつあった。

「海賊との距離、約１マイル・・・」

一方、スクニィーは、不敵な笑みを浮かべ・・・

「まもなく包囲完了です。」

「そうか・・・完了次第、一気に叩くぞ、そして、ミナムとやらの首をとるぞ！！」

「おう！！」

スクィニーの号令に一同呼応した。

ベッツィーは帽子をかぶり直した。

「よし！！帆走用意！！」

「えっ？か・・艦長」

驚く副長を尻目に

「ここで一気に速度を上げってスクィニーの前に出る」

「わかりました。帆走用意！！取り舵用意！！」

「敵までの距離０．５マイル！！」

その報告が入った瞬間

「撃てっ！！」

双方の船から衝波飛び交いだした。

「攻撃が始まった！！」

そう驚くミナム

「あっ！！」

衝波の一部がミナムをかすめた。

「大丈夫？」

心配するカーネル

「大丈夫だ！！」

「もう！！よくもやったわね！！」

カーネルは、思いっきり衝波を放った。

パシューン！！

次の瞬間、海賊船マリハの右舷側にいた海賊船1隻にカーネルの放った衝波が直撃し船首から煙が上がった。
そして、その海賊船の左舷船首が大破した。

一方少し前、戦闘が始まり不利な状況下、船橋にいたベッツィーに報告が入った。

「右舷側、魔導師負傷者多数・・・左舷側・・何とかこらえている状態です。」

その時だった、右舷側から想像をはるかに超える光の矢が放たれ、海賊船の1隻に直撃、左舷船首を大破させた。

その光景を見ていたベッツィーはわが目を疑った。衝波で船が大破するか？・・・

その報告を受けたスクィニー・・

「えっ？　大破しただと・・」

「4番船は戦線を離脱するとのことです。」

「そうか・・・」

一体何が起きた？そう怪訝な顔をしたが、戦闘が激化していき、

まだ帆をはれない状態のマリハを見て・・・

「はやく・・近づけ・・・そして。乗り込むのだ！！」

そう号令するスクィニー

両者とも魔導士による衝波攻撃、投擲機による鉄球、そして、弓矢の応酬を繰り広げていた。

しばらくして、カーネルの攻撃を受けた海賊船は沈没した。

「４番船・・轟沈・・・」

その報告を受けたスクィニー

「なに～！！どういうことだ！！」

「右舷に恐ろしい魔導師が一人いるようで・・」

「たった一人の魔導師だと」

衝波を打ち続け疲れたカーネル。今度は別の船からカーネルあたりへ衝波を集中して打ってきた。

「きゃ！！」

おもわずうずくまったカーネルふと後ろを見るとミナムが盾で衝波を防御していた。

「大丈夫か？カーネル」

「ええ？」

そこへ、コロコロと鉄の玉が転がってきてミナムの足に当たった。

「これは？砲丸？」

片手に盾を持ちそれを拾うミナム・・・これ・・ゴルフボールくらいの重さだな～そう思って何気なし二

右舷を併走する海賊船に向かって投げた。

バキ！！

ミナムが投げた鉄球が海賊船のマストに直撃、マストを折った。

一瞬で右舷を併走する海賊船からの攻撃がとまった。

そこへミヌがあがってきた。

「ミヌ・・どうした？」

「騒がしいと思ったら戦闘が始まっていたのね。」

のんきに答えるミヌ、そこへしばらくやんでいた攻撃が再開した。

「きゃっ！！」

「大丈夫か？」

「もうっ！！」

ミナムの心配をよそにミヌも衝波をうった。

パシューン！！

今度は、海賊船の左舷から煙があがり、左舷中央に大きな穴が開いた。

そして、ミナム・カーネル・ミヌが交互に攻撃を受け残っていたもう一隻の海賊船も沈没した。

その頃、ソウシがふらふらしながら甲板に上がってきた。

「ソウシ様・・・大丈夫ですか？」

心配して近づくミヌをちらりと見たソウシは、目の前の光景を確認して

「だいじょうぶ・・・です。」

と言いつつふらりとミナムに倒れ掛かった。思わず支えるミナム

「ほら・・・言わんこっちゃない・・・・・」

そう言って近づくミヌをよそにカーネルはミナムに倒れ掛かるソウシを見て少しムカッとしていた。

「すみません・・・」

そう言って再び一人で立ったソウシ・・・

「ミナム殿達の戦いぶりを見させていただきました。今度は・・私の番です。」

その言葉に驚くミナム達、しかし、ソウシはふらつきつつも左舷側へ向かった。

戦闘指揮をしながら右舷側の光景を見ていたベッツィー・・・信じられん・・・何なんだあの3人は・・

混乱する海・・・

「なに！！2隻とも沈んだだと！！」

報告を受けたスクィニーは信じられなかった。

「敵がひるんだぞ」

ベッツィーも振り向き、副長に言った

「総帆開け、全速で海賊船の前に出る・・・副長、操船を頼んだぞ。」

「艦長・・・」

「超弩弓を準備・・・俺も戦う！！」

超弩弓、普通の矢と違いこれに衝波を注入し使用する特別な弓矢・・・

これを使いこなせるのは海軍に数えるほどしかなく

その一人がベッツィーだった。

帆を張り終えてマリハ・・・速力を徐々に上げていった。

その様子を見たスクィニー

「全船速力を上げろ・・・」

海賊船の追跡に少し焦るベッツィー

「敵もやるな～」

そう言って超弩弓の弓を引いて、一番近くの海賊船に照準を合わせ放った。

放たれた矢は轟音を轟かせながら海賊船に直撃した。

バキ！！！

右舷船尾付近に直撃を受けた海賊船は、煙を上げ大破し、３本あるマストの船尾側１本が折れて倒れた。

その頃、左舷側に着いたソウシとミナム達・・・飛び交う衝波の中、ソウシは刀を構えた。

「真空波！！」

ソウシはそう叫び刀を振り下ろした。

振り下ろされた刀は、光り輝き、轟音を立てた。刀の先から放たれたその光は

煙を上げ大破し傾きつつある海賊船に直撃し、完全に船体を２つに

追ってしまった。

「船長！！！2番船轟沈！！」

「みりゃ・・わかる・・」

目の前の光景に逆に冷静になるスクィニー・・・顔は完全に青ざめていた。

なんて奴らだ・・・あの4人は・・・

しばらくして・・・超弩弓の直撃を受け、沈没する3番船・・・・

「船長！！」

「本船をぶつける！！全速前進！！」

「船長！！」

「俺が前に立つ！！」

海賊船がまっすく近づいている様子に気付いたベッツィー

「艦長、突っ込んできます！！」

「わかってる。」

ベッツィーは超弩弓を放った。

バキ！！！

ベッツィーの放った矢を刀で跳ね除けるスクィニー

「へっへっへっ」

「な・・なに！！」

跳ね除けられたことに驚くベッツィー

ミヌが衝波を撃つとこれも跳ね除けた。

「えっ！」

驚くミナム達・・・

今度は、スクィニーが攻撃を仕掛けた・・・

「どりゃー！！！」

スクィニーが放った矢は、ベッツィーの超弩弓よりもすさまじいものでった。

「急速回避！！！」

「ま・・・間に合いません！！」

迫り来る光の矢に誰もが目を瞑った。

どーーーん！！！

轟音と共にビリビリっと船体に衝撃が走った。

だれもがしまったと思った時だった。本来この後に来る衝撃波が来ない・・・

攻撃された場所を見るとミナムがその攻撃を盾で受け光に包まれた。

「く・・」

「ミナム！！！」

やがて、スクィニーの放った光の矢が消え・・・そこに立つミナム・・・

攻撃を受け止められたスクィニーも驚愕の色を隠せない

「なに！！」

驚いていると船首マスト攻撃を受け、マストがスパッと海に落ちた。

「くそ！！」

スクィニーの睨んだ先にはソウシがいた。

「なんて奴らだ。・・・このまま突っ込め！！」

「全力回避！！」

「無理です！！間に合いません！！」

「来るぞ！！全員、格闘戦準備！！」

そして、船首が折れたままスクィニーの海賊船がマリハの左舷にぶち当たった。

ズシーンという音と共に振動が船体伝わった。

「それ！！乗り込め！！！」

そう叫ぶスクィニー

「応戦しろ！！」

ベッツィーの怒号が飛び交う。

戦艦マリハになだれ込んでくる海賊達・・・応戦する水兵達！！

ミナム達も乗り込んできた海賊達を次々に倒していった。

一方、ベッツィーの前にはスクイニィーが立ちはだかっていた。

「お前が・・・ベッツィー・・・か」

睨みを利かすスクィニー・・・睨み返すベッツィー

こいつが・・・親父の仇・・・か・・・

甲板の戦い

「くっ・・・・・」

ベッツィーは、船橋まで吹き飛ばされていた・・

「艦長！！」

「この～」

3人の水兵がスクィニーに向かって襲い掛かった。

次の瞬間・・・

ギン！！　鋭い金属音が響き・・・水兵は3人とも真っ二つになった。

「な・・・なんて・・・やつ・・・・」

スクィニーに圧され、ジリジリ下がる水兵・・・

「ふふふ・・・この船の船長もこの程度か・・」

不敵な笑みをふかべるスクィニー・・・

少し前のこと戦艦マリハになだれ込んできた海賊達・・・

その中でスクィニーと対峙したベッツィー・・・

刀を数回交わした時、隙をつかれ吹き飛ばされたのであった。

数人の水兵がスクィニーに飛びかかろうとした時だった。

「待て！！俺の相手だ！！」

そう叫び立ち上がったベッツィー・・・

「艦長・・・」

「大丈夫だ・・」

「ほう・・いい根性してるじゃねぇか！」

再びベッツィーとスクィニーが刀をかわす・・・

火花をチラシ金属音が高く鳴り響く！！！

「どうした・・こんなものか・・・」

海賊達を追い払いつつ、艦長ベッツィーが戦っているところまで来たミナムとソウシ・・・

その光景を見ていたソウシが思わずつぶやいた

「まずい・・・」

「何がまずいんだ!!艦長の気迫がすごいじゃないか。」

「あれは・・・怒りだ」

「えっ?どういう・・・?」

そこへカーネルとミヌがあらわれた。

「あれ・・・」

ソウシがベッツィーを指差したら。ちょうど、スクィニーとつばぜり合いをしていた。

「突き飛ばされるぞ。」

ソウシがそう言った瞬間、ベッツィーが突き飛ばされ、すぐに立ち上がり刀を構えた。

「でも・・なぜ・・」

「怒りだけだと・・・闘気に乱れが出る」

「闘気って?」

「闘うときの力の源だ。これを元に俺の真空波や魔導師の衝波・・・さっきの超弩級が出せるんだ。そして、闘う時の力も・・・」

「そうなんだ・・でも何故駄目なんだ？」

「闘気は、自分でコントロールするものだ。コントロールできなければ、力は半減する」

「そんなもんなんだ。」

ポカンとした表情のミナム

「そんなもんって・・・ミナム殿・・・ひょっとして・・」

「俺・・そんなこと考えたことない・」

あきれるソウシがミナムを見ていたら今にも飛び出そうとした。

「ミナム殿！！」

「あいつは、この艦の艦長だ・・・助けないと」

そういい残し、ミナムは飛び出した。

「あ・・」

ミナムが飛び出した後、ソウシたちが続こうとしたが目の前に2人の海賊が行く手を塞いだ。

「お前らの相手は・・こっちだ」

「く・・」

ベッツィーの焦り

「貴様！！！この程度か！！！」

そう叫んで、ベッツィーをまた突き飛ばしたスクィニー

くそ・・・なぜだ・・・なぜ・・・負ける・・・親父力を貸してくれ・・・

「なにを！！！」

体制を建て直し、スクィニーに切りかかるベッツィー

「まだわからんのか！！！」

ギン！！！

今度は、刀を飛ばされ、剣先を目の前に指されたベッツィー

「あ・・・」

その時だった。

「待て！！」

カーン！！！

「何じゃ！！」

スクィニーが声がした方を見ると、刀が刃を横にして顔面に直撃している男が立っていた。

なにやつ・・・こいつだろ・・・さっき。待てと言ったのは・・・

不思議そうに見ていると

ハラリと刀が落ちた。顔に直撃した部分を赤く腫らしながら

「痛かったぞ！！！」

そう叫んで近づいてくる。

「何奴・・・」

「俺がミナムだ！！！」

そう言って刀を抜いた。

「貴様が・・・ミナムか・・・まず貴様から血祭りにしてくれる！！」

二人の剣先が交わり火花が飛び散った。

ギン！！

次の瞬間、ミナムとスクィニーの剣が交差し、つばぜり合いになった。

「ぐ・・」

なんてパワーだ・・・今までの奴とは全然違う・・ミナムは、剣に力をこめた。

しんじらん・・・こんな小さい奴にこんなパワーがあるなんて、スクィニーも驚愕していた。

そこへソウシ達がやってきた。

「ベッツィー殿、大丈夫か！！」

「ああ・・・大丈夫だ」

そう言って目を見開き起き上がるベッツィーは刀を探した。

「ベッツィー殿！！」

声をかけベッツィーの刀を差し出すソウシ・・・

しかし、それに気がつかず刀を探すベッツィー
奴を倒さねば！！焦りだけが彼を襲った。
それを見ていたソウシは大声で
「ベッツィー殿！！」
はっ目の前に刀に気付きベッツィーは、スクィニーに向かった走っていった。
「待て！！」
その頃スクィニーとミナムのつばぜり合いが続いていた。
「ぐ・・」
「ぐぉぉおお！！」
ギン！！
お互いの刀が火花を散らし、お互いを突き飛ばした。
スクィニーとミナムはお互いの力で後ろに３ｍほど飛ばされた。

その光景を見たカーネルが驚きを隠せなかった。

「ミナムが跳ね返されてる・・・」

「そんな・・」

戦場での驚き

スクィニーも刀を構えなおし、ミナムを睨み返した。

「やるな・・貴様・・・」

その時だった。

「貴様の相手は、俺だ!!」

そう言って、ベッツィーが入ってきた。

あ・・・おれの・・・とポカンとするミナム・・・

「貴様なんぞ用ないわ!!」

切りかかってくるベッツィーの剣を軽々とかわすスクィニー

そして、

ベッツィーの剣を受け止めはじいた。

「あ・・・」

よろめきスクィニーに背中を向けたベッツィー

しまった・・・

ザッ！！

「う・・・」

スクィニーは返す刀でベッツィーの背中を切った。

間一髪、背中の皮を掠めたスクィニーの剣・・・

そして、スクィニーは、ベッツィーの尻を蹴った。

そのまま飛ばされるベッツィー・・・

ポカンとしていたミナムの方へ、向かった飛んでくるベッツィー

「えっ！！」

ドン！！

「うぁぁあああ！！」

ドシーン！！

ベッツィーと共に後ろに吹く飛ばされ、船橋に叩きつけられた。

「ミナム殿！！！」

「ミナム！！」

カーネル・・ミヌ・・・ソウシは、二人の方へ駆け寄った。

そして、その光景を見て驚愕した。

船橋に叩きつけられた衝撃で偶然にも二人の唇が重なっていた。

気がつき驚く二人・・・

「あ・・」

「何してんのよ！！！男同士で！！」

カーネルの声が響いた。

慌てて状態を起こすベッツィー

「すまむ・・」

「こちらこそ・・・」

次の瞬間、ベッツィーの鎧の前がペロンとはだけ・・・

ミナムの前に女性の胸が現れた・・・

「え・・・？」

「あ・・・」

思わず胸を隠すベッツィー・・・

そこへ後ろからスクィニーが近づいてきた。

「そろそろ終わりにしようか！！」

ミナムは慌てて起き上がり、スクィニーの剣を受け止めた。

「まだだぜ！！」

ベッツィーVSスクィニー

「カーネル！！ミヌ！！艦長を早く！！」

そう叫んでベッツィーを運ぶ3人

ソウシはベッツィーの背中を見てすぐに手当てを施した。

「大丈夫・・皮を掠めた程度だ。」

「ああ・・」

なんということだ・・・スクィニーにも勝てず・・・女だとばれてしまった。

そう落ち込見ながら服を着替えるベッツィー・・・

そこへソウシが話しかけた

「ベッツィー殿・・・・何をそんなに怒っておるのだ。」

ベッツィーはソウシを睨んだ。

「怒ってなどおらぬ」

「そうかな・・・」

「そういう意味だ」

「超弩弓をつかえるほどだったら。あのようなことはあるまい」

「それに・・・あのミナム殿も五分五分ではないか・・」

ベッツィーがそう話していると横から服と鎧を準備していたカーネルとミヌの声が聞こえてきた。

「カーネルさん。どのくらい魔法かけてます。」

「かけてるって？」

「だからミナムさんの力を制御する・・・」

ミヌの言葉に・・・・しばらく、固まるカーネル・・・そういえば・・・・

あの時から・・・ずっと・・・全開でかけっぱなしだった。

「カーネルさん？」

「あ・・・ごめん・・・そのままだったわ・・・そういうミヌは？」

「私もなんです・・・」

「ってことは？」

「そう・・・あの逢坂の関も・・・・」

「じゃぁ・・・・」

「さっきの戦いを見て思い出したの」

「今はずしたら・・・」

「まずいです・・・たぶんこの船がもなたいかも・・・」

「じゃぁ・・・」

「「どうしよう・・・」」

その話し声を聞いたソウシは、たぶんそんなところだろう・・・思っていた。

前のアクバの戦いや京へ向かう時、ミナムの力を目にしていたソウシには

ミナムの動きが遅いことに気付いていたのだった。

一方、ベッツィーは、驚きの表情を隠せなかった。

そこへソウシは再び話しかけた。

「ベッツィー殿あなた次第でこの戦の勝敗が決まります。何に怒っているのかはわかりませぬが。今はスクィニーを倒すことに集中し

なさい。」

「私は、怒ってなどおらぬといっておるでしょうが・・・」

「ならば、ここで休んでください。私かミナムのどちらかがスクィニーを倒してきます。」

その言葉を聞いて、ようやくわれに返ったベッツィー・・・そうだ・・・奴を倒しさえすればよいのだ。

しばらく目を瞑り・・・

そして

目を開いた・・・・

「私はこの艦の艦長です。私がやります。」

「そうですか。」

ベッツィーはゆっくりと立ち上がり剣を手にした。そして、スクィニーの方へ向かっていった。

ベッツィーを目にしたスクィニー・・・

ベッツィー・・・そう思っていると

「ミナム殿!!後は私に任せてください。」

そう言ってベッツィーがミナムの前に立った。

「ベッツィー殿、大丈夫ですか？」

「ああ・・・・」

ベッツィーが剣をかまえたのを見てスクィニーは叫んだ

「貴様・・性懲りもなく出てきやがって・・今度こそこの刀の餌食にしてくれる！！！」

そして、剣先が数回火花を散らし二人はすれ違った。

次の瞬間・・・スクィニーは倒れこんだ。

裏切りのギタ

甲板にうずくまるスクィニー・・・

スクィニーの船が煙を上げ後方から崩れていった。

「艦長！！」

「どうした！！」

「海賊船が・・・もう一隻！！」

「なに！！海賊船だと！！」

副長が指差す方を見ると見たことがない海賊船が

「何だ・・・あれは・・」

その時だった！！

海賊船から攻撃が来た。

「危ない！！！」

ベッツィーが気がつくとスクィニーの腕の中にかくまわれていた。

「スクィニー！！！」

スクィニーは海賊船からの攻撃の直撃を背中で受けた。

「ふふふ！！！これでスクィニーもいなくなったわ！！」

その光景を見て喜ぶギタ・・・

この時を待っておったのだ・・・後は・・・あの艦長の首を持っていけば俺も・・・

「乗り込むぞ！！」

「おう！！」

「船長！！」

「何だ！！」

「戦艦から攻撃です！！」

「何！！」

ギタの海賊船右舷にミナム達の攻撃が直撃した。

「くそ！！早く乗り込めー！！」

大破した海賊船からギタたちがなだれ込んできた。

再びマリハ甲板は、混乱に陥った。

一方・・・

甲板に倒れこみ血が滲み出すスクィニー・・・

「なぜ・・・おれを・・・」

じっとスクィニーを見つめるベッツィー

「いい格好だな～スクィニー」

後ろ振り返るとそこには、ギタ海賊団がいた。

「ギタ・・・貴様・・・」

ギタはにやりと笑い

「これでこの海域は俺様のものだ!!」

「好きにはさせんぞ!!」

ベッツィーは刀を構えなおした。

その様子を見たギタ・・・

「好きにさせんぞ・・・だと・・・笑わせんな。貴様!!」

そう言ってベッツィーをじっと見て

「ほう・・・貴様・・・あのホーリーの息子か・・・」

「何！！」

「今から貴様の親父と同じのところへ送ってやるよ。親父と同じようにな・・」

その言葉に眉をひそめ睨みつけるベッツィー

「貴様・・・今・・・なんて言った。」

「ど・・・どういう・・意味だ！！！」

そう叫んだのは瀕死のスクィニーだった。

カカカと笑いギタは、真顔で

「あら・・・スクィニー・・・まだ生きてたの・・・ちょうど・・・いい・・冥土の土産に教えてやる。ホーリーを殺したのは俺だ！！」

「なに！！」

過去の出来事

「貴様！！今何て言った。」

そう声を絞るスクィニー

「俺様が・・スクィニー・・貴様の名を借りて殺したんだよ・・・・ホーリーを・・」

その時、ベッツィーの記憶がよみがえって来た。

さらわれて来たベッツィーとその母は、ある砂浜にいた・

その前に立ちスクィニーを名乗っていたのはこいつだ・・・・

その映像が戻ってきた。

そこに一人であらわれた父・・ホーリー・・・・

「娘と妻を解放しろ！！」

「貴様を殺してからな・・」

そういうギタ・・・・に

「船長！！」

「どうした。」

「ルーシー様がもうすぐ到着します。」

「まずい・・・」

そう思ったギタは・・・

「ホーリー悪いが死んでもらう！！！」

ズバッ！！！

そして、ホーリーの妻を気絶させた。

しばらくして、ルーシーとスクィニーがやって来た。

「誰だ。俺の名を語っている奴は・・・」

「そう焦るなスクィニー・・・そんな奴は私がゆるさない」

ルーシーに諭されながらスクィニーは、ホーリーが呼ばれた海岸に着いた。

そこには、ホーリーの遺体に泣きつくベッツィーの姿が・・・

その姿を見て唖然とするスクィニー・・・声がでない・・・

「なんてことを！！！こんな卑怯なことをする奴は誰だ！！！」
そう大声でルーシーが叫んだ・・その様子を見て、笑顔が一瞬でひきつったギタ
やばい・・俺が殺ったとわかると俺の命があぶない・・・
するとルーシーがギタの方を向いて問いただした。
「ギタ・・・お前がやったんか？」
「ち・・・違う・・・俺じゃない・・・俺たちが来たときにはすでにこうなっていた。なぁ・・」
ギタの言葉に海賊団一同がうなずく・・

「やはり・・・貴様だったか・・・」
そう言って立ちあがろうとするスクィニーだったがもはやそこまで体力がなかった・
くそ・・・これまでか・・・
その時だった。

「き～さ～まぁあああ！！！」

対魔シールド

「なぜだ・・・」

剣をギタに振り下ろすベッツィー・・・おかしい・・・何故そんな簡単によけられる・・・

ソウシ達はギタ海賊団を次々と倒していた。

一方、スクィニー海賊団もギタ海賊団に切りかかっていった。

「船長の弔いだ!!!」

ベッツィーとギタの戦いが続いた。

そして、ベッツィーは隙を突かれ、刀を飛ばされた

しまった・・・・そう思ってたベッツィーを見たミヌ

「あぶない!!」

そういって、衝波をギタに向けて撃った。

「む!!」

そう言って盾を構えるギタ・・・

ミヌの衝波が直撃したがはじかれた・・・

「えっ？」

驚くミヌ・・・

「貴様！！」

ミヌに切りかかろうとするギタだったが、今度はカーネルが衝波を撃った。

同様にカーネルの衝波もはじかれた・・・

どういうこと？

驚くカーネルとミヌ・・・

その様子を見ていたソウシ・・あれは・・・対魔シールド・・・

ということはどこかに魔導士が・・・あたりを探した。

すると黒ずくめの魔導士を見つけた。

あれか・・・そう思いソウシはその魔導士の方へ向かった。

一方ギタは、カーネルとミヌに近づいていった。

「貴様ら～！！」

少しずつ後退するカーネルとミヌ・・・

「許さん！！どういたぶってくれようか。」

そこへ

「待ちやがれ！！」

そう言ってギタの前に立ったのはミナムだった。

「なにやつ！！」

黒ずくめの魔導士

「誰でもいいだろう・・」

そこには、スーツ姿のミナムが右手に刀左手に盾を持って立っていた。

「貴様!!俺を馬鹿にするのか?」

ギタがそう思った瞬間、ミナムは目の前まで迫り切りつけた。

ギタは盾を構えミナムの剣を受け止めようとした。

スパッ!!!

「おわ〜」

ギタが構えた盾が見事にスッパリと切れ・・・慌てて頭を下げるギタ・・・・

間一髪ミナムの剣を交わしたが、頭は河童のようにてっぺんだけ見事に

髪の毛がそられてしまった。

慌ててミナムから離れるギタ・・・

「あぶね～」

ほっとしたとき髪の毛がどばっと頭から落ちてきた。

「あれ？」

頭をさするギタ・・・手の感触には頭頂部だけつるつるの感触が・・・

えっ・・・なんて奴だ・・・・

そう思っていた時だった。ミナムが鉄球を投げてきた。

あんな鉄球・・・この対魔シールドがあれば・・・当たっても知れてる・・・

目の前を見ると剛速球が・・・大丈夫・・・ほら・・・

そう思うと目の前に来ていた剛速球が消えた。

次の瞬間・・・・

「う・・・・・」

声の出ない叫び声を上げギタは、股間を押さえ前のめりに倒れこんだ。

ミナムが投げた鉄球は、ギタの股間を捉えたのであった。

なぜ・・・対魔シールド・・・が効かない・・・その光景を見ていた黒ずくめの魔導士・・・

そう思っていると

「貴様!!何奴!!」

魔導士が振り向くとそこにはソウシが立っていた。

「くっ・・ソウシ・・・」

そう叫ぶとその魔導士はソウシに向け鉄砲を発砲した。

パン!!

「うっ!!」

弾丸は、ソウシのわき腹を掠めた・・何とか交わしたソウシだったがそのままマストから転落した。

ドン！！

「ソウシ殿！！」

驚き近づくカーネルとミヌ

「大丈夫ですか・・・」

「ああ・・何とか・・・」

倒れ込むソウシ・・・あの声は・・・たしか・・そう思いながら気絶した。

一方、ギタは泡を吹いて倒れていた。

黒ずくめの魔導士は、まずい・・・・そう思い、ギタを操った。急に起き上がるギタ・・・

その様子を見て集まった。ベッツィー、ミナムそしてスクィニーの手下たちは思わず剣をかまえた、

その時だった・・・ギタは宙に浮き

「退却だ〜！！」

そう叫んで空中を逃げるギタ・・・

慌ててベッツィーが超弩級を撃った

パシーン！！

「はじかれた・・」

ベッツィーがそう思っているとミナムが飛び上がり刀を振り下ろした。

スパーン

何とかよけたギタだったが、左手をすっぱりと切られていた。

その様子を見ていた黒尽くめの魔導士は、驚いた・・・

くそ・・なんｔ・・やつ・・・対魔シールドが効かぬ・・・

そしてミナムに向け鉄砲を発砲した。

パン！！

「うわ！！」

盾をに身を潜めたミナム・・・

弾丸はそれていた。

ミナムが盾から顔を出すと

左手を切られたギタであったが無言のまま・・・

はるか向こうに逃げていった。

戦のおわりに・・・

残されたギタの仲間たちは、大慌てで、海賊船に乗り込み脱出した。
そんな混乱の中、ミナムはソウシが倒れているのを見つけ駆けつけた。

「大丈夫ですか？」

声をかけるが反応がない。そこへ、カーネルとミヌが

「あそこから落ちて・・・」

「そうか・・」

そう言ってミナムはソウシを抱き上げようとする・・

それを見て、嫉妬するカーネル・・・

そこへソウシを見ていたミヌが話した

「ミナムさん・・大丈夫ですよ・・・たぶん打撲だけだと・・」

「しかし・・・脇から・・・」

「これは魔法で直せるから・・わたしたちの船室へ連れて行きましょう」

こうしてミナムはソウシを彼女らの船室へ連れて行った。

一方、スクィニーはまだ生きていた・・・
しかし、もはや虫の息だった。
呼吸するのも困難な状態で
苦しみながらも・・・
「よくやった・・・よくやった・・・」
そう何度もつぶやいた・・・・
それを聞いていたベッツィーは次の言葉に驚いた。
「わが娘・・ベッツィー・・・よくやった・・・」
「えっ？」
スクィニーの言葉に驚くベッツィー
「スクィニー・・・今なんと・・・」
もう声が出ないと悟ったスクィニーは懐からある首飾りを出した。
ベッツィーはその首飾りに見覚えがあった。それはベッツィー自身が持っていたものと同じだったからだった。

「こ・・・・ごふっ・・・・・こ・・・・れ・・・・を・・・」

そういい残し、スクィニーはこの世を去った。

「船長～！！！」

そう泣き叫ぶスクィニー海賊団たち・・・・

そこへ、ミナムが戻ってきた。

「どうしたんですか？」

「スクィニーが今亡くなった・・・」

そう・・・さびしそうに語ったのはベッツィーだった・・・

今まで、親父の仇・・・・そう信じてきた・・・・しかし・・・・

今度こそ・・・あの・・・ギタを・・・

そう心に誓っていると・・・・

「ベッツィー様・・・お願いがあります。」

そう言って土下座をする海賊達・・・・

「なにか・・・」

「船長の亡骸を持っていっても・・・・・」

「しかし・・・・・」

「頼む・・・海賊とはいえ俺たちのおやじなんだ・・・・・・」

その言葉に胸が痛むベッツィー・・・そうか・・・こいつらにとっては親なんだ・・・

「わかった・・・・」

「艦長！！！」

そういう副長に手で制したベッツィー・・・

「あと・・・もうひとつお願いがあるんだけど・・・・」

「まだ・・・あるのか・・・あまりへんなことを言うと・・・・さっきの約束はなしにするぞ・・・・」

海賊達はしばらく固まった・・・しかし

「俺達も・・・あんた達と一緒に行動させてくれ・・・足手まといかもしれないが・・・・」

「それは・・困る・・・・」

「いや・・・ただ・・・ちゃんと・・・離れて・・行くから」

「なぜだ？」

「船長の敵をとりたいんだ。ギタの奴・・・」

「そうか・・・しかしお前らの船もひどい状態だぞ・・・」

「それは・・・」

そこへ副長がボソッと言った

「マリハの沖島に民間ドックがあるます・・・艦長」

「そうか・・・」

「えっ？」

二人の会話に驚く海賊たち

「民間のドックに入るのは自由だしな・・・」

「艦長・・・われわれの管轄外ですし・・・」

顔を合わせ喜ぶ海賊達・・・・

「ただし・・・今度、へんなことしたら・・即、沈めるからな・・」

「ありがとうございます。」

そう言って海賊達は、スクィニーの亡骸と共に1隻残った海賊船に戻っていった。

「艦長・・・」

「副長・・・かなりやられましたな・・・」

「そうだな～・・・・」

そこへミナムが話しかけた

「これからどうされるのですか？」

「ミナム殿か・・・これから・・・メイジではなく、オイオイへ向かいます」

「オイオイ？」

「艦を修理するドックのあるところです・・・」

そう言ってベッツィーが倒れこんだ。

「艦長！！！」

「ベッツィー殿！！」

慌てて支えたミナム・・・・ふと背中に手を回すと血がべっとりとついていた

「副長・・・後はたのむ・・・」

ベッツィーが副長に話しかけると・・ミナムがひょいっとベッツィ

ーを抱えあげた・・

その様子を見た副長は

「ミナム殿・・・医務室へ・・・後は私がしますから」

その頃、ギタは、船に揺られ航海している中、気がついたそして、自分の左手の激痛に叫んでいた。

くそ・・・あの・・・やろう・・・今度あったらただじゃおかねぇ・・・

数日後

ギタはルーシーの前にいた。

「なに？　スクィニーが死んだと・・・」

驚くルーシー

「しかも奴は、裏切ったんですよ。だから・・・私が左手と引き換えに奴を殺りました・・・」

「そうか・・・ご苦労だった・・・」

ギタを追い払ったルーシーは、しばらく無言で海を見ていた。あのスクィニーが裏切っただと？

ギタの奴・・・今は・・・生かしてやる・・・

「ルーシー様・・・」

「なんだ・・」

「やはりマリハと交戦したようです・・・」

「マリハだと？」

「艦長は、ベッツィーです。」

その言葉を聞いて、なんとも不思議な縁よのう・・・あの・・・ホーリーの息子か・・・

軍港　オイオイ

戦いを終え傷ついた戦艦マリハ、静かに湾に入って行った。

湾の奥には、造船所が・・・やがて・・・マリハはいくつかあるドックの人に入って行った。

その頃、ソウシは目を覚ました。

「ここは・・？」

「ソウシさん・・・」

ソウシの目にはカーネルトミヌの顔が入ってきた。しかし、ソウシは気がつくとミナムを探していた。

「どうしたんですか？」

カーネルの言葉でソウシは、何をしてるんだ？わたしは・・・

そして、あの黒ずくめの魔導士を思い出した。

「ここは？」

「マリハの中ですよ・・・」

「もうすぐ、オイオイに着くそうです。」

カーネルとミヌの返答に気が抜けるソウシ

そうか・・・わたしは？ふと横を見るとベッツィーが寝ていた

「カーネル殿・・・何故？ベッツィー殿が・・・」

そう言って起き上がろうとするソウシ・・・・わき腹の痛みが彼女を襲い

起き上がることが出来ない・・・

「ソウシさん・・・無理しないでください・・・」

慌ててミヌがソウシを寝かせようとする。

「ミヌ殿・・ところで・・・」

「ベッツィーさんのことですか・・・」

スクィニー、ギタ達との戦いが終わり、倒れていたソウシ

それを見つけたミナムはソウシを抱きかかえ船室に連れて行った。

その話を聞いたソウシは驚いて言葉を漏らした。

「えっ・・・私を抱きかかえて・・・」

平静を装うソウシだが・・・・前に抱きかかえられたことを思い出すと胸の鼓動が高ぶった。

そこへカーネルが話を続けた

「そうよ・・・船室に寝かしつけた後、わたしたちが治療したんだから・・・」

「そうでしたか・・・なんとお礼を言えば・・・」

起き上がれないソウシ・・・こんなはずでは・・・

「ところで・・・ベッツィー殿は、」

「ああ・・・艦長は、しばらくしてミナムが連れて来たの・」

それは、二人がソウシの治療をしているときだった。ドアからノックする音が

「ミヌ見てきて・・」

ミヌがドアを開けるとそこにはソウシが立っていた。

「ソウシさん?」

「ベッツィー艦長を頼む」

そう言うとミナムは、部屋に入ってきた。

「ちょっと待って！！」

そう叫ぶソウシ・・・わたし・・・今上半身裸じゃない・・・

「どうしたんですか・・ソウシさん？」

「その時って・・・ひょっとして・・・わたし・・・裸？」

「そうだけど・・・」

あっけらかんと答えるカーネル・・・そしてミヌと顔を合わせ・・・

「裸見られたのが恥ずかしいの？」

「あ・・・」

顔を真っ赤にするソウシ・・・・

「ソウシさんってかわいい・・」

そういうミヌの声は見られたという羞恥心にかき消されていたがカーネルの一言がソウシを救った。

「大丈夫よ・・・すぐに・・・シーツをかぶせたから・・・」

ほっとするソウシ・・・よかった・・・

そう思っているとカーネルがボソッ言った一言で、ソウシは再び顔を真っ赤にしてしばらく無言になった。

「この間・・お風呂で見られているから・・・」

ちょうどその頃ベッツィーが目を覚ました。

「ここは？」

ベッツィーが目を覚ましたことが艦内にながれた。

そして、戦艦マリハはオイオイ海軍工廠に入港した。

オイオイにて

京では、ミナム達がマリハ沖会戦で、スクィニー海賊団の船長スクィニーを倒し6隻の内4隻を沈めたと報告が入ってきた。その報告に沸く京の人々は、ギオン独立以来久々の大勝利に酔っていった。それを気に食わないミカドがそこにいた。そして、海軍大臣が直立不動で報告をしていた。

「陛下、今回の会戦は、戦艦マリハの活躍で・・・」

「そうか・・・」

「スクィニーを倒したのは、ベッツィーです。」

「ベッツィーか・・・最年少艦長の・・・」

「は・・・」

「そうであたったか。今回の海軍の働き、大儀であった。」

「ありがたきお言葉・・・」

一方、ドックに入った戦艦マリハの艦長以下、全ての乗組員はオイオイの町に繰り出していた。ミナム達は、艦長ベッツィーから説明を受けていた。

「マリハの修繕には約１０日間かかります。その間、ここオイオイに止まることになります。その間、十分に休養をとってください。」

「そうですか・・」

「ところで、ソウシ殿は、大丈夫ですか？」

「ええ・・・まぁ・・・何とか・・・」

「そうですか・・・」

「それでは、ごゆっくりと・・」

そういい残して、ベッツィーは去っていった。指定された宿の戻ったミナム達、オイオイ飯店にて食事を取っていた。

「１０日間の足止めか・・・」

「そうですね。」

「ソウシさん・・・これからどうなるんですか？」

「たぶん・・・マリハに乗ってルーシー海賊団との戦いになると」

そこへベッツィーが入ってきた。

「何の話ですか？」

「ルーシー海賊団とのことですよ。」

「そうですか・・・今回の戦いで6隻の海賊船は使用不能に・・・
しかし、マリハ沖にはまだ4隻の海賊船が残っています。」
「ということはこいつらをやらないと次にいけないってことか・・・
」
その言葉を聞いたベッツィーはにやりとして、
「このうち3隻は。無視してもよいでしょう。」
「それは?」
「スクィニーの部下だった3隻はたぶん今回の件でギタを敵にする
はず・・・」
「じゃぁ・・・1隻をやればいいんか?」
ソウシの言葉にしばらく黙り込むベッツィー
「いや・・・ギタは・・・今頃ルーシーのところだろう」
「じゃぁ・・・ルーシはマリハ沖に来るってこと?」
「今こられたら一たまりもありません。たぶんクリオが出てくるか
と・・ところで」
ミナム達を見回したベッツィーは頭を下げた。
「この間は、助けていただきありがとうございました」

「いや・・・お礼なんて・・」
そう答えるミナムを見て
「ところで何故わたしをあの部屋へ？」
「ベッツィー殿が女性だったから・・・確か軍医・・男だろう？」
ふとあの時のことを思い出したベッツィー・・・
服がはだけて・・・・キ・・ス・・・？
顔を赤らめ少しうつむき黙ってしまった。
まずい・・・そう思ったソウシが
「ところで？黒ずくめの魔導士を見ませんでしたか？」
「黒ずくめ・・の魔導士？って」
「ギタについていた魔導士です・・・」
「何故・・そんなことを？」
「いや・・・気になったもので・・・特に、ギタの対魔シールドが気になったもので・・・」
「確かに・・あのシールドはすごかった。けど」
「けど？」

「何故ミナム殿の攻撃は防げなかったのでしょうか？」

その言葉に驚くソウシ・・・

「それは、まことか？」

「ああ・・ソウシ殿、ギタはミナムのなぜか・・・攻撃を防げなかった」

そこへミヌが口をはさんだ。

「ひょっとして？対魔シールドって、魔力で増幅した攻撃を防ぐものですよね」

「そうですけど・・・なぜ？」

「実は、ミナムには、ある魔法をかけています。」

「それは、初耳だな？」

ミナムがそういうとミヌは慌てて、言葉を濁した。

「あ・・いや・・・・」

それを見ていたカーネルがミナムに耳打ちをした

「ミナム・・・・ちょっと・・・」

「なんだい・・・カーネル」

「ちょっと・・・こっちへ」

こうして二人はその場から出て行った。

「ところでさっきの話ですけど・・・」

そう話を戻したのはそうしだった。

「ミナムには、魔法をかけています。私とカーネルの二人で・・・」

「一体どんな魔法？」

「力を抑える魔法・・」

「力を抑える魔法？」

「そう・・ミナムの力を抑える魔法です・」

「ミナムの力を抑えるって？」

そうか・・・力を抑えるから対魔シールド効かなかったのか・・

その頃ミナムはカーネルとふたり・・・月夜に照らされていた。

消えた二人

オイオイ飯店を出た二人・・・しばらく歩いて湾内のある岸壁にいた。そこは、改進橋と言う対岸の海軍工廠へ渡る浮き桟橋が見える場所だった。
二人は月に照らされたその海を見ながら、とある一角に座り込んでいた。

「カーネル・・・」

その雰囲気に身を任せたい・・・そう思うカーネルにミナムが話しかけた。

「カーネル・・・この戦いが終ったら・・・正式に結婚しような・・・」

「えっ？」

「ミヌのことは、俺にまかせて・・・」

ミヌのこと？彼女を抱いておいてどうするつもり？そう思うカーネルだったが・・・ミヌのことは、私にも問題が・・・

そう思い返すカーネル・・・

「まかせるって？」

「この戦いが終ったら、俺がはっきりさせるから・・・」

その言葉を聞いたカーネルは、しばらく、ミナムを見つめた。

カーネルを見つめなおすミナム・・・

カーネルは、ただ、ミナムを見つめ固まってしまった。

え・・・この顔は？・・・ひょっとして・・・カーネルの期待が募っていく・・・そこへミナムの顔が近づいてきた

ひょっとして・・・カーネルの胸の鼓動が高鳴る・・・・

え～！！！顔が近い・・・てば・・・そう思っていると唇が重なった。

・・・・・

月夜の明かりの中、二人はあの契りを結んで以来のキスをした。

うわ～・・・うわ～・・・・・

カーネルの心臓は、契りを結んだ時より、はるかに爆発寸前だった。

そして、二人は月明かりに照らされた海を見て、しばらく寄り添って座っていた。

無言で歩く二人・・・

そのままミナムの部屋に・・・・・

カーネルが目を覚ますと横にはミナムの寝顔が・・・

こんな幸福が・・・

昨日のことを思い出す・・・・

ミナムの腕の中の記憶を・・・

カーネルは幸福に浸っていた。

そんな時にミナムが目を覚ました。

「おはよ・・」

「おはよ・・」

布団の中、掛け布団で顔の半分を隠すカーネル

「よく眠れた？」

無言でうん・・うん・・・と二回うなずくカーネル・・・

う～ん・・・しあわせ・・・

そう思っていた・・・・しかし、ふと我に返ったカーネルは、慌てて布団から出た。

無言で・・・・わたし・・・・・もどるから・・・

こうして、ミナムの部屋を後にしたカーネル・・・

幸せ一杯の気持ちで廊下を歩いていると、

「カーネルさん・・・」

ミヌが呼び止める声が・・・カーネルが振り返るとそこにはミヌが立っていた。

「ミヌ・・・」

「ミナムさんと?」

「・・・・・」

「そう・・」

ミヌの言葉に返すことが出来ないカーネル・・・・その時だったソウシは二人を見つけ思わず身を潜めた

「カーネルさん・・・私・・わかっていたの・・・・だけど・・・・」

「だけど・・・・？」

「今のままでもいいの。」

ミヌの言葉に驚くカーネル・・・何うそ言ってるの？普通自分のものにって・・・そこへミヌの言葉が重なった。

「ミナムさんの力になりたかったの。ただ・・・ただ・・・それだけなの・・・・」

「ミヌ？何に言ってるの？」

「・・・・・」

ミヌは今にも泣きそうな顔をしていた。それをこらえカーネルの質問に答えた。

「わたしは・・・・」

「何言ってるの好きなくせに！！」

しばらく、無言のミヌ・・・そしてソウシはその言葉に動揺した

何故私が動揺する？

一方ミヌはただ俯いて黙り込んでしまった。

そこへベッツィーがやってきてソウシに話しかけた。

「ソウシ殿！！」

びくっとなり固まるカーネルとミヌ・・・

何故？ソウシがここにいるの？

そう焦る二人だった。

「ソウシ殿、これからミナム殿のところに行くがどうか？」

「左様ですか？ならば一緒に参りましょう」

そう言って二人はミナムのところに向かった。

ベッツィーとソウシがミナムのところに行くと知った二人は慌てて、ミナムのところに向かった。しかし、すでにベッツィーとソウシはミナムの部屋に入っていたところだった。

「まあ・・・座ってください・・」

ミナムがそう言った時だった。

「ミナム」

そう言ってミナムの部屋に飛び込んできたカーネルとミヌ・・・二人は勢い余って、これから座ろうとしていたソウシだけをミナムのほうへ突き飛ばした。

「わっ！！」

「え？」

ミナムが振り向くとソウシが目の前に飛んできた。

ドン！！！

飛ばされたソウシはミナムを巻き込んで荷物がおいてあるところへ倒れこんだ。

「いたたた・・・」

そういって起き上がろうとするミナムの上には、ソウシが抱きついていた。

「すまぬ・・・」

「いや・・・カーネル！！ミヌ！！」

その時だった。ミナムの荷物の中にあったノートパソコンが輝きだした。

「まずい・・！！！」

焦ったカーネルとミヌだったが、気がつくとミナムとソウシの姿が消えてなくなっていた。

久々の現代

「き・・消えた・・・？」

驚くベッツィー・・・・・

「ああ～あ・・・」

「カーネルさんどうします？」

「そうするもこうするも・・・帰ってくるの待つしか・・」

「そうですねぇ～」

淡々と話す二人を見ていたベッツィー

「カーネル殿・・・ミヌ殿・・・二人はどこへ？」

「ミナムがいた世界へ・・・」

「ミナム殿がいた世界とは？」

「よくわからないんだけど・・・夜も明るく・・・馬もいないのに勝手に走る馬車とか・・」

「絵がひとりでに動いてし話出したり・・」

「そうそう・・」

ベッツィーはカーネルとミヌが話している内容がまったく理解できない・

「夜も明るい？勝手に走る馬車？動く絵が話す？」

「そう悩まないで・・・ベッツィーさん」

「そうそう・・・とにかくよくわかんないところなの」

「そうでうすか・・ところで二人は戻ってくるんですか？」

「たぶん・・・5日後くらいたったら・・」

「そうですか・・・」

そういい残してベッツィーはその場を去って行った。

「ところでカーネルさん・・」

「何よ・・ミヌ」

「今頃、二人・・・向こうで・・」

「あ・・・」

思い出したカーネル

「ひょっとして、裸で？」

「・・・・たぶん・・」

そう言って腕を組んでうなずくカーネル

「ソウシさん・・・律儀だから・・・」

「だから？」

「ミナムさんのこと好きになったりしないわよね」

「たぶん・・・」

「ミナムさんも裸で寝てるだけって気付いているし・・・」

「そうねぇ～」

「襲ったりしないわよね」

「ミナムに限って・・・」

「じゃなくて・・・ソウシさんが」

その光景を思い浮かべるカーネルとミヌ・・・二人して首を横にふった。

「ありえないわよ・・・」

「そうね」

不安がよぎる二人だった。

その頃、ミナムとソウシは現代のミナムの部屋で寝ていた。

ふと目を覚ますソウシ・・・横には男性の裸が・・・夢か・・・・

自分は男の腕の中で男性の体に抱きつき甘えた・・

う～ん・・・こうやって自分が女として生きたい・・・

そう思いながら・・・夢見心地に浸っていた・・・

しばらくして、ソウシは考えた・・・え？・・・

そう思ったが抱きついている相手の体が妙に生々しい・・・

どうしたんだ・・・あっ・・・さっき突き飛ばされてミナム殿にぶつかって・・

ふと顔を上にあげるとそこにはミナムの顔が・・・

え！！！

驚きミナムの抱きついたまま・・・固まるソウシ・・・

わ・・た・・・し・・・は・・・だ・・・かだ・・・

そんな時・・・う～ん？と目を覚ましたミナムと目が合った。

ソウシの想い

「わ～！！」

「きゃー！！！」

お互いの叫び声が部屋でこだました。

慌ててミナム離れたソウシはそのまま掛け布団にくるまりベットから降りた。

わ・・・私は・・・一体どうしたんだ？

そう自問自答したが記憶がない・・・

うつむいて見てしまったソウシ・・・・

ある一転を見つめ固まった。

「ソウシ殿・・」

「ソウシ殿・・・！！！」

ミナムの声にエコーがかかって聞こえる・・私は・・・・ひょっとしてミナムと・・・・

そう考えると・・・・混乱した。

「ソウシ殿・・・」

ようやくミナムのほうを見るソウシ・・・

私は・・・？ふと・・・ひょっとして・・・ミナムのことが・・・

「ソウシ殿！！！」

「ミ・・・ミナム殿・・・」

どう答えていいかわからないソウシ・・・

「ソウシ殿落ち着いてください・・・」

ミナムの言っている内容がまったくわからないソウシ・・

けど・・おれ・・・このままでもいいかも・・・

そう思っているとミナムが話しかけてきた。

「たぶん・・・裸になっただけだから・・・」

どういう意味？

「多分・・・Ｈはしてないから・・・」

その多分って一体何？俺とＨしたんじゃないの？

「今まで・・・カーネルとミヌで同じ経験をしてるんだ。」

あの二人か・・・

「気がつくと裸で抱き合っているんだ・・なぜか・・」

じゃぁ・・・なぜ・・・Ｈしていないてわかるの？

「ただ・・今までの経験でＨしていないから・・・安心してください・・・」

安心しろ？・・・こんな状態で・・・・・

ただジーッとミナムを見つめるソウシ・・・

「本当にＨしていないといえるのか？」

ミナムはソウシからの視線に目をそらした。

「実は・・・」

「実は？」

「カーネルとミヌも同じ経験をしている・・・」

「それは聞いた」

「あとでＨした時」

そんなこと聞きたくない・・・

「初めてだったんだよ・・・二人とも・・」

「えっ・・」

その言葉を聞いて、安堵した反面、あの二人を抱いたとミナムから聞いたことに心が引きちぎられそうになるソウシ・・・

「何故・・そんなことを・・」

「ソウシ殿だからです・・」

「私だから？」

「そう・・・ソウシ殿だからです。」

ミナムのその一言はソウシの心を貫いた。

「私では・・・」

そうつぶやくソウシにミナムは・・・

「ソウシ殿は、今の俺にとって大事な存在です。」

「えっ？」

ミナムの言葉にソウシは視線を上げた

「今回の討伐で何もわからない俺にとって、頼れるのはあなたなのです・・・」

そんなことか・・・・ふと視線をそらし、ため息を付いたソウシ

「それに・・・」

「それに？」

「ソウシ殿にとっても迷惑でしょう。」

そう言ってミナムは、立ちあがり服を物色した。

そして、ソウシに服を渡した。

ひとり服を着るソウシ・・・私の想いは・・・しまっておかねば・・・

失意のソウシ

一人着替えるソウシ・・・

本当に何もなかったのだろうか、そう思い自分の体を確認する確かになんともない、ミナムの言うことが正しいのか・・・逆にさびしさが走る・・・それに私の気持ちは、さっきのミナムの言葉”ソウシ殿にとっても迷惑でしょう”が心の中にとげの様に刺さってくる。けど・・・私の気持ちは

部屋をノックする音がした

「ソウシ殿・・・」

ミナムだ・・・私は・・・どうしたら・・・

その時だった携帯音が部屋中に鳴り響いたのは、

一体何の音だ!!驚くソウシを尻目に携帯音が消えた

「もしもし・・・えっ?」

しばらくミナムの話し声がしていた。おかしい一体誰と話しているんだ?そう思いソウシは部屋からのぞいてみた。すると、ミナムは右手に何かを持って耳にあて、誰かと話しているみたいだった。話が終った様子ミナムがソウシに気付いた。

「ソウシ殿、ちょっと出かけてくるから、ここを動かないでください。」

「わ・・わかった・・・」

そういい残しミナムは外に出かけた。

一人残ったソウシ・・・どうしたらいいんだ？

ミナムは会社に着いた上司の前に立ち、辞表を出した

「どうした？急に・・」

「体調がわるいんで・・」

「そうか・・・」

「今までお世話になりました。」

「わかった。総務に行って、手続きをしてこい。」

「はい・・」

「けど・・・さびしいな・・・」

「急で申し訳ございません。」

「今晩どうだ？」

「すみません。体調が悪いもので・・」

「そうか・・・まぁ元気にな」

「はい・・」

こうしてミナムは会社を後にした。

その頃、ソウシは部屋でんボーッとしていた。目覚めミナムと目が合った瞬間を思い出していた。そして、ソウシの妄想が続いた、あのままミナムの上に乗ってキスを・・・そうしとけば・・・いや・・・いかん・・・自分の頭を横に振った時、家の玄関が開いた。

「よっちゃん？いるの？」

そう話しながら由美が部屋に入ってきた。部屋を見渡す由美、そして、ダイニングに入るとじっと目をつぶるソウシがいた。

「あなたは、だれ？」

由美の言葉に驚くソウシも身構えた。誰だ？この女は？

「どこから入ってきたの？」

そっと立ち上がり由美との距離を置くソウシ。その様子に合わせて動く由美。

ソウシが動こうとした瞬間、ソウシの手をとった由美

「離せ！！」

手を離そうとしたソウシだったがあっという間に由美に後ろを取られた

え・・・わたしが・・・ソウシが驚いているとミナムが帰ってきた。

「ただい・・えっ・・・！！！」

その光景に驚いたミナムの表情を見て二人が

「よっちゃん！！」

「ミナム殿」

「どうしたんだ？二人して・・」

現代での出来事

由美の前に座るソウシとミナム、

「そういうことだったの。ところで、みゆは？」

「い・・・いや・・・情報がない」

「そう」

「ミヌ殿か？」

そう言って話に入ってきたソウシ

「いや・・ミヌではなく、みゆって、俺の姪っ子なんだ。」

ソウシにみゆのことを説明するミナム

「そうでしたか。」

「ところでソウシさんてもしかして女？」

「そうですが・・・何か」

ソウシの言葉を聞いて、ミナムの頬をつねる由美

「イテテ・・・なにすんだよ。」

「これで3人目よ。いい加減にしなさいよ。カーネルさんはどうす

るの。」

「今回、無事カーネルの故郷に戻ったら、結婚するよ。」

「何故、結婚しなかったの」

「い・・いや・・・いろいろあって・・」

「そう・・」

「ソウシさん、何か食事でも、」

ソウシは、ボーッとしていた、帰ったらミナムはカーネルと結婚するのか・・・

「ソウシさん!!」

「えっ?」

「い・・いや・・・まだですが・・」

「ちょうどよかった。今から行かない?」

「旦那のは?」

「旦那?今日は遅いって」

こうして3人は近くのファミレスへ向かった。

足取りの重いソウシ・・・仕方がない・・・そう思うが体がやけに

重い。

「ソウシ殿、大丈夫ですか。」

「ええ・・まぁ・・」

3人はファミレスで食事を取っていた。ソウシにとっては不思議だらけだった。

「どうしたの？」

「あ・・いや・・」

「なにも・・」

「よっちゃん・・じゃぁ・・」

由美と別れたミナム達は家に向かった。

「ミナム殿、これからどうやって。向こうへもどるのです」

「帰ってパソコンを動かして見るから」

「パソコン？」

「あの時光ったやつだよ・・」

「ああ・・あれか？」

おかしい・・・体が重たい・・・どうしたんだ？

「ソウシ殿？」

「大丈夫・・・くっ・・・」

「どうしたんですか？」

あ・・あしがつった。右足を押さえうずくまるソウシ

「大丈夫ですか？」

「だ・・・大丈夫です。」

そう言って立ち上がろうとするソウシだったが倒れこみミナムに寄りかかった。

「無理しない方がいいですよ」

そう言ってソウシをミナムの背中に誘導した。

「いいですよ・・恥ずかしい。」

「大丈夫だから」

そう言ってミナムは、ソウシをおんぶした。

ミナムの背中に揺られるソウシ

「ソウシ殿・・」

「何ですか」

「意外に軽いんですね」

「バカ・・・」

このまま・・・もうしばらく・・・このままで・・・・いさせて・・・かなわぬ・・・

そう思っていると家に着いた。

「すまなかった。」

「いいよ。疲れたんでしょ。お風呂入れるからちょっと待っててて。」

そんな笑顔をみせるな・・・頼むから・・

一人風呂に入るソウシ・・・今日のミナムの言動が心に刺さる

なぜ、私は彼を好きになったんだ。いや・・・勘違いだ・・・

もし、好きだとしても・・・この気持ちは、知られてはいけない。

そう悩んでいると眠気が襲ってきた。

風呂から上がろうとするソウシ・・・

あれ・・・？

バターン

風呂場から大きな音がした慌てて駆けつけるミナムそこには全裸のソウシが

目を覆いながらバスタオルくるむミナム・・・

なんとか来るんでソウシをベットへ運んだ。

翌朝、ソウシが目を覚ますと、ベットに顔を伏せミナムが眠っていた。

わたしは・・・？　お風呂で？　　えっ？　　顔を真っ赤にするソウシ・・・

服を着ていない・・・えっ？・・・起き上がろうとすると体中が筋肉痛できしむ

ソウシが筋肉痛にあえいでいるとミナムがむくりと起きだした。

「ソウシ殿・・大丈夫でしたか？」

「すまぬ・・運んでくれたのか」

「ええ・・まぁ・・」

視線を合わせしばらく黙り込む二人・・・

その時だった。パソコンが輝き出し二人を包んだ。

戻ってきた二人

ミナムとソウシがいなくなって数日が過ぎ、ため息を付くカーネル・・・大丈夫かしら・・

「カーネルさん・・・また、悩んでるんですか」

「だって・・・・」

起こり気味のカーネルにミヌはこういった

「今日くらい帰ってくれば、向こうでは1晩くらいでしょ？」

「何言ってんのよ・・・一晩でも・・」

「ふ～ん・・・あの日ミナムさんと何してたんですか？」

「えっ・・」

あの日のことを思い出すカーネル”無事帰ったら結婚しような”

急に顔を赤くするカーネル

「あ～！！やっぱり何かあったんだ・・」

「ミヌ！！もうっ！！」

カーネルがミヌを見るとさびしそうにしていた。

「ミヌ・・」

「大丈夫ですよ・・・私、第2婦人になるんだから・・」

「えっ・・」

「負けませんから・・それより見に行きません」

しばらくして、二人はミナムの部屋に行き覗き込んだ。

「えっ!!」

二人はその光景を見て顔を真っ赤にした。帰ってきたときも二人ともミナムの横に裸で寝ていたのだったがそこには、足を絡め裸で抱きあって寝ているミナムとソウシの姿があった。

そんな時だった。

二人が目を覚ましたのは、しばらく、朦朧とする意識の中お互いを確認する二人・・・

「あ・・・」

「・・・」

しばらく、固まる二人・・・ミナムがふと横の視線に気付くと、そこにはカーネルとミヌが・・・やばい・・・そう思うミナヌ・・・一方、ソウシは、慌てて体を両手で隠した。

「ソ・・ソウシ・・どの・・」

「あ・・いや・・」

妙に落ち着いているソウシ・・・辺りを見回し服を着だした。そして、無言のまま部屋を後にした。

「ソウシさん！」

一人残されたミナムを待ち構えていたのは、カーネルとミヌだった。

「なにも・・・なかったから・・」

そう言い訳をしたミナムだったがしばらく、二人にこってりと絞られた。

一人海岸に立ち海を見ているソウシ、そこへミヌがやってきた。

「ソウシさん」

「ミヌ殿か・・」

「大丈夫ですか？」

「何が？」

「あ・・いや・・・あの～」

「ひょっとして・・・裸で」

うんうんとうなずくミヌ・・・

「大丈夫ですよ。ミヌ殿達もそうだと聞いたし」

「じゃぁ・・」

「気にしていませんよ」

にこやかに答えるソウシ・・・心では、何故うそをつく・・・その言葉が耳の中でつぶやかれた。

「そうでしたか・・よかった・・・てっきり・・」

「てっきり？」

「ミナムのことを憎むかと」

「憎む？そうですね・・・私の裸を見たのだから・・・ところでミヌ殿は？」

ソウシはどうやってミナムの世界に行ったか聞いてみた。

「そうでしたか。」

「それが？どうか？」

「それと、足がつったとかありましたか？」

「いえ・・・カーネルさんはつったみたいですけど、あ・・確かに結構疲れました。」

「そうですか・・・」

向こうの世界で由美に取り押さえられたことが気になるソウシだった。そういえはこの間の戦いのときミヌにも力で負けたよな。そう思いつつミヌと別れた。

夕方になりミナム達一行食事をしているとベッツィーが入ってきた。そこにミナムとソウシがいることに気付いたベッツィー

「お二人さん、おかえりなさい・・・」

「ところでベッツィー殿、なにか？」

そう聞くソウシに

「出港予定が決まりましたので、報告までに」

「で？」

「3日後です。」

「そうですか・・」

そんな会話の中、ソウシのミナムを見る時の目が優しいことに気付いたカーネル

やはり・・・なにかある・・・

「ソウシ殿・・・あとで話が・・・」

ミナムが言うとベッツィーも

「ソウシ殿に話があるので来てもらいたい・」

「わかりました。うかがいますので・」

食事が終わり、ミナムが待っているところへ行くソウシ

「ソウシ殿・・・」

ソウシにはわかっていた。多分気にしないでくれということを

「わかってますよ。」

「えっ？」

「そんなことより、カーネル殿と結婚するのでしょ。」

「まぁ・・・」

ソウシはミナムの肩に右手を置き、耳元でささやいた。

「式には呼んでください・・じゃぁ・・」

そういい残して、ソウシは去って行った。これでいいんだ・・・そう思いながら・・・

その光景を見ていたカーネル・・・やっぱり・・・二人何かある・・・そう勘違いしていた。

それぞれの想い

ベッツィーに呼び出された場所に着いたソウシ

「ベッツィー殿なにか？」

「ソウシ殿・・・これ」

ベッツィーは一枚の図面を見せた。その図面を見てよくわからないソウシ

「これは？」

「大筒だ」

「大筒？」

「これを今回のドックで艤装したんだ。」

にっこりとしているベッツィーにソウシが話しかけた。

「これは、どんなものだ？」

「そうか・・・これは、ギオンが使っている鉄砲を大きくしたやつだ。投石器で鉄球を投げる代わりになるんだ。」

「それが？」

「投石器は、威力を増すために魔法を使うだろう。」

「そうだが・・」

「これには必要がない。」

「どういう意味だ。」

「ちょっと来てくれ」

そう話をしてベッツィーはソウシをある場所に連れて行った。そして、大筒の威力を見せた。

「こ・・・これは？」

「そう・・・これが大筒の威力だ。しかも対魔シールドも効かない」

「対魔シールドも？。これがあれば・・・」

そういうソウシにベッツィーは冷静に

「しかし、こいつはかなり重い。だから簡単に移動できない。」

「でも・・・これが戦線に投入できると」

「確かに、その通りなのだがギオンも同じものを持っていると聞く」

「じゃぁ、どうすれば・・・」

「そこが課題だ。」

一方ギオンでは、硬直した戦況を打破すべく大筒をアスケ原に配備しつつあった。グレースは相変わらず消耗戦を仕掛けていたからだった。

「これで、グレース軍を一網打尽に出来る」

「しかし、奴らは城にこもって出てこんぞ。」

「いっそのこと、大筒を城の手前まで持っていけば。」

「馬鹿なことを、奴らはそれを待っておるのだ。うかつなことは出来んぞ。」

一人宿に戻ったソウシ、さっきの大筒のことを考えていた。相当重いらしいな・・・

ふと目の前をミナムが通っていった。ミナム殿なら持てるかも・・・しかし、勝手につれてくるわけもいかんし・・・

ミナムは、何やらミヌと話をしていた。

ジーッとミナムの姿を追うソウシ・・・

「クォンが治ったって・・」

「そうか・・じゃぁ・・帰ったら乗れるかな？」

「乗せてくれるかしら？」

「そんなことないさ・・」

ソウシは視線を下げ再び大筒のことを思い出していた。

いや・・・ベッツィー殿に話して見よう。

そう思い顔をあげると目の前にミナムがあった。

「うあ！！」

「ソウシ殿、何驚いてるんですか？」

「あ・・いや・・・別に・・・急に目の前にいたもので」

「そうですか・・・じゃぁ・・」

そう言ってミナムは去って行った。知らず知らずミナムを目で追いかけるソウシ。

しばらくして、われに返ったソウシ、そうだ・・・ベッツィー殿と話さねば・・・そう思っているとカーネルが声をかけてきた。

「ソウシさん」

「カーネル殿・・」

「ソウシさん・・らしくないですね」

カーネルの言葉に鋭い目つきに変わるソウシ

「なにが・・ですか・」

「ミナムに驚くなんて。」

「あ・・・それは、考え事をしていたから・・・」

「考え事・・・ですか」

今日は妙に絡んでくるな・・・そう思うソウシ

「ところで、これが終ったらミナム殿と結婚するそうですね。」

ソウシの思いがけない言葉に逆に驚くカーネル

「な・・なぜ・・・それを?」

「ミナム殿から聞いた」

「そうですか。」

「式には呼んでくださいね。」

そう言ってカーネルの肩をポンと叩きソウシは、その場を離れた。

そこへミナムがやってきた。

「カーネルどうした。」

プイと横向くカーネル

「知らない」

そう言い残しカーネルもその場を去った。

ミナムがそっとカーネルの方へ行ったのを影から見ていたミヌ

そして、私じゃないんだ・・・

出港前夜

「総員に告ぐ、明日１４時に本艦マリハは、ビキニに向け出港する。よって今晩は全員上陸を許可する。各自明日１０時までに戻ってくること。」

艦長ベッツィーのこの言葉を締めくくりに、仕官以下水兵達は、上陸をして行った。

その様子を艦上から見ているベッツィー

そして、母の一言を思い出した。

「生きて・・・」

それは、数日前ベッツィーが母のところに行った時のことだった。

「母上・・・」

「ベッツィーか」

「スクィニーが死にました。」

ベッツィーの言葉に固まる母・・・しばらくして、ベッツィーを見つめた。

「ス・・・スクィニーが？」

「はい。」

「お前が倒したのか」

「いえ・・・ギタという奴が・・・」

そういうとベッツィーは、両手を突きうつむいた。

「なぜ?本当のことを言ってくれなかったのです?」

「ベッツィー・・あの時は・・・」

そうあの時は母は、気絶させられていたのだった。だから真犯人は知るはずがなかった。

「そのことではなく・・父のことを」

しばらく、続く沈黙の中、母は口を開いた。

「言えなかった。」

「えっ・・」

「ただ、言えなかった。」

ベッツィーは俯いたまま涙していた。

「わ・・・私は、父を・・・二人とも・・・・ギタに・・・殺された・・」

泣き崩れるベッツィーを母は抱きしめた。
しばらくして落ち着いたベッツィーは、立ち上がった。
「ベッツィー・・・」
「母上、行ってまいります」
立ち上がったベッツィーをただ見つめる母・・・
ベッツィーは振り向き、家を出ようとした。その時、母が最期に発した言葉が
「生きて・・・」
後の言葉はよく聞き取れなかった。
艦上から降りるベッツィーをミナム達が待っていた。
「ミナム殿、何故ここに？」
「ベッツィー殿は、一人ですか？」
「ええ・・まぁ・・」
「じゃぁ・・・俺たちと軽く行きませんか？」
ミナムは、右手でお猪口を持つようなそぶりを見せた
その様子を見て戸惑うベッツィーにソウシが話しかけた。

「私も行きますし、これからのことも聞きたいのでいかがですか。」

「行きましょうよ」

カーネルとミヌもベッツィーをそくした。ベッツィーフッと軽くため息を付いてまいったなぁ・・・そう思いつつ観念した。

「わかりました。」

ミナム達と歓談を楽しんだベッツィーだった。

そして、戦艦マリハがオイオイを出港した。

静かな船出

オイオイを出港して一時間程、戦艦マリハは、マリハ灘を航行していた。

しばらくして、メイジを出港した戦艦コウア・セツと合流した。

その後ろを密かに追いかける海賊船がいた。その船には、副長カイソンを中心に

親父であるスクィニーの仇をとるべく集まったスクィニー海賊団の残党たちが乗船していた。

海賊船を発見したコウアからマリハに連絡が入る。

「戦艦コウアから着信・・スクィニーの海賊船が本艦隊を追撃中」

その報告を受けた副長が艦長ベッツィーに聞いた。

「艦長いかがいたします？」

そこへ別の着信が入った。

「彼らは、スクィニーの敵をとるため、海軍に協力するといってきています。」、

「そうか・・・ならば・・・ほうっておけ」

「は・・・」

その頃ルーシーの元から戻ってきたギタは、先の会戦に参加していない合流した2隻の海賊船と共にクリオのところにいた。そこで先の会戦についてクリオに説明していた。

「何！！、スクィニーが裏切って海軍の見方をしただと？」

ギタの言葉に半信半疑のクリオ

「そうなんです。アッシも左手と引き換えにスクィニーを倒したんでさ～」

「それで？俺にどうしろと」

「海軍の奴らは、確実にビキニに向かっている。だから俺たち3席と共同でたたかねぇか？」

「で？ルーシー様は？」

「賛成でさぁ～」

ギタがそう言った時、クリオの副長が耳打ちをし、内容を確認しうなずくクリオ

「それは、真か？」

「はい・・」

クリオはギタのほうを向いてこう言った。

「わかった。」

「それはありがたい。」

「そうだ、情報では海軍の軍艦は3隻だそうだ。お前らはスクィニーのあだ討ちがったな。

先鋒をまかせる」

「そ・・・それは・・・ありがたい・・」

こうしてクリオ海賊団の協力を得たギタだったが、不安で一杯だった。

3対3か・・

そう考えていると黒ずくめの魔導師が声をかけてきた。

「どうした・・・ギタ」

「黒魔導師様・・・」

不安そうな顔を見せるギタ

「敵は・・・あのベッツィーだ」

「それが？」

「船を真っ二つにした奴だ。」

「それで？」

黒ずくめの魔導士の言葉に苛立つギタ

「あ～！！どうしてあなたはそんなに冷静なんだ？」

ギタはそう叫ぶと頭を抱え座り込んだ。

「俺の対魔シールドであの程度の攻撃は防げる」

黒ずくめの魔導師の一言を聞いて、飛び上がるギタ

「本当か？」

「ああ・・」

「そうか・・よし、これであのベッツィーを血祭りにしてくれる」

そう言って、ギタは部下のところに行った。

あいかわらず単純なやつだ・・・不敵な笑みを浮かべる黒ずくめの魔導士

しかし・・・あのミナムって奴は、一体何者なんだ？

部下のところに着いたギタ、右手で剣を抜き天をかざした。

「もうすぐ海軍が来るスクィニー船長のあだ討ちを取るぞ！！！」

「おお！！！」

こうしてギタとクリオ海賊団はマリハとビキニの国境にあるダイズ諸島に隠れ海軍を待ち伏せていた。

夜明けの会戦

一方、ベッツィー率いる艦隊は、ダイズ諸島まであと2時間くらいのところにいた。

「各艦に伝えよ。敵だ待っていると」

「はっ・・・」

前日の夕刻、マリハ艦上にはミナム・カーネル・ミヌと相変わらず調子が悪いソウシの姿がそこにあった。彼らの姿を見つけたベッツィーは、ゆっくりと近づいてきて

「明朝には海賊と遭遇するでしょう。」

その言葉に驚く4人、そんな中でソウシはしんどそうに聞いた。

「なぜ?」

「ダイズ諸島は、クリオ海賊団が拠点としているところだ」

「そうでしたか。」

「とりあえず、今は休んでください」

水平線が徐々に白く明るくなる薄明の頃、ベッツィー率いる艦隊はダイズ諸島に差し掛かっていた。

そんな時だった。右の島影から突如、衝波が飛んできた。

「艦長！！大きな衝波が近づいてきます。！！」

「何！！！面舵一杯！！直ちに対魔シールドを！！」

ズシーン！！！

衝波はマリハの船首をかすめた。

「よし、かわした」

「海賊船を確認」

「それで」

「船影　3　こちらに向かって突っ込んできます」
ベッツィーの眉がぴくっと動いた。
「3隻だと。」
「敵に船首向けよ！！　全速前進、右舷攻撃用意！！コウア・セツに伝令　縦陣で行くと」
敵に右舷側を見せたベッツィー艦隊は、攻撃しつつ右旋回しながら徐々に船首を海賊船のほうへ向けた。
「ようし！！！このまま突っ込め！！」
「ほう・・ギタの奴、うまくやっている」
にやりと不適な笑みを浮かべたのはクリオだった。

この時、ミナム達もこの響きと共に目を覚まし、甲板に上がって驚いたすでに衝波の撃合いが始まっていた。
「始まっているぞ！」
「ミナム殿！！こちらへ！！」

外に出たミナムを呼び戻そうとするソウシ

入り口の方を見たミナム

「剣と縦をくれ！！」

「はい！！」

ミナムの方に剣と縦を持って行くカーネルとミヌ

「行くぞ！！」

艦橋では、一隻の海賊船がダメージを受けていないことに気付いていた。

「艦長・・・あれは？」

「対魔シールドか」

「そのようで。」

その時だった左舷の見張りが声を上げた

「艦長！！左舷から船影５隻確認」

「艦長！！いかがなさいます。」

「挟撃か？いや。多分、もう5隻いるはず・・・すれば・・右舷側の島の右端からか・」

「多分」

「見張りに伝えよ。島の右端をよく監視するように」

「艦長、針路は、？」

「まず、前の3隻を叩く！！超弩弓を」

会戦の最中

ベッツィー率いる3隻の軍艦は、一列に並びギタ海賊団へ直行した。

「ベッツィーが突っ込んできます。」

「なに！！」

対魔シールドが効きギタの船が無傷なのに気付き、気をよくしたギタ

さすが黒魔導士様・・・敵の攻撃でもびくともしねぇや・・・

「こちらも突っ込め！！海軍を血祭りに上げて・・・」

そう叫ぼうとしたときベッツィーが超弩弓を構えているのが見えた

「あ・・・いや・・・反転・・・」

口ごもるギタの肩を叩いたものがいた。それは、黒尽くめの魔導士だった

「黒魔導士様・・・」

「このままで行け。」

「あ・・・」

「わしを信じないのか？」

「あ・・いや・・」

ギタがうろたえているとベッツィーは超弩弓を放った。

閃光を放ち迫ってくる超弩弓

「わ～！！！」

思わず身を伏せるギタ

次の瞬間だった。

船体に大きな矢が当突き刺さっただけだった。

「あれ？」

いつものように船体が炸裂するようなこともなかった。

キョロキョロと辺りを見回すギタ

「がはーはー見たか！！よし！！突っ込め！！」

一方、超弩弓を跳ね返されたベッツィーは驚きを隠せなかった。

「なに？」

どうしたらいいんだ。

飛び交う衝波の中、コウア・セツから別の海賊船に超弩弓が放たれ直撃

海賊船1隻を航行不能にした。

その光景を見ていたソウシ、超弩弓が効かない。なんて強力な対魔シールドなんだ

しかし、この対魔シールドには見覚えがあった。このシールドを出来るのは確か

マヤザキ様ともう一人、いなくなったはずの黒騎士団一番隊隊長のトリニティ

マヤザキ様がここにいるとは考えられない。そう奴しかいない。

そこへソウシを覆いかぶさる影かひとつ

「危ない！！」

ミナムがとっさにソウシに抱きつき二人とも倒れこんだ。

そこへ衝波が被弾した。

「大丈夫ですか？」

しばらく、ミナムの腕の中で固まっているソウシ

「ソウシ殿！！」

はっとするソウシ

「あ・・大丈夫！！」

「そうですか・・・」

そういい残すとミナムは立ち上がり振り返り砲丸をギタの船に向けて投げた。

「この！！」

衝波が効かず投擲の効力もわずか・・・弓に至ってはほとんど効いていない

「がっはっは！！」

その状態に笑いが止まらないギタは、海賊船の一番後ろの一段高い場所にいた。

ギタが高笑いしていると顔の横を掠めた黒い物体があった。

「は・・？」

それに驚くぎた・・・次の瞬間、ギタの後ろの建物の一部がが大きな物音共に吹っ飛んでいった。

「へ？」

思わず鼻水をたらし後ろを振り向くギタ。

船橋の壁に大きな穴が開いていた。

どうなってるんだ？その様子を見て戸惑う黒魔導士

ミナムという奴は、対魔シールドが効かないのか？

「黒魔導士様～！！」

「俺が攻撃する！！」

そういうと黒魔導士は、船首に向かった。

その頃ミナムも船首に着きベッツィーに話しかけていた。

「何ですかミナム殿」

「ベッツィー殿、大筒ですよ。大筒」

「えっ？」

「今こそ使うべきです。大筒を」

しばらく、不思議そうな顔をするベッツィーに

「これで」

そう言って、ミナムは砲丸をギタの船めがけ手投げた。

焦る黒魔導士

ミナムが投げた砲丸が、ギタの船の左舷船首に直撃した。

その頃、船首についた黒魔導士は、砲丸の直撃を目の当たりにした。

バキ！！！

木が砕け散る音共に左舷船首上部に大きな穴が開いた。

穴がいたしばらくじっと見つめる黒魔導士

「くそ！！！」

黒魔導士は、腰の剣を抜き両手で構えた。

そして、

「双竜波！！」

そう叫んで刀を振り下ろした。

マリハの船首にいたミナムは、ギタの船を指差し

「ほら。あれ」

「えっ？」

「砲丸だと穴が・・・たしか、大筒って対魔シールド効かないんだよな」

「えっ？」

ベッツィーが納得した瞬間だった。

ギタの船船首から閃光が放たれ。2体の竜となってマリハに向かってきた。

「ミナム殿！！」

「えっ？」

その閃光を見てミナムは慌ててベッツィーの前に出て盾を向けた。

そして、2体の竜となって襲ってきた閃光は、ミナムの盾に直撃した。

まばゆいばかりの閃光がミナムを包み、轟音が鳴り響いた。

そして、その輝きでミナムがしばらく見えなくなっていた。

「ミナム！！」

「ミナム殿！！」

そう叫ぶが近づけないカーネルとソウシ・・・

光が徐々に小さくなっていくのを確認していた黒魔導士

「やったか？」

そうつぶやいて振り向こうとした瞬間わが目を疑った。

ミナムが盾を持って立っていたのだった。

「何！！」

ミナムの後ろに隠れていたベッツィー後ろを振り向いたミナムと顔を見合わせる

「ミ・・ミナム殿」

「大丈夫ですか？」

「はい。」

「早く艦橋に戻ってください」

「わかりました。」

ベッツィーが艦橋へ戻るとギタの船は近い距離まで迫っていた。

「島の右側から海賊船5隻」

やはり・・・

「右舷側で総攻撃を加える。大筒準備」

「大筒準備!!」

「魔導士隊、整列!!」

「は!!」

「取り舵一杯」

「取り舵一杯!!」

ベッツィーは前の3隻を呼び指し叫んだ。

「船が真横を向いたら一斉攻撃」

「はっ!!」

反撃は大筒の轟音と共に

徐々に回頭する戦艦マリハの様子を見たギタは喜んだ

「奴は横っ腹を見せたぞ！！突っ込め！！」

黒魔導士はその様子に不安がよぎった一体何をする気だ。

さっきミナムに攻撃を防がれたのも気なった。

ふと見るとマリハの船体から大筒が出てきた。

なんだ？あれは？そんな様子も気にせずただ突っ込め！！！と騒ぎ立てるギタ。

マリハの右舷がほぼ見え出した。

まずい。そう感じた黒魔導士は、左舷側に衝波を放った。

その勢いでがくんと船が速度を落とし船首を右に向けた。そのため、ギタ海賊団の一隻がギタの船より前に出た。その時だった。

「撃て！！」

轟音と共に大筒が火を噴いた。

その砲弾は、水上に水柱を立たせ、数発がギタ海賊団の1隻を直撃した。

大破して目の前で沈み始めるギタの僚船

「うわぁぁああ！！」

その様子にビビり足を振るわせるギタ・・・

「急速回頭！！逃げるぞ！！」

急速に反転してる中、第2波が襲ってきた。

沈み行く僚船が盾となったが、一発がギタの船の船首に直撃し大破した。

その直撃と同時にギタの海賊船を飛び出した黒魔導士

くそ・・・なんてことだ・・・

下では、飛んで逃げようとする黒魔導士を見て

「く・・・黒・・魔導士・・さま！！　待ってください！！」

そう叫ぶギタの姿があった。

それを無視して黒魔導士は、いずれにせよミナムを確認せねば・・・
そう思い戦艦マリハへ向かった。

一方、遠目からベッツィー艦隊を包囲しつつあったクリオ海賊団は、
この一瞬の出来事に動揺した。

一瞬で船が沈んだぞ！！

あれは、一体何なんだ？そう疑いつつもクリオは徐々にその包囲を
縮めていた。

「船長！！ギタが・・」

「わかっとる」

逃げやがって・・・そうつぶやいたクリオは、ギタが逃げていく方
向を見ていた。

マリハ艦上では、ギタの船が逃げていき、包囲網の一角が崩れたの
を見て見張りが叫んだ。

「ギタの船が逃げていきます。」

「艦長」

「針路をギタの船に向けよ。この針路でこの海域から逃げる。面舵一杯！！」

「面舵一杯！！」

その矢先だった。

「艦長！！あれ！！」

マストに黒尽くめの男が立っていた。

「何奴！！」

そう叫んで真っ先に出て行ったのはソウシだった。

しばらく、ソウシを見た黒魔導士は、

ソウシか・・・

そう思いながら横にいたミナムを見つけた。

あいつか・・・

混乱する戦火の中

回頭する艦の中、マストの上に立つ黒魔導士に対するソウシは、刀を手にし構えた。

こ・・こいつ隙がない・・・緊張が走る。

しかし、黒魔導士はそんなソウシの横にいるミナムを見ていたやつか・・・

ミナム達の視界から消えた黒魔導士

次の瞬間、ミナムの前にあらわれ、衝波を撃った。

「う・・・」

衝波を受け止めたミナムは、数メートル後ろに下がった。

なんてスピードだ・・・う・・動けない・・・固まるソウシ

ミナムの状態を見て驚く黒魔導士・・・なんて奴・・・びくともしていない・

「イテテ・・・やってくれる」

今度は、ミナムが反撃に出た。

慌てて剣で防ぐ黒魔導士が吹き飛ばされた。

なんて・・・パワーだ！！

すぐに体制を立て直す黒魔導士・・・

ミナムと黒魔導士の剣が火花を散らす・・・

少し間合いを取った黒魔導士はすかさずを衝波を撃った。

ギン！！

「何！！」

衝波を刀で跳ね除けたを見て驚く黒魔導士。

次の瞬間、ミナムの剣が顔をかすめた。

く・・・私としたことが・・・

黒魔導士の顔を覆っていた布が切れた。

危うく顔が見えそうになり、慌てて顔を隠す黒魔導士

「くそ！！」

振り返るとそこにはミナムの剣が迫っていた。

とっさに剣で受ける黒魔導士だったがミナムのパワーに体がフアっと浮いた。

そこにミナムの蹴りが入った。

「ぐっ・・」

黒魔導士は、そのまま船首の方へ吹き飛ばされ船首の建物に叩きつけられた

その様子を見ていたベッツィーだったが徐々に狭まる包囲網に焦っていた。

「速力はあがらないのか？」

「目一杯です。」

「コウア、セツは？」

「ついてきています。」

「そうか・・」

一方、、ギタが逃げる光景を見ていたクリオ

「攻撃用意！！・・・・・ん！？」

海軍の船以外にギタの船を追いかける1隻が目に入った。

「あれは」

望遠鏡を覗くとそこには海賊旗が見えた

「船長どうしたんですか？」

クリオの部下が聞く

「あれだ・・・」

「あれ？」

「そう・・あれだ」

そう言って、クリオが海賊船を指差した。その方向を部下が見た

「あれは・・・スクィニーの部下・・カイソン・・あいつも生きていたのか・・・それが？」

「何かおかしくねぇか？」

「応援に来たんでしょう」

「あれがか？」

カイソンの船がギタの船に向かってまっすぐ向かっている様子を見て

「確かに・・・変ですね・・・」

「ちょっと距離をおかねぇか？」

「船長・・・なぜです。」

「どう見ても様子がおかしいだろう。」

「船長・・・」

「全船に伝えよ速度を落とせと・」

「はっ」

ギタの奴、なにか隠してやがる・・・・そう感じたクリオ

マリハ甲板では、船首の建物に叩きつけられた黒魔導士の姿があった。

黒魔導士の正体

ミナム達は、ゆっくりと黒魔導師のほうに近づいていった。

すると、顔を覆っていた布が外れた。その顔を見て驚いたソウシ

そこには黒騎士団2番隊隊長のトリニティの姿があった。

「ト・・トリニティ・・殿」

「誰だそれ？」

「なぜ？トリニティ殿が？」

困惑の様子を隠せないソウシその時だった。

目を覚ましたトリニティが顔があらわになっていることに気付き、

慌てて目の前にいるミナムに向かい至近距離で銃口を向けた。

バン！！

トリニィの凶弾がミナムの腹部を襲った。

くずれ落ちるミナム

うっ・・・

そのままミナムは甲板に倒れこんだ

「ミナム！！」

「ミナム殿！！」

慌ててミナムに駆け寄る3人・・・

腹を抱えうずくまるミナム

カーネルとミムはすぐにミナムを抱え運んだ。

二人が少し後ろにミナムを連れて行くのを確認したソウシは剣を持ち

「トリニィ・・貴様！！」

そう叫んで切りかかった。トリニティは最初の一撃を鉄砲で受けた。

スパッと鉄砲の一部が切り落とされた。

「何！！」

トリニティは慌てて剣を持ち、ソウシの刃先をかわす

なぜだ・・・ソウシはここまで強くないはず・・・

「なぜだ！！何故、お前がここにいる！！」

そう言って切りかかるソウシ

「わからんのか！！」

「何を！！」

「この国を変えるためだ！！」

鍔迫り合いをする二人・・・・

なぜだ？ソウシにこんな力がある？そうトリニティが思っていると

ソウシの後ろからカーネルとミヌの声が聞こえてきた。

「ミ・・ミナム？」

「ミナムさん？」

ソウシはその声に動揺した・・・まさか・・・

ギン！！

その隙を見逃さなかったトリニティは、ソウシを剣を突き返し距離をおいた

その時、ミナムの姿が視界に入って驚愕した。

心配するカーネルとミヌをよそにミナムの上半身がムクリと起き上がった。

「イテテ！！」

ひるんだトリニティをみてソウシは剣をおろした。

ギン！！

カラン

カラン

トリニティの刀が甲板に落ちた。

く・・・

バケモノめ！！

慌てたトリニティは、無差別に衝波を放ち、ソウシたちがひるんだ隙に上空へ逃げていった。

「ミナム大丈夫？」

ミナムの横で心配するカーネルとミヌ、ミナムの腹には、銃弾があった。

「お前たちの魔法のおかげでたすかったよ。」

ソウシは、振り向きミナムの姿を確認した。

わけもわからず涙が溢れ返ってきた。

そして、刀を落とした。

カタン・・・

ソウシはカーネルとミヌをよそにそのままミナムに抱きついた。

「よかった・・」

ダイズ沖の修羅場

しばらく、二人の光景に唖然とするカーネルとミヌがいた。ソウシは、ただミナムに抱きつきただよかったとつぶやき、抱きつかれたミナムは、何が起きたかわかっていなかった。そして、ミナムの両肩を持ち涙目でミナムをじっと見つめ、もう一度ミナムを抱きしめた。

「よくご無事で・・」

その横からカーネルの震える声がした。

「ソ・・ソウシ殿？」

「あの～」

ミヌの声もしてきた。そして、ふとわれに返ったソウシだった。あ・・・しまった・・・とソウシのミナムから離れた瞬間、顔を真っ赤にしてその場でうずくまってしまった。

真っ赤になった顔を両手で隠し、俯き座り込んだソウシの姿。その目には、いつもの鷹のような鋭さもなく、ごく普通の女の子の目をしていた。

その様子を見ていたカーネルとミヌ、カーネルは思わずミナムの耳を引っ張った。

「イテテ！！」

「ミ～ナ～ム！！」

「痛いってば！！」

「どういうこと！！」

「どういうって？」

「ひょっとして・・寝たの？」

その一言に、慌てふためくミナム、横で耳まで赤くするソウシ

「そ・・そんなはずがあるはずないじゃ・・・」

今度はミヌがミナムの頬をつねった。

「そんな～！！ミナムさん！！」

「わ・・・私は、寝てなぞおらん」

そんな甲板上での修羅をよそ目に、ベッツィーは、ため息を付いたなにをやってるんだか・・・そう思っていると副長が横から話しかけてきた。

「海賊の動きが鈍くなっています。このまま包囲網を突破できるかも。」

「そうか」

ベッツィーは副長の方を振り向いた。

「全館に告げよ。全速前進！！本艦が突っ込み切り開くと」

「は・・」

「魔導士隊を船首に配備、全砲門準備・・」

「全砲門準備！！」

ベッツィーの言葉が艦内でこだまする。その喧騒の中、ミナム達の修羅場はまだ続いていた。

ギタの海賊船内では、部下が一人こう叫んだ。

「右舷から僚船が近づいています。」

「そうか・・・」

少し安堵の表情を浮かべるギタだったが、次の一言を聞いて慌てた。

「船尾から海軍が近づいています。！！」

「なに～！！、クリオは？」

「包囲網が遅れている様で」

「なんだと～！！全速だ～！！全速！！」

ギタは拳を上げ唾を飛ばしながら叫んだが、反応は冷ややかなものだった。

「もう・・限界です。」

その言葉に部下の胸倉をつかみ前後に激しくゆするギタ。

「限界だと!!!何でもいいから逃げろ!!」

「し・・しかし・・」

「船長!!」

別の部下がギタの前に出てきた叫んだ。ギタは別の部下のつかんでいた手をはずした。

「なんだ!!」

「あの僚船・・・カイソンです。」

「何!!」

や・・・やばいぞ・・・そう考えるギタ・・・どうしたらいいんだ?

そんな時、ギタの海賊船の前方にその様子を見ながら近づいている船団があった。

「船長。ギタの奴、逃げ惑っていますぜ」

「ふん・・しょせん・・あの程度の男よ」

「もう一隻もスクィニーの仲間っぽいけど、なんだか様子が変ですぜ」

「そうだな～まるでギタを追いかけているようだな。」

ルーシー海賊団の船団２０隻が近づきつつあった。

ダイズ沖の修羅場　その２

逃げるギタの海賊船の前に２０隻もの海賊船があらわれた。

「せ・・・船長！！」

そう叫ぶ部下の指差す方を見て、慌てふためくギタの姿がそこにあった。

「なんじゃ～！！」

しかし、部下の次の一言でギタは、しばらく固まった。

「ルーシー様の船です。」

「は・・・？ルーシー様？」

この言葉の後、約1分・・・ギタは固まっていた。

「ギタ様！！」

「は・・・はははは。助かったぞ！！」

そこには、ルーシー海賊団の船団を見て安どの表情を浮かべるギタだった。

ギタの船の前の海賊船を見つけたベッツィーたち

「くそ・・・なんてこった。何故ルーシーがここへ？」

「艦長・・・あれを」

副長がある方向を指差した。その方向をベッツィーが見るとそこには、カイソンの船がいた。

「艦長・・全速で右転し、ギタの船に砲弾をぶち込みながら、あの船の来た方へ抜けましょう」

「そうだな・・・」

復調の言うことにうなずいたベッツィーは、直ちに司令を出した。

「全艦、5分後、全砲門を右転しつつ一斉照射、目標ギタの海賊船。」

そう言うと超弩弓を手にしたベッツィーを引き止める副長

「艦長。何も。」

「副長。操船を頼む。私も攻撃に加わる。」

「わかりました。では、」

「では？」

「あそこの3名にも手伝っていただいた方がよいのでは？」

そう言う副長が指差した先には、まだ内輪もめをしていたミナム達の姿があった。

まだやっていたのか・・・ため息を付いたベッツィーは一言漏らした

「そうだな・・」

一方、助かったと思ったギタは、ルーシーの伝令を聞いて驚いた。

「ギタよ。何故、逃げる」

「へ？」

「何故、敵をとらんのじゃ？」

その伝令に口をぽかんと開け右から鼻をたらし、驚きの表情で固まったギタは

ま・・・まさか・・・あいつらと戦えと？

「ルーシー様。お助けを！！」

そう叫んだら、ルーシーから返答が帰ってきた。

「味方がいるだろう1隻、相手はたった3隻だろう？」

ギタはその言葉に絶句した。

うそだろう・・・おい・・・絶対勝てるわけない・・

「あの船は裏切り者のカイソンだ。あいつのせいで、スクィニー殿をなくしたのだ。」

その声はカイソンまで聞こえた。怒りに震えるカイソンは叫んだ。

「ギタ!!貴様こそ裏切り者だ!!!親父の仇をここでとらせてもらうぜ!!!」

その叫び声はルーシーにまで聞こえた。そして、帽子を深くかぶり目を隠した。

やはり・・そうであったか。

かつて、ルーシーに正面から戦いを挑んできた奴がいた。

そいつの名は、スクィニー・・・

海賊船同士の戦いでは戦力的にほぼ互角、普通に戦えば結果はわからなかった。しかし、奴は、ルーシーと一対一の戦いを挑んできた。その戦いで魔力が勝ったルーシーが勝ち、スクィニーはルーシーの傘下に下った。

そうか・・そうだったのか

スクィニーは味方の裏切りで死んだのか・・・

そう思うルーシーだった。

ダイズ沖の修羅場　その３

甲板に降り立つベッツィーそこには、ミナム・ソウシ・カーネル・ミヌの四人がまだごたごたしていた。

「あの？」

ベッツィーの言葉が聞こえない４人、それを見てベッツィーは叫んだ。

「ミナム殿！！！ソウシ殿！！」

その声にようやく止まった４人。

「ベッツィー殿」

「忙しそうだが、今一度力を借りたい。」

そう言ってベッツィーは、ギタの船を指差した。

「やりましょうか・・」

そう言って立ち上がるミナムにつられ、ソウシ・カーネル・ミヌも立ち上がった。

「ありがたい。」

「これが俺たちの使命だからな」

それぞれは、戦艦マリハの左舷側に向かった。

一方、助けを請おうと自らに近づくギタの船に向かってルーシーは攻撃をした。

ギタその攻撃に驚いた。そして、ルーシーはこう叫んだ。

「スクィニー海賊団よ。今こそ、仇をとるのじゃ。」

まさか・・・俺が裏切ったのがばれたのでは？そう考えるギタの姿があった。

「やむえん・・・反転だ！！海軍と戦う！！」

そう叫んだ時だった。

「海軍が近づいてきます。」

「なに～！！」

ギタは思っていたよりも海軍が近づいていることに驚いた。そして、くそーとつぶやき、後ろを見るとルーシーがそして、左舷を見るとカイソンが近づいていた。破れかぶれになったギタは、戦艦マリハに向かい攻撃をはじめた。

「副長！！！海賊船からの攻撃です。」
攻撃の様子が見えた副長は冷静だった。
「あの程度ならびくともせん」
急速にギタの海賊船に近づく戦艦マリハ
「副長！！射程圏内に入りました。」
この言葉と同時に、戦艦マリハには無数の衝波や砲丸・矢が向かってきた。
「よし！！面舵一杯！！」
「面舵一杯！！」
「魔導士隊！！対魔シールド！！！」
「回頭角　３０度・・・」
「全砲門攻撃用意！！」
「６０度」
「魔導士隊攻撃開始！！」
その号令と共に、衝波の反撃が始まった。そして、ソウシの真空波・ベッツィーの超弩弓がギタの船を直撃した。

「うわ～！！！。対魔シールド！！！！！」

そう叫んだが、轟音と共に船首に超弩弓が炸裂、船首を大破させた。

次の瞬間、真空波が襲ってきた。慌てて伏せるギタ、そして、真空波は全てのマストをなぎ倒した。

「マ・・・マストが・・？」

「回頭角９０度」

戦艦マリハの左舷側がギタの船に見えた。

「ま・・まさか・・・」

そうさっき、僚船が一瞬で大破したのを思い出したギタは凍りついた。次の瞬間

「撃て！！！」

轟音と共に大筒が火を噴いた。次々と直撃する砲弾によりギタの船がほぼ壊滅状態になった。その様子を見たルーシーはこうつぶやいた

何という破壊力・・・

沈み行くギタの船を見て攻撃の手をやめた戦艦マリハ、そこへカイソンノ海賊船がギタめがけて突入してきた。

「親父の仇！！！」

こうしてギタはカイソンに捕らえれた。

ミナム飛ぶ

次の瞬間ルーシーは、海軍の艦隊に対し攻撃を命じた。

「前方の3隻を殲滅せよ！」

ギタの船を沈めた勢いで海軍は、開いた海域に向け進路を向けつつあった。そんな状況の下、ベッツィーは艦橋に戻って、副長から報告を受けた。

「海賊から攻撃が！！」

ベッツィーが海賊船のほうを見るとすでに攻撃の矢が自船の方へ向いていた。

「くそ・・・対魔シールド！！」

ベッツィーがそう叫んだが、数発が艦隊に直撃した。

「コウア二直撃速力低下！！戦闘に支障なし！！」

「全艦反撃用意！！用意！！テッ！！」

ベッツィーの号令と共に全艦が左舷側にあるルーシー海賊団２０隻に反撃を開始した。

「か・・艦長・・・敵が・・・・」
副長の声に、ただ冷静にこたえるベッツィー
「わかってる！！」
どうしたらいいんだ？そう思っていると左舷側からミナムが飛び出したのがベッツィーに見えた。
「えっ？」

数分前のことだった。ミナムが突如変なことを言い出した。
「カーネル？」
「何？」
「俺。あそこまで飛べるかな？」
ミナムが指差し差した方には、接近している海賊船の姿があった。
カーネルはその距離を見て驚いた。
「あれを？」
カーネルは無理と言おうとした時だった。横からミヌが話しかけた。
「あれは可能ですよ。」

や・・やめて!!!カーネルは心でそう叫んだ。

ミヌの言葉に戸惑うカーネル・・・また・・・飛ぶの?あのときの恐怖がよみがえる。そう決闘の時、あのジャンプを・・・そこへミヌが話しかける。

「カーネルさん、あそこまでだったらそんなに高く飛ばないから。大丈夫ですよ。」

不安なカーネルはミヌのほうを見て、海賊船を指差して。

「ミヌ・・・何が大丈夫なの?あそこよあそこ!!」

カーネルの言葉を聞いても動揺しないミヌ、逆に笑顔を見せた。

「大丈夫ですよ!!前にあそこより遠くへ飛んだから。」

「えっ?」

「そのときはあんなに高く飛ばなかったし。」

「そうなの?」

その話のソウシが乗ってきた。

「じゃぁ・・・私は、浮遊術で飛んでミナム殿を援護します。」

「そうですか。」

ソウシの言葉を聞いたカーネルもソウシに続いた。

「私も浮遊術で援護するわ。ミヌはどうするの。」

「もちろんミナムさんと一緒に行きます。」

「一緒に行くってどうやって？」

「ミナムさんに抱っこしてもらって」

ミヌの言葉にあきれるカーネル

「あんたねぇ～」

その言葉をよぎったのはミナムだった。

「じゃぁ・・ミヌは、俺と行くか」

ミナムの言葉に頷き、ハートマークがつくような声で返事をした。

「うん！！」

デレデレするミヌ・・・心のなでガッツポーズをしていた。

そんなミヌをおいてソウシがルーシーの船を指差し説明した。

「ここから8つ目がルーシーの船です。」

「そうですか。とりあえずルーシーを倒さんと」

「そうですね・・」

「じゃぁ・・行くか」

「ミナムさん抱っこ・・」

甘えるミムを見て何が抱っこよ・・・カーネルがそう思ってい見ているとミナムはヒョイと

ミヌをお姫様抱っこをした。やった!!!そう心の中で叫ぶミヌ

その光景を見て、ムッとするカーネルとソウシ

「じゃぁ・・行くぞ!!」

ミナム達は飛び交う衝波の中、戦艦マリハから飛んだ。

カーネル・ミヌの衝波とソウシの真空波が上空から海賊船を襲った。

「なんだ!!あの攻撃は!!」

彼女らの攻撃を受け煙を上げ、大なり小なり損傷する海賊船!!

「なんて奴らだ！！」

「早く上空に魔導士を！！！」

「ルーシー様！！」

「何事だ！！」

「上空からすさまじい攻撃が！！」

「そのくらい何とかしろ！！」

混乱するルーシー海賊団

そんな中、ミナムは上空を飛んでいた。

「一艘目！！」

そう叫んで一番手前の海賊船を次の海賊船へのステップとして蹴ったミナム。その衝撃は海賊船を真っ二つに折ってしまった。

その様子を見たルーシー

「あ・・・あれは？」

ミナムが蹴った海賊船は次々と真っ二つに折れた！！
そして8隻目、ルーシーの船も前まで飛んできた
「8艘目！！」
「来るぞ！！こしゃくな！！」
そう叫んで攻撃するルーシー
その攻撃を受けたミナムだった。
「ぐ・・」
「なに！！」
私の攻撃が効かないのか？そう驚くルーシの前にミナムが着陸した。

ミナムVSルーシー

ミナムが降り立つと同時にすさまじい振動が船を襲った。しばらくして、ミヌを下りミナムの後ろに回った。

そして、カーネルとソウシがミナムの両脇に降りてきた。ミナムに睨みを利かすルーシー

「貴様がミナムか」

「そうだが、何か？ところでルーシーってのはどこだ」

「ミ・・・ミナムさん」

ミヌが後ろからミナムの背中をつついた。ミナムが振り向くと

「どうした？」

「あの人？」

「えっ」

そう言ってミナムの目の前をルーシーを指差した。

「あの・・・おばさん？」

「しっ！！聞こえるわ？」

その言葉を聞いて、顔が険しくなるルーシー

「聞こえてるよ・・・」

二人の言葉にため息を付いたカーネルとソウシ・・

「バカが・・・」

「やい！！ミナム！！！とうとう私を怒らせたわね！！ドク！！クランツ！！」

「は！！」

屈強そうな男とマジシャンミ見たいな男が現れた。

「な・・なんなんだ？」

「ミナムとやら！！覚悟しな！！」

一方、戦艦マリハにからルーシー海賊団と戦っていたベッツィー

「艦長！！敵がひるんでいます」

「よし！！！このまま突っ込むぞ！！全艦全速！！」

その頃、ルーシーの船上では戦いが始まっていた。

ミナムとルーシーの剣が交わった。

「何！！」

ルーシーは、ミナムが剣を受け止めたことに驚いた。

こやつ・・・力は互角か・・・だと・・・

ミナムの剣をはじき、少し下がったルーシーは衝波を撃ってみた。

「何！！」

今度はミナムは衝波をはじきかえした。ふと、周りを見るとソウシとドク、クランツとカーネル・ミヌが互角の戦いをしていた。

そこへベッツィーが飛び込んできた。

くそ・・・こんな時に・・・しかたない・・・

ルーシーはミナムにその刀を振り下ろした。

「大波動！！」

ルーシーが放った大波動は、甲板を切り裂きながらミナムを襲い、

慌てて盾で防ぐミナムを直撃し炸裂した。

「ミナム！！」

「ミナム殿！！」

その衝撃を受けたミナムは、必死に盾を押さえ、頼む！！もってくれ、そう思った時、その衝撃に耐え切れずミナムはそのまま
後ろに吹き飛ばされ、マストに体を叩きつけられた。
「ぐ！！」
その様子を見ていたルーシーは、にやりと笑い　、やったか・・・
とつぶやいた時
目の前の光景を見て、わが目を疑った。

「いてて！！」
そう言って、倒れていくマストから立ち上がるミナムの姿がそこにあった。
「ミナム！！」
立ち上がるミナムを見て喜ぶカーネルたち
「ルーシー、覚悟！！」
そう叫んで超弩弓を構えるベッツィー
その時だった。

「この戦い、しばし待たれい！！」

そう叫んで、一隻の海賊船がルーシーの船に乗り付けてきた。

差し出された首

ルーシーとミナムの間に飛び込んできたのはカイソンだった。

「カイソン。何故、邪魔をする！！」

ルーシーに膝をついたカイソンは、ギタを突き出しこう叫んだ。

「親父であるスクィニーを殺したのは、このギタだ！！そして、あのホーリーを殺したのもこいつだ。」

その光景を見て、一同は立ち止まりカイソンのほうを注目した。そして、ルーシーは、カイソンのほうを見て

「それは真か？」

「はい。ギタは俺たちの前で、親父を殺し、ホーリー殺害を話した。」

その言葉を聞いたルーシーは、今度は、ギタのほうを見た。

「ギタ・・・貴様がやったのか？」

「お・・・おれは・・やってねぇ・・・カイソンこそ犯人だ！！」

「ギタ！！この期に及んでまだ嘘をつくか。」

「やってねぇ～！！！」

「もういい。例の薬を！！」

「ルーシー様！！俺は、やってねぇ！！」

そう叫ぶギタに無理やり小さな薬を飲ませた。

しばらくして、ルーシーがギタに質問をした。

「スクィニーをやったのはお前か。」

「お・・おれは・・・そうだ・・・あんな堅物俺がやったんだ。あれ？前から狙ってたんだ・・・あれ・？」

首を横に振りながらも本当のことを言うギタ。

さらにルーシーの質問が続いた。

「ホーリーの母娘を人質に奴をやったのもお前か？」

必死に口をあけないでおこうとあがくギタ

「そんなに話したくないか？」

「いや・・・あれ？・・・あいつも俺がやったんだ・・・あれ？スクィニーの奴が生ぬるかったんでな・・あれ？」

「そうか・・カイソン・・よくやった」

ルーシーはしばらく俯き考えた。そして、こうつぶやいた

「あと、何隻のこっているのだ？」

「クリオ海賊団が５隻、わが方が８隻・・」

「そうか・・惨敗だな・・」

「しかし、ルーシー様・・・まだクリオ殿も健在ですし・・」

「私の攻撃を受けて平気な奴がいた。」

そう言ってルーシーはミナムをにらみつけた。

「し・・しかし・・・」

「私の攻撃が聞かないのだぞ！！」

ルーシーの言葉にただ黙り込む海賊達・・・

「ルーシー様！！」

「お前ら・・逃げたい奴は逃げろ！！」

ルーシーの言葉に驚く海賊達

「ルーシー様！！」

「私は、負けた・・・だから・・・これ以上お前たちを犠牲に出来ない！！」

「そんなこと言わないでください。俺たち最後までついていきます

！！」

「いい加減にしろ！！」

そう叫んで海賊達を睨むルーシー、その海賊達の目には涙があった。

「このままじゃ・・・犬死だ！！死ぬのは私だけでいい！！」

そういい残し、武器を捨て、ゆっくりとベッツィーの前に向かっていった。

「ルーシー様！！」

海賊達の叫び声がこだました。

ギタの最期

ベッツィーの前に膝をついたルーシー

「頼む仲間を逃がしてくれ。」

周りの海賊達は泣き叫んでいた。

その様子を見たベッツィーは、こう叫んだ

「よかろう！！逃げたい奴は逃げよ」

しかし、その声を聞いても海賊達は逃げなかった。

「俺達は、ルーシー様について行きます」

「お前ら・・」

その時だった。ベッツィーの横にミナムが来て、耳元でささやいた。

「そうだな・・それはいい案だ。」

「ルーシー」

ベッツィーを怪訝そうに見るルーシー

「このたびの叛乱は、あいつがルーシーの名を使って勝手にやったんだろ！！」

そう言って、ベッツィーはギタを指差した。

それを見たギタは、驚いた。

「えっ？・・おれ？」

ベッツィーの言葉が理解できないルーシーは聞き返した。

「それは？」

「つまり、ギタが勝手にやったことだ。そして、お前はギタの首を出して、ミカドに忠誠を誓えば」

「そんなことはできぬ」

頑なに断るルーシーの目の前ににソウシが来て話を始めた。

「今回の目的は、ルーシーの首ではなく、叛乱を収めることだ。」

「・・・・」

「ミカドはルーシーを投降させろともおっしゃっていた。」

ソウシの言葉に顔をあげるルーシー

「それは・・・どういう意味だ」

「お前ら海賊団がミカドに忠誠を立て、海軍と協力するといえば・・・助かるということだ」

そしてソウシは、海賊達にこう叫んだ。

「海軍に協力すれば、お前らもルーシーも助かるがどうする！！」

どよめく海賊達・・・しかし、しばらくして

「ルーシー様が助かるなら俺達ついて行きます。」

「ルーシー様！！」

その様子を見て俯くルーシー　こいつら・・・本当にバカなやつらだ・・・

そしてこうつぶやいた。

「ありがたい・・」

こうしてルーシーは軍門に下った。

「さてと・・こいつの首をはねるか・・」

そう言って、ベッツィーは、ギタの方へ歩いて行き刀を抜いた。

その刃先がギタにむけられ、ただビビッているギタ・・・その時だった。

「まってくれ・・・」

その声の主はカイソンだった。声のする方を振る向くベッツィー

「ベッツィー様・・・あなたの仇でしょうが・・われわれ船長の仇でもあります・・・」

「それが・・・」

「俺の手で仇をとらせてくれ！！」

そこへルーシーが続いた。

「こいつは、わしの仇だ・・・カイソンにやらしてくれ。頼む」

目の前で頭を下げるルーシーを見て過去の記憶がよみがるベッツィー

こ・・こいつは・・・父の仇・・・わ・・・わたしが晴らしたい

そう思っていた。

しばらく、立ち尽くすベッツィー

その思いを消したのはポンとベッツィーの肩を叩いたミナムがだった。

「ミナム殿・・・」

「見ろ」

「えっ？」

ミナムの指差した先には、恐怖にただ体をガタガタ震わせ、小便を漏らし

「ヤ・・ヤダ！！！死にたくない・・・助けてくれ！！！」

そう叫んでいるみっともない姿のギタがいた。

「こんな奴がお前の仇か？」

その惨めな醜態を見たベッツィー・・・しばらくその様子を見ていた。

そして、こんな奴・・・こんなくだらない奴に、親父は・・・

そう思うと涙が出てきた。そこへミナムがベッツィーの両肩に手を置いた

びくっとなるベッツィー涙目のままミナムを見返した。

「こんな奴に、ベッツィー殿の手を汚すことはない」

「し・・・しかし・・・」

そう言って泣き崩れるベッツィーを次の瞬間ミナムが抱きしめた・

「心配するな・・」

「でも・・・」

「くやしいか？」

「・・・」

「お前は十分にやった」

ベッツィーはミナムの胸の中で泣いた。

しばらくして、落ち着きを取り戻したベッツィーは。ミナムを見上げ見つめた

その時だった。

「いてて！！」

ミナムが急に叫んだ

「いつまで抱き合ってるの！！」

そう言ってミナムの耳を引っ張ったがカーネル

あ・・・やっとわれに返るベッツィーは俯き黙り込んでしまった。

そこへソウシが

「ベッツィー殿。それでは、カイソンが仇を撃つということでいいな」

黙って頷くベッツィー

「ありがとうございます。」

次の瞬間、カイソンは刀をギタに振り下ろした。

こうしてダイズ沖会戦は終わり、ルーシーの叛乱は、ギタの愚行であったこと

そして、ギタの首を差し出したルーシーはミカドに忠誠を誓った。

京の出来事・・・

京では、ルーシー投降の知らせを聞いたミカドが激怒していた。

「なに～！！ルーシーが忠誠を誓っただと！！！」

「ミカド・・・・落ち着いて・・・・」

フトーがミカドをなだめているとそこに慌てて右大臣が入ってきた。

「一大事です！！」

「何事だ・・・・」

フトーが聞き返すと

「青蛇が・・・青蛇が・・」

「青蛇がどうしたんじゃ」

「ミカドに忠誠を誓うそうです。」

「えっ？」

目が点になるミカド・・・そこへフトーが質問した。

「じゃぁ・・・　今回の叛乱は」

「奴の手下の勝手な行動だと首を差し出してきました。」

その言葉を聞いてミカドは卒倒した。

「ミ・・・ミカド・・・・・」

「な・・・なんとしてもミナムを・・」

数日後、御前会議が開かれた、今回の英雄ミナムをどうするかが争点となった。

「ミナム殿を正式に軍に入れては？」

「しかしですな～！！」

御前会議でもまとまらないミナムの処遇・・・

そんな中でフトーがミカドに進言した。

「ミカド・・・」

「何じゃフトー・・・」

「いっそのことミナムを討伐隊の隊長ということで・・・」

フトーの言葉に顔をしかめるミカド・・・

「フトー何を言っておるのじゃ・・・そんなことは・・・」

「ギオン討伐に向かわせるのです。」

「しかし・・・ギオンと手を組んだらどうするのじゃ？」

「それならば、ソウシをつければいいかと。」

二人の会話に入ってきたのは、マヤザキだった。

「ソウシか・・・しかし、それだけでは・・・」

「ちょうど、3番隊は、ギオン討伐隊へ支援に行ったまま、ソウシは適任かと」

「し・・・しかしだな・・・・・・」

マヤザキが納得しようとした時、フトーがこういった。

「マヤザキ殿」

「なにか？」

「私の情報では、ミナムは二人の魔導士が着いていて、その一人と結婚するとか・・」

その言葉を聞いたミカドは身を乗り出した。

「ほう・・・それで？」

「その結婚を許可して、結婚相手を京へおいていくようにするです。

」

そう言ってフトーはにやりとした。そして、ミカドもその話を聞いて自分のあごひげを数回なで・・・

「そうじゃな・・・要するに人質というわけが・・」

「御意に・・」

そう言ってフトーは頭を下げた。

「マヤザキよ、ミナムが戻ったら、ギオン討伐を命ぜよ。そして、先発している3番隊と合流するように言うのじゃ」

「は・・・」

「それとミナムの婚礼の儀を行うぞ・・・」

「は・・・」

その頃、ミナム達一行は、まだ、戦艦マリハにいた。

相変わらず船酔いをしているソウシ・・・

「もうすぐカサオだ・・」

甲板で手すりに手をかけ、海を見ているミナムの横にはカーネルが

いた

「そうね・・・」

「カーネル・・・もうすぐ・・・」

ミナムが言おうとした瞬間、

「私もいるんですけど」

そう言ってミヌが、二人の間に入ってきた。

「ミヌ・・・」

「わたし・・・あきらめませんから・・」

「ちょ・・・ちょっとミヌ何言ってるのよ」

少し起こり気味にカーネルは言った。

「ちゃんとカーネルさんの了解を得て、2番目の妻になるんだから・・」

「もうっ・・・」

そんな3人の光景をふらふらしながら見ているソウシの姿があった。

そこへベッツィーがやってきた。

「あと数時間で、カサオです。」

やがて戦艦マリハは、カサオに入港した。

下船

ルーシーと青蛇が降伏・・・！！！

その知らせはギオンにまで響き渡った。

「ワカタケル総帥！！」

「どうした？」

「ルーシーと青蛇が・・・」

頭を下げ話しかける部下をチラッと見たワカタケルは、椅子に座った。

「投降したんだろ・・」

「はい・・・」

「そうか・・もう・・よい・・・」

そう言って、部下を追い払うしぐさをする。

「し・・しかし・・」

そう答える部下にワカタケル

「あ・・・・」

「もうよい・・と言ってるだろ」

「はっ・・・」

頭を下げ部下が部屋を出て行こうとしたら

「まて」

「はっ・・・」

「ユウ城を総攻撃せよ!!」

「えっ?」

「アスケが原でちょろちょろしているのがいるだろう。そろそろあの消耗戦を終らせるんだ」

「わかりました。」

ワカタケルは、少し焦っていた。それは同盟した連中が簡単に放棄したことでもなく、

大筒を完成させていたことでもなかった。

それはミナムが出現に対し、ミザキがあらわれていないことだった。

伝承のとおりミナムは現れた・・・しかし、先に現れるはずのミザキがいない。

一体どうなってるのだ?

一方、カサオに着いたミナム達は、戦艦マリハからまさに下船しようとしていた。

「ベッツィー殿、今までお世話になりました。」

深々と頭を下げるミナム・・・その様子に驚くベッツィーはミナムの両肩に手をおいた。

「ミナム殿・・・そんなことしないでください。こちらこそ助けられたのに・・・」

ベッツィーの行動にカーネル、ミヌ、ソウシは目を疑った。3人の目の前でミナムを抱きしめていたら立った。カーネルは何やってのよ!!!と顔をひきつらせ、ミヌはあちゃーと顔に手を置いた。そして、呆然と見ているソウシの姿がそこにあった。

「えっ？」

抱きしめられ、ただ驚くミナム・・・やばいよ～これ・・当然、カーネルの視線が怖い・・・しかしむげに引き離すわけにもいかず、ただ、立ち尽くしていた。そんなミナムの耳元でベッツィーはかすかな声でささやいた。

「・・・お前のことが好きになった・・・」

「え!!!」

目を見開き驚くミナムからそっと離れたベッツィー・・・周りの雰囲気をみて、まずったかな～そう思いながらも、本当は、キスしたかったけど・・・少し航海をした。そして、右手を出して

「それでは・・・また・・・いずこで・・・」

「ええ・・それでわぁああ？」

握手をしようとした二人の間にカーネルが少しひきつった顔で、割ってはいてミナムを押しのけベッツィーと握手した。

「お世話になりました。」

「そうですね・・・」

ベッツィーを握っていた手にはかなりの力が、その力に少しむっとするベッツィー

おー痛てー　私が一体何をしたんだ？そう思っていると今度はソウシがあらわれた

「ソウシ殿もお気をつけて。」

「そなたも・・」

そういうとベッツィーはソウシの耳者でささやいた。

「ミナム殿を頼みましたよ。」

「なぜ、そのようなことを。」

「好きなのでしょ」

その言葉に反論できないソウシ、な・・なんてことを言うんだ。ただでさえカーネルとミヌが争っているのに私の入る隙などない・・・

「勘違いですよ。ベッツィー殿。」

「なら私も参戦しようかな？それでは達者で」

そう言って、ベッツィーはソウシの肩をポンと叩いた。

こうして、ミナム達一行は、マリハから下船した。

カサオ海軍司令部の宴

女海賊ルーシーの投降を聞いたカサオの町は歓迎ムード一色となっていた。

カサオに着いたミナム達を待っていたのは海軍司令部でのささやかな宴だった。こうして、ミナム達一行は、今海軍司令部の宴が行われいる部屋にいた。

「はっはっはっ・・・君達ならやってくれると信じていたよ！！」

グラス片手にバンバンとミナムを叩きにこやかに話しかけるハリー提督に

「う・・・運がよかっただけですよ。」

そう答えつつミナムは絶対こいつ信じてねぇよ・・・

そう思っていると誰かが後ろから肩に手を回し抱きついてきた。

「うっ・・・」

「ミナム殿・・・」

ミナムはその声に聞き覚えがあったがいつもとまったく違う・・・と周りを見るとハリー提督の顔はひきつっている。そして、カーネル、ミヌ、ソウシ殿も唖然とこちらを見ている。ま・・・まさか・・・？ベッツィー殿？

「えっ？」

顔を横に向けるとベッツィーの顔が目の前に・・・

「ベ・・・ベッツィー殿・・ど・・・どうしたんです？」

ミナムの言葉に少しむっとした様子のベッツィーは、ミナムから離れ、両手に腰をあて。

「戦友との別れを惜しんでるのに・・・」

ベッツィー殿・・どうしたんですか？・・・結構酔っているみたいだし・・・そう思っているとミナムは、一方からものすごい殺意を感じた・・・やばい・・・カーネル・・・だと視線の方を見ると・・・やっぱり・・・カーネル・・・えっ？・・・ミヌも・・・・ソ・・・ソウシ殿まで、そんな目で見ないでくれ～俺が一体何をしたというんだ。と心で叫ぶミナム・・

ベッツィーもミナムの視線の方向を見て、いいじゃないこのくらい・・・そう思っていたが彼女らの視線を無視できない。そして、ミナムを離れ、カーネル達の方へ歩いていった。

一方、カーネルも何やってるのよ～！！もうっ！！そう思っているとベッツィーが近づいてくる。

な・・なんで近づいて来るの？焦るカーネルにベッツィーは頭を下げた。

「あなた達にも本当に感謝しています。」

急に頭を下げられ戸惑うカーネル、ミヌ、ソウシ・・・しかし、次の瞬間だった。

「えっ？」

カーネルはわが耳を疑った。い・・今なんて言ったの？それはカーネルの耳元でかすかに聞こえた。
ミナム殿ことが好きになりました。カーネルにはそう聞こえた。う・・うそよね？そんなはずない。とカネールがミヌ、ソウシに頭を下げ挨拶しているベッツィーを見るとちらりとカーネルの方を見て、かすかに口元がクスっと笑った。
えええ！！！じょ・・・冗談でしょ・・・とカーネルが驚いていると、ベッツィーがミナムの方へ向かった。ま・・まずい・・そう思ったその時だった。ミナムと握手したベッツィーは、何かを話しかけ、ミナムは驚いた表情を見せたとたん、頬にキスをして・・・

「じゃぁ・・」

そういい残して、この場から去っていった。
う～！！ミナム・・後で・・・
その視線を感じながらも、ミナムもキスされた頬を押さえ戸惑っていた。

しばらくして、宴が終わり、ハリー提督に呼ばれたミナム達・・・

「ところでだ・・・ん？」

ハリーは驚いたミナムの顔が腫れてからだった。

「ミ・・・ミナム殿・・・どうされたのですか・・？」

「いや・・・お気になさらずに・・・」

首をかしげるハリー提督だったがまいっかと話を始めた。

「実は、君達は明日にでも京に向かってもらう。」

「えっ・・・あ・・・明日ですか？」

「そうだ・・・ミカドのご命令だ」

「そ・・そうですか・・」

がっくりと肩を落とすミナム・・・とほほ・・また歩きか・・・そう思っていると

「明日、１０時に京行きの馬車を手配しているからそれに乗っていってもらえるか。」

「えっ？馬・・馬車ですか・・・」

「そうだ・・・」

「ありがとうございます。」

「ミ・・ミナム・・・」

「ミナムさん？」

「ミナム殿？」

慌ててミナムをとめようとする３人・・・

「どうした？」

「そうか！！明日１０時で・・」

「わかりました！！」

嬉しそうに答えるミナムに対して、ため息をついた3人だった。

「どうする？」

「最悪だな・・・」

「そうですぅ・・・」

落ち込む三人・・・だった。

馬車の中

「あ・・・痛て・・・なんだこれは。」
「だ・・だから・・言ったじゃない！！」
「そうですぅう　痛い」
「・・・・・」
ただじっと目をつぶっているソウシ・・・
俺達は今、京に向かう海軍特急馬車の中・・・
特急馬車といっても椅子は硬く・・クッションなんかまったくない。
それにもまして道が悪いときている。ただでさえ乗り心地が悪いのに・・・それは、数時間前のことだった。予定時刻に指定場所に来た俺達の目の前には馬４頭で引くタイプの馬車が一台・・・

「これに乗るのですか？」

「そうです・」

にこやかに答えるハリー提督、そこへカーネルが

「私たちは、飛んでいきますので・・」

その言葉を聞いたハリー提督が怪訝な顔をしたと思ったら、

「いかん！！、君達も乗るのだ！！」

「ええ！！」

驚く３人

「君達の護衛のためである！！！」

「し・・しかし・・・提督・・・」

そう答えようとするソウシにミナムが

「せっかくだから乗ろうぜ」

ミナム殿・・・余計なこというなよ・・・しかもそんな軽いのりで・・・ソウシが思っているとドンと背中を押された。

「さ・・・乗った乗った・・」

こうして無理やり馬車に乗せられた４人だった。

「ここまで・・・ひどいとは・・・」

「もう・・・信じられない・・・」

がたがた揺れる馬車の中でお手玉状態で攪拌される俺達はあちこちに叩きつけられていた。

これは・・・たまらん何とかせねば、そう思ったミナムは運転手に向かって叫んだ。

「う・・・運転手さん」

「なんですか・・」

しかし、激しく揺れる馬車の中では声は途切れ運転手にまともに届いていなかった。

「少し・・・あ・・・として下さい」

「了解」

そう言ってパシっとムチを振るった。
ますます速度を上げる馬車・・・運転手さん・・・ち・・ちがうって！！わっ！！
馬車は速度を上げるごとにますますゆれはひどくなった。

「ミナム何やってるのよ！！」

ミナムに睨みを利かすカーネルを見て、俺はゆっくりといったつもりだったのだがもう一度

「運転手さん！！ん？」

ミナムがふとソウシに目をやると青ざめた顔をしていた。

「ソウシ殿・・・大丈夫ですか？」

「わ・・・私に声をかけるな！！」

その言葉に驚くミナム・・・ソウシ殿・・・ひょっとして・・・乗り物酔い？や・・やばいよ・・・

「う・・運転手さん！！」

ミナムはそう叫んだが遅かった。

「うっ！！」

「わ～！！」

「キャー！！」

ミナム達は目の前の光景にどうすることも出来なかった。
ただ大慌てで、こぼれてくるものを手で受けていた。

「と・・止めてくれ！！」

しばらくして京に着いたミナム達・・・

「もう・・・最低！！」

「う～」

そう言いつつもミナムを睨むカーネルとミヌ

「・・・・」

ソウシはただ一人俯いていた。

「ソウシ殿、大丈夫ですか？」

ミナムがソウシに声をかけたことに切れたカーネル

「あんたのせいでしょ！！」

そう言ってミナムの頬をつねった。

「コホン！！」

迎えに来たフトーがそんな４人の様子を見て目を丸くした。

「いかがされた。」

「まぁ・・・馬車が・・すごい揺れまして」

「へっ？」

ミナムは馬車で来たことを説明した。

「はっはっはっ」

「笑い事ではないですよ。」

「そうですか。それは、大変でしたね。ところで挨拶がおくれました。私、フトーと申します。」

フトーは軽く笑みを浮かべ、ミナムに手を差し伸べた。

「ミナムです。」

そう言って握手をするミナム・・・

「お噂はかねがね聞いております。」

噂ってどんな噂だ？

フトーの邸にて　1

「ささ・・こちらへ・・・・」

「フトー殿」

そう声をかけたのはミナムだった。

「なにか？」

「ところで、噂とは？」

「はて？」

「先ほど、おっしゃていた噂ですよ。」

「ああ・・・・」

ふとは思い出したかのように声を上げた。そして、にやりとして

「あなた方の武勇伝ですよ。まぁ・・後でうかがいたいものですな・・はははは・・」

この男・・・怪しい・・・そう思ったミナムだった。しかしフトーはマイペースでミナム達を案内した。

「こちらへ」

ミナム達は、フトーに連れられ豪華な家の前まで連れて来られた。

おかしい何かあるのでは？そう思ったソウシは

「フトー殿、何故・・・あなたの家に？」

「ははは・・ミカドのご命令で・・・この度の活躍にふさわしい対応をせよと・・ささ・・中に入って」

広い玄関に入ってフトーはこう言った

「まず・・・ここで旅の疲れでも癒してください。夕刻の６時から宴があります。侍女がお迎え参りますので、それまでごゆるりと」

そして、ミナム達はそれぞれの部屋に通された。部屋で一人休んでいたミナム・・・なんか・・・あやしいよな・・・あの男・・・ところでカーネルたちはどこかな？そう思って部屋を出ようと扉をあけてミナムは驚いた。えっ？あなたはだれ？そこには侍女が立っていた。目の前の扉が急に開いたのに驚いた侍女はしばらく声を失っていたがすぐに話しかけてきた。

「お客様、お風呂が沸いておりますので、よろしければ入ってください。」

風呂ねぇ～そうだな・・・浴びるかとミナムは侍女に話しかけた。

「風呂はどこ？」

「案内いたします。こちらへ・・・」

案内をする侍女の後ろを歩くミナム

「ところでカーネルたちは？」

「あのお三方は、この廊下を曲がった部屋にそれぞれおられます。」

「そうですか・・・」

「ところで・・・風呂は、別々だろう」

「は？」

「女湯と別々ですよね。」

侍女は笑みを浮かべながら

「面白いことを・・・・もちろん・・・そうですよ・・」

よかった・・・ミナムは旨をなでおろした。そして、しばらく、歩くと侍女が立ち止まって振り返った。

「ここです。」

「ありがとう。」

ミナムは脱衣場に入って行った。すると、侍女が入ってきた。えっ・・・これからおれ・・確か風呂に入るんだけど・・あ・・・あなた？一体なにしてるんですか？と入ってきた侍女をミナムが見ていると徐に服を脱ぎ始めた。ええっ！！驚いたミナムは声を上げた。

「あなた！！！何してるんですか・・・ここで・・・」

すると侍女は不思議そうな顔をしてミナムを見て

「お客様のお背中を流そうと」

そう言って、するりと上半身裸になった。わっわっ！！一体何考えてるんだこの人、しかも、下の服に手をかけてるし

「ちょっ・・・ちょっと・・何故脱ぐんですか」

ミナムがそう言うとその侍女は今度は怪訝な顔をして、

「脱がないと服がぬれるからです。」

「そういう問題じゃなくて。」

「何か問題でも？」

「あなた・・女性でしょ・・・・」

「だから？」

「だからって・・・あなた・・・あなた恥ずかしくないの？」

「別に・・これは私の仕事ですから・・・」

「そうじゃなくって・・・」

「ひょっとして、お客様・・・Hなこと考えてません？」

かんべんしてくれ～こいつ・・・一体何を考えてるんだ？ミナムが

そう思っていると

「別にHしてもかまいませんよ。」

はっ？一体どうなってるんだ。まてよ・・・ここは、フトー殿の家とか言ってたな・・・

ということは、そんなことをしたら何を言われるかそう思ってミナムが顔をあげると

目の前にはすっぽんぽんの侍女が立っていた。

「うわ～！！」

「さぁ～お客様・・・入りましょう。」

ミナムは慌てて、侍女に言った。

「頼むから一人で入らせてくれないか？」

すると侍女はすごく落ち込んだ顔をしてうろたえた。

「お客様・・・何かお気に召さないことを・・・」

こいつ～何考えてるんだよ・・・

「そうじゃなくって」

「では・・・私がお気に召さないのでしょうか」

「そうじゃなくって」

「では？」

「ただ・・一人にしてほしいんだけど・・・」

「せめて・・お背中だけでも流させていただけませんか？そうしないと・・・」

侍女は泣きそうな顔でミナムに訴えた。その顔を見たミナムは勘弁してくれ～でも、してあげないとこの人後で何か罰でも受けるのかも・・・う～しかたない・・

「じゃぁ・・背中だけだぞ・・・」

「はい！！」

そう言って侍女はにっこりと笑顔を見せた。そこへ、ミナムは大きなタオルを侍女に渡した。

「これは？」

「体に巻いて入ってきて」

「変なの？」

何が変だ・・・お前に方がよっぽど変だ・・・そう突っ込みたかったがしぶしぶタオルを巻いたな・・・これで大丈夫だ・・とミナムは風呂場に入って行った。そして、椅子に座って体を洗おうと顔をあげて驚いた。

「うわ！！」

「何驚かれてるんですか？」

侍女がミナムの前にちょこんと座っていた。しかも、裸で・・・

「あの～タオルは？」

「あ・・・あれ？脱衣場においてきました。」

「えっ？なぜ？」

「だって・・・ぬれるから・・・・」

そうじゃなくて・・・あなた・・ちょっとは考えてよ～しかも、こちらに見せつけるように座って丸見えだし・・・い・・いかん・・・何とかせねば・・・ミナムと惑っていると・・・

「ご立派ですね・・・」

へ？何言ってるんだこの人は、視線が・・・・えっ・ひょとして・俺の股間を見てるし・ミナムは思わず股間を押さえて後ろを向いた。

「うわぁぁ！！！　と・・とりあえずこれで背中を洗ってくれ・・・」

「はい！」

そう言って侍女はミナムから洗い手ぬぐいを受け取った。やがて・・背中を洗い始めた侍女・・・そうそう・・うまい・・・そう思っていると

「かゆいところないですか」

「だいじょうぶですよ」

「そうですか・・それでは右手を上げてください」

侍女がそういった瞬間・・・ミナムはドキッとした。背中に何かチクチクと当たってるよ・・・・ふと見ると――うわー!!!・・・・侍女の胸があたっていた。思わず背中を丸めるミナム・・・

「どうなされたのですか。」

「む・・むねが当たってるんですが・・」

「それが?」

侍女がそう言ってミナムにもっと胸を押し当ててて来た。

「これでどうですか?」

「そうじゃなくて・・」

「じゃぁ・・」

侍女がそう言った瞬間にミナムの股間に侍女の手が回ってき、アレを掴んだ・・

「うわぁあ!!!」

慌てて股間を押さえ逃げるミナム

「どうされたんですか？」

「そこはいいから・・ね・・もう背中を流し終えたでしょう。だから・・・一人でゆっくりさせてくれないか？」

「そうですか。わかりました。」

そう言って侍女は立ち上がり、ミナムに体を見せつけ、風呂場を出ようとして、振り返った。

「えっ？」

「お客様・・・そのご立派な下の処理はよろしいですか。」

「けっ・・・結構です・・・頼みますから一人にして下さい。」

「はい・・」

そういい残して侍女は風呂場を出て行った。

何なんだ一体？そう思って風呂に浸かっているとまさか？体を拭くとか言うんじゃないだろうな？

そう思ったミナムは、こそこそと脱衣場に向かった。そして、周りを見ると侍女はいなかった。

ほっと旨をなでおろすミナムだった。

一方、フトーは侍女から報告を受けていた。

「ははは！！・・・それはおかしい」

「フトー様、笑い事ではありません。」

「じゃぁ・・お主に指一本も触れなかったのか」

「はい・・・」

「そうか・・・ご苦労じゃった。」

「フトー様・・」

「あとでな・・・」

フトーはしばらく考えていた・・・ミナムの奴、あの展開で我慢したのか・・・単なる怖気づいたのか？それとも・・・もし、わしのことで・・・う～む・・・ようわからん奴じゃ・・・宴でもう少し様子を見させてもらうか・・・

フトーの邸にて　2

やがて宴が始まった。そこにはミナム達一行以外に、フトー、マヤザキ、陸軍大臣のナンゴウがいた。

「今日は皆様方にお越しいただいたのは、ルーシー海賊団投降の立役者であるミナム殿一行にささやかでありますが私から感謝の意を表して本日の宴を楽しんでいただきたい。」

フトーの挨拶の後、すぐに乾杯が行われ宴が始まった。

「ところでミナム殿・・」

そう言ってミナムに近づいてきたのはフトーだった、

「はい・・」

あやしいなぁ～このおっさん・・・そう思っているミナムにフトーは頭を下げた。

「ど・・どうなさったのですか？」

そういうとフトーが耳元でささやいた。

「先ほどはお気に召さなかったようで・・」

やはり・・・このおっさんの仕業か・・・

「あ・・あの・・そういう意味ではなくて」

「それでは？」

「実は・・・」

ミナムはそう言って耳元でそっと言った。

「婚約者がいるんです。」

「ほう・・それが？別に少し遊ぶくらいいいじゃないですか・・・」

「実はこの中にいるのです・・」

「えっ？まさか？ソウシ殿？」

「そんなはずないでしょう。」

ミナムは首を横に振って否定した。

「では？あの魔導師の中の一人？」

頷くミナム・・・

「あちらの？」

「そう・・・」

「そうでしたか・・・これは出すぎたまねをしましたな・・・はは

は・・・ところでミナム殿このめでたい話・・・ミカドの前でして

もよいか？」

「は？」

何言ってるんだ。・・・このおっさん・・プライバシーの侵害だろう？

そうミナムが思っていると

「ところで・・・私が婚儀のことを進言いたそうか・・」

「な？」

「ははは・・まぁ・・・・あとは楽しく・・あ・・そうそう・・・これを・・」

フトーは手元からなにやら竹の筒のようなものを出した。

「それは？」

フトーはぐい飲みをミナムの前に出し、その筒から飲み物を注いだ。

「ささ・・・これを・・・」

ぐい飲みを手に取り、フトーの方向を見たミナム・・あやしいぞこれ・・・絶対何かある・・・

「これは？」

「滋養強壮の薬です。これを飲むと体の疲れが取れますぞ・・・」

「本当ですか？」

「そんなに怪しまなくても～」

「あ・・・そんなつもりは・・・」

「なら・・・私が・・・」

そう言って同じ筒から自分のぐい飲みに液体を入れ・・ミナムの目の前で飲み干したフトー

「これでどうです？」

「わかりました。」

しかたない・・・飲まないと・・・ええい・・・ままよ！！とミナムはその液体を飲み干した。

なんとも得体の知れない苦いようなすっぱいような液体だった。しかし、体にはなんら変化がなかった。あれ？そう思っているとフトーが

「効き目は、しばらくしてからじゃよ・・・ははは」

そういい残してフトーは、ミナムの前から去って行った。

そんな宴の中、ソウシはマヤザキと酒を酌み交わしていた。

「マヤザキ様・・・明日以降は、」

「明日は、ミカドへの謁見がある。その後は、その時にわかる。」

「そうですか。」

「まぁ・・・そういわずお前も飲め・・・」

「マ・・マヤザキ様頂きます。」

「ところでミナム殿は、お二人の魔導師がおられるとか・・・」

ミナムに話しかけているのは、ナンゴウだった。

「大変でしょう・・女性魔導師が二人もいると・・・うらやましい・・」

相当酔ってるなこのおっさん・・・そう思っていると次の言葉を聞いて飲みかけた酒を思わず噴いてしまった。

「大変でしょう・・・夜の方も・・」

何言ってんだこのおっさん!!!

そんな光景を見ていたソウシにマヤザキが話しかけた。

「どうした・・・ソウシ・・・」

「あ・・・別に・・・・」

ソウシが答えに戸惑っているのを見て、口元がすこし笑ったマヤザキ

「お前、ミナムのこと好きなのか？」

な・・・なんてことを言うんですか？ソウシは思わず固まってしまった。

「図星か？」

「違います・・・マヤザキ様があまりにもありえないことをおっしゃるから・・・」

「ははは・・そうか・・すまなかった・・・」

「ところで、マヤザキ様・・」

「何だソウシ・・・また、仕事の話か」

「ええ・・これだけはお耳に入れておかねばと・・・」

「仕事の話は、したくないが・・・」

そう言ってマヤザキはソウシの目を見ると真剣だった。

「しかたない・・・なんだ」

「先日の会戦で、２番隊隊長トリニィがギタの魔導士として現れたのですが。」

その言葉を聞いたとたん、マヤザキの目は鷹のように鋭くなった。
そして、
「その件は、後日伺う、他言無用だそ」
「わかりました。」

ミナムの横にはカーネルとミヌが来ていた。そして、
「あの二人、いい感じね」
「そうですね」
そう言ってカーネルは、ソウシとマヤザキを指差した。
「えっ？」
「ソウシさん・・・かわいい・・・あんな反応して」
そう言ってミナムの肘をつついたカーネル
「ホント・・」
そう言ってミヌもミナムのほうを見た。
「そうだね・・・」

やがて宴が終わり、ミナム達はそれぞれ別の部屋に向かった。ふとミナムが見るとソウシがいつもとかなり違いふらふらしていた。

「ソウシ殿？大丈夫ですか？」

ミナムが声をかけると・・・ソウシはしばらくミナムを見つめた。私は・・・と視線を落とし、空を見た。空には雲がかかった朧月が庭を照らしていた。

「ソ・・ソウシ殿？」

「大丈夫です。もう少しここで風に当たっています。」

「そうですか・・・それでは。」

ミナム達はソウシをおいてそれぞれの部屋に入って行った。ミナムの後姿を見送るソウシ

しばらく風に当たっていたソウシ・・・気持ちがいい・・・ふとあの時、ベッツィーがストレートにミナムの告白していたのを思い出していた・・・私には、できない・・・そう思うと朧月がますますにじんできていた。

しばらくして、ソウシは声をかけられた、そこには、ミナムがたっていた。

「ソウシ殿・・・まだ・・・おられたのですか」

やばい・・・今は見られたくないそう思ったソウシは、ミナムから顔をそらした。

「ええ・・」

「そうですか・・・風に当たると気持ちいいですな」

「ああ・・そうですね。」

早く行ってくれ頼むからそう願うソウシ

「ソウシ殿、ありがとうございました。」

「えっ？」

「あなたがいなかったら・・・・（今はどうなっていたことか）」

ソウシにはミナムのあなたがだけしか聞こえなかった。あなたが・・・その後は？一体何を言ったんですか？そう戸惑うソウシに次に聞こえたのは

「ありがとう・・あっ・・・それと、いい感じでしたね」

「えっ？」

ミナム殿・・一体何が言いたいのですか？ソウシの頭の中には”？マーク”が３つ以上点灯していた。

「マヤザキ殿と・・・ツーショットで・・・好きなんでしょ？」

「そ・・・そんなことありません。」

「それは失礼・・」

そういい残してミナムはソウシの肩を叩いて、部屋に戻ろうとした。再びミナムの背中を見送ろうとするソウシ・・・・・どうすることも出来ない自分がそこにいた。しかし、思わずミナムの背中を掴んでしまった。

驚いて立ち止るミナム・・・

「ソウシ殿？」

フトーの邸にて　3

ミナムの背中に寄り添うソウシ・・・おもわず・・・いけない言葉をこぼしてしまった。

「すき・・・」

その言葉に驚き振り返るミナムの胸に飛び込んでしまった。あ・・・やって・・・とソウシが思っていると記憶はここで終っていた。

「ソウシ殿？」

抱きつかれたミナムはソウシに声をかけたが反応がない・・・

「あれ？ソウシ殿？」

ミナムはソウシの頭を上げた・・・ガクリとうなだれるソウシ

「えっ？」

ソウシの膝が落ちた

「わわ・・・」

思わず声を上げるミナムは、そっとソウシを抱き上げ・・・ソウシの部屋に連れて行った。

ミナムが部屋から戻ると目の前にはカーネルが立っていた。

「カーネル・・・」

さっきのは、なんなのよ～そう心で叫ぶカーネル。

「何故？ソウシさんと」

「見たのか？」

その時ミナムに変化が現れた。カーネルを見て異様にあがってくる心拍数・・・どうしたんだ俺？

「抱き合っていたでしょ？」

そう言おうとしていたカーネルがミナムの様子が変なのに少し気付いた。

あれ？どうしてこんなに近いの？いつの間に？――――ミナムが目の前いる

「何をして・・・・んんぅ・・」

唇をふさがれたカーネル・・・・く・・くるしい・・・ミナムの唇が離れたと思ったら

ミナムに抱きしめられ、見つめられていた・・・どうしたのミナム・・・そう思っていたら

「ちょっと！！！なに・・・」

再び唇が奪われ・・・すっと・・・離れた瞬間に

「お前がほしい・・・」

言葉を返すまもなくミナムの唇が重なった。
しばらくして、唇が離れた・・・どうしたのミナム・・・ん・・・なんなのよその目は・・・真剣な眼差しが痛いほど指してくるし・・・そんなに見つめられると・・・あれ？ひょっとして・・・いつの間にか抱っこされているし・・・ええっ！！！そういう私もミナムの首に手を回してたり・・・てへへ・・・顔をあげるとミナムの顔が・・・あれれ・・・という間に、ミナムの部屋のベットの上に・・・って、すでにミナム上にのってるし・・

「んん・・」

ミナムの強烈なキス・・・その後、私に微笑をくれたミナム・・・次の言葉に私は驚いた。

「今日は返さないから・・・」

ええ！！！

「カーネル・・・カーネル・・」

かすかに耳に聞こえる甘い声、ミナムが呼んでいる。夢見心地の私に響くこの声・・・そう思っていると――――――んん！！！急に息が出来なくなった・・・思わず目を開けるとそこにはミナムのドアップが――――――ええ！！！！！ミナム・・・私の上にいるし――――朝からがんばる気？――――――それより・・・苦しい・・・

私はミナムをバンバンと叩いた。ようやく私に気付いたミナムは唇をようやく開放してくれた。
プハーーーー！！！大きなお声を上げた私にミナムは、微笑を見せて

「もう少し・・・」

どうしてそんなこと言うの？あんたが口を塞ぐから

「えっ？・・だって・・・息できないじゃない・・・」

「起きないから」

私の顔を見つめるミナム・・・前はやさしかったのに・・・今回は、なぜ？あんなに？そう思っても、わたしも・・・きゃーー言えないけど・・昨日のこと・・・で？何故そんなに？見ているの・・・また・・顔が近づいてるし～・・・思わず身構えた・・・

チュ・・・

おでこキスが来た。不意をつかれた私・・・驚いてると・・・ミナムは私を抱きしめ
首筋にキスをしてきた。もーごかんべんを・・・と思っていても体は・・・・反応し・・・ミナムの肩に手を回していた。そして、ミナムが私に入ってこようとしたその時だった。

「お客様・・・朝食の時間です・・」

ノックと共に侍女の声がしてきた。ミナムはそっと私を解放してくれた。

「カーネル・・・朝食行こうか・・・」

ミナムの声を聞いて、私は気付いた・・・・何も着ていない・・・・

「ふぅ～・・・」

食事を前に思わずため息を付いた私をミヌが話しかけてきた。

「カーネルさん・・・」

「ど・・どうしたの・・・ミヌ・・・」

「大丈夫ですか？」

「えっ？」

ミヌ・・・ひょっとして昨日のこと知ってるの？

「ため息付いて・・・しんどそうだし・・・」

「えっ・・・大丈夫よ・・」

ミヌは私の方をじっと見て、しばらくして

「そうですね～だって～顔はすっきりしているみたいだし・・・」

ミヌ・・・それはどういう意味よ・・・顔がすっきりって・・・はっきり言って午前中寝たかったのに・・・ミカドへの謁見さえなければ・・・きっと・・・寝てたのよ・・・ミナム・・・絶対昨日おかしかったわよ・・・とふとミナムの光景が思い出された・・・しかし、その後、あの前にソウシさんを連れて行ったことを思い出した。ひょっとして・・・・ソウシさんにも・・・やってないわよね・・・ふとミナムを見るとさっきとは違っていた・・・そう・・・あのギラギラした・・・私を抱いていたときの目はそこになかった・・・ミナムったら・・・ひょっとして・・・恥ずかしいの？ミナムをじっと見つめるカーネルだった。

カーネルの視線を感じたミナム――――――昨日のことを思い出した・・・どうしたんだ？おれ？昨日・・・ソウシ殿を部屋に運んでベットに寝かせた時、胸の鼓動がすごい高鳴った・・・やばい・・・このままだとソウシ殿を・・・そう思って慌てて、部屋を出たあと・・・目の前のカーネルを見て思わずキスをしてしまった・・・あの後は・・・・勢いで・・・カーネルは許してくれるだろうか？

ミナムは席をはずし、中庭でボーッとしていた。以前だったらここでタバコを吸うところなのだがなんか吸う気にもなれないし、だいたいここへ来て、タバコを吸っているやつを見たことがない・まぁ～そんなことはいい、昨日、俺は本当にどうかしてんだ・・・そうだ・・・きっと・・・しかし、やりきれないため息が出てきた。

「はぁ～」

顔をあげると目の前にフトーが現れ、ミナムの右肩をポンと叩いた。

「ミナム殿・・」

「フトー殿・・・？・・・どうなされたんですか？」

フトーを見たミナムは驚いた。昨日まで杖をついていなかったフトーは、やや前かがみなって歩いてきた・・・・

「いや～少し効き過ぎた・・・はははは」

効き過ぎたって？一体何が？そう思ったミナムは

「何が？」

「あれが・・・・」

「あれって？」

「あの薬・・・・」

「ひょっとして昨日飲んだ・・・・」

「そう・・・あれじゃ・・・」

「一体何の薬だったんですか？」

フトーはミナムのほうをじっと見てにやけた・・・やばい・・・・かんぐられた・・・ミナムは思わず目をそらしてしまった。

「そうか・・・おぬしもか・・・・今朝、聞いたんだが、あの薬単なる滋養強壮薬ではない」

えっ～！！！じゃぁ何の薬だったんだよ・・・

「実は・・・強烈な媚薬入りの滋養強壮剤だったんだ・・・」

目の前で座り込むフトーはため息をついた・・それを見て、やっぱり・・・と思ったミナム

「そうですか・・・」

「ミナム殿は、お若いからいいですな～」

「えっ？」

「わしはこの通りじゃ・・・」

そう言って腰をトントンと叩くフトー・・・おっさんも元気じゃん・・・そう思うミナムだった。

「さてと・・・昨日の侍女には十分お仕置きをしておきをしておきましたので・・」

「えっ？」

昨日の侍女ってあの風呂についてきた彼女のこと・・・ひょっとして・・・首とかにしてるんじゃ？

「でも・・・彼女は悪くないんですよ・」

フトーはミナムの方を一瞬見て、カッカッカッと笑った。何笑って

んだこのおっさん？ミナムが思っていると・・・

「やさしいですな～ミナム殿は・・」

「しかし、首とかにしてないでしょうな」

「くび？」

「ははは！！そんなことしてませんよ。大体彼女は、まだわしのベットの上で寝てるはずだから・・」

「へ？」

おっさん・・ひょとして・・・お仕置きって・・・一晩中、してたのか？ミナムが驚いているとフトーはゆっくりと立ち上がり、ミナムの肩をポンと叩いて

「彼女もミナム殿と出来なかったって・・悔しがってましたよ・・・・では・・・後ほど大極殿で・・・」

フトーの邸にて　4

ゆっくりと杖を突きながら歩いていくフトーの背中を見ていると後ろからカーネルの声がした。

「ミナム・・・・」

ミナムが振り返るとそこにカーネルが立っていた。やっぱ・・謝らないと・・・・な

「カーネル・・・・ご・・・ん？」

ミナムが話しかけようとするとカーネルは人差し指でミナムの口を押さえた。

「言わないで・・・・・」

「カーネル・・」

カーネルはそっとミナムのキスした・・唇が離れたかと思うとカーネルがミナムに抱きつき耳元でそってささやいて・・・・

「今度は、もっとやさしくね・・」

そして、パッとミナムから離れたカーネル・・・・

「じゃぁ・・着替えてこようかしら・・」

ミヌは、二人の光景を別のところで見ていた・・・・そして廊下の影

に隠れた。何故？隠れるの？――――――もう・・・無理なのかな～・・・でも・・・京に来る時、ただ一度、抱いてくれた感触がなつかしいよ・・ん？足？誰の？ミヌが顔をあげるとそこにはソウシが立っていた。

「ソウシさん・・」

「ミヌ殿・・」

ふとソウシは二人ミヌの視線の先を見るとミナムとカーネルの姿があった。思わず目を背けたソウシ・・その時だった、ミヌがソウシに抱きついてきた

「ミヌ殿？」

「しばらく・・・しばらく・・こうさせてください・・」

胸の中ですすり泣くミヌ・・・私はどうしたらいいんだ？ミヌの姿を見ると自分の姿が重なった・・・い・・いかん・・・ソウシよ・・しっかりしろ、そこへ後ろから声がした。

「おおっと！！これは・・・」

「フトー殿」

やばい・・・変に思われる・・そう思ったソウシは、ミヌから離れた。急に離されたミヌもフトーを見て、ま・・・まずい・・・変なところ見られた・・ひょっとして勘違いしたかも・・・そう思って慌てて涙を拭った。ミヌの涙に気付いたフトーは、ミヌの方をちらりと見て、

「いかがされた？」

「あ・・いや・・・」

「確かミナム殿の魔導士の・・・」

「ミヌです・・」

「ああ・・そうじゃったなぁ～ひょっとして？ソウシ殿の？」

フトーは小指を立てた、それを見たミヌ・・・やっぱり完全に勘違いしているし・・一方ソウシは、それを見て、そんな勘違いするか？と驚いていた。

「ち・・違います・・・ソウシさんとそんな関係じゃありません。」

「じゃぁ・・・なぜ、抱きついていたんじゃ？」

「そ・・それは・・・ミナムさんが・・最近、カーネルさんばかり・・・」

と声がだんだん小さくなってきた。その様子を見ていた

「そうでしたか・・・」

う～む・・・ミヌか・・こいつは使えるな・・・カーネルは人質として京においておくとすれば
こやつをミナムの魔導士として戦場へ・・・か・・・ミナムがうまいこと勝ってくれればよし負けてもよし・・・それに・・・そう思

うフトーは、ミヌに耳打ちした。

「後で、話があります・・・」

「え？」

「お一人で来てください・・」

「フトー殿？今、ミヌ殿に何を？」

ソウシが声をかけた

「いや・・別に・・たいしたことではない。では、大極殿でお待ちしてますので」

そう言ってフトーは、その場を去っていった。

こうして、ミナム達一行は、フトー邸を出て、大極殿へ向かおうとした。

しかし・・

目の前には、海軍の特急馬車が・・・・

「また・・・これに乗るのか？」

「うそでしょう？」

「最悪ですぅ～」

「私は乗らんぞ・・」

ミナム達を待っていた衛兵達が困り果てた顔をしていた。

「とりあえず乗ってください。私たちが殺されます」

「どうする？」

「しかたないわ・・」

「わ・・わたしは、のらんぞ！！」

「ソウシさん・・・あきらめてください・」

そう言ってミヌがソウシを馬車に押し込んだ・・・・

謁見

ミナム達は大極殿の広間で膝をついて待っていた。そこへ、両脇にフトーとナンゴウを従え、ミカドがあらわた。

「ミナムよ。この度の働き、朕は真にうれしいぞ・・・・・・顔を上げよ」

ミカドの言葉に一同は一礼をして顔を上げた。

「ありがたきお言葉・・・」

「この度の働きに、これを・・・」

ミカドがそう言うとお盆のようなものを持った侍従たちがあられた。

「こちらへ・・・」

こうして、ミナム達は一人ひとりよばれ、ミカドか直接勲章をかけられた。

そして、一通り勲章をかけ終わるとミカドがこう言った。

「この度の働き真に大儀であった。その武運を信じ、すぐにでもギオン討伐を・・・」

そのミカドの言葉に驚く一同驚いた。すぐに、ギオン討伐ですか～？少しは休ましてくれても・・・

そんな不満がミナム達の心をよぎった。しかし、

「と思っておったのじゃが・・・聞くところによるとそち・・・結婚すると聞くではないか」

えっ？何言ってんだ？俺が誰と結婚しようと勝手だろうが・・・そう思ったその時ミカドから意外な一言がでた。

「ミナムの素性がはっきりせぬと聞いておる・・・わしでよければ・・保障してやる・・・だからすぐにでも婚儀をいたせ・・・」

「えっ？」

驚いて顔を見合うミナムとカーネル・・・・

「めでたいことじゃ・・・余はうれしいぞ・・・フトーよ・・・あとは任せたぞ」

「御意・・・それとミカド・・・」

フトーがミカドに耳打ちをしていた。その話にふむふむと頷くミカド

「ほう・・・」

「・・・・」

「真か・・・それは？」

やがてにんまりと笑みを浮べた。ミナムはその顔に嫌な予感がした。

「ミナムよ・・婚儀の後、１０日程、休みを取らす・・」

「ええ！！」

ミナム達はミカドの意外な言葉に驚いた。どうせ・・結婚したらすぐにギオン討伐に向かわされると思っていたミナム達にとって、この言葉は、まったく予想だにしていなかったからだった。ミナム達の驚く顔を見て、ミカドは・・・目を丸くして？

「どうした？・・不満か？」

ミナム達は、顔を横にぶるぶる振り

「いいえ・・・滅相もございません・・・ありがたく・・お受けいたします。」

ミナムの言葉に笑みを浮かべたミカド・・・どうみても、俺をあざ笑っているとしかミナムは思えなかった。

「新婚旅行とやらへ言ってまいれ・・・」

「え？・・・あ・・」

「どうしたのじゃ？」

「あ・・・はは～仰せのままに・・・」

ミナムは大慌てで、ミカドにひれ伏した・・・

「しかしのう・・・なぜ・・・そのようなイベントを余に教えてくれんだ・・・」

「そ・・それは、俺の・・・とりあえず、そういうイベントが風習としてあしまして・・」

必死に弁明するミナム・・・あ～俺一体奈に言ってんだ？・・・・・そこへミカドがニヤリとしてミナムに話しかけた。

「おぬしも好きよのう～」

ミ・・・ミカドなんてことを・・・ふと横を見るとカーネルの冷たい視線が俺を攻撃している・・・ん？ミヌ・・も・・・とりあえず何とかしないと・・・

「し・・新婚旅行のことですか？」

「そうじゃ・・・楽しそうじゃのう～二人きりでしたい放題・・・」

ミ・・・ミカド・・・公衆の面前でござるよ・・・フ・・フトーの奴・・・あいつ～何くすくす笑ってるんだ？えっ・・お前だろう・・くだらんことを吹き込んだのは・・・ええ！！心でこう叫んだミナムは必死に答えた。

「え・・・あれは・・・結婚した記念で一生の想い出で・・・」

「そうじゃろう～　一生の想い出とはいいことを聞いた。そうか・・いい想い出か・・のう　フトー・・」

「ミカド・・そうでございますな。さぞ楽しいでしょうな・・・」

ミカド・・・勘弁してくれ～・・・フトー貴様！！ここじゃなか

ったら・・・これでカーネルは絶対に行きたくないって言うぞ・・・どうしてくれるんだ・・・と心でミナムは叫んだものの、それは絶対に声に出せないことだった。

「そうか・・・それは・・・よい言い訳じゃ・・・余波　参考にするぞ・・ハハハ・・・」

こうして謁見は終った。

大極殿を出たミナム・・・あれからずーっと頭をたれた状態で歩いていた。はぁ～これじゃ俺は単なるスケベじゃないか・・・

「何ため息ついてるの」

カーネルがミナムの肩を叩いた。カーネルを見たミナムは再び溜息をはいた。

「も～！！」

そこへミヌがミナムに話しかけた。

「ミナムさんって・・案外スケベだったんですね・・」

ミヌ・・・お前まで・・・

「私も驚いたぞ・・・ミナム殿がスケベだったとは・・」

「あ～！！！スケベ・・スケベ・・・って言うな・・誰がスケベだって？」

そう声を上げたミナムは、次の瞬間、後悔した。カーネル・ミヌ・そして、ソウシが黙ってミナムを指差していた。助けてくれ～！！！俺が何したってんだよ～！！そこへ、カーネルは止めを刺した。

「新婚旅行って・・そういう意味だったの・・」

みんなに睨まれしゅんとなるミナムだった。

「ちがうのに・・・」

しかし、フトーの奴ミカドにあんなこと言いやがって・・・・

――――――――それは、少し前のことであった。

「フトーそれは真か」

「はい・・・・」

そこには、ミカドとフトーそして数人の重要人物がいた。

「真実であったか・・・あのミナムが結婚するのは・・」

「しかも、もう一人の魔導士は、ミナムのことで悩んでおります。」

「ということは？」

「今のうちならわれわれの言うことを聞くでしょう・・」

「そうか・・・で？どういたす。」

「それは・・二人を婚儀を行い、しばらく休ませた上、出兵を言う。」

「何故休ますのじゃ？」

「それが・・」

「新婚旅行？」

「左様で・・・」

「ミナムもスケベよのう・・・旅行につれて行って、やりまくるのじゃから・・・」

「はぁ・・・それが終って出兵前に魔導士ミヌを第2婦人に・・」

「何故じゃ？」

「ミヌをわれらの言うことを聞かすよう・・・」

「ほう・・」

そこへマヤザキが話しに入ってきた・

「それは良策でございます・・・仲間のミヌをこちらに引き入れるとは、しかし、念のためにソウシをつけさせます。」

「そうじゃな・・」

ミカドは久しぶりに明るい顔をしてその場を出て行った。

「マヤザキ・・・何故ソウシをつける・・」

ミカドが去った後、マヤザキに語りかけるフトー・・・二人は、少し離れた場所で密談をしていた。

フトーの言葉ににやりとするマヤザキ・・・

「ミザキ・・・」

マヤザキの言葉に眉がピクリと動いたフトー

「はて？何のことだ？」

「隠しても・・・フトー殿・・」

「貴様・・・どうして・・」

フトーとマヤザキ

フトーの顔色が曇った・・・こやつ・・・一体何を考えておるのじゃ・・・ひょっとしてミザキを見つけたのでは？
フトー自身もまだミザキの招待を掴めていない。フトーの後ろからこそっと・・・

「ひょっとして・・・ミナムがミザキとお思いでは？」

フトーは振り返り笑顔でマヤザキに語った。

「ほう・・それは面白い話だな～マヤザキ・・・・ところでお主はだれが？ミナムで・・・だれがミザキか知っておるのじゃな」

「いえ・・・それはまだ・・・」

「それがお前の仕事だろ！！！で・・・どこまでわかっておるのじゃ？」

しまった・・・マヤザキはそう思った。逆に自分にふられるとは？

「今のところ・・・・ミザキが確認できておりませぬ。ただ・・」

「ただ？」

「ミナム一行があやしいかと・・」

ほう～こやつ、ぼかしよったか・・・フトーはマヤザキが驚くことを言った。

「ミナム一行？ということは？ソウシも含まれるのか？」

「な！！」

「何を驚いておるのじゃ？」

「そ・・・それは・・・」

「あ・・・そうじゃったな・・・ソウシはお主の部下じゃったな・・・じゃとするとあの3人か・・お主は、やはりミナムがあやしいか？」

「はい・・・あの一行には、正体がはっきりしないのが2名・・・ミナムとミヌです。しかし、ミヌは斎宮様が管理されておられた。そうなるとミナムがあやしいかと・・それに・・」

「それに・・」

「ワカタケルの可能性も・・・個人的な見解ですが・・・」

「おお・・・そうじゃったな・・ワカタケルはどうなのじゃ」

「まだはっきりしておりません。」

この狸め・・・大臣を引退したとはいえ・・・まだ権力を握っていることだけはある・・・そう思ったマヤザキに対しこやつ・・・もう少し泳がせておくか・・・そう感じたフトーだった。

その頃、ミナムとカーネルははフトーの邸にいた。

「あれ？ミヌは？」

「さっき・・・用事があるって・・・・」

「そうか・・・・」

「それより・・・ミナム・・・・」

カーネルがミナムの横に寄ってきた・・・こ・・・これはとミナムは思いカーネルに顔を近づけた・・・・

その時だった・・・後ろから・・・

「うっほん！！」

えっ？驚いて振り返る二人・・・・

そこには、ヤマト姫とカーネルの両親がいた

婚儀まで・・・1

ミナムとカーネルの視線の先には、ヤマト姫とカーネルの両親が目の前に立っていた。――――――な・・・なんで・・・ここにいるんだ？それにこちをじっと見ているし・・・そう思ったらカーネルと目が合った――――――や・・やばい・・・と俺達はぱっと離れた。

次の瞬間、俺達の頭にヤマト姫の杖が飛んできた。

パカン！！

パカン！！

「いった～！！」

なにも頭を叩かなくても・・・・俺達を見たヤマト姫は

「何！！乳繰り合ってんだ！！　（　ふ・・・古い！！　）　結婚もしとらんのに！！」

知ってるくせに・・・俺達の関係を・・・・この程度のこと・・・

そうミナムが思っていると

「さ・・・斎宮様・・・そんな？」

「なにが・・・そんな・・・じゃ」

そこで俺達を驚かす言葉を放ったのはほかでもないカーネルの父だった・・・・

「斎宮様・・・まぁいいじゃないですか・・・結婚するんですから・・・」

えらくにこやかな親だな～ミナムがそう思っているとカーネルが切り出した。

「ところで斎宮様・・・お父さん・・お母さんまで・・・どうして？」

「それは、お前の結婚式に出るためだ・・なぁ母さん」

「ええ・・」

ちょ・・ちょっと待て？ミナムとカーネルは顔を合わせた、だいたいさっき俺達の結婚は、ミカドから許されたばかりのはず・・・それにカモベ村からここまで3日は、かかるぞ？どういうこどた？そう疑問に思っているとヤマト姫が話し始めた。

「明後日、お前らが結婚すると聞いて、わしらは、先にここへ来たんじゃ・・」

「斎宮様？」

「なんじゃ？」

「その話・・・いつ聞いたんですか？」

「４日位前じゃが・・・どうした？」

「――――――　ええ！！！」

ミナムとカーネルはその言葉に驚いたが、周りの目は冷ややかだった。

「何をそんなに驚いておる」

ミナムとカーネルはただ顔を見合わせてるのが精一杯だった。

「明日には、村長たちも来るぞ・・・・ところで・・・ミヌは？」

「ミヌですか？本宮様に会いに行くって言ってましたけど・・・なぁ～カーネル」

カーネルもミナムの言葉に頷いた。

「おかしいのう？」

「何がです？」

「わしらは・・・ナラのところによってきたのじゃが・・・ミヌとは会わんかったぞ。」

「へ？」

ひょっとして、ミヌの奴・・・この京で迷子って？

「カ・・・・カーネル」

ミナムがカーネルを見るとカーネルもおどおどしながらミナムの方を見ていた。まいったな

カーネルも・・・・しかし、俺も京のこととなるとわからないしなぁ～

「どうしよう・・」

ちょうどその頃、ミヌは、フトーと会っていた。

「フトー様・・・なんでしょうか？」

フトーはしばらく、ミヌを見ていた・・・気持ち悪いよこのおっさん・・・じろじろ見ているし・・・そう思うミヌに対し、フトーは、こう言った。

「お主・・・ミナムを独占したいか？」

「えっ？」

何を言ってるのこのおじさん・・・大体・・・すでにカーネルさんがいるし～・・・どうにもできないよ・・・そう半ばあきらめているミヌに不思議なことをフトーは言った。

「ミヌよ・・・わしの言うことを聞けば・・・ミナムを独占できるぞ」

絶対、あやしい・・・何考えているの・・・ミヌがそう思っていると

「お主には何もせんから安心しろ・・・」

「どういうことですか？」

「次の出兵の時に、これらを持って言ってほしいのじゃ・・・」

そういうとフトーは、ミヌの前に、鏡と勾玉そして、紙包が数個入っている紙袋を渡した。

「これは？」

「鏡は、魔除けじゃ・・・勾玉も同じ・・・そして、紙包みは滋養強壮薬じゃ」

「どうやって使うのです？」

「鏡と勾玉は常に持ち歩け・・・特に勾玉は首からはずすな・・」

「これは？」

この薬はどうやって使うのと思っているとフトーがにやりと笑い

「ミナム殿が疲れているとき、食事に入れるがよい・・・あとはお前しだいじゃ・・それじゃ・・」

えっ？これだけ？一体何いっているのこのおっさん？そう思っているとフトーが

「そろそろ行くか・・・それと・・・京で迷子になったことにしなさい・・」

そう言ってミナム達のところへ案内された。

一方、ミナム達は、ミヌがいないことに慌てだしていた。

「どうする？」

「どうするって？私たちも京は、わからないし」

「あっ！！ソウシ殿に頼んでは？」

「それが一番かも・・・」

そう言っている時に、彼らのいた部屋がの扉が開いた。一同開いた扉を見ると

そこにはミヌとフトーが立っていた。

「ミヌ！！」

婚儀まで・・・2

みんなの視線を浴びるミヌは、いきなり頭を下げた。

「ごめんなさい！！」

「どこ行ってたんだ？」

ミナムの一声にビクッとなりシュンとするミヌ―――それを見て、ヤマト姫が追い討ちをかけた

「―――そうじゃ・・・皆に心配かけよって・・」

「すみません・・本宮様のところへ行こうとしたら迷って・・・」

ヤマト姫の上目使いで申し訳なさそうにしているミヌ・・・・そこへ、フトーがにこやかな顔をして、話に入ってきた。フトーの方を見るミナム達・・・

「いや～ははは・・・帰り道に偶然、ミヌ殿を見かけて声をかけたんじゃ・・・そうしたら迷子になっているというではないかじゃから、同じ方向だから連れてきたんじゃ・・・」

「フトー様・・・迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」

今度はフトーの方に向け頭を下げるミヌ、慌ててヤマト姫も頭を下げた。

「フトーよ、礼をいうぞ。お前ら何をしておる・・礼を言え・・・礼を」

あ・・そうだとばかり慌てて、頭を下げるミナムとカーネル

「ありがとうございました。」

フトーは左手を挙げ、ニコニコしながら

「何も・・・そこまでは・・・偶然通っただけじゃから」

「そうか・・・」

こやつ・・・何か企んでおる・・・そう感じたヤマト姫――ミヌの方をチラリと見るとミヌが目をそらした。そんな時だった。フトーが咳払いをしてこう話した。

「ところで・・婚儀の件ですが、日取りは明後日に決まりました。」

――――――はぁぃぃ？・・フトー殿・・・今・・なんとおっしゃいました?、目が点になるミナム、そしてカーネルと顔を見合わせた。

うそ～!!明後日・・・婚儀って・・・と両手で口を隠しミナムを見つめるカーネル

驚いている二人の姿を見て、ヤマト姫とカーネルの両親が顔を見合わせた。

「お主ら・・どうしたんじゃ?」

「えっ・・・今聞いたんで？」

「何？自分らの婚儀の日取りも知らなかったんか？」

「ええ・・まぁ」

ミナムは頭をかいて、カーネルの方を見た。

「知ってたのか？」

顔を小刻みに横に振るカーネル・・

「いえ・・」

ヤマト姫がふとミヌに目をやると驚いた様子はなかった。

そこへミナムとカーネルの肩をバンと叩いて抱え込んだカーネルの父親

「そんなに驚くことなのか・・・ちょうどいいじゃないか・・いや～めでたい・・」

「おとうさん・・・」

「その通りじゃ、それでは支度があるので、カーネル殿は母君とこちらへ、ミナム殿はこちらへ」

ミナム・カーネルは別々の侍女に連れられそれぞれの部屋にいった。

その場に残ったフトーとヤマト姫、

「お主何を考えておる。」

「いや・・何も」

「真か？ミヌに何をした。」

「おおっと・・・そんな怖い顔をせんでも・・・本当に何もしておらん。ただ・・」

「ただ？」

「勾玉と鏡――そして薬を渡しただけだ・・」

「なぜ・・・」

「ミナム殿に勝ってほしいからじゃ・・・」

「ほう・・・もっともらしいことを言うのう」

「斎宮様・・・考えすぎじゃよ・・それじゃ・・」

あやつ・・・一体何を？そう思うヤマト姫・・しばらくして、二人の会話を見ていたミヌのほうを見たヤマト姫・・・

ボーッとしていたミヌは、さっきのことを思い出していた。

「ミヌ殿・・・この度の叛乱は、グレースの存亡にかかわる問題じゃ・・・予言の通りミナム殿が救世主であれば、すでにミザキはこの地にいることになっておるしかし、ミザキは未だに消息すらつかめておらぬのじゃ・・・ただ・・・」

「ただ・・・？」

「わしらの情報では・・・今回の叛乱の首謀者ワカタケルとその部下オスギ、ミナム殿・・そして・・」

「そして？」

「お前、ミヌ・・・お主ら４名があやしいとわしらは考えている。」

「ええ！！！」

フトーの言葉に驚くミヌ・・・

「隠しても無駄じゃわしらの情報網を甘く見るな・・・それでだ・・お主はミナムに一番近い人物の一人じゃ・・・本来は、カーネルに頼むところじゃが・・・事情があって頼めぬのじゃ。」

「事情って？」

「それは言えぬ・・・それとミナムの情報を報告してほしいのじゃ。」

「それって・・」

ミヌはソウシ殿と言おうとしたが飲み込んだ。

「ソウシじゃろ・・」

フトーの一言に言葉が出ないミヌ・・・

「ソウシは、マヤザキの息がかかっておる。」

「しかし、わたしもその怪しいリストに入っているのでは?」

「ほかにおらんのじゃ。それと渡したものはいずれ必ず必要になるじゃろうから、持っておけ・・・それとこのことは他言無用じゃぞ・・」

婚儀まで・・・3

ふとわれに返ったミヌの前には、ヤマト姫の顔が・・・・し・・し
かも・・・ドアップで・・・

「ミヌよ」

「わぁぁぁぁぁ!!!」

ヤマト姫の顔を見たミヌは、驚き腰を抜かした。

パカーン!!

「痛いですぅ!!」

頭を叩かれたミヌは、座り込んだまま頭を抑えた。

「フトーから何を言われた。」

「えっ?」

「一体何を言われたのじゃ?ひょっとしてHなことでもされんじゃ・・」

「えっ?そ・・・そんなことされてませんよ。ただ。」

「ただ・・・?」

「必ず役に立つだろうからと勾玉と鏡と薬を・・・」

こ・・これ以上は言えない・・・自分が怪しいということなんて決して・・・そうミヌが思っていると

「本当じゃろうな・・」

頭をぶんぶんと縦に振り

「う・・・うそじゃありませんってば・・」

ヤマト姫は、ミヌに顔を近づけた・・・ひっ・・・こわいよ～・・・・

「うそじゃないだろうな・・」

「さ・・斎宮様・・ほ・・・本当ですってば～怖いから離れてください・・」

ムカッ!!!

パカーン

「痛いですぅ!!!」

フトーの奴・・ミナムの見張りを頼んだにちがいない・・・まぁ・・いいか・・・そう思うヤマト姫・・ん・・・ミナムの奴、カーネルと婚儀をするということは?ミヌは?

「ミヌよ。」

「はい・・・」

ビクッとしてかまえて涙目でヤマト姫を見るミヌ

「お前、ちゃんとしたんだろうな」

「へ？」

「H・・・」

ヤマト姫の一言に真っ赤になるミヌ・・・な・・・何てこと聞くんですか・・・こんな時に・・・

「・・・・・」

ミヌの様子を見たヤマト姫は

「やったんじゃぁ――――――で・・・何回？」

さ・・・斎宮様・・・か・・・回数まで聞くのですか？そんなにすごまないでください。

斎宮は、また顔をミヌに近づけてきた。

「何回じゃ・・・」

「いっ・・・一回です。」

「へ？・・・・いっ・・・一回じゃと・・・」

「はぃ・・・・・」

ミヌは俯いてしまった。

「ってことは、契りのときだけか・・・」

そういうとヤマト姫は、ニコリとして、ミヌに顔を近づけた。斎宮様その顔もこわいんですけど・・しかし、ミヌの心の声は聞こえない。そして、そっとミヌの手に紙包みを渡した。

「これは?」

「ミナムと二人になった時に、ミナムに飲ますのじゃぞ・・」

「どうやって?」

「それは、飲み物やご飯に混ぜるといい・・・じゃぁ・・検討を祈る」

そう言ってミヌを残してヤマト姫はその部屋を去っていった。

じゃぁ・・検討をって?どういう意味?

婚儀まで・・・4

黒騎士団詰め所に来ていたソウシは、マヤザキのところに行ったが
まだ大極殿から戻っていなかった
仕方がない――――3番隊の部屋に行くが誰もいない。そのことに
驚いたソウシ

これは――――どういうことだ?

辺りを見回すと、机の上に一通の書簡があった。それは3番隊副長
ヒョウドウからだった。

隊長殿、この度、われわれは、ユウ城防衛の任を承り、これより出
陣いたすところです。
隊長殿のご活躍を耳にし我等も黒騎士団3番隊の名に恥じない戦い
をお見せいたします。
またの再会を楽しみにしております。ヒョウドウ・・・・

その書簡を見て、驚くソウシ・・・何故・・・3番隊が出陣を?京
の守りの為にわたし一人が
ミナムと共に行ったのではないのか?どういうことだ?

「ソウシ」

そこへマヤザキがあらわれた。ふとマヤザキの方を見るソウシ・・・
・

「マヤザキ様・・・これは?」

ソウシの言葉に頭を下げるマヤザキ

「すまぬ・・・2番隊が消息をたち、3番隊をどうしてもと・・・」

「そうですか・・」

そう言葉を吐いて俯くソウシのしぐさを見たマヤザキ――――やはり・・・こいつ少し変わったそう感じた。一体、ミナムと何かあったのか？そう思っているとソウシはふと思い出したかのように話し出した。

「2番隊といえば、隊長のトリニィを前の戦いで見たのです。」

「そういえば・・この間の酒の席でそう言っておったが・・・真か」

マヤザキはじっとソウシを見据えた・・・

「真でございます。あの双竜波を撃ってきたのですから」

「双竜波をか！！」

「はい・・・」

「どういうことだ？」

「ポメラで一体何が起きているのですか？」

「わからぬ・・・しかし、それが真であるとすれば、最初から仕組まれていたことになる。」

「ということはこの中にも内通者が？」

「そうだ・・・」

「マヤザキ様・・私はどうすれば・・」

「お前は、これまでどおりにミナムを見張れ、しばらくして、ポメラへの出兵が予定されている。」

「真ですか。」

「そうだ・・そうすれば、ユウ城防衛にあたっている3番隊と合流できるだろう。」

そういうとマヤザキはポンとソウシの肩を叩いた。やはり・・・昔はこんなに間単に肩を叩かせてくれる奴ではなかった・・・・

「それと、2日後ミナム殿の婚儀を執り行うそうだから準備しておけよ。」

それを聞いてソウシは、俯いた。そうかやはり婚儀を行うのか・・・・

「どうした？」

「あ・・いえ・・わかりました。」

「それとソウシよ。余計なことかもしれんが婚儀の時は、きれいな服を着て来いよ。」

「ど・・・どういう意味ですか。それは私がいつも汚い格好してい

るかのように・」

「じゃぁ・・どんな格好をして来るんだ？」

いきなりなんてことを言うんだ？私がどんな服を着ようが別にいいじゃないかそう思うソウシは

「ちゃんと黒騎士団の軍服で・・・」

「お前な～仮にも女なんだから、それなりの格好をして来いよ。たしかベッツィー殿も来ると聞いている」

マヤザキ殿・・何故のそのようなことを？・・しかも・・あのベッツィーも来るって？しかも時間がないのにソウシは俯いているとマヤザキの一言がソウシを驚かせた。

「確か・・・フトー殿がお前の服も用意してくれているはずだ。」

「えっ？」

「だから心配するな」

「なぜ？フトー殿が？」

「今回の婚儀の件は、フトー殿の意見だ。それにソウシよこの国は一夫多妻の国であることを忘れたわけてわないな。」

マヤザキのまさかの言葉に焦るソウシ・・・な・・・何故・・・今そんなことを・・・

「マヤザキ様・・・・意味がわかりませぬが・・」

「そうか？お前の顔には書いたあったが――――じゃあ・・がんばれよ」

フトーの邸に戻ったソウシは、中にはボーッたたずんでいた。・・・婚儀・・・か・・・なんとなくカーネルをねたましく感じていた。私が・・女の服を・・・か・・・い・・いや・・・軍服という正装がある。そう言い聞かせるソウシだった。

「ソウシ殿・・・ちょうどよかった・・・」

振り向くとそこにはフトーが立っていた。

「なにか・・」

「ちょっと、よろしいか？」

フトーは、ソウシを導いてある部屋に案内した。

「ここは？」

「ソウシ殿の服です。ミナム殿の婚儀にこれを着ていただきたい。」

それは淡いピンクのドレスだったしかも背中が腰の変まで開いていた。素敵な・・・・と思ったがいや待てこれを黒騎士団の私が？よ

うやくソウシはその服を指差し

「こ・・これは・・着れませぬ・・」

驚いた顔のソウシをなだめるようにフトーは、

「黒騎士団のことは心配ない。ミカド、マヤザキ殿も了承しておられる。」

フトー殿そういう問題ではなくて、はっきり言って黒騎士団3番隊隊長の私が・・・そんな格好をしたらしかも、ミカドだけじゃなく大臣クラスが来ると聞いているのに

「私には立派な軍服がありますゆえ。」

「そうおっしゃらずに・・・ああ・・・海軍の・・えっと・・・・ミナム殿と一緒に戦った・・ああ・・

ベッツィー殿もこられて、別のドレスを非常に気に入られて・・・

それを着てくるそうじゃ」

「ええ!!ベッツィー殿が・・・」

嫌な予感がする・・・ベッツィー殿たしか・・・ミナム殿を好きになったとかいってたよなソウシがそう考えていると

「婚儀はあくまで今回この婦人と結婚しましたというだけのことじゃ・・」

「そうだからと言って・・・」

「ただ」

「ただ？」

「その場では、結婚相手を尊重して、直接手出しは出来ませぬが・・・女性達には自分をアピールする数少ない場でもあります。」

この国は、そんなに女性が着飾って、男性の前にでることが少なく年一回の祭りとか上流社会での社交界、そして、婚儀ぐらいしかなく、特に婚儀は適齢期の男女がそろいやすい数少ない場であった。

「あの～何か・・・勘違いをなさっているのでは？私はこれで・・」

ソウシは頭を下げ、その場を抜けようとしたがフトーの言葉は、ソウシを動けなくした。

「それは、どうかな？お主・・人はだませても、自分の心はだませぬぞ・・・」

何故？わかった・・・そうだ・・・しかし・・・

「まぁ・・・たかが婚儀じゃ、たまには女性らしくしなされ・・・ああ・・それと」

そう言ってフトーは赤色と青色の紙に包まれたものを渡した。

「これは？」

「お主がどうしてもミナム殿を振り向かせたいときに使う薬じゃ。赤はお主・・青はミナム殿・・まぁ・・これを使わない方がよいの

じゃけど・・・」

「フトー殿・・」

「おおっとこれは差し出がましいことをした。今の話は、ここだけのことよ・・・ハハハ」

フトーが部屋を出た後、すぐに、侍女が入ってきた。

婚儀　1

ミナムとカーネルの婚儀の日が来た。二人はフトー邸から馬車で本宮へ向かった。本宮では、ナラ姫が祭事を司りミナムとカーネルは祭殿の前で夫婦の誓いを行った。本宮から出た二人をヤマト姫が待ち受けていた。

「おめでとう・・・これで正式な夫婦じゃ・・」

「ありがとうございます。」

そして、二人は披露宴の会場へ連れて行かれた。会場は立食形式ですでに多くの人たちがいた。その光景を見たミナムは驚いた――――俺がまったく知らない人までいる。よく見るとあの大極殿にきていた大臣達の姿も見えた。ミナムとカーネルは雛壇に座った。そして、あたりを見回して挙動不審なミナムを見たカーネル

「どうしたの？」

「いや？どうなってるんだ？」

「婚儀の披露宴はこんな感じになるのよ。カモベ村だったら村人全員が来るのよ。ひどい時は近くの村の人まで・・・」

「どうして？」

「一種のお祭りなの・・・だから、男性は正装をして、女性は着飾ってるでしょ。」

「そうだな・・」

確かに軍人は軍服をそれ以外の人たちは、それぞれの正装をしている。しかも、女性に関してはドレスを身にまとって・・どちらかというと俺達より男達のほうを見ているぞ？どうしたんだ？ミナムはあたりを見回すとミナム達のほうを見ているのはごく数人でどちらかといえば、それぞれを気にしているようだった。

「何考えてるの？」

「あ・・いや・・ほとんど・・皆こっちを見てないような気がするけど・・」

「そりゃそうよ・・・ある意味・・・婚活の場、見ないなものよここは・」

今なんて・・・じゃぁ・・俺達は・・・おかざり？まだ呆然としているミナムを見て
カーネルはむっとした。

「ミナム・・・まさか・・・別の女を・・・」

カーネルの言葉をさえぎるように大きな声が上がった。

「ミカドのおなーりー」

場内は、モーセの杖で海が割れたかのようにミカドからミナムまで道が開き、一瞬で静まり返り直立不動で礼をしていた。ミナム達の前に来たミカド・・・ここに来るまで、横を向いて手を振っていた

けど・・・

「ミナム、カーネル・・・お主らの婚儀を祝福するぞ。」

「ありがたきお言葉」

ミナムとカーネルが頭を下げた。その様子を見たミカドはうんと頷き振り向き叫んだ。

「この者たちの未来に神からのご加護があることを!!」

そして、ミカドは二人の方を振り向いた。

「今日は楽しんでくれ・・・これで、余は帰るぞ」

そういうとミカドは、横の侍従に何やらぼそぼそと話しているぞ・・・こっちにも少し聞こえてるんですけど

「あそこと・・あの・・・女性に声をかけろって・・」

ミカド〜!!!あんたもかい!!!ミナムはそう思っているとやがてミカドは、扉の方へ歩き出した。こうしてミカドは会場を後にした。

「ミナムさん!!・・・カーネルさん!!」

しばらくして、ミナム達の前にあらわれたのはミヌだった。ミヌは、

薄い黄色系の色をした可愛い感じのドレスを身にまとっていた。しかも、ミヌには男達が数人ついてきた。しかし、ミナムの前に来ると男達は少しミヌから離れた。

「どうした？ミヌ？」

「ミナムさん・・どうです？この格好？」

「かわいいぞ。」

「それだけですか？」

ミヌは少ししょんぼりして、軽く横を向け開いた背中を見せた。ミナムは驚いた・・み・・みぬ・・お前なんて格好をしているんだ？

「ミヌ・・お前・・・」

ミナムに話しかけられにっこりとするミヌ

「ミナムさん？」

「背中・・大胆すぎない？」

「そう？・・これは？」

そう言ってミヌは、ミナムに背中を見せ少し胸元を強調してみせた。それを見たカーネルは慌ててミヌに声をかけた。

「ミヌ！！十分、可愛いから・・さっきも男の人が誘ってたでしょ」

「カ・・カーネルさん・・もうっ！！わたし困ってるんですよ。逆に！！」

「楽しんできなさいよ。ねぇ～　ミヌ？」

カーネルがミナムに話をしようとしたら、ミナムが固まっていた。どうしたの？とミナム方を見ると目の前には、水色のドレスを着た女性が・・・だ・・・誰なの？そうカーネルが思っていると

「ミナム殿・・・おひさしぶり・・・」

この声に聞き覚えがあった。その時、ミナムが声をだした。

「ベッツィー殿？」

「あ・た・り・」

あの勇ましいベッツィー殿？しかも、胸元があいたあんなセクシーな格好をしてとカーネルが思っているとベッツィーはミナムの前に座り、ミナムの顎に手を添えた。カーネルは、ぎょっとした・・・なんてことしてるのよ。ベッツィーさん、今日は、私達の婚儀だから・・にらみ見つけるカーネル・・・その視線に気付いたのかベッツィーはミナム～から手を離し

「今日は、カーネル殿との婚儀だから、これくらいにしておく。たまには私を見てほしいものだ」

「へ？」

ベッツィー殿？な・・何を言っておられるのです・・・カーネルの

怒りのオーラが見えないのですか？カーネルの方をチラチラ見ているミナムの顔に気付いたベッツィーはカーネルの方へ視線を向けた。そして、背中を見せ

「ま・・いいか・・・ところで・・カーネル殿、あの時はありがとうございました。」

「えっ？」

「この通りきれいに直っておる」

「あ・・・ああ・・」

「じゃぁ・・・今日はこれで、いい男でも探しに行くか？」

ベッツィーは振り向きミナムにウィンクをして、離れていった。驚き顔を合わす3人。

「ベッツィーさんってあんな感じでした？」

ミヌはともかく・・・ベッツィー殿もあんな格好で・・・ひょっとしてソウシ殿も？・・・いや・・

多分・・・違う・・あのソウシ殿だ・・・そう思っているミナムをつねるカーネル

「痛て」

「何考えてんのよ～」

「で・・まだ・・つづくの？これ・・」

「たぶん・・・」

婚儀　2

会場で一人柱の影にたたずみ、ミナムとカーネルの様子を見て、ため息を付いているソウシ・・やはり来なければよかった。しかも・・・こんな格好で・・・ソウシはそう悩んでいると後ろから声がした。

「おい！！」

また、ナンパをしに来た男かいい加減に！！！後ろを向いたまま言葉を吐き捨てた。

「結構だ。一人にしてくれ」

ソウシは振り向いて言葉を放ったことを後悔した・・・声をかけてきたのはマヤザキだった。

・・・なぜ？マヤザキ様がここに？どうして？

「どうしたんだソウシ・・」

「えっ？」

「何が一人にしてくれだ・・・まるで振られた女のように・・」

ソウシは顔を真っ赤になっていくのがわかった。頭もカーッとしてな・・ななな・・なんてこと言うんですか。マヤザキ様！！！ってなんなんですか？その不敵な笑いは・・ちょっと・・・マヤザキは照れ笑いをしながら、ソウシをまじまじと見ているとソウシはたじろいだ。

「な・・なんですか？」

「まいったなぁ～」

「えっ？」

「見違えるもんだ・・」

「やめてください。」

「十分、女らしいじゃないか・・」

「そんなこと言わないでくださいよ。はずかしいですよ。」

「十分、美しいから自身を持て。俺がエスコートしてやるよ」

エ・・・・エスコートって・・な・・何言ってんですか、マヤザキ様もう・・いい加減にしてください。ただでさえ、恥ずかしいのに、身構えるソウシを見てマヤザキは手を引っ張った。

「け・・結構です。あっ！！」

「いいから・・」

そういうソウシの手を引っ張ってマヤザキはミナム達のところへ向かった。あっ・・・だめ・・・今の私を見られたくない。必死で抵抗するがマヤザキの力のほうが勝った。止めて！！心で叫んでもずるずるとひっぱられる・・・マヤザキは眉ひとつ動かさずに淡々とソウシを引っ張った。顔を隠し引きづられるソウシ・・・やがて・・・ミナム達の前についた。ささっとマヤザキの後ろに隠れたソウシ・・

・マヤザキ様恥ずかしいですから――――と逃げようとするとしっかりと手を握られていた。
こいつが・・・ミナムか？この男のどこが？そういえば、さっき、あのベッツィー殿もなにやら話していたな～ミナムと面と向かって話をするのがはじめてのマヤザキには、いまいち理解できなかった。

「ミナム殿・カーネル殿・・この度は、おめでとうございます。」

「ありがとうございます・・マヤザキ殿・・ところで後ろの御仁は？」

「あ・・ああ・・」

そう言ってぐいっと手を引いてミナムの前にソウシを引き出した。

「えっ！！」

ソウシを見て驚くミナムとカーネル

「ソウシ、しっかり、挨拶しろ。」

観念したソウシ・・・顔を真っ赤にして、直立不動になり、頭をさげて

「お・・おふたりさん・・・お・・おめでとうございます・・・」

「ソウシ殿・・・ありがとうございます。」

ソウシをじっと見つめるミナムの目に

「な・・・なんです？」

「きれいですよ。ソウシ殿」

「・・・」

思わずソウシはその場から逃げ出した。

「あっ！！」

「なにか悪いことでも・・」

「多分・・・はずかしいだけですよ。」

ニコリと笑みを浮かべるマヤザキは、ミナムに酒を注いだ。

「これは・・・」

ミナムがそそがれた杯に口をつけるとマヤザキが耳元でささやいた。

「この後もソウシのことをお願いしますよ。」

「えっ？」

「どういうことですか？」

「次の遠征でもミナム殿に随行することになった。」

「えっ？」

目を丸くするミナム・・・

「そうですかっ・・・ええ！！」

って事は、次の遠征って、ポメラか・・・・ミナムにはなんとなくわかっていたが何もこんな時に・・・

「声が大きいですよ・・・」

なんなんだその笑みは

「では・・・楽しんでください・・・あ・・あと別の意味でもソウシを頼みましたよ。」

「へ？」

どういう意味ですか？そう思っているとカーネルが話しかけてきた。

「何の話？」

「いや・・・」

「そういえばソウシさんどうしたの？」

「恥ずかしらしい・・」

「あっそう・・」

ソウシは、とりあえず会場の外へ向かった。

「あれは・・」

逃げ出すソウシを見たベッツィーは彼女を追いかけた。会場を出たソウシ・・・廊下で立ち尽くしていた。きれいですよ。ソウシ殿・・・ミナムの言葉に一瞬でカーと頭に血が上り気付いたらここにいた・・・一体何をいているんだ私は？そう振り返ると二人の光景を思い出し、胸が苦しい・・・そんな時だった

ポンと肩を叩かれた・・・

ま・・まさか・・・ソウシは思わず声を上げ振り返った。

「ミナ・・・・ム？・・・・」

そこには、ベッツィーが立っていた。

「ミナム殿でなくて悪かったな」

ソウシはしばらく考えた・・だれだ・・この人？んと顔を見ると傷が・・・えっ？ひょっとして？

「ベ・・ベッツィー殿ですか？」

「はぁ～・・・ベッツィー殿ですか？って・・ソウシ殿・・」

ベッツィーは、しっかりしろと言いたがったが、目の前で俯き悲し

そうにしているソウシを見て

「お主もか・・・」

「えっ？」

顔をあげるソウシ・・・どういう意味？まさか・・・？ベッツィーはソウシの両肩に手を置いて

ソウシの目をじっと見て

「お主も・・・ミナムのこと・・・好きなのか？」

ただ・・・黙っているソウシは、ベッツィーと目を合わさない・

「ち・・違う・・」

「お主もライバルか・・・」

何を言っているのだベッツィー殿・・私は違うと申したのに・・・

ともう一度否定したいがその

言葉がでない・・

「まぁ・・・どちらでもいいが・・・」

ベッツィーはソウシの両肩から手を離した。

「えっ？」

「もっと・・・自分に素直になりなよ・・・じゃぁ・・私は会場に

戻るか・・」

素直に・・・か・・・その言葉が胸にズキンと響いた・・・・そして、ソウシは、そのまま会場を後にした。

会場では、キスコールが鳴響いていた。戻ってくるんじゃなかったとベッツィーは入り口の近くの壁にもたれかかった。キスは、婚儀の披露宴締めくくりのイベントとして行われており、逆に披露宴の終了意味していた。鳴り止まぬキスコールの中・・・カーネルとミナムは恥ずかしそうにキスをした

新婚旅行　1

ミナムとカーネルは、温泉地に着いてへとへとだった。それは、婚儀が終わり、初夜にもかかわらず、会場の前に来た馬車を見て呆然として二人は顔を見合わせた、何故・・この馬車なんだ？そこには海軍の特急馬車があった。

「あの～？」

二人で後ろを見ると皆が一同に万歳万歳と言い始めた。嘘だろう？思わずため息を付くと同じように
ため息を付くカーネル

「しかたない・・」

「うん・・」

二人は馬車に乗り込んだ・・・やはり・・・・乗心地は最悪だった。なぜ・・来た時の馬車を出してくれないんだ～！！ミナムは心でそう叫んでいた。

部屋に着くと疲れてへたり込んだ二人、そこへ女将は入ってきた。

「いらっしゃいませ・・・今日は？えっ？」

二人の疲れきっている様子を見て、まぁまぁ

「お二人さん・・・京から来られたそうで・・・しかも馬車で・・・」

「はい・・」

「新婚さんとかで・・・まぁ～お元気なことで・・」

ミナムは嫌な予感がした絶対勘違いしている。この女将なににやけてるんだ？

「まぁまぁ・・お盛んなことで・・・あとでお茶をお持ちしますので・・・」

そういい残して、女将は口に手を当てにやけながら部屋の外に出た。絶対勘違いしていると言おうとしたら・・・女将の声がした

「そうそう・・・今日は、お風呂はお二人ではいれますから・・いつでも言ってくださいよ」

二人でお風呂？とミナムはカーネルの方を見るとカーネルは目をそらした。

「先に食事にします。」

ミナムの声に女将は、すぐに戻ってきて

「そうおっしゃらずにお風呂に行ってください。ささ・・」

お風呂セットを渡されたミナム・・ど・・どうしようとカーネルを見るとカーネルも少しはにかんでいた。はぁ～早く誘ってよ・・もう心積もりは出来ているのに・・・そう思うカーネルにようやく声

がかかった。

「行こうか・・」

「うん・・」

二人が立ち上がった瞬間、パソコンが光りだした。

「えっ？」

「なんで？」

気がつくとそこはミナムの部屋だった。これは？と見ると横にカーネルが寝ていた。やっぱり？俺の部屋かということは、と当然俺も裸だ・・・とカーネルを見ると目を覚ましていた。

「ここは？」

「俺の家・・・」

「ということは？」

「そう・・・」

カーネルは嫌な予感がした。私も裸だ～！！！と思わず隠すカーネル・・・ここで初夜なの？ひょっとして？・・えっ・・外は明るいし・・・どうなってるの？と思っているとミナムの顔がアップにな

った。ちょっ・・ちょっと今そんなこと

ん――――

ミナムの唇が重なった。

「こんな初夜になっちゃったけど・・・」

そう言ってミナムの唇が再び重なる。でも・・でも・・・こんな・・・の・・・イヤー!!!!

あれ?

ミナムの体がすっとカーネルから離れた。

「カーネル・・・こっちでも式を挙げよう」

「えっ?」

どういうことミナム?言っている意味がわからないし、そう思っているとミナムが振り返って

「由美に見せてやりたいんだ。」

「由美さんに?」

「あれでも俺の唯一の肉親なんだ・・」

そうだ・・ミナムのお姉さんなんだ・・・でも?どうやって?時間もないし・・・って驚いているとミナムは携帯をかけていた。

「由美?そうそう・・カーネルのと俺の姿写真に撮りたいんだけど。うん・・・わかった・すぐ行くから」

「どうしたの?」

「由美の奴・・・結婚式場で働いているから・・・今日時間あるうちにって、すぐ行くぞ」

すぐって?私達、裸よと思っていたらミナムは服を持ってきたそうカーネルが前に来たときの服を・・

新婚旅行　2

式場に着くと由美が待ち構えてた。

「遅い！！」

「これでも早い方だぜ！！」

話すミナムを尻目に、由美はカーネルの背中を押していった。

「ささっ・・早く！！」

「ゆ・・由美さん？」

「おれは？」

由美は右の扉を指差して叫んだ。

「右に行くと男物があるから適当にタキシードを合わせて」

「あっそ・・」

由美に背中を押され――――――由美さんそんなに押さなくても・・カーネルはある部屋に入れられた。そこには純白のウェディングドレスがあった。

「きれい・・・」

「でしょ？」

早速、由美はカーネルの服を脱がせ、採寸して体型に近い服を見つけてきた。

「時間がないから。これで勘弁してね。」

こんなドレス着れるなんて・・・グレースでは考えられない・・

「じゅうぶん・・・きれいです・・・」

服を着終わるととすぐに化粧をし始めた。なに？これ？一体何をするの。カーネルは不安になった。見た事もないものを顔に塗り始めたからだった。

「ちょっと・・・」

「じっとしなさい！」

「でも。」

「カーネルさん・・私を信じて・・ね！！」

しばらくして、カーネルの化粧が終った。そして、鏡を見るカーネル・・・えっ？これがわたし？私はしばらく鏡を見ていた。そこに、由美さんがポンと方をたたいて

「さてと！！ドンくさいよっちゃんは？どう？」

そう言って後ろにあるカーテンの向こうを除いた。カーテンからひ

ょっこり首を出した由美は残念そうな顔をした。

「なんだ・・」

「なんだとは・・なんだ・・」

「つまんないの・・準備できてるし～」

「あのなぁ～」

「それでは。じゃじゃーん」

由美は、カーテンを開けてカーネルを披露した。純白のドレスに身を包まれたカーネルを見て息を呑むミナム・・・ジーッと見つめられ恥ずかしそうにするカーネル・・・

「よっちゃん・・・なにか言ってあげなさいよ」

ボーッとしているミナムをバチンと叩く由美・・・

「えっ・・・ああ・・・きれいだ・・」

ったく・・・バカなよっちゃん・・もっといい言葉をかければとカーネルを見ると、真っ赤だし～

参ったねぇ～そう思う由美は、時間がないんだった。

「ささ、チャペルへ行くわよ」

二人をチャペルへ連れて行った。一人の牧師そして、ミナムとカーネルそして、由美この中で二人は永遠の誓いを立てた。そして、二

人の写真を撮った。

「あとで、部屋に置いとくから。早く着替えて！！」

カーネルが着替えていると由美が入ってきた。

「着替えた・・・うふふ」

何笑ってるのカーネルがそう思っていると由美が耳元でささやいた。

「今日は、新婚初夜よ・・」

そんなことは知ってるって・・・

「いい思い出になる場所をセットしたから・・・もうちょっと・・」

由美は可愛い服をカーネルに準備していた。そして、手際よく化粧を直し、カーネルをタクシーへ連れて行った。

「早く！！」

ミナムが部屋を出ると由美が叫んでいる。何焦ってるんだ？と俺の手を掴んでタクシーまで引っ張った。

「なんだよ！！」

「いいから！！」

開いたタクシーの前まで来ると中にはすでにカーネルが乗っていた。えっ？と驚くと由美は背中を押し無理矢理俺をタクシーに押し込んだ。そして、封筒を渡してバタンとドアが閉まった。向こうでは由美が手を振ったりガッツポーズをしてはしゃいでいた。俺が窓を開けると由美はこう叫んだ。

「今日はホテルを予約したから、じゃぁ～！！後はがんばってねぇ～！！」

えっ？がんばるって？どういう意味？ん？ちょっとまて？俺はホテルなんて予約していないぞ・・第一・・・支払いはどうするんだ？どういうことだ・・そうださっきの封筒は？と封筒を開けるとそこには、ホテルのカードキーと俺のカードが・・・・そして、領収書ってしかも俺のカードで切ってる・・・由美の奴・・・しっかりしてやがる。やがて、タクシーが動き出した。俺が振り返りカーネルの方を見ると顔を真っ赤にしていた。

「カーネル」

俺が声をかけても、カーネルはじっと俯いていた。

しばらくして、タクシーはあるホテルの前に止まった。そのホテルはこの町では比較的有名なホテルだった。俺がタクシーを降りたが、カーネルは降りてこなかった。

「カーネル」

俺の言葉にビクッとなった

「あ・・・」

そう言って慌ててカーネルはタクシーを降りた。

カーネルは、タクシーを降りて目の前の建物を見て驚いた。なんなのこの高い建物は、これが由美さんが言っていたホテルなの？ふとミナムを見ると少し向こうにいた。

「待ってよ・・ミナム・・・」

「早く来いよ」

「もうっ・・」

私は、走ってミナムの腕を掴んだ・・なんだかすごく嬉しくなってきた。さっきの結婚の誓いと言いこのホテルって建物といい――――とミナムについて行くと、いきなり目の前の扉が横に開いた。そこには、人が5，6人入ったら一杯になりそうな部屋があった。まさかここに泊まるの？

「これは？」

「エレベーターだ、ささ、乗った乗った」

え？乗るの？これ？乗り物なの？えっ？ミナムは私の手を引っ張ってエレベータに私を連れ込んだ。

そして、何かよくわからないボタンを押すと扉が閉まった。そう思うとガクンと下に押さえられそうになった、

「えっ？どうしたの？」

「上に昇ってるんだ。ほら」

思わず抱きついた私に顔で合図してきた。ミナムが示した方を見ると何か丸いものが次々と転倒しては消えていった。私には何のことかまったくわからなかった。やがて、動きが止まり、扉が開いた。そして、私はミナムに連れられて行った。

「どこ行くの？」

「とりあえずレストラン・・・腹減ったろう。」

そういえば何も食べていない。ただミナムに着いて行くとそこはおしゃれな場所だった。そして、外を見ると星を散りばめた様な夜景が眼下に広がっていた。そして、私は夢のような空間でミナムと食事を取った。食事を終え部屋に入った私達――――――ミナムは、私を抱きしめた

「カーネル・・」

何も言わずただ頷いた――――ミナムの手が顎を持ち上げると目が合いその瞬間目を閉じた。いつもより深く長いキス気がつくとすでに何も来ていない私、そっとやさしく触れるミナムの手に私は心も体も熱くなった。熱くなったミナムを受け入れた私――――――そのまま、何度となく目の前が真っ白になり、そして、ミナムによって私の体は満たされていった。あらからどのくらい経ったのだろう？目

を覚ますと横には可愛い寝顔をしているミナムの姿が――――と思ったら心は幸福で一杯になった。そして、甘えるように寄り添ったら、ミナムが目を覚まし、私の額にキスをした。

「おはよ・・」

「おはよ・・ん・・」

私の言葉を奪うようにミナムの唇が重なった。そのままミナムを抱きしめると――――朝から元気なミナムが私の中に入ってきた。

本当にどのくらい経ったのかな～ようやく起き上がったミナムと私は、部屋で朝食を食べた。

こうして私たちの初夜は終った。

家に戻ったミナム――――帰りに両親の墓により結婚を報告して、そして、あるものを買って帰ってきた。

すでに由美の姿はなく、写真と一緒に　お幸せに！！！と書いたメモ書きを残してあった。

ミナムは、写真をカーネルに見せる

「えっ？こんなにきれいに絵が書けるの？」

そう驚いていた。そして、ミナムは、パソコンに写真と後買った物を貼り付けていた。

「何しているの？」

「こうしたら向こうに持っていけるかもしれないだろう」

「ふーん・・・」

そういうとカーネルはミナムを抱きしめた。

「このままここで・・・」

突如、パソコンが輝きだした。

一方、二人がいなくなった旅館では大騒ぎになっていた。そう二人がいなくなって7日間

今日、返さないと・・・大変なことに、女将は慌てていた。もちろん、いなくなったことは

内緒にしていたのだった。しかし、当然この話は、京のミカドの耳に入っていた。

「ひょっとしてにげたのでは?」

「早く捕まえよ。」

そう言うミカドにフトーは

「まぁ～まぁ～これまで、ミナムは何度か消えています。しかし、数日後には戻っていると報告があります。」

「しかし、フトー」

「そうです。ミカド」

フトーの話にあわせたのはマヤザキだった。

「マヤザキや・・」

「わたしも同様の方向を聞いております。」

「しかし」

不満たらたらのミカドに

「これで、カーネルを京においておく理由もできた。」

「そうか・・」

必死に探していた旅館の女将――――ふと、二人が泊まっていた部屋の前を通ると声がする

まさかと戸を開けると二人がいた。

二人の運命

俺はミカドの前にいた――――――そこは、大極殿、周りには大臣達が・・・そして、俺の横にはカーネル、ミヌ、そして、ソウシがいた。ミカドは俺達に一声かけた。

「ミナムよ。お前の力をこのグレースの為にもう一度発揮してもらいたい。」

あっ・・・やっぱり――――――俺はため息を付いた。俺の様子を見ていたカーネルは、肘で俺をつついた

「知ってたの・・」

「なんとなく・・」

「そう・・」

そしてミカドはこう言った

「明後日、ユウ城の救援に出陣せよ」

ギオンの攻勢によりユウ城は、一刻を争う状況だった。黒騎士団3番隊が守備に当たっている出城ハン城が攻めの防衛――――敵陣包囲網への個別攻撃により、ユウ城は未だ完全に包囲されていなかった。しかし、これも時間の問題となっていた。

「ミナムよ。頼んだぞ!!」

「ははっ！！」

俺が頭を下げるとミカドは不思議なことを言った。

「ミナムよ・・・お主――――――新婚だったな。ところで新婚旅行はどうであったか？たっぷり楽しめのか・・・」

一体、何を聞き始めるんだミカドよ。ほら――――――カーネルも少しムッとしているし・・とその隣のミヌとソウシはもっと不機嫌そうに見えた。

「ええ・・・まぁ・・・」

「そうか・・・それは、よかった。余も今度、新しい妃を迎えたら、行って見るぞ新婚旅行とやらへ・・・」

ミカドはニコニコしながら、俺達を見ていた。そして、次の一言に俺はどう答えていいかわからなかった。

「ミナムよ。お主の新婦は、京で守ってやるから、思う存分暴れて来い！！」

俺はカーネルと顔を見合わせた。ミカドそれは一体どういうことですか？カーネルをおいていけということですか？

「ミカド・・恐れながら・・」

「なんじゃ？」

「カーネルは、私の妻であり、魔導士でもあります。」

ミカドはキョトンとした顔をしていたが、にんまりと笑顔を浮かべ

「それが？」

「で・・ですから・・・一緒に・・・」

「私もミナムと一緒に戦います。」

カーネルがそういうとミカドは、俺とカーネルの顔を交互に見た。
そして、ミヌの方を指差し、

「ミナムよ・・・ここにもう一人魔導士がおるではないか・・・それとも、新婦を守るということを信じないのか？」

「い・・いえ・・滅相も・・ございません。」

「ならば、わしらに預けよ。わるいようにせん。」

ミカドがそう言うと横からナラ姫が話をした。

「では、本宮でカーネルを預かります・・・」

チッ・・・余計なことをミカドは、一瞬顔をしかめた。しかし、すぐににこやかになり

「そうじゃな！！魔導士とはいえ、カーネルも女性であったな・・・本宮殿に任せる。」

「御意」

俺は、呆然としてカーネルを見つめた――――――カーネルも俺を見ていた。

嘘でしょう？カーネルはミナムをじっと見つめた。なぜ――――私達別れないといけないの？ミナムの姿が歪んで見える・・・私は、この後、大極殿を出るまで記憶は、まったくなくなっていた・・ただ覚えているは大極殿を出て、ミナムの腕の中で泣いていたことだけだった。

ミナム・・・

ミナム・・・

二人を見ていたミヌとソウシはとても声をかけられる状態ではなかった。

「ソウシさん・・」

「今は、そっとしておこう・・」

「ええ」

出陣前夜・・・・

一緒にいる二人、カーネル――――――俺は、絶対に帰ってくる・・・信じてくれ・・・今、お前に出来ることは俺を刻み込むことだけだ。ただ、カーネルを抱いていた。ミナム――――ミナム全てを覚えとくわ・・・声・・匂い・・・そして、ぬくもり・・・そして、私のことを覚えていて・・・私は必死にミナムにしがみついた。

やがて夜が明け出陣の刻限が近づいてきた。

出陣・・

ギオン討伐を命じられたミナム――――――自らの戦闘服であるスーツを着て大極殿に立っていた
その横には、ミヌとソウシ・・・そして、少しはなれたところにカーネルがいた。

「ミナムよ。これより武威大将軍の地位を与える。まずユウ城に向かい黒騎士団3番隊と合流し、ユウ城包囲網を突破せよ。」

「かしこまりました。ご期待に沿えるよう奮闘してまいります。」

「よくぞ言った。思う存分暴れて来い！！よし！！出陣の太鼓をならせ！！」

太鼓が鳴り響く中、ミナム達は、大極殿を出ようとした。途中、カーネルが立っていた。
立ち止まるミナム

「行ってくる」

「お気を付けて」

カーネルは、朝フトー邸でのことを思い出した。――――――出発の準備をするミナム。しばらく・・いや・・もう会えないかも・・・そんな中、私の目の前に4枚の写真がひとつは、ミナムが一枚、私が一枚そして私たちが並んで写っているのが2枚あった。

「これは？」

「結婚式の写真」

「こんなにきれいに・・でも・・どうして？」

「パソコンつけていたんだ。そしたら、これとあとあれが何とかこっちにもってこれた。」

ミナムが指差した方を見るとそこには、棒の先に赤いものが着いたものと、小さい蝋燭のようなものが数個あった。ミナムは、私のほうを見てにっこりと笑い、

「これもっているからな。カーネルはこれを持っといてくれ」

ミナムが手にしたのは私の写真だった。そして、残りを私のくれた。

「ありがとう・・・」

私はただこの言葉を言うのが精一杯だった。そして、今――――目の前にはミナム・ミヌ・ソウシがいた。

そこへヤマト姫が現れた。

「ミナムよ。おぬしらにこの馬を渡そう。」

そこには、３頭の馬がいた。ミナムはその中にいたクオンを見つけて駆け寄った。

「元気だったか？」

そう聞くと、耳元で何かささやいているようだった。クオンの話を聞きながら頭をなでているミナムを見ていると、ミヌが私に話しかけてきた

「カーネルさん・・ミナムさんのことは、任せてください。」

「ありがとう・・・ミヌ」

そうは言ったけどはっきり言ってあなたが一番危ないのに、ミナムに言い寄らないかと・・

「あ～！！その目疑っているでしょう。」

「そんなことないわよ。」

「本当ですか？」

「本当よ」

私に向かってガッツポーズを見せるミヌ―――それはどういう意味なの？そして、私はソウシを見た。彼女は困った顔をしていた、多分私達の会話を聞いてあきれているのよ・・・そう思っているとミヌが私の耳元でささやいた。

「ミナムさんの下の処理も任せてくだ・・」

パカン！！

「痛いです！！」

叩いかれたところを抑えるミヌ

「冗談ですって・・・」

本当に何を考えてるの？

「ミヌ・・本当にミナムを頼んだわよ・・」

「はい！！」

「ソウシさん・・ミナムを頼みます。」

「わかった。」

こうしてミナム達は、ユウ城へ向け旅立って行った。

一方、ギオンによるユウ城包囲網は徐々に狭まれていた。大筒の威力の強大さにグレース軍は苦戦を強いられていた。

「このままでは、ユウ城も陥落します。大将」

坂上は考えていた。そんな時に兵士の一人が入ってきた。

「ホクテイ城が陥落・・中将以下、玉砕との事です。」

「なに！！では？」

「残るは、黒騎士団が護るハン城のみです。」

「一部撤退・・・を準備せよ」

「何を言っておられるのです。」

「このままでは、全滅するだけだ！」

「ちょっと待ってください。前線のハン城にいる黒騎士団はどうされるのです？」

「仕方がない！！」

そこへ別の兵士が入ってきた。

「京から連絡、ミナム達がギオン討伐の為京を出発」

「真か！！」

ギオン側の前線では、着実に包囲網を完成しつつあった。

「ワカタケル総帥もすごいものをお作りになった。そういえば、岡蒸気にこれを積むそうだ。」

「そんなことになれば、輸送も楽になる。」

そんな時だった。

「ミナムが出陣したそうです。」

「何？ミナムとな？」

「まぁ・・俺達にはこの大筒があるから大丈夫だ・・・」

ギオン兵の笑い声がこだましていた。

ワカタケルにもミナム出陣の報告が入ってきた。

「ワカタケル総帥、いかがなされます。」

「様子を見よう。」

「し・・しかし」

「ルーシーの件だろ」

「はい・・・リーシー自らミナムに勝てぬと言ったとか言わないとか・・」

「そのようなあやふやな情報では動けぬ」

旅立つミナムを見送るカーネルの肩をナラ姫が叩いた。その顔は少し曇り気味だった。

「すまぬ・・・」

なぜ謝るのですか？そう思っているとそこへフトーが現れた。相変わらずニコニコしていた。

「カーネル殿・・ミナム殿のことご心配でしょう。」

「ええ・・」

言葉と顔があっていないんですけど・・・しかも、何故、そんなにニコニコしていられるのですか？

私が機嫌が悪いのに気付いたのかフトーは軽く自分の頭を叩いた。

「特に、変な虫がつかないか・・・そっちも心配でしょう。」

「えっ？」

「ご心配なく・・」

この人一体何言ってるの？はっきり言って意味がわからない・・・・ミナムに変な虫って女のことでしょう。ミナムがそんなことするはずが・・・・

「ミヌ殿を第2婦人として、ミカドから認められましたから・・・

ただし、婚儀はギオン討伐後です。」

「へ？」

何言ってるのよ・・・それじゃ最初から私が付いて行けばいいことじゃない。なぜ、ミヌとも結婚させるの？私は一体なんなの！！！

「では・・」

そう言い残して、フトーはそそくさと帰っていった。

「最悪・・・」

忍び寄る・・・

ミナムが出発して、3ヶ月が過ぎた。そろそろミナムもユウ城に着いた頃だと思う・・・私も体調を崩し、
最近嘔吐がひどいと思ったら妊娠していた。そう・・ミナムの子供を・・・そして、いつもミナムの写真を見て
早くと祈る日々だった。そんなある日、ナラ姫が慌てて私の部屋に入ってきた。

「大変じゃ」

「本宮様・・どうされたのです？」

「早く隠れるのじゃ・・」

どうしたの急に？そう思いながら私は、ナラ姫の指示通りに隠れそっと除いた。その時だった。数名の衛兵が部屋に入ってきた。

「何事ぞ！！ここは本宮の巫女の間と知っての狼藉か！！」

ナラ姫が怒りをあらわにし、手にしている杖を衛兵に向けいた。衛兵が近づくと稲光を光らせ衛兵を威嚇していた。
衛兵も魔法を使おうとするが、使えない様子だった。

「どうした？」

「衝波も撃てないぞ！！」

「バカめ・・・ここは、本宮じゃぞ・・・そうは行かぬは・・・な

ぜこのような狼藉をした！！」

もう一度、稲光を光らせ今度は、一人の衛兵に電撃を食らわした。

「うぁぁああ！！」

叫び倒れ込む衛兵・・・

「これは、ミカドの御意向である。速やかに、妊娠されたカーネル殿を引き渡してもらいたい。」

「なぜじゃ？妊娠しているカーネルは、身重逆にここにおいて置くのが筋じゃ・・・」

「ミナムの子だからです。」

えっ？私は驚愕したあの人たちはこの子を堕ろせと言っているの。なんてことを・・・そう思っていると

ナラ姫は、再び杖の先から稲光をだした。それに怯える衛兵・・・

「いくら本宮様でも、これは反逆に当たりますぞ・・カーネルはどこです。」

「カーネルは妊娠なぞしておらぬ。」

本宮様・・・いくらなんでもそんな見え透いた嘘は・・・絶対無理ですって――――ほら、衛兵達があきれいるし。

「本宮様、もうちょっとましな嘘をつきましょうね。」

「今、滝行をしている。」

ですから――――その嘘まったく通じてないってば・・・衛兵達も笑っているし・・・本宮様、えっ？

私は、目を疑った。そして、衛兵達もわが目を疑った。それは、衛兵達の後ろから私が入ってきたからです。

「本宮様・・・これはどういうことです？」

それ――――私の台詞よ・・・わたしの・・どういうことよ。何故私がそこにいるの？

「カーネルよ」

「はい・・本宮様？」

ちょっと待ってあんた誰？私はここよ・・ここ・・・しかも、本宮様、何もなかったようにしゃべって・・

「この者達がお前が妊娠したというのじゃ。」

「えっ？」

両手を顔に当て、驚いた表情をする私のそっくりさん声までそっくりだ～！！そして

「何を冗談を今まであの冷たい滝に打たれていたのに・・・妊娠？・・このおなかで？」

そういっておなかをさすっていた。確かにおなかがとフト私のおな

かを見るとポッコリというか
ふっくらというか・・・出ているし・・・・・う〜・・・・

「嘘をつかれても困ります。このままでは反逆罪に・・・」

「ではこれではどうか？」

「ぎゃーー！！！」

私は目を疑った・・・本宮様は、いきなり私のそっくりさんに電撃をかけた。くたっと倒れこんでいる
私のそっくりさん、かわいそうに・・・衛兵も驚いて固まってるじゃない・・・やりすぎよ・・・
本宮様は、カーネルを杖で指していた。

「これでどうじゃ？」

「あ・・し・・しかし・・・」

答えに困る衛兵・・・

「なんならもう一度かけようか？」

ほ・・本宮様・・なんてこと言うのです。ようやく気付いた私のそっくりさん驚いて目をうるませてるし・・

「本宮様・・・お・・・おゆるし・・を・・・」

えっ？なんでそんなこと言えるの？普通もっと怒るべきじゃないの？そう思っていると

「し・・・しかし・・・ミカドがどうしてもお連れしろと」

「ミカドがか・・」

そう言って本宮様私のそっくりさんの方をじっと見ているし～・・・ん？私のそっくりさん・・・どこ見てるのん～？私はその視線の先を追った。ほ・・・本宮様？どういうこと？ん？よろよろと歩き出したら・・・ええっ！！！本宮様に寄り添って・・・ちょっと何してるの？

「本宮様・・・行きたくありません！！」

なんか寒気がしてきた・・・雰囲気やばくない？これって・・・本宮様これはあんまりでしょう。衛兵達もほら・・あきれているわ・・・どうしてくれるの？

「しかし、ミカドの命令です。」

こればっかり衛兵ってなんて頭が固いのかしら・・・

「しかたない・・・行かそう・・・ただし・・・」

「ただし？」

「カーネルに何かあったらどうなるかわかってるよのう。」

「そ・・それは、ミカドでも。あの不貞罪は適用されるということですか。」

「そうじゃ。あの法令には、ミカドも含まれておるのじゃから、よく覚悟せよと。もし、カーネルが死んだら同罪じゃしな・・・」

「わかっております。」

「それとわしも一緒に行くぞ！」

そう言って私を残して本宮様たちは、大極殿へ向かった。

しばらくして、私の部屋に戻ってきた二人・・・私は、そっくりさんを見て驚いた。魔法が解けるとまったく別の人物だったからだった。

「これは、本宮の秘術のひとつじゃ・・・」

そう言ってにこやか話し始めたときのことだった。一人の巫女が中に入ってきた。

「本宮様・・・大変です。」

「何事じゃ・・・」

「ユウ城が陥落したそうです・・・」

ユウ城・・・陥落1

数十本という黒い煙をあげ、一部は炎も――――苦しみもがくユウ城の姿が目の前にあった。
そして、ミナム達が向かう方向と逆方向に脱出を図っている兵士達の姿が・・・そして、道端には
もう動きの取れない遺体がそこらに散らばっていた。

「遅かったか・・」

ミナムの一言目がこれだった。ミナム達は２０００名の兵を引き連れ京を出発して３ヶ月、ユウ城が見えるユウの関で待機していた。ユウ城に伝令を飛ばしていた。ユウ城は陥落寸前・・・それは目の前を見ればわかっていた。その時だった。戻ってきた伝令が

「今、ユウ城が陥落したと。坂上大将がまもなくここに来れれる・・・」

伝令が言う間もなく、陣の中に坂上大将が入ってきた。

「貴殿がミナム殿か・・」

「その通りですが・・・失礼ですが。あなたは」

「申し送れましたな。坂上田次郎と申します。」

「これは、はじめましてミナムと申します。これからよろしくお願いします。」

ミナムが頭を下げると坂上は一瞬目が手になったがガハハと笑い始めた。

「面白い御仁だ。ところで兵はざっと2千というところですな。」

「ええ・・まぁ・・ところでユウ城はどうなっているのですか」

坂上はユウ城の方を振り向いてしばらく黙っていた。そして、ミナムの方を見ると

「あのざまだ・・5つある出城のうちの4つは陥落した。そしてユウ城もいつまで持つかわからん。ミナム殿はいかかかな？わが軍は、ここから先のコレイ城に向かうが」

「ちょっと待ってください。まだ陥落したわけじゃ・・」

「そうだが・・・」

「ところで、まだ落ちていない出城とは？」

「ハン城だ。あそこは黒騎士団が守備に当たっている。」

「坂上大将！！それは、真か？」

ソウシは驚き声を上げた。ソウシに気付いた坂上は頭を下げた。

「これは・・ソウシ殿・・・真にすまぬことを・・・」

「なぜです・・」

「援軍がおくれぬのだ・・・」

「ところでハン城とは？」

「これを見てください。」

そう言って、坂上は地図を広げた。現在、ギオンとグレースを分けている南北に伸びるユウ山脈
ユウ山脈のほぼ中央にユウ峠という、唯一超えることが出来る峠がある。ユウ関はここにあった。
そして、ユウ関から東へ突き出たユウ山の上に立つのがユウ城・・・
そこから5本の頂きが伸び
その突端に出城が有していた。そして、このユウ峠からへ通じる街道の延長戦上にハン城はあった。
ミナムはまずハン城を指差した。

「坂上殿、この城はまだ落ちてないのですが。」

「そうだが・・」

「このルートがあるのになぜ？」

ハン城とユウ峠の街道を指差すミナムに、坂上は、ハン城の周りを指差し

「このようにすでに取り囲まれております。」

「で？ユウ城まで？」

「今は、このルートを残して、ほぼギオンに落ちておる。」

坂上は地図上でユウ城から現在位置をなぞった。それを見たミナムは、

「ユウ城までどのくらいですか？」

「馬で約2時間というところだ。」

「そうですか・・で・・どのくらいもちますか？」

「正門がすでに破られている・・・今日いっぱいもつかどうか・・しかし、もうこんな時間だから総攻撃は明日かと・・」

ミナムは地図をじっと見ていた。そして、正門から本丸までのラインを見ていた。そして、そこを指差し

「ここは正門から直に本丸に行くのではないようですね。」

「その通りだ。ここは山を利用した弾劾になっていて、まっすぐあがって来れないようになっている。」

「そうすると明日の総攻撃で最初の部隊が本丸を占拠すると怒涛のごとく残りの部隊が入ってくるでしょうね。」

「そうだが？」

ミナムはソウシのほうを見て、

「ソウシ殿」

「なにか？」

「何か人の変わり見ないな事をできますか？」

ミナムの一言に頭をかしげるソウシ

「どういう意味だ？」

「なにか人のようなものと言うか、何か魔法で」

「マリオネット？」

そう言ってミナムの横に座ったのはミヌだった。

「マリオ？」

「ちがう。マリオネットよ。」

ミヌはここぞとばかりにミナムに寄り添った。

「で・・・マリオネットをどうするんだ。」

ソウシが口を挟んできた。

「撤退するならそれを身代わりにと・・・」

「身代わりはいいけど、戦うことも出来ないし。やられるとすぐ紙切れになるぞ。」

「紙切れ？」

「そう・・マリオネットってこのように人型の紙に魔法をかけるだけのものよ。だから・・ただ立っているだけだし。何もできないわ」

「だったら尚更だ。今からこの付近ある遺体をある程度をユウ城へ運んでほしい。そこへそのマリオネットをおいておく。そして、できる限り・・・ここまで撤退させる。」

その言葉に驚いた坂上が

「全軍を撤退せよと」

「その通り。そして、ここある火薬を城の床下においておく・・・」

「これは？」

「そう・・大筒用の火薬だ。敵が占拠してしばらくしてから。ミヌの雷撃で爆破する。」

「それは、妙案ですな・・・では、早速・・」

そして、翌朝を迎えた。

ユウ城・・・陥落2

ギオン前線では・・・ユウ城攻略の指揮を任されていたカクサンが声を上げた。

「いよいよ、ユウ城を攻略する時が来た！！勝鬨を上げろ！！」

各部隊から歓声があがった。そして、

「先日、正門も完全に攻略、そして、中間門の撃破しました。後は、城内の最期の門だけです。」

「よし、最期の門を突破して城を落とすぞ！！」

陣内から再び歓声があがり夜明けとともに先発隊から順に出陣した。電光石火のごとく、次々とユウ城の防衛隊を破るギオン軍――――昼には最期の門が陥落し、本丸が落城した。やがて本隊とともにカクサンがユウ城に入って行った。こうしてユウ城は陥落した。カクサンが入場してしばらくしてのことだった。

ドーン！！

轟音と共に地響きが本丸を揺らした。その轟音を合図にグレース兵１０００がユウ峠からユウ城に向け進軍した。その戦闘にはもちろんミナム達もいた。

「行くぞ！！」

ユウ城のあちこちで轟音と共にあがる黒煙――――まさしく、敵は混乱しているミナムはそう思っていった。しかし、ユウ城に向かう途中で待ち伏せにあった。

「撃て！！」

号令と共にミナム達を無数の砲弾が襲った。その号令をあげていたのはなんとカクサンだった。

空城の計をしたつもりだろうが・・・あまいな・・・ミナムが盾で、攻撃を受け止めている中、死者が増えていった。

「きゃっ！！」

「大丈夫か！！ミヌ！！！」

「ちょっとかすっただけ。」」

ソウシがその状態を見て、ミナムの方を振り返り叫んだ

「このままではまずい。」

「クオン！！ミヌを頼む！！」

「わたった。」

ミヌをクオンに乗せたミナムが叫んだ

「退却！！　退却だ！！」
その叫びとともにグレース兵が退却を始めた。
「ミナムさんは」
「俺はしばらくここで踏ん張る！！」
ミヌが泣きながら
「私も残ります。」
そこへソウシが来てミナムを制した。
「ミナム、無謀なことはするな！！」
「ソウシ殿、ミヌを頼む」
「・・・・」
「ソウシ殿・・」
「その前に敵に一太刀を浴びせよう。」
そう言ってソウシは、剣をかまえた。
「真空波！！」
そう言って敵の一部を崩壊させた。

「ミナム・・・わたしも・・」

ミヌがそういった瞬間、ミナヌは、クオンの尻を叩いた。

「行け！！クオン！！」

「ミナム！！」

クオンはミヌを背負ってひたすら走ったユウ峠に向かって・・

一方、ソウシはミナムの横に立っていた。

「私も残る。」

「ソウシ殿、あなたにはまだ、やることがある。」

「ミナム殿をここで死なるわけにはいかぬ。」

ミナムはチラッとソウシのほうを見た

「勝手にしろ」

「そうさてもらう」

ソウシとミナムは前の軍勢を見ていた。そして、ミナムが言った。

「敵はざっと千人いるな。」

「怖いのか？」

「いや？ちょっとな・・」

「おまじないをしてよろうか」

ソウシが笑顔を見せたとき砲弾が飛んできた。あわててソウシをミナムは自分の影に入れた。

「あぶない。」

その時だった。ソウシはミナムに軽くキスをした。

「おまじないだ！！」

「ソウシ殿・・・」

その様子を見たカクサン――――「追撃せよ！！」そう叫ぼうとした瞬間、真空波が左の砲撃手十数名を吹き飛ばした。しかも、よく見ると目の前でたった2人で突っ込んでくる馬鹿な奴を見つけた。バカめ。そう思いカクサンは叫んだ

「あいつらへ攻撃を集中しろ。」

銃声と号砲がけたたましく鳴り響き、砲弾がミナム達に集中し、ソウシの前に出て盾を構えたミナムを直撃した。

「ソウシ殿！！！」

「ミナム殿！！！」

ミナムの影に隠れたソウシ・・・砲弾の全てを受け止めているミナ

ムに・・・轟く爆音・・・吹き上がる爆煙と共に二人の姿は見えなくなった。

「やった！！」

その様子を見ていたカクサンは、確信した。しばらく、舞い上がった砂煙で前の状況が見えなかった。その時だった。砂煙の中から真空波がカクサンを襲ってきた。

「何！！」

間一髪よけたカクサンだったが、かなりの人数がやられていた。次の瞬間、ミナムが切りかかってきた。そして、ミナムが切りかかった刀が大筒をスパッと切り裂いた。うそだろう・・あの鉄の塊を？と思った瞬間ミナムはその大筒を片手に持ち、別な大筒へ向け投げつけた。一瞬にして、カクサンが準備していた陣内は混乱に陥った。

「このやろう！！」

銃弾がミナムを直撃したが、まったく効かない。その様子を見てカクサンは思い出した。自分達の軍にもう一人同じ奴がいることをこのままでは全滅だ。

「退却だ！！退却！！城まで戻るぞ！！」

カクサンの軍は一斉に退却を始め、ユウ城に戻った。

敵の軍勢が去ったのを確認したミナムとソウシ・・・

「やったか・・」

「ああ・」

ふとミナムはソウシの顔を見て笑った。

「何笑ってんだ。」

「ひでぇ顔だ・・」

「何よ・・ミナム殿こそ・・」

二人はしばらく笑いそして近くに木にもたれかかり座り込んだ。

「疲れたな～」

「ああ・・」

大爆発！！

ミヌがクオンに乗って戻ってきたのは、ミナムとソウシが座り込んでしばらくしてからだった。

「ミナムさん！！」

ある木の下で肩を並べ座り込んでいる二人の姿を見たミヌ。ミナムさん大丈夫？ひょっとしてとミヌを驚かせた。そして、近くによると二人とも足を前に投げ出し、寄り添って座っていた。近づいてきているミヌに気付いたミナム

「ミヌ・・・戻ってきたのか？」

ソウシもミヌに気付いて

「ミヌ殿無事であったか？」

二人の様子を見たミヌ・・・心配して損したわ・・・なに仲良く座ってるのよそう思いつつもミナム達の前に行くと
ミナムが話しかけた。

「ミヌ・・怪我は大丈夫か？」

「かすり傷よ。ほら」

ミヌはすっかり直った怪我を見せた。

「それより何もないわよね！！」

ミヌの言葉に顔を合わせるミナムとソウシ・・・何、顔を合わせてるのこの二人ひょっとしてなにかあったの？

「この通りへとへとだよ。」

「さっきまで戦ってたんだから・・」

やっぱり・・・何か？おかしい・・

「ミナムさん・・・カーネルさんに報告するわよ」

「ミヌ・・・俺達戦ってただけなんだから」

「本当に？」

「本当だよ」

「まっいっか・・よいしょ」

そう言ってミヌは二人の間に座った。そして、握り飯を二人に渡した。そして、坂上大将が言っていたことを伝えた。

「ユウ城をあんなに簡単にわたして、奴はギオンのスパイか？だって・・」

「ちょっとまて、俺がなぜギオンのスパイ？」

「このままじゃまずいわ」

「なぜ・」

悩んでいるミナムにソウシが言った。

「たしかに大体、ユウ城はとられるし、軍にも相当のダメージをだしている。そして、運悪いことにミナム殿が敵を追い返せたこと。普通これは出来ぬことだ・・」

「そ・・そんな理由で・・・」

ガクッとうなだれるミナム・・・を見たソウシ

「このままじゃまずい・・」

「あっ!!」

そう声を上げたのはミナムだった。

「な・・なによ!!急に声を上げて!!」

ミヌは驚いてミナムの方を見た。すると、ミナムの手にはあの小さな蝋燭があった。あ・・あれ・・・あのときの?――――ん?なにか少し大きいような?

「じゃじゃーん」

そう言ってミナムはその蝋燭を手にして高高と掲げた。

「それは?」

「ミナムさん・・・それって・・」

ミヌはミナムが手にしているものを指差し驚いていた、その様子にソウシを不思議に思っていた。何をミヌはそんなに驚いているんだ？

「そうこれは・・・あの大爆発をした奴の大きいやつです。」

爆発だと・・・ひょっとしてあのミドリを一瞬で全滅した奴なのかこれが？しかもこんなに小さいものがソウシがそう思っているとミナムがニコリとした。

「ミヌ・・・これここからだと届かないから、テレポートの魔法でユウ城の上まで飛ばしてくれ！！」

ミナムの言葉に少し悩んだ表情のミヌ

「しかし、私の魔法だとあそこまで雷撃は届かないです。」

「これに火をつければいいだけだ。約2秒くらいあるから、あそこまでは持つだろう。」

「それなら可能です。けど・・」

「けど・・」

困った表情をするミヌ・・・

「どうしたんだミヌ・・」

「１００％狙ったところに行くわけではないですよ。」

「なぜ？」

「自分がテレポートするわけじゃないから・・・」

「そうか・・」

一体何を話しているんだ？この二人は？ソウシは疑問に思い尋ねた

「ミナム殿。一体これから何を？」

「これをあそこで爆発させる。」

ミナムが指差した先はユウ城の本丸だった。その言葉を聞いたソウシは戸惑った。ちょっと待て、ミナムはまさかあの本丸を吹き飛ばすつもりじゃ・・

「まさか・・本丸を吹き飛ばすつもりじゃないでしょうね。」

「ソウシ殿、安心してください。いくらなんでもそこまでの破壊力はないですよ。」

ミヌはミナムが手にしているものを指差して

「けど・・・前より大きいです・・・本当に、大丈夫ですか？」

「ああ・・大丈夫だと・・・思う・・・・多分・・」

その多分ってなんですか多分って・・二人はミナムにそう突っ込みたかった。しかし、今の戦局を打開する手はほかになかった。

「ミナムさん。やりましょう。」

一方、カクサンは、ワカタケル総帥とアスケ原へ進駐している5大将軍のコウリクとチョウハに戦局を伝えていた。報告を受けたワカタケル

「そうか・・ミナムは、オスギと同じか・・・」

オスギと同じということは俺と同じか・・・しかし、なぜこうも簡単にユウ城を明け渡した？敵の戦略のミスといえばいいが、心配のし過ぎか？それとも、しかし、このままではミナムにやられる可能性が高い。やはりオスギをぶつけるか・・

「オスギを派遣準備せよ・・」

「かしこまりました。」

またアスケ原に進駐しているコウリクとチョウハはたまたま合流しているところにカクサンの伝令が来た。

「そうか・・カクサンもよくやってるな、しかし、ミナムとやらは、あのオスギと一緒とは。」

「そうだな～」

そういった瞬間だったものすごい爆発音が轟音となって彼らを襲った。

「なんだあの音は？」

今度はしばらく地面が揺れた。

「じ・・地震だ！！」

この異変に気付いた二人は、ユウ城を見て愕然とした。

「あれは？」

時間は少しさかのぼって。ミナムは、例の蝋燭のようなもの実は少し大きめの爆竹に火をつけた。

「ミヌ・・テレポート」

「はい！！」

そう言ってミヌは、テレポートの魔法を使った。そして、飛ばされた爆竹は、ユウ城の本丸を外れ
本丸がそびえる崖の中腹ぐらいに飛んでいた。

「し・・・失敗です。ミナムさん」

ミヌがそう叫んだ瞬間だった。爆竹から閃光がきらめいたと感じた瞬間、その閃光に当たりは包まれた。ミナムは慌てて盾を構えミヌとソウシをミナムの影に入れた。次の瞬間、大轟音と共に大爆発をし、きのこ雲が発生した。
その爆風は離れていたミナム達にも襲い掛かってきた。必死に絶えるミナム・・・しばらくして、爆風がやんだ。

轟音は、ユウ峠の坂上大将まで聞こえた。

「何が起こった。」

そう言って坂上大将がユウ城をみるときのこ雲が立ち上っていた。

「なんだ？あれは？」

「ミナムさん・・・何が大丈夫ですか」

ミヌに怒られるミナム・・・そんな？ここまで破壊力が・・・そう思ってソウシを見ると彼女は呆然とユウ城の方を見ていた。

「まさか・・」

そう言おうとした時、ミナムはソウシの視線の先に何があるかを見て言葉を失った。そして、ユウ城を見た全員が目の前の現実を受け止めることが出来なかった。そこには、ユウ城は跡形もなく、しかも、城が建っていた小高い山は半分が崩落し、まるで火山が噴火した後のように原型をとどめていなかった。また周囲にあった原生林はほぼ壊滅し、ところどころ火の手が上がっていた。やがて、あたり一面を雲が覆い急に雨がふった。

これがユウ城の大爆発として語られ、ミナムが起こした。爆発として、ミナムの今後の運命を変える出来事となった。。

第一報！！！

「ユウ城が大爆発しただと！！」

コウリクとチョウハの使い2名の報告に、ワカタケルは動揺していた・・・爆発だと？どういうことだ？ここではせいぜい黒色火薬しか出来ないはずでは？――――――しかも、その火薬も私がもたらしたもの、ようやくグレースも同様のものを作ったと聞いたところなのに？

「し・・しかも」

一体、何が言いたいワカタケルは思わずその使いの者を睨んだ。一瞬、言葉を詰まらせるその使いのもの

「しかも。どうした・・・」

「ユウ城は崩壊し、カクサンは戦死・・・しかも、現場へは行けない状況、数人の兵士が何とか逃げて帰って来て報告をと・・・」

「一体何があったのだ？」

この場には、ワカタケル以外に五大将軍のソンヒとグランデネスがいた。

「は・・・大爆音と共に、一瞬で建物は、その地盤と共に崩落し、跡形もなくなりました。そして、辺りを見ると瓦礫の山でした。」

そしてもう一人は、

「私は、コウリク様の陣に降りましたが。ユウ城は轟音と共に、巨大な煙に包まれ、煙はその中心から上へキノコのような形をしており、しばらくして、煙がなくなると、ユウ城の土台がこちら側へ半分崩れておりました。」

キノコ雲？そして一瞬で・・・ま・・まさか・・・ミナムとやらは核兵器を・・・いや・・・まてよ？
それともそんな魔法がこの世界で可能なのか？もしそうなら・・まずい・・これがミカドが持つ力なのか？ワカタケルがそう考えているとグランデネスが話した。

「しかし・・・カクサンが戦死とは信じがたい・・・他に何かないのか？」

「それとミナムはオスギ様と同じく、鉄砲、大筒がききません。」

「それは、速報で聞いたが真か・・」

「はい・・私めは、あのミナムが銃弾を跳ね除け・・そして、大筒を切り・・あの大筒をわれわれの方へ投げてきたのです。棒を投げるかのように。」

「何！！」

その時、ワカタケルは、ソンヒのほうを見た。ワカタケルを見て頷くソンヒ

「オスギは？」

「いつでも・・出陣可能です・・・」

「そうか・・・ソンヒよ・・・即、出陣せよ。」

ハッと一礼をして下がるソンヒ、その横でグランデネスは、

「総帥・・」

「グランでネスは、ギオン港の防衛を頼むぞ・・・」

「はっ」

「な～に～！！陥落しただと！！ミナムの奴はどうした！？ミナムは！！」

一方、京では大極殿の中をミカドの叫び声が響いた。その声にビクッとしている官僚達、いつの時代も官僚達は自分達の事、地位、給与、そして、挙句の果てに権力と名誉まだ求め自分たちは、国家の主権者達の部品であり道具であると言うことを忘れ、そして、まるで自分達が権力者であるかのように振舞っている彼らも、首がかかっている時には、消極的な行動をとる。そのようなことをすると安

全が保てませんからとか、統制がとれませんからそういう詭弁を使い、実質自分達の無能を誤魔化していた。そんな彼らも、ミカドの前では失態は出来ない。なぜなら、ミカドは簡単に官僚達を首にしたり、さらに死刑にも出来る。これが王政というか独裁国家の利点であり、欠点でもあった。そんなミカドに、ユウ城の陥落の一方は、あまりにも衝撃的な出来事であった。

「は・・・ミナム殿は、ユウ峠まで進軍した時にすでに遅く陥落したと・・」

報告をする陸軍情報担当を真っ赤な顔をして睨みつけるミカド

「貴様!!そんなことは聞きとうないわ!!死刑になりたいのか!!」

「も・・申し訳ございません。ただ・・・ミナム殿の到着は」

「もうよい!!下がれ!!」

「は・・」

情報担当は慌てて、自分の場所へ戻った。その時だったフトーがミカドに話しかけたのは、

「ミカド・・・」

「なんじゃふフトー」

「恐れながら進言いたします。ミナム殿は予定より早くユウ峠に到着しております。これは、坂上大将の戦術ミスの可能性が高いと感

じます。」

フトーは、両手を目の前で組、頭を下げた。その様子を見ていたミカド・・・こやつ一体何を考えておるのじゃ？何故ミナムの見方をするのじゃ・・・ミナムに何かあるのか？・・・しかし、こやつを置いて置かねばわしの地位も危うし・・・どうする？いっそのことミナムの事を聞いてみるか・・・

「フトーよ、何ゆえミナムの肩を持つのじゃ？」

「ミ・・・ミカド・・なんてことをおっしゃるのですか？ただ、私は事実を言ったまでで・・・」

フトーは、ミカドの質問に一度顔をあげ、すぐ話を続けた。

「それに・・」

「それに・・・なんじゃ？」

「ミナム殿なら・・・奪還も可能かと・・・」

「何を言っておるのじゃ・・・あのユウ城は、千年の間・・・グレースを守ってきたのじゃぞ。それが陥落したのじゃ・・」

「ですから・・奪還も可能かと・・・それに・・」

ミカドは、眉間にしわを寄せて、じっとフトーを見ていた。こやつ一体何を考えて折のじゃ？相変わらずくえぬ・・

「それに？」

「海から攻めるのです。」

「なぬ？海から？」

その時、隊列から一人の軍人がミカドの頭を下げ出てきて、彼は海軍大将だった。

「恐れながら申し上げます。ルーシーの投降によりわが海軍にもいささか余力がございます。また、南海が制海圏になり、ポメラの近くまで侵攻が可能となり、現在、わが軍にほぼ全精力を費やしている敵の裏を書けるかと」

「ほう」

その言葉に関心を寄せるミカド・・・そこへ陸軍大臣が出てきた

「意義あり！！！これまでもそうでしたが、ギオンの待ち伏せにあうのでは？」

陸軍大臣の言葉が終らないうちにその議場へ一人の男が駆け込み・・・ミカドの前に膝をついた。

「た・・・大変でございます・・・ユウ城が・・・ユウ城が・・・」

話を切られた陸軍大臣は怒り刀に手をかけた。

「貴様！！ここは、ミカドの御前であるぞ！！」

そう言い刀を上段に構えた。その時だった、その使者が言った言葉

に一同凍りついた。

「ユウ城が・・・大爆発と共に消滅しました。」

誤報

「何を戯言を言っておる！！」

叫び陸軍大臣は、刀を振り下ろそうとしたその時、マヤザキが叫んだ。

「待ちなさい！！」

陸軍大臣は、刀を止め、ゆっくり歩みを進めるマヤザキを睨んでいた。

「何ゆえ止める！！」

「これは、戯言ではない。」

「何！！」

マヤザキの言葉に議場はどよめいた。ユウ城がすでに消滅した・・・この衝撃は、議場の誰しもが信じることが出来なかった。このことには流石のフトーもこの情報には驚いた。

「マヤザキ殿・・・それは真か・・」

「はい・・・今しがた私にも同様の報告が入って参りました。」

「そ・・それは・・・まことか？」

ようやくミカドも声を上げることができた。

「はい・・・残念ですが・・・・」

「そ・・そうか・・」

放心状態のミカドの方をちらりと見てフトーはマヤザキに聞いた。

「で・・・戦況は？」

「確実な報告ではないのですがわが軍の損害は、死者約１００名と聞いております。しかも、これはユウ城撤退後、奪還に失敗し、退却時の損害と聞いております。」

「どういうことだ？」

「ユウ城を撤退後、城におびき寄せ、混乱に乗じて敵に損害を与え城も奪還する作戦だったようですが、途中待ち伏せを受け、やむなく撤退したようで・・しかも・・」

「しかも・・なんだ・・・」

「殿はミナム殿が勤めたそうです。」

「どういうことだ」

「殿を務めたのは、ミナム殿・ソウシと撤退途中で負傷しながらも途中でミナム殿の下へもどったミヌの３名だそうです。そして、しばらくして、大爆発が起こりユウ城は消滅したそうです。」

「と言うことはミナム殿の攻撃と言うことか・・」

「それはわかりませぬ・・・しかし、今回の出来事で敵は約８千名の兵士、それと、五大将軍の一人カクサンを失ったと聞きます。」

「それは・・・真か・・・」

「はい・・・しかし、爆発後ミナム達の消息が不明と・・・」

再び議場はどよめいき、フトーも困惑の色を隠せなかった。

「ミ・・ミナム殿が・・・消息不明・・とな」

「はい・・・ただ・・・」

「ただ・・・今は、道がない為、確認できないと・・」

フトーは、マヤザキの方とじっと見ていた。こやつ・・・本当のことを知っておるのか？・・・それとも何か隠してまいか・・・う～む・・・相変わらず・・・とミカドの方と見ると顔の満面の笑みを浮かべていた。

「まぁ～よいではないか・・ミナムのことなど。」

ミカドの声は明るかった。これで邪魔者は消えた。そうだ・・・久しぶりにミリアの所でも行こうか？

「フトー・・・余は疲れた・・・後は任す」

そういい残してミカドは大極殿をあとにした。その様子を見てあきれるフトー

「まぁ・・・仕方がない・・・しかし、これで戦局がわからなくなってきた。」

やはりあきれた表情をしているマヤザキ・・・

「フトー殿その通りです。」

「やはり海軍を動かすべきか・・皆で決議を取ろう！！」

こうして会議は終わり、グレースは、海軍にもギオン討伐の命が下った。

その頃、ユウ城へ向かう街道沿いで変わり果てた風景を見て呆然としているミナムの姿があった。

「ここまでとは・・・」

ミヌは、腕を組んで少し俯いて、しかし、声はやや怒り気味で

「嫌な予感がしてたんですけど・・・」

ミヌを見ていたソウシ――――――　一体何が起こったんだ？これがあのミドリを壊滅させた爆発なのか？

「ミナム殿・・・一体何をしたんだ？」

「ミドリにやった奴と同じことをしただけだ・・・」

ミナムの言葉にミヌが食って掛かった

「同じこと？・・・・そんなはずないですよ！！絶対！！」

「ミ・・ミヌ」

ミヌに圧倒されるミナム

「前の時の倍以上あったわ。あの蝋燭！！」

「まぁ・・まぁ・・ミヌ・・落ち着いて。」

「この状況で落ち着いてられないわよ！！どうすんのよ・・・この状況で、一体」

ミヌが指差した方を見るとユウ峠からの道は崩れ落ち、通れる状況ではなかった。

「こっちもよ！！」

今度はミヌが反対側を指差すと、ユウ城へ向かう道も完全に崩壊していた。

「空を飛ぶってどう？」

ミナムの言葉を聞いてため息を付くミヌ・・・

「あのねぇ～ユウ峠からここへ来るまでに、何人打ち落とされたと思うの？」

そう言ってミヌがユウ峠の方を指差すと、まさに上空を飛んでいた兵が打ち落とされる瞬間だった。

「どうする？」

ミナムはソウシの方を見た。その時だった。ミナム達は、自分が座っていた場所が急に崩れだした。

「えっ？」

「わ～！！！」

しばらくして気付いたミナムが上の方を見た。かなり落ちたな～

「ミヌ、ソウシ殿、大丈夫ですか。」

「なんとか・・」

「かろうじて・・」

「クオンは。」

「大丈夫・・」

そうか皆無事か・・・しかし、だいぶ落ちたな・・・これは戻るの

は至難の業だ・・どうしたものか
ミナムは、崩れた方とじっと見ていた。

誤報　2

ミナムの情報は、カーネルの元にも届いていた。

嘘よね・・・・ミナム―――私・・・・信じないから・・・・目の前にある結婚式の写真を見ていた。

その時だった。

「カーネル！！隠れるのじゃ。」

ナラ姫の言葉に思わず身を隠した私。外から声が聞こえてきた。

「本宮様、カーネル殿を引き渡していただく。」

「お主ら何を血迷うておるのじゃ。カーネルは罪人でも何でもないぞ」

「ミカドがご寵愛をと」

えっ？一体何を言ってるのよなんで私がミカドなんかと寝ないといけないの？そう思っているとナラ姫が杖で使いのものの顎を突き上げた。

「お主ら？正気か？」

「ただ・・ミカドが・・」

ナラ姫は杖を持ち上げ使いのものの顎を持ち上げた。

「たわけ者め！　ミナムはまだ行方不明なだけじゃろ、それに、仮に死んでも一年は喪に服すのが道理じゃ！！」

「し・・しかし・・」

「ミカドの伝えとけ、今は、カーネルを渡さぬと！！」

「わ・・私が・・・」

「不義密通罪でミカドも死刑になると伝えよ。」

報告を聞いたミカドは怒った

「何？渡さぬと・・」

それを横で聞いていたフトー

「ミカド・・・ナラ姫の言うとおりです。」

「う～きっとあやつを手に入れてやる！！覚えていろナラ姫！！」

一方、本宮では、ナラ姫とカーネルが話をしていた。

「大丈夫でしょうか？」

「お前は心配せず、その子のことを考えていたらよいのじゃ。」

「ミナムは？」

「多分、行方がわからないだけだと」

その頃、ミナムは落ちた崖の下で刀を立てていた。

「何をしているの？」

ミナムの行動を不振に思ったミヌが聞いてた。

「ん？これ？」

そういうとその刀はぱたりと倒れた。その方向を見て指を指した。

「よしこっちだ」

その様子を見て不審に思ったソウシが

「何をやってるんだ？」

「この方向に行こう。」

ミナムの言っていることがあまりにも唐突で意味がわからないミヌは

「ソウシ殿。なんとか言ってくださいよ。」

「まぁ。とにかく、ミナム殿のいう方向に向かいましょう。ちょうど、この方向にハン城があります。」

「ほら見ろ」

そう言ってミヌのほうを見るミナム

「単なる偶然よ」

「あっそ・・」

そんなミナム達の行動を知らなかった坂上大将にある情報が届いた。それは山口隊報告書だった。そこには、驚愕の事実が載っていた。ミナム達らしき遺体の発見とハン城が無事であった。そして、坂上大将はがある城を指差した。その城こそハン城だった。

「あの城は、まだ生きている。その城までの街道を制圧すれば、わが軍に勝利が見えたぞ！！」

こうしてハン城奪還作戦が始まった。

そして、ミナム達の遺体発見の報告は京に届いた。

うそ・・よね・・そう嘆くカーネル――――彼女を抱きしめるナラ姫の姿がそこにあった。そして、耳元でボソッと呟いた。

「ミナムはまだ生きておる。」

「えっ？」

「これは、秘密じゃぞ・・・」

大極殿では、ミカドが踊っていた。

「これで余の邪魔をする奴はいなくなったぞ。」

山口隊報告書

坂上大将の命令の元、我々山口隊は、崩壊したユウ城の方を向いて、進軍を開始した。我々の行く手には、一体何が待ち構えているか、これは神のみぞ知るところとなっている。それは、ユウ城の大爆発により、通常の街道が既に存在せず、しかも、どこに何者かが息を潜めて隠れているか我々にはまったくわからない状況であった。それは、野獣なのか？それとも何か得たいの知れないものなのか、はたまた、ギオン軍なのか？それを知るすべは我々にはなかった。そして、我々は、もっとも過酷な陸路を選ぶことにした。空路は、幾度となく偵察隊が目の前で撃墜されているのを見ている。もちろん、我々の力ではどうすることも出来ない状況だった。こうして、しかたなく我々は陸路を選んだ。行軍を進める我々、ユウ山脈の森林が我々に襲い掛かってきた。この日は突如の大雨が我々を襲う。爆発により街道はところどころ崩れ、時々の崩落に我々は備えた。そんな中で、ある崩落が我々を驚愕させた。その崩落と共に蛇の群れが我々の目の前に現れた。しかし、我わらが気付いたときには既に遅かった。我々は、既に蛇の群れに囲まれていたのだ。

我々は、必死にその群れを避けつつ、最新の注意を払い我々は進軍していった。その時だった。

「隊長！！大丈夫ですか。」

「だいじょうぶだ。」

隊長である私が、蛇にかまれてしまった。その瞬間蛇の群れは我々に対して牙をむいてきた。我々は、必死に戦った。そして、何とか、我が隊は、魔導士殿のフリーズという氷結魔法によって救われた。

やがて、我々が進軍していくと、我々の行く手を阻む大きな障害が立ちはだかった。それは、完全に崩落しきった街道であった。なんとそこは、約１マイルくらいにわたり崩落をしており、しかも我々が進もうとするとすぐに崩落をしてしまう状態であった。

しかし

その時である。

我々はあるものを発見した。

それは、少し向こうに崩落を免れた街道の一部が残っており、そこには３体の真っ黒な遺体、そして、その横には、１頭の馬が死んでいるのが遠めであるが我々に確認できた。そして、山口隊長はこういった。

「あれが、ミナム達の遺体だ！！そして、これ以上の進軍は不可能だ！！」

ここまで進んだ我々だったが、すぐに崩落する地面、そして、ユウ山脈の自然の驚異に疲労も限界に来ていた。しかたなく、我々は進むことをあきらめ、この場で、ナム殿の遺体に黙祷を捧げた。そして、隊長の英断の元、坂上大将の元へ戻ることとした。

この報告書を見たミカドは、大いに喜んだ。

「ミナムは死んだのだと・・・」

しかし、その他の者達は、呆れて何もいえなかった。そして、この報告書はカーネルの元にも届いた。

「どうじゃ？」

「どうって？」

その報告書を見てカーネルは呆れた。結局、遺体そのものを発見したわけでないし～しかもなんなの？蛇たちの群れとの格闘って、しかも、隊長さんかまれるって？これって報告の意味があるの？そう思っているとナラ姫が言った。

「とりあえず、ミナムは死んだことになった。」

カーネルは焦ったこんな報告書で死んだことになるなんてひどい・・

「本宮様」

ナラ姫は、じろりとカーネルを睨み、よそを向いてこういった。

「都合がいいではないか。ミナムが死んだこととなれば、ミカドもお前に手を出すまい。カーネルよ。悲しいふりをしろよ」

「えっ？」

「いいか？」

そう言ってナラ姫はカーネルに顔を近づけた。

「わ・・わかりました・」

こうしてミナムの訃報は京中に知れ渡った。

ハン城への道のり

「ソウシ殿、このまま、まっすぐ行けばハン城へ行けるんですな。」

ミナム達は、崩落場所から少し離れた場所で、地図を広げ相談していた。ソウシは、地図のある場所を示した。そこにはユウ城と記しあった。

「ここがユウ城、そして、ここがハン城、丁度これから向かう方向に当たります。」

「しかし、ハン城は、ギオンに取り囲まれてるのでは？」

「その通りですが、ここを見てください。」

そう言ってハン城から一本の道を示した。それをたどるとユウ峠になっていた。

「これは？」

「そうです。この街道が既に使用不能となった今この道しか我々が戻るすべはない。そして、ハン城には3番隊もいる。合流すれば何らかの策がうてるはず」

「行きましょう！！」

その時だったミヌが一言言った。

「ところで、ハン城ってギオンが取り囲んでいるんでしょ？」

「そうですが・・」

「敵陣へ突っ込んでいくわけですか？」

「たぶん。」

「たぶんって」

ミナムは少し怒り気味のミヌの肩をポンと叩いた。

「ミナムさん」

「これしか方法はない。」

「でも・・」

不安そうな顔をするミヌにミナムは笑顔で答えた。

「大丈夫・・・」

「ミナムさんのその笑顔の方がよっぽど心配です。」

「えっ？」

「ミヌ・・・それはどういう意味だ！！」

ミヌの言葉に驚いたミナムを見て、ソウシは腕を組んでうんうんと二回頷いた。

「納得！！」

「えっ～！！！ソウシ殿まで」

ミナムは動揺したどういうことだ俺が一体何をしたと言うんだ！！と叫ぼうとした時ミヌが

「さっきの大爆発・・・」

「あ・・・あれは・・だな・・」

「ほら～」

呆れた顔をするミヌにソウシが後ろから声をかけた。

「案外、敵の裏をかけるかもしれん。」

「そうかもしれませんね。」

ソウシの言葉に頷きミナムのほうを横目で見るミヌ・・・それを見たミナム・・・俺ってこんなものだったのか？とほほと思っていると

「出発しましょう。」

こうしてミナム達は、ハン城に向かった。

その頃、コウリク率いるギオン軍１万は、ハン城を奉仕して、ある人物の到着を待っていた。

「コウリク将軍、早く攻めた方がよいのでは？」

「いや・・なんと言っても、相手は黒騎士団だ。迂闊に手を出すとこちらが痛い目にあう。」

「しかし」

「待てと言うのだ。もうすぐ奴が来る。それまでこの包囲を維持せよ。」

ハン城を包囲し、総攻撃をかけるべく準備をしていたコウリクに報告が入った。

「ユウ峠に動きあり、敵約２０００がハン城へ向け進軍した模様。」

「何！！総大将は？坂上か？」

「いえ？クスーキです。」

「そうか・・・とりあえず、ユウ峠への街道へ４千の兵を向かわせろ。それと、チョウハへ連絡」

「了解しました。」

アスケが原で待機していたチョウハにすぐ連絡が入った。

「何！！敵が動いただと！！」

ふん。どうせ陽動作戦だろう。しかし、万が一のことあるな・・・
チョウハは考えた。そして、
そういえばカクサンの兵2千はいたな。よし・・・・

「クウソよ！！」

「はっ！！」

「お前に4千の兵を預ける至急にコウリクの元へ向かえ。」

「承知しました。」

「全軍に伝えよ。明日、あの方が来られたら。我が軍はハン城へ向かう。行軍準備」

「了解しました。」

一方、ユウ峠を出発したクスーキに、ギオン軍がこちらに向かっている情報を掴んだ。

「足止め岩までどの位ある？」

「あと一時間くらいです。」

「そうか・・先発隊を急がせよ」

足止め岩。ハン城に向かう途中にある小さな峠で交通の難所である。両側に岩山が競っていて、道の真ん中に大きな岩があり、道幅も狭いときている。ここをとることが今回の目的であった。

ここにギオンからハン城に向かう数人の兵隊の姿があった。その中の一人は魔導士、数人の兵隊と台車に乗せられたというより魔法で縛り付けられた人物がいた。

「大丈夫ですか・」

「う〜！！！」

「まぁ・・こんなものだろう・・」

ミナムあらわる。

クスーキ達がギオンより少し早く足止め岩に到達した。

「これで、我々の勝ちに等しい。早く大筒を持って来い。」

その時だった。クスーキの前にギオン軍が迫っていた。

「何と言うことだ！！」

「ギオン軍その数約４千！！」

「中将いかがなさいます。」

「全軍を戦闘準備！！大筒が来るまで持ちこたえるのだ！！」

ギオン軍の中では、少し遅れたことに動じていなかった。

「足止め岩を盾にしています。いかがなさいます。」

「あの中に、鉄砲を集中させろ！！こちらの兵は倍だ。」

銃弾の嵐がクスーキ隊を襲っていた。

「中将！！このままでは・・・」

その時だった。轟音と共にアスケが原で大爆発が起きた。

「な・・何事！！！」

大爆発に驚く両軍・・・そんな中、クスーキたちの基にようやく大筒が届いた。

「よくやったぞ！！ギオン軍め。見ていろ。撃ち方用意！！」

大筒が見たギオン軍の兵士は、慌てて逃げた。

「どうした！！」

「大筒です。」

「何！！」

「退却！！退却だ！！」

「撃て！！」

混乱するギオン軍に砲弾が襲ってきた。

砲弾の届かない場所まで何とか退却したギオン軍

「損害は・・・」

「約千名・・」

「しばらく、ここで待機するぞ」

一方、勝利に喜ぶクスーキ隊であった。

「間一髪でしたな。」

「ああ・・・ところで、こちらの被害は？」

「８００名くらい・・・」

「犠牲が大きすぎたな・・・」

「ええ・・」

「しかし、何故？あの爆発は起きたのだ？」

疑問に思うクスーキだった。

この戦闘が起きている最中、コウリク軍の包囲網の一角が急襲された。戦闘は、一瞬で終わり、そこを固めていた約２０００の兵は、半分になり命からがら、他の陣へ逃げてきた。そのものたちは口々に「バケモノ！！バケモノに襲われた！！」「鉄砲も利かない！！あれは、バケモノだ！！」そう叫んでいた。その報告を受けたコウリクは、バケモノだ～？いったに何があった？鉄砲もきかぬだと。まるでオスギのようだが？オスギが暴走したのか？それとも・・

「オスギ殿はどうした。」

「先程、チョウハ殿のところに着いたそうです。」

「そうか・・」

では・・・オスギではない・・・ということはグレースもオスギのような奴がいるのか？

「そいつはどんな奴だった。」

コウリクが逃げた兵士に聞くとものすごい怪力の二人と魔導士が二人で襲ってきた。その破壊力は一瞬で砲台を吹き飛ばし、気付いたら仲間が砲台自体もなくなっていた。とか・・・なんなんだ・・それは？ただ驚く、コウリク・・・それにあの爆発は？一体？

その爆発は、チョウハも確認していた。進軍準備中のチョウハ軍約８０００名は無傷だった。しかし、クウソからの連絡が途絶えていた。しばらくして、クウソから使者が来た。クウソたちは爆心から離れていたため、損害は軽微、約１００名程負傷した程度だと。

その報告を受けたチョウハは決心した。

「ハン城へ向かうぞ」

時をさかのぼること1時間、ミナム達はハン城を包囲している陣の一つから少し離れたところにいた。

「ところでどうする？」

「今から攻めるか。」

ソウシがそう言った時に、クオンが話した。

「わしも戦うぞ」

そう言ってクオンは、擬人体に変化した。しかも、美形に・・・

「これで4人か・・」

その時ミヌがあることを言った

「何か混乱でも起きれば・・・」

その言葉にミナムはあることを気付いて、ポケットからあるものを出した。そう爆竹を・・

「これを使うか？最期の一つだ」

それを見て驚くミヌは声を揚げそうになった。

「え・・んんぐぐぐ」

慌て口を押さえるミナム、その光景を見てソウシが

「それは、破壊力が大きすぎる・・ここで使えばユウ城の二の舞に・・」

ミナムは笑顔でアスケが原を指差し、

「あそこで大爆発を起こす！！」

「そんなことしても無駄でしょ！！」

そういうミヌを制して、ソウシがいった。

「それは名案かも・・」

こうして、あの大爆発が起きた。そして、ミナム達はハン城に入った。

ミナム・・ハン城にあらわる。その報告が坂上大将の元に届いた。

ハン城にて

ミナムあらわる！！この衝撃の報告は、京にまで轟いた。その報告を聞いたミカドは大極殿でマヤザキとフトーの前でぶちきれていた。

「なんで、生きてるのじゃ！！死んだのではなかったのか？くそっ！！！」

そう言って、近くのものに当り散らすミカド、思わず近くの椅子を蹴って、その場にうずくまっていた

「あう・・・っつ・・」

その光景を見て、笑うに笑えないマヤザキとフトーは次の言葉に呆れた。

「あのカーネルも手にはいらんではないか。」

この程度の男かやつは・・・・マヤザキがそう思っているとミカドが振り返り

「そうじゃ、報告書を書いた山口を処刑せよ。余を混乱させた罪じゃ」

このような捨て台詞を吐いて、ミカドは大極殿を後にした。しかし、実際には、山口は処刑されず戦場にある死体の者の首を差出し、山口と言う人物は死んだことになった。

一方、ハン城に入ったミナム達、城内の様子を見て驚いた。そこに

は、黒騎士団３０名と約３００名の兵士しかいなかった。ソウシを見つけたヒョウドウが駆け寄ってきた。

「ソウシ様！！」

「ヒョウドウか・・・大丈夫か・・」

「ええ・・まぁ・・この有様です。」

そう言って、俯くヒョウドウの肩をポンと叩くソウシ

「ヒョウドウ・・・よくやった。」

その言葉に、ソウシをキッと睨むヒョウドウ

「どこがですか？ハン城は囲まれ。ユウ城は消滅して、これからどうしろと・・・」

確かのヒョウドウの言うとおりだった。ハン城の包囲網は、ミナム達が突破した一部を除いて未だに健在、特に、ユウ峠までの街道も既に敵に落ちている。この状態で篭城して、今まで何とか保っていたのもユウ城が健在だったからだった。それがない今。どうやって戦えと言うのだ？そんな会話が黒騎士団からもあがっていた。

「どうする？」

「まず、退路の確保が先決でしょう。」

そうやって、なんのためらいもなく言い放つミナムにヒョウドウは、叫んだ。

「一体どうやって？ここの兵を少しでも動かすとこの城自体が危なくなる。」

「俺達で、やってやるさ。」

そう言って、自分を指差したミナムは、ミヌ、ソウシ、そして、クオンと目を合わせた。

「そ・・・ソウシ様・・・そんな無茶な！！」

「1個師団くらいだったら俺達4人で何とかなる。」

「ソ・・ソウシ様まで・・・」

ソウシの一言に、驚く黒騎士団の姿があった。

「し・・しかしですな・・・」

止めようとするヒョウドウを見て、ソウシは

「兵糧は後どのくらいだ？」

「あと10日くらいがいいところでしょう。」

その時だった。2人の兵士が駆け込んできた。

「ヒョウドウ様、申し上げます。」

「何事じゃ。」

「ギオン軍、約４千がこちらに向かっておるとのことです。」

「それで？」

「５日後には、包囲網まで・・」

険しい顔になるヒョウドウ・・これまでか？そう思っているともう一人の兵士が叫んだ。

「申し上げます！！」

「もうよい！！」

「ギオン軍とクスーキ隊が足止め岩で交戦！！ギオン軍を撃退しました。」

「何！！詳しくも申せ！」

「はっ・・・ギオン軍４千が足止め岩まで進軍、そこでクスーキ隊と交戦、約千名を失い撤退したとのことです。」

ハン城にて　2

ミナムは、ソウシの顔を見た。しばらくして頷いたソウシはこう言った

「今がチャンスだ」

「これでも使う？」

そう言ってミナムは、あるものをソウシの目の前に出した。その出てきた小さな蝋燭を見て、ソウシは目が点になっていた。

「！！」

「ソウシ殿、どうされた。」

その声に驚くヒョウドウ、そこへ、ミナムの頭をパチっと叩くミヌ

「まだあったんですか？」

「これが最後だ。」

「そ・・それは使わないでおこう・・」

ソウシの狼狽振りに驚いているヒョウドウ達・・・

「ミナム殿・・それは？」

「爆竹って・・・ん・・・むぐ・・・」

ミナムの口を押さえたミヌが、

「なんでもないです・・・ところでどうします。これから?」

「んんーーーー!!!」

「そうだな・・」

そう言って考え込むソウシ・・・

「んんーーー!!!」

もがいているミナムを見て、ミヌが語りかけた。

「言わないでよ・・・このこと・・・」

「んんーーーーー!!」

頷くミナム・・・・そして、それを見たミヌがようやく手を離した。

「はぁーーー」

ミナムは大きくため息を付き自分をを見る一同に向かって言った。

「俺が飛んで、敵の陣を上空から攻撃する。」

「・・・・」

ミナムを見て、固まる一同・・・言っている意味がわからん?・・・

大丈夫か？本当に？・・・こ・・この人が本当にあの英雄ミナム殿か？そう首を傾げたくなるほどだった。

「俺とミヌがまず上空からこの街道側にある敵陣へ飛び降りるから・・・その後、ソウシ殿、クオンが陸から攻撃をかけてくれ。」

「えっーーー私がですか？」

驚くミヌの頭をなでるミナム

「着陸地点の調整を誰がするんだ？」

頭をなでられていることに嬉しくなって俯くミヌ

「わかりました。」

その様子を見て少しムッとしているソウシは、ミナムの頭にポンと刀を当てた。

「で・・俺はどうしたいいのだ？」

「着陸時に少し振動と衝撃があると思うからその隙に一気に攻撃をかけてくれ。」

「わかった。」

ソウシとクオンは、頷いた。その様子を見て、呆れている黒騎士団達・・・ソウシ殿ってあんな感じだったかな？そう思っているうちの一人ヒョウドウがソウシに聞いた。

「ソウシ様・・・本当に大丈夫ですか。」

「まぁ・・見てろ・・・」

「じゃぁ・・・一時間後に。」

あれから1時間が過ぎた。ミナム達の姿は、ハン城の中にはあった。そこには黒騎士団達もいた。そんな中、ミナム達に報告が入ってきた。

「ミナム殿が崩された陣地は、復旧されておりません。それと・・・」

「それと・・なんだ。」

「足止め岩で敗走したギオン軍が街道の陣へ集結、その数、約三千・・」

「と言うことは、陣内の兵とあわせると約四千もいまずぞ。ソウシ殿、これは、いくらなんでも無謀すぎる」

そう言って、ソウシに進言したのは、ヒョウドウだった。そのヒョウドウを見て、肩をポンと叩いたソウシ

「それでは、予定通り、後方の陣への囮を頼む。」

「ソウシ様!!! いくらなんでも。」

「まぁ・・見とけ・・・ミナム殿!! 頼んだぞ。」

「それでは予定通りお願いします。俺は１０分後には、敵陣へ着陸します。」

「わかった。」

こうして、戦いは始まった。

ミナム再び飛ぶ！！

「将軍！！ハン城に動きが！！」

コウリクの元に第一報が入ってきた。コウリクは、ユウ峠へ通ずる街道沿いの出城の一つカイン城に陣をおいていた。本来であれば、この街道を進み、足止め岩を超えれば、ユウ城、最後の関門、ユウ峠の関、そこを突破すれば、グレースに進入できる。これまで坂上の前にユウ城はなかなか落ちなかった。そして、出城を一つずつ攻略し、ここまでやってきた。しかし、ユウ城陥落寸前にカクサンともども八千名の兵を失い、足止め岩では敗北、その知らせはコウリクを焦らせた。そのときに入ってきた報告がハン城に動きがありだった。

「それで？」

「ミナム達に破壊された陣の方へ出陣を確認」

「すぐに」

「そ・・それが・・」

「どうした？」

「すぐに撤退したそうです。」

その報告に首をかしげるコウリク、そこへ参謀の一人であるトンイが話し始めた。

「単なる時間稼ぎじゃ・・・・」

「報告によりますと、その時、何か飛び出したらしい。」

「飛び出したって？」

「は・・城の中から何か飛び出したように見えたそうです。」

「どういうこでだ？」

少し前、ミナムは、準備済ませた。その姿は左手に盾を持ち背中にミヌを背負っていた。

「ミナム殿、頼みましたぞ」

「まかしておけ」

その光景を見て、首をかしげるヒョウドウ。一体何が始まるんだ？

「ミナム殿？これは？」

「今から飛ぶから」

「飛ぶって？どうやって」

「まぁ・・見ててください。ところで、ヒョウドウ殿の方は、大丈夫か？」

「それは・・任せてください。」

この光景を見ていたソウシは、ミナムの肩を叩いた。

「ミナム殿・・・」

とミナムを見つめていると知らず知らずミナムに近づいていた。すっとこの間の光景がよみがえる。左手に持っていた盾を少し持ち上げた時、ミナムはソウシの方を振り向いた。そして、ミヌがよそを向いた隙に、盾に隠れてミナムにさっとキスをした。

「ご武運を・・・」

ソウシは、そう言ってポンとミナムの肩を叩いた。

「ソウシ殿も、頼みましたよ。」

「任せておけ」

「クオンもな」

「おう」

「では、行きます!!」

そう言って、ミナムは、ジャンプした。それは、一瞬の出来事だった。ミナムは先程の言葉を残し、目の前から消えた。少なくともヒョウドウ達には、そう見えた。

「み・・ミナム殿は？」

「あそこだ。」

ソウシが指差す方を見たヒョウドウの目には、小さな点がかすかに見えた。

「ま・・まさか・・・・一瞬で・・・あそこまで」

「そうだ・・・じゃ・・俺達の出番だ。思う存分暴れてやる。」

カイン城のコウリクには、次々と戦況が入ってきていた。

「ハン城部隊がすぐに撤退」

「追撃せよ。」

「将軍、ユウ街道に向け、敵が進軍」

「直ちに、反撃せよ・・」

「そ・・・それが・・・・」

「それがどうした？」

「敵は、たったの2名・・」

「はぁ・・・血迷ったのか？」

「申し上げます。前衛の一部が先程の2名によって壊滅。」

な・・なに？一体どういうことだ？何が起きているのだ？嫌な胸騒ぎがする・・ユウ街道の陣は、ユウ峠側とハン城と道が交わる場所の少し山側に位置している。カイン城から増援をだすまでも・・そう思った時、驚愕の一方が入ってきた。

「将軍！！ユウ街道の陣が・・・陣が・・・」

「陣がどうした？」

「陥落しました。」

「えっ？どういうことだ。？」

それは、一瞬の出来事だった。ユウ街道の陣の防空魔導士達が、空を見た瞬間、はるか上空から強烈な衝波が降り注いできた。そして、ドスンと大きな地響きと共にゆれと衝撃波が陣の中央から発生した。衝撃波が炸裂し陣地内にいる兵士たちに襲い掛かった瞬間、その中心から幾多の衝波が陣地内を駆け巡り、ユウ街道の陣は崩壊した。慌てて逃げ出す兵士たちだったが。次の瞬間、ハン城側から攻撃を受けた。生存者はカイン城へ逃げ伸びた兵は半分の約二千名にも満たなかった。

「い・・一瞬で二千もの兵を失っただと・・・」

ま・・・まずい・・・コウリクは、嫌な予感がした。そして、

「すぐにすべての陣を引き払い、カイン城に軍勢を集結させよ。」

「待ってくだされ・・・包囲網は、ほぼ完璧です。逆に今総攻撃をすれば、勝てましょうぞ。」

「いや、将軍のおっしゃるとおりです。彼らの戦力は未知数です。たった2名で前衛千名を負かしたのを考えると、各陣の戦力は、約二千名、しかも一番戦力があったユウ街道の陣は、この二名と何者かによって、陥落してます。今、逆に個別攻撃をされては、損害が大きくなるばかりです。」

コウリクはため息を付いた。

「そうだな・・・全軍に撤退命令を速やかに、カイン城に集結せよ」

膠着した前線

ミナム達がユウ街道の陣を抑えて、３ヶ月になる。ハン城包囲網は解かれ、ギオン軍は、カイン城にその軍を集結しつつあった。
その状況を聞いたミナムは、敵軍の数は約１万５千・・・今だったら。勝てるかも？だったら早く終らせたい、そう思っていた。
しかし、ミナム達だけでは、約１万５千の軍勢はあまりにも多く、そして、この間と同じ手は既に使えないこともわかっていた。
そのためにも早く、ミナムがつれてきた軍２千と坂上大将率いる本隊の到着が待たれた。

その頃、坂上大将は、やむにやまれぬ事情があって、軍を動かせないでいたミナムをこれ以上英雄にするなと言うミカドの命令が届いていたからだった。
大将としても今、進軍するのが正しい、しかし、しかしだ、ミカドの命令では、全く動くことが出来ない。どうしたものか

しかし、以外にもミナム達がギオン軍を蹴散らした話は、京ではあまり知られていなかった。どちらかと言うとクスーキの足止め岩の決戦で、
ギオンを負かせた方が話題となっていた。

「マヤザキ殿」

フトーの言葉に足を止めたマヤザキ、振りあけるとそこにはフトーがにやりとして立っていた。

「ミカドは？」

「機嫌が悪い・・・ミナムがあまりにも目立ちすぎておる。」

「どういたしますか？」

「別に・・」

そう言って、にやりと笑うフトー・・・

「ミナムは？」

「ほっておけ！！今は、奴の力が必要な時期じゃ。使えるうちはとことん使わせてもらうさ」

フトーの言葉に納得するマヤザキ・・・・

「同感ですな・・・では・・」

「そう・・・クスーキを今回英雄扱いで、話をながそう・・」

「そうじゃな・・」

一方、カイン城に着いたチョウハは、軍の状態を見て驚いていた。なんということだ。

そこには、本隊の八千の兵以外は、戦力になりそうになかった。そして、あのユウ城が全く跡形もいけている。

そんな様子を見ていたチョウハにコウリクが後ろから話しかけた。

「わかるだろう俺が動かない理由・・・」

「ああ・・・」

呆然とその状態をみて、気力なく返事をするチョウハに、両手を挙げ左右に首を振ってコウリクはこういった。

「お手上げだよ。どうやって攻めればいいかもわからん。」

「お前らしくないな・・・やはりミナムか・・・」

「多分・・・」

「どんなやつだ？」

「それがはっきりしない。とりあえずごく普通の奴らしい、ただとてつもない力持ちだそうだ。それに・・・」

「それになんだ？」

「奴には、銃も大筒も・・・そして、衝波も効かない・・・」

コウリクの言葉を聞いたチョウハは、怪訝な顔をした。そして、こういった。

「まるで・・・・オスギと同じだな・・」

「ああ・・それだけじゃないんだ」

コウリクのため息交じりの言葉に流石のチョウハもしばらく言葉が出なかった。

「まだ・・何かあるのか。」

「ああ・・・ミナムの周りにあと3名一人は、ソウシ・・・一人は多分魔導士のミヌ・・・そして、もう一人、ミナムとほぼ同じくらい力がある奴がいる。」

チョウハはしばらく考えた。それって？ミナムが2人いる？

「ま・・・まさか、ミナムが2人もいるはずないよな・・・」

「そんなことはない。」

「ただ、オスギとその魔導士だけだとまずいような。」

「オリニティを呼ぶようにした。それと決戦時は俺も戦闘に立つことにした。」

「コウリクよ。いくらなんでも、せめて4対4にしないと・・・ところでオスギは」

「もうすぐ到着予定だ。」

「そうか、後は、トリニティ殿を待つだけか。」

オスギ　1

俺を俺を殺してくれ・・・

目の前で引き裂かれていく人々・・・や・・やめてくれ・・・もう・・・しかし、奴らは俺に向かって襲ってきた。そして、その手を振りほどいた時、その人は、壁にぶち当りその形を失っていた。・・・う・・・うそだ・・この手は？俺の手？一体何をしているんだ？俺は・・・辺りを見ると血の池がそこには無数の無残な遺体があった。

「うわ～！！！」

バッと起き上がろうとするがいつものように体が自由に動かない。俺はあたりを回すといつもの光景と違っているのに気がついた。ここは？どこだ？辺りを見ると俺の魔導士ポムがいた・・・彼女は、そうだ、俺は、体が不自由なはず、いつもこの台車がないと移動できない。そうだあれは夢だ・・・きっと・・俺は、そう思いたい・・・

「大丈夫ですか？うなされていたようですが・・・」

「あ・・ポムか・・・大丈夫だ・・ありがとう。ところでここは？」

「ワカタケル総帥の命令で、カイン城に向かっております。」

「そうでしたか。ポムは。これから戦闘か。」

「はい・・」

そういうと台車は再び動き出した。そして、オスギは過去のことを思い出していた。ある村の真ん中で目を覚ますと裸は体に何も付けていない状態、要するに全裸た。しかも、俺は過去の記憶を全くなかった。そして、周りにいた屈強そうな衛兵を見て、素っ裸の俺には全く勝ち目はないと思い仕方なくつかまった。総統に助けられるまでは・・しかし、いつも悪夢にうなされる俺、気付くといつも台車の上で、身動きが取れない。そう立って歩くことすら出来ないのだ。そんな俺をいつも助けてくれるのは魔導士のポムだ。俺の全ての世話をしてくれる彼女に俺は身も心もあずけている。しかし、ポムもギオンの兵士として、俺を食わせるために必死に戦ってくれる。この身動きが取れないこの体が憎い。だから、いつかポムを助けたいと思っている。そう思っていると俺の目の前が再び白くなってきた。

俺が目を覚ました時には戦闘が終っていた。辺りを見回すと死体の山が散乱していた。

「終ったのですか。」

「ええ・・」

「ありがとうな・・・いつも」

俺がじっとポムを見つめるとポムはニコリと微笑んだ。

一方、ここ数日、ハン城の偵察隊が戻ってこないことが気になるミナム・ソウシそして、ヒョウドウの3人はハン城で待機していたミナム達に、偵察隊が壊滅との報告が入っていた。その報告にヒョウドウとソウシは青ざめた。黒騎士団の一人、シバーンが死んだ。偵

察隊隊長として任務中に彼が死亡した。しかも、その遺体は無残な姿だった。無言で帰ってきた遺体を見て、さらに驚くソウシ、ヒョウドウ、そして、黒騎士団達・・・

「だ・・・だれが・・」

「こんなことって・・」

そうシバーンの体は、無残にも引き裂かれていたのだった。その遺体を見てじっと涙をこらえるソウシ・・・そこへミナム達がやって来た。ミナムを見つけたソウシは、思わずその場から逃げた。

「あ・・ソウシ殿・・どこへ・・」

そういうクオンの肩を押さえ、無言で顔を左右に振るミナム、そんなミナムの、手を引いたミヌとしては行ってほしくなかった。しかし、ミヌが耳元でこうささやいた。

「ミナムさん・・行ってあげてください。」

「ミヌ・・・」

「悔しいけれど・・今、ミナムさんが行かないと・・・」

そう言って涙目を隠すように、ミナムに背中を向けた。

「早く・・」

「わかった。」

ミナムは、ソウシを追いかけた。ソウシは自分の部屋で俯き机に両手を突いて涙していた。シバーン・・すまぬ・・・シバーンは3番隊では、一番若手だった。これから・・・と言うときに、そう思っていると後ろに人の気配を感じた。

「入ってくるな！！」

「ソウシ殿」

ミナムの声に驚くソウシ、来てくれた・・・そう思うと自分の泣き顔を見せたくない。

「ミ・・・ミナム殿・・・来ないでください。」

叫び声をあげるソウシにミナムはそっと近づいた。そして、ポンとソウシの肩を叩いた。ビクッとしたソウシだが振り向き涙目のままミナムを見つめ、俯きながらミナムの体しがみつき泣き崩れた。

それは、数時間前のことだった。

「フッゥーーー！！」

そんな声と共に偵察隊の前に突如、一人の男が現れた。

「何奴！！」

そう言って身構える偵察隊１０名、次の瞬間、その男は目の前から消えた。

「何！！」

次の瞬間、シバーンの前にいた5人の体がバラバラになって吹き飛んだ。

「くそ」

その姿を何とか見つけたシバーンは、剣をかまえ、そいつに切りかかった。

「フッゥーーー！！」

なんとその男は、刀を素手で受け止めた。

「何！！」

そう声を上げた時にはみぞおちに衝撃が走り吹き飛ばされるシバーン

「ぐはっ！！」

壁に叩きつけられたが何とか立ち上がったら、目の前にそいつが立っていた。シバーンは渾身の力を込め衝波を放ち、その男に直撃した。

「やったか？」

しかし、衝波が直撃したはずのそいつは、無傷で立っていた。

「くそ・・・これまでか・・」

「フォッウーーー！！」

オスギ2

俺のせいで・・・シバーンは死んだ・・・そう追い詰めるソウシの姿がそこにあった。俺が奴を任命したばかりに――――後悔するソウシは、まだミナムの腕の中で泣いていた。

「お・・・おれが・・・」

その言葉にミナムは、ソウシの両肩を持って、俯きながらなくソウシの顔を自分の方へ向けた。

「ソウシ殿!!」

「えっ・・」

涙目でぼんやりと見えるミナムの顔、彼の視線が痛い・・・けど・・・

「ソウシ殿!!しっかりしなさい・・」

「お・・俺のせいだ・・・」

再び俯き、膝を落とし、泣き崩れていくソウシ・・・・

「俺が・・・俺が・・・」

「ソウシ殿!!!」

首を左右に振り、ミナムの胸を叩き逃げ出そうとするソウシ・・・

「俺のせいだ～！！！俺のせいで・・・シバーンは・・・んんっ？」
突如、唇を奪われたソウシ・・・ミナムがキスをしていた。しばらく、固まるソウシ・・・やがて、唇が離れミナムを見つめるソウシ・・・
「な・・なぜ・・・」
そう言い残しふっと気を失った。

ソウシを寝かせたミナムはそっと部屋を出た。そこにはミヌが俯いて立っていた。
「ミヌ・・」
その声を聞いて、ミヌはミナムに抱きついた。
「た・・・確かに・・ソウシさんのところに行くように言いました。けど・・けど・・・」
ミナムは、そっとミヌの頭をなでた――――その時、顔をあげたミヌ、目には涙を浮かべミナムをしばらく見つめていた。視線をそらしたミナム、胸をドンと叩かれた。
「い・・・何時まで待てばいいのです？私も第2婦人なんですよ。それとも・・・それとも抱いて下さい――――そう言わないといけないのですか。」

「そんなこと・・・」

「じゃあ・・・何故、ソウシさんにキスしたの？」

「えっ？」

ミヌの言葉にしばらく固まるミナム、み・・見られてたのか・・・

「ミヌ・・・お前・・・」

「私が入って行ったのにも気付かないで、」

ミヌは、再びミナムの胸を叩いた。悔しい・・・私ここにいるのに・・・そう思っている時だった。思いっきり抱きしめられたミヌ――体をミナムに預けた。しかし、耳に入った言葉は

「ごめん・・・・」

悲しみが止まらない・・・私じゃなくて、なぜ？ソウシさんなの？そう思っているとミナムの腕の力が少しずつ抜けてきて体から離れた時、ミナムの体をドンと押して、ミヌは去って行った。

「ばか・・・」

その頃目を覚ましたオスギ・・・・また嫌な夢を見てしまった。俺の意思とは無関係に動く俺の体は一瞬で、目の前の人間がその形を

失っていった。台車の上で頭を抱えていると目の前にはポムがいた。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・大丈夫だ」

そう言ったとたん俺の唇は、ポムのと重なっていた。そして、俺の顔をみたポムは、上に乗り抱きしめてきた

「私の中で・・・休んでください。」

俺はいつものようにポムに甘えることにした。

目を覚ますとソウシはベットの中にいた。辺りを見回すと既に朝になっていることに気付いた。俺は・・・どうしたんだ？と昨日のことを思い出すと、ミナムにキスされたことを思い出し顔が熱くなった。なぜ・・・あんなことを？逆にミナムからキスしてもらったことに嬉しくなる俺思わず唇をそっと触った。初めての時は偶然――――あとは俺から戦場で武運をと言うことでキスをしてきた。ミナムはただ俺のことを受け止めてくれていたのか、この世界では、これがしきたりと思ってくれいたのかわからない。ただあの時は無性にミナムにキスがしたくなったのは事実、そして俺はミナムのことが好きだとあの時気付いた。しかし・・・ミナムにはカーネルがそう思いながらベットから何とか起き上がった。

し・・・しかし、どんな顔をすればいいんだ？・・・と・・とりあえず、ロビーへ向かった。ロビーへ近づくとミナム達の声がしてきた。

「俺が偵察隊に加わるよ。」

「ミ・・ミナム殿・・・お気持ちはわかりますがリスクが大きすぎます。」

「しかし・・だなぁ・・」

ミナムは話を途中で止めた。それは視界にソウシが入ってきたからだった。ミナムをチラッと見て

ソウシは、ミナム達のほうへ近づいて、こう言った。

「私も行こう。」

「ソウシ殿・・大丈夫ですか」

「まぁ・・・」

ソウシはミナムの顔を直視できないままでいた。

「俺も偵察隊に加わる。」

「ソウシ様まで・・」

ソウシの言葉に呆れるヒョウドウは、肩をすくめ・・

「ま・・・いいでしょう・・」

「ところでミヌ殿は？」

そう言ってミナムを見つめるソウシ、ミナムも頭をかきつつ

「そういえば、クオンも見ないな・・・」

オスギ3

勝手に城を抜け出そうするミヌを見つけたクオンが声をかけた

「ミヌさん・・どこ行くの？」

ヤッバ～イとしばらくじっと固まったミヌが振り返るとそこにはクオンが立っていた。

「クオン・・・べ・・別に・・」

「ほんまでっか？」

「クオン、あのねぇ～」

クオンの言葉に呆れるミヌ、

「で・・どこ行くん？」

「クオンには関係ないでしょう。」

そういってミヌは、城を抜け出し、近くに泉を見つけ、しばらく、水面を見ていた。そして、石を投げた。ちゃぽんと言う音とともにゆれる水面、ふとそこに自分の顔を見ていた。な・・・泣くな・・・私！！！そう思って、思いっきり水面に映る自分の顔に向け石を投げつけた。ばちゃんと大きく水面が跳ね上がった時、

「何してるんでっか？」

クオンのその声に驚き、顔を慌てて拭ったミヌ、

「くおん。何しに来たの？」
「ひょっとして、泣いてはったん？」
そう言ってクオンがミヌの目を指差した。それに少し後ずさりする
ミヌ・・・・・
「な・・・泣いてなんか・・・・」
ミヌがそう言おうとした時だった。
「フッゥーーー！！」
不気味な声が響いた。
「な・・何」
顔を見合す二人・・・・
「フッゥーーー！！」
さっきより声が大きくなり。ザッ！！ザッ！！と物音がして茂みが
揺れているのがわかった。
「来るわよ。」
「そやね・・」

「フォーーーーッゥーーー！！」

その雄たけびと共に身構える二人に現れて奴、

「えっ」

それは一瞬の出来事だった。

どす・・・鈍い痛みがミヌに走った。声も出せずうずくまるミヌ・・・

その光景を見て、奴は表情を変えた。

「フッゥーーー！！」

そう叫んで、ミヌを蹴ろうとした時、クオンがそいつを後ろから蹴った。

「なにしまんねん」

クオンの蹴りを受け止めたそいつ

「フッゥーーー！！」

「な・・なに・・」

慌てて蹴り直すクオン、そいつもクオンの蹴りに驚いていた。その

時だった。

「クオン！！！」

そう叫んでミヌが放った衝波が奴に直撃した・・・慌てて衝波をよけたクオンは、ミヌの横に立った。

「やったか・・」

そう言い残してミヌは倒れこんだ。

「ミヌ！！！」

ミヌを抱きかかえたクオン背中に奴の気配がした。

「フッゥーーー！！」

「くそ！！」

クオンは空波を打って、上空へ逃げた。

「ここまでは・・」

ふと横を見ると奴がいた。空中で奴の拳をよけると奴はそのまま落ちていった。

「えっ？」

それを見て慌ててハン城へ逃げ込んだクオン・・・

ミナムとミヌ

上空からいきなり飛び込んできたクオンとミヌに城内は騒然となった。

「一体何があった？」

「ミナム殿すまん。」

そう謝るクオン、その腕の中には、傷ついたミヌの姿があった。

「ミヌ！！」

ミナムの叫び声に意識を戻したミヌ

「ごめんなさい・・・わ・・た・・し・」

「もう話すな。」

そう言って、クオンからミヌを受け取ったミナム、慌てて部屋に連れて行った。そして、黒騎士団の医師がミヌを見ていた。ミヌの横にじっと待っているミナム・・・

「どうですか・・」

「まぁ・・・打撲ですが・・・少々、やられすぎで・・・」

そう言って、ぶらりとしている左手をさした。

「よく、持ちましたよ。あのシバーンがやられた相手だ。体が残っているだけでも不思議だ。」

「先生・・」

「ところで席をはずしてもらえないだろうか」

「えっ？」

「今から魔法で治療をしますので、下がっていただけぬか。」

「はい・・・ミヌを頼みます。」

そう言ってミナムが部屋を出ようとした時、医師が振り返り

「ソウシ様にお伝えください。今から治療しますので来て下さいと」

「わかりました。」

部屋を後にしたミナムは、ソウシを呼んだ。ソウシはミナムの肩を叩いて、

「後は任せろ。」

そう言って、数名の黒騎士達と部屋に入って行った。パタンと閉じたドア・・・ミナムはじっとその扉を見つめた。その向こうにミヌがいる。俺がもう少し優しくしていれば――――後悔が押し寄せてきた。そして、壁に背中をつけ、ミヌ・・・こめん・・そう心で呟いて徐々にへたり込んだ。しばらく、床をじっと見つめていると影がミナムを覆った。顔をあげるとそこにはクオンが立っていた。

「ミナム殿・・・すみませんでした。」
そう言って目の前で泣き崩れるクオンに
「クオンお前はよくやったよ。」
「し・・しかし・・」
その時、扉が開いた。そして、ソウシが一言
「山は越えた。」

だっと立ち上がりミヌが寝るベットへ駆け込むミナムの目には、眠っているミヌの姿があった。

「ミヌ・・・ごめん」

その光景を見て、ソウシは胸が苦しかった。俺は何も言うことができない。すっとその場を抜けた。
一人部屋で窓から少し差し込む光の線を見つめるソウシの姿がそこにあった。ふと思い出すミヌが無事だと知ったときのミナムの笑顔・・・それに比べ俺は、何浮かれていたんだ・・・そう思うとため息しか出ない。そんな時だった。

「ソウシ様」
「なんだ」

「敵がわかりました。すぐに来て下さい。」

「わかった。」

ソウシがミヌの部屋の前を通るとミナムは、ミヌ横でじっと看病をしていた。

「ミナム様はいかがいたしましょうか。」

「まぁ・・いい・・・」

こうしてソウシは、ロビーに向かった。

ミナムは、ミヌの顔をじっと見ていた。青あざが所々あったがこれは数日で消える医者から聞いていた。ただ、眠っているミヌを見るミナム、ミヌごめんな・・この言葉を・・・心の中で呟いた・・・

その頃、ロビーでは、奴の正体がわかったと報告が入ってきていた。

「奴の名は、オスギ、正体不明、ただ記録によりますと、怪力の持ち主だそうです。」

「怪力だと？どういうことだ？」

その言葉に全く納得が出来ないソウシ、怪力を売りにする奴はこの世には五万といる何故怪力？ソウシの鋭い目が報告をしているもの

にむけられた。ビクッとなって慌てて資料をめくる報告者

「えっ～と、資料によりますと、ある日全裸で現れた奴を、衛兵が捕らえようとした時、衛兵が数人吹き飛ばされています。」

「その位、いくらでもいるだろう」

「それに、」

「それに？魔封じの手錠も効かなかったそうです。」

その言葉に驚くソウシ、魔封じの手錠、正確には、背中に両手を回してその親指の付け根に取り付ける手錠のことで、怪力と呼ばれる兵達もこれは、はずすことが出来なかった。

「どういうことだ。」

「はい。手錠をかけたところ、意図も簡単に手錠をちぎったそうです。」

「そうか・・・」

翌朝になって、目を覚ましたミヌ・・・目の前にはベットに頭をうつ伏せにして寝ているミナムの姿があった。ミナムも目を覚まして、目を開けているミヌの頭を優しくなでた。

「大丈夫？」

「うん・・・ミナムさん・・ごめんなさい。」

「俺の方こそ・・・ごめん・・・」

「いえ・・・カーネルさんもいるのに・・・私こそ、わがまま言って・・・んんっ？」

ミヌは目を見開いたミナムが唇をふさいだからだった。しばらくして、唇が離れて、目から涙が出そうになるミヌは、必死にこらえた。

「俺こそ、すまなかった。お前も大事なパートナーなんだから。」

う・・嬉しいそう思ったミヌは、涙をこぼした。その涙を手で拭いたミナムは、再びミヌにキスをした。

そんな時、カイン城には、ようやくオスギが入城していた。そして、ポムがチョウハと話をしていた。

「やけに遅かったではないか。」

「少々、実戦から離れてましたゆえ、肩慣らしをしてまいった。」

「それでどうだった。」

「黒騎士団はたいしたことないようでしたが・・」

「が？」

「途中、オスギ様と互角に戦うやからがおりまして。」

「ほう?そのようなものがいたのか・」

「ええ・・・魔導士と一緒におりましたので取り逃がしました。」

「それほどか・・・で次はどうか。」

「魔導士を痛めつけました故、次は倒せるかと。」

ポムは笑みを浮かべていた。

出陣前夜

ハン城とカイン城の睨み合いは、3ヶ月に及んだ。この間カイン城には、トリニティも到着し、出陣が可能な状態となっていた。しかし、前に起こったユウ城の大爆発とユウ街道の陣へのミナム達の突撃により、兵力の3分の1を失った。コウリクとチョウハは、新たな戦力であるトリニティとオスギを向かえ、出陣準備をしていた。

「トリニティ殿がかなり遅れましたな。」

カイン城に入ってくるトリニティを先頭に30名の黒騎士達を天守閣からみているコウリクは、不安げに言った。その言葉に、チョウハもため息交じりに

「やっと着いたと言う感じですよ。本当に・・・」

「いつグレース軍が動くかで、この数ヶ月ひやひやもんだったよ。」

「確かに・・・」

「ところで、トリニティ殿は、何故遅れたのか?」

「怪我とか・・」

「怪我だと・・・」

「ダイズ沖海戦で怪我をしたとか。」

「そうか・・とりあえず、戦力はこれで補充できたな。」

「まぁ・・・オスギとトリニティ率いる黒騎士団2番隊・・・ハン城には、ミナムとソウシ率いる黒騎士団3番隊・・か」

「戦力的には、我が方の兵士を考えると奴らが進軍しなかったことで、やっとこちらに勝機ができましたぞ。」

「そうだな・・・」

ハン城では、驚きの声が上がっていた。

「ミ・・・ミナム殿・・・今なんとおっしゃいました。」

「明日、俺が先頭で出陣する。いいな・・・ミヌ・・クオン」

「はい・・」

ミナムの言葉に呆然と立ち尽くし開いた口をそのままにしているヒョウドウ・・・ミナムは視線を一瞬
ヒョウドウに向けた後、こう言い放った。

「今のままだと、いずれこちらが不利になる。現に兵士達の疲労もピークに来ている。」

ミナム達も予想をしていたが、これまでの長期戦で兵士達の疲れもピークに達しているのも確かだった。それは、カイン城で迎え撃つミナム達も同じだろう。そう思ったミナムは

「だから明日、カイン城を一気に攻める。」

前にすっと出てきたソウシ

「ならば、私も行こう。」

「ソウシ様まで・・・」

ヒョウドウはため息を付いて、黒騎士団の方を見た。視線が合うたびに頷く騎士達、その光景を見て両手を挙げ、頭を2，3回振ってもう少し頭のいい奴はいないのか？そう思いつつも振り返り黒騎士団に向かって叫んだ。

「3番隊　出陣じゃ！！！」

「オオーーー！！！」

城内はどよめいた。

「その前に、2千名ほどハン城へ援軍を頼まないと、」

作戦は、こうであった。ミナム達部隊がカイン城へ進軍を始めると同時に足止め岩からハン城へ援軍2千を送ってもらう。ただそれだけだった。はっきり言って、ミナム達の特攻でどこまでやれるかが勝利の決め手だった。

こうしてカイン城攻防戦が始まった。

ミナム　VS　オスギ

ミナムがハン城から出陣！！その情報にカイン城のギオン軍に緊張が走った。

「何！！ミナムが出陣しただと？」

その一言に、コウリクもチョウハも驚いた。

「何故今になって？出陣を・・・」

「ええい・・・オスギ、ポム殿を前衛に出せ、あと黒騎士団もだ！！」

カイン城の前では既に戦闘が始まっていた。カイン城から放たれる弾丸の嵐、これをミナムは盾を使い防御しつつ、単身突撃をしてきた。

「何！！鉄砲が効かんぞ！！」

「うわ！！！」

そこへミヌとクオンの強力な衝波、そして、ソウシの真空波が襲ってくる。この３名の凄まじいまでの波状攻撃によって、カイン城の正門の兵力はほぼ壊滅状態になっていた。その様子を見ていたコウリクとチョウハは、驚愕を隠せなかった。

「たった４人で・・・守備隊１０００名が壊滅だと？」

「どういうことだ！！」

「鉄砲も大砲も効きません！！」

「えっ？今なんて言った。」

「ですから。あの四名には、我々の兵器が全く通用しません。」

「どうするコウリク？」

チョウハは武具を着けながらコウリクに聞いた。コウリクも既に武具を着けていた。

「正門が開いたら出陣する。チョウハよ後は頼んだぞ。」

「どういう意味だ。」

「多分、この戦いは負けだ。」

「何故だ！！まだ3万近くも兵がいるのに・・」

「たしかに俺達の兵力は多い、しかし、しかしが、俺達の兵の大半は所詮魔導士付きの将兵ではない。力が違いすぎる。」

「じゃぁ・・俺も戦う、少なくとも俺とお前は、魔導士がいる将兵ではないか。」

「だからだ・・だから・・俺の兵の半分とお前の兵合わせて約2万5千の兵を何とかギオンまで退却させてくれ。そうすれば、まだ、この戦に勝機が残る。」

コウリクは、チョウハの両肩をもち話した、その手にはかなりの力が入っていた。

「わかった。コウリク殿こそ、ご武運を・・」

その時だった。ミナムの鉄拳で正門の扉が打ち砕かれ、あたりに埃が立ち込めた。

「来るぞ！！」

「フッゥーーー！！」

舞い上がった埃が薄くなっていく・・・その中にうっすらと人影が見えてきた。

「行くぞ！！」

ミナムが中に入っていくと目の前にいた人影が襲い掛かってき、一撃で壁へ吹き飛ばされた。

ドシーン！！

壁に叩きつけられたミナム、それを見て、オスギは辺りを見回した。

「ミナムさん！！」

「なんて奴」

ソウシは思わず構えた――――――オスギの視線の先には、、クオンがいた。

「やっぱ・・・わしかい・・」

クオンがそう呟いた瞬間、オスギがクオンを襲った。

「ぐ・・・」

何とか受け止めたクオン・・・に対しオスギが次の攻撃をかけようとした時、

「いてて・・・」

声をする方を思わず見たオスギは驚いた。そこには、ミナムが立っていた。

「フッゥーーー！！」

「やってくれるじゃねえか・・・おすぎさん」

ミナム　VS　オスギ　2

ミナムの前に立つオスギ――――身長はミナムとそう変わらず銀色の甲冑を身にまといしかも、変わったマスクをしていた。――――こいつがオスギかミナムがそう思っていると

「貴様！！」

その叫び声と共にソウシが襲い掛かっていった。ソウシの剣を軽くかわすオスギが次の瞬間、
ソウシの剣を素手で受け止めた。

「ソウシ殿！！」

そう叫んでミナムがオスギに向かっていった。

「ウッゥーーー！！」

慌ててソウシの剣を離し、ミナムの剣をかわすオスギ

「ミナム殿！！！」

そう言ってソウシが前に出ようとした瞬間、双竜波がソウシを襲った。間一髪かわしたソウシ見上げるとそこには、トリニティが立ちはだかった。

「トリニティ！！」

「貴様は、わしが血祭りにあげてくれる！！行くぞ！！」

トリニティの叫び声と共に黒騎士団2番隊がソウシの前にあらわれた。

「隊長！！！」

ヒョウドウ達が駆けつけ、目の前の光景に驚いた。何故？2番隊が俺達の前に立ちはだかる？

「どういうことですか？」

「わしにもわからぬ・・・ただ・・・俺達の敵であることは間違いない！！！」

「死ぬ覚悟は出来ているな！！」

そう言ってトリニティは剣を抜いた。

「貴様こそ！！！」

一方、オスギと対峙していたミナムは、苦戦していた。こいつ俺よりパワーも動きも上だ。そう思った瞬間、オスギのパンチを受け止め、数メートル後ろへ吹き飛ばされた。

「ぐっ！！！」

「ミナムさん」

そう言って衝波を撃ちミナムに近づくミヌ・・しかし、衝波が全く効かない！！

「えっ？」

ミヌを見つけたオスギがミヌに蹴りかかった。

「ミヌ！！！」

「この」

横からクオンがオスギに蹴りを入れた。しかし、それを受け止めるオスギ

「フッゥーーー！！」

「なんて奴」

ひょいとオスギの攻撃をよけたクオンだがそこへ間髪なく、次の攻撃を受けクオンは吹く飛ばされた。

「うわーー」

壁に激突するクオン・・・・

「クオン！！！この～！！！」

すぐにミナムがオスギの後ろから蹴りを入れようとするがすっとよけられた。まずい・・・と思った瞬間、オスギのけりがミナムわき

腹を直撃した。

「ぐあ・・・」

何とか堪えて立っているミナム。容赦なくオスギが襲い掛かってきた。そこへ再びクオンが立ち上がり、オスギに攻撃をした。その時だった。ミヌはミナムに言った。

「ミナムさんにかけている魔法を解きます」

「えっ？」

「早く！！わたしの前に立って。」

「わかった！！」

そう言ってミヌが呪文を唱えるとミナム刃光に包まれた。しかし、何の変化もなかった。

「どういうことだ？」

「早く、クオンを！！」

「わかった！！」

目の前では攻撃を受け、必死に耐えるクオンの姿があった。次の瞬間に殴られ気絶したクオン――――オスギは、だらんとなったクオンの頭を持ち、蹴りを入れようとした時だった。ミナムの蹴りがオスギに炸裂し、オスギを城壁まで吹き飛ばした。

「えっ？」

こんなに簡単に？そう思っているミナムを尻目に壁に激突したオスギは頭を振ってミナムを見た。

「フッゥーーー！！」

そして、再びミナムに襲い掛かった。今度は、簡単によけれるミナム。どうなってんだ？その時、不意にオスギのパンチを食らった。しかし、さっきのとは違いそんなにダメージがない。昔の喧嘩をした時のパンチ。これなら・・・と思ったがやはり吹き飛ばされた。ただ、すぐに体制を建て直すミナムにオスギは再び蹴りを入れようとした。その蹴りをよけたミナムは、剣を抜きオスギの仮面を切った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8330q/

リーマンクエスト

2011年11月2日11時40分発行